Nanden Daizōkyō

(南傳大藏經)

VI

Edited by Takakusu Junjirō
(高楠順次郎; 1866–1945)

and various translators

1935

高楠博士功績記念會纂譯

(Scan 2020)

経蔵 (Sutta Pitaka)
長部 (Dīgha Nikāya)
戒蘊篇 (Sīlakkhanda Vagga)


南傳大藏經

Contents

"The Dīgha Nikāya is a Buddhist scripture, the first of the five nikāyas (collections) in the Sutta Piṭaka, which is one of the "three baskets" that constitute the Pāli Tipiṭaka of Theravāda Buddhism. In English it is known as the "Collection of Long Discourses." A complete version of the Dīrgha Āgama of the Dharmaguptaka School survives in Chinese translation under the title of *Cháng Ahánjīng.*[1] There are 30 *sūtras* (discourses) in it as compared to 34 *suttantas* (discourses) of the Theravādin Dīgha Nikāya. Fragments of the Sarvāstivādin School's Dīrgha Āgama are also extant in their Sanskrit as well as Tibetan translations. During the fifth century, a commentary on the Dīgha Nikāya, known as the *Sumaṅgalavilāsinī,* was written by Buddhaghosa." [2]

Sīlakkhanda Vagga

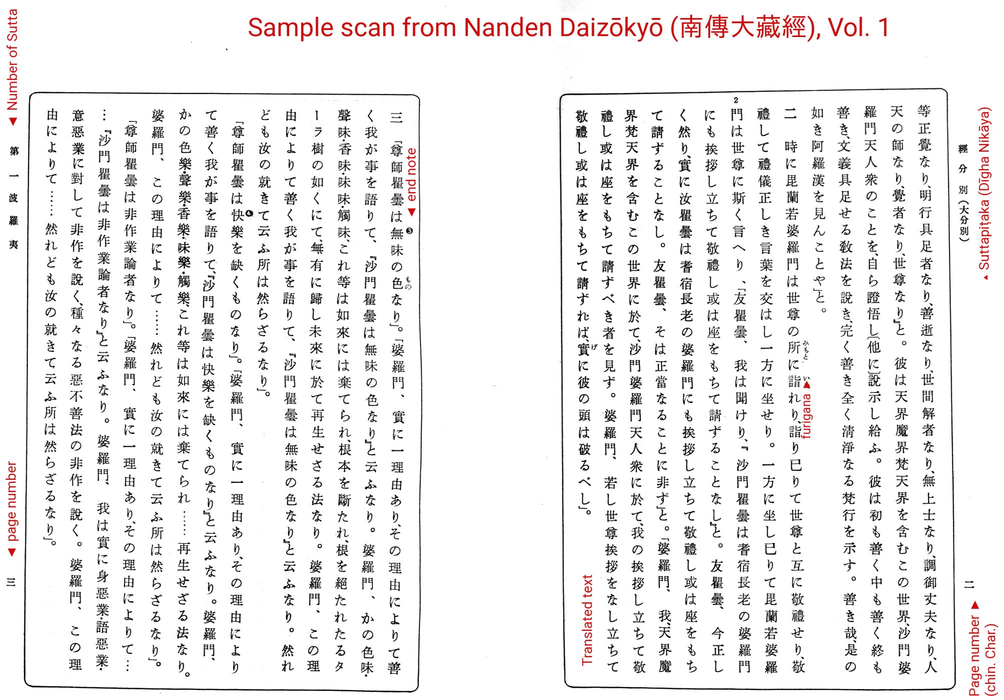
1. Brahmajāla Sutta: "The Net of Brahma" or the Perfect Net, in which are caught all the 62 heretical forms of speculation concerning the world and the self taught by the Buddha's contemporaries.
2. Sāmaññaphala Sutta: "The Fruits of the Homeless Life." The Buddha explains to King Ajātasattu the advantages of joining the Buddhist Order and renouncing the life of the world.
3. Ambaṭṭha Sutta: Pride of birth and its fall. A dialogue with Ambaṭṭha on caste. Contains reference to the legend of King Okkāka, the traditional founder of the Sakya clan.
4. Soṇadaṇḍa Sutta: Dialogue with the, brahmin Soṇadaṇḍa on the characteristics of the true brahmin.
5. Kūṭadanta Sutta: Dialogue with the brahmin Kūṭadanta condemning animal sacrifice.
6. Mahāli Sutta: Dialogue with Mahāli on deva-like vision and hearing, and the attainment of full enlightenment.
7. Jāliya Sutta: On the nature of the life-principle as compared with the body.
8. Kassapasīhanāda Sutta: A dialogue with the naked ascetic Kassapa against self-mortification.
9. Poṭṭhapāda Sutta: A discussion with Poṭṭhapāda on the nature of the soul, in which the Buddha states the enquiry to be irrelevant and not conducive to enlightenment.
10. Subha Sutta: A discourse, attributed to Ānanda, on conduct, concentration, and wisdom.
11. Kevaḍḍha Sutta: The Buddha refuses to allow a Bhikkhu to perform a miracle. Story of the monk who visited the devas (deities) to question them.
12. Lohicca Sutta: Dialogue with the brahmin Lohicca on the ethics of teaching.
13. Tevijja Sutta: On the futility of a knowledge of the Vedas as means to attaining companionship with Brahma.[3]

---

[1] Taishō 1, separate sutras also in T. 2–25.

[2] Sarao K. T. S.; "Dīgha Nikāya;" in: Sarao K. T. S., Long J. D. (eds.); *Buddhism and Jainism. Encyclopedia of Indian Religions;* Dordrecht 2017 (Springer)

[3] Webb, Russell; *An Analysis of the Pāli Canon;* Kandy 1975, ^{2}1991, ^{3}2008 (Buddhist Pub. Soc.); ISBN 978-955 - 24-0048 - 1. "For free distribution. This work may be republished, reformatted, reprinted and redistributed in any medium. However, any such republication and redistribution is to be made available to the public on a free and unrestricted basis, and translations and other derivative works are to be clearly marked as such."



經分別（大分別） 二

等正覺なり、明行具足者なり、善逝なり、世間解者なり、無上士なり、調御丈夫なり、人天の師なり、覺者なり、世尊なり』と。彼は天界魔界梵天界を含むこの世界、沙門婆羅門天人衆のことを、自ら證悟し（他に）説示し給ふ。彼は初も善く中も善く終も善き、文義具足せる教法を説き、完く善き全く清淨なる梵行を示す。善き哉、是の如き阿羅漢を見んことや」と。

二 時に毘蘭若婆羅門は世尊の所に詣れり、詣り已りて世尊と互に敬禮せり、敬禮して禮儀正しき言葉を交はし一方に坐せり。一方に坐し已りて毘蘭若婆羅門は世尊に斯く言へり、「友瞿曇、我は聞けり、『沙門瞿曇は耆宿長老の婆羅門にも挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずることをなし』と。友瞿曇、今正しく然り、實に汝瞿曇は耆宿長老の婆羅門にも挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずることをなし。友瞿曇、そは正當なることに非ず」と。「婆羅門、我天界魔界梵天界を含むこの世界に於て、沙門婆羅門天人衆に於て、我の挨拶し立ちて敬禮し或は座をもちて請ずべき者を見ず。婆羅門、若し世尊挨拶をなし立ちて敬禮し或は座をもちて請ずれば、實に彼の頭は破るべし」。

第一 波羅夷 三

三 「尊師瞿曇は無味の色なり」。❸「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は無味の色なり』と云ふなり。婆羅門、かの色味・聲味・香味・味味・觸味、これ等は如來には棄てられ、根本を斷たれ、根を絶たれたるターラ樹の如くにて、無有に歸し未來に於て再生せざる法なり。婆羅門、この理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は無味の色なり』と云ふなり。然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

「尊師瞿曇は快樂を缺くものなり」。❹「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて善く我が事を語りて、『沙門瞿曇は快樂を缺くものなり』と云ふなり。婆羅門、かの色樂・聲樂・香樂・味樂・觸樂、これ等は如來には棄てられ……再生せざる法なり。婆羅門、この理由によりて……然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

「尊師瞿曇は非作業論者なり」。「婆羅門、實に一理由あり、その理由によりて……『沙門瞿曇は非作業論者なり』と云ふなり。婆羅門、我は實に身惡業・語惡業・意惡業に對して非作を説く、種々なる惡不善法の非作を説く。婆羅門、この理由によりて……然れども汝の就きて云ふ所は然らざるなり」。

Figure 1: The original Japanese text is written vertically, right to left.

Technical notes: Due to limitations in the specs of the *pdf* and *djvu* file formats direct links from the Concordance (☞ S. i) and romanized Table of Contents only work in the “full” pdf, not the derivates automatically created at archive.org. In the *djvu* file only links to external targets work (by opening a new tab in your standard browser). If in doubt – choose he large file.

The hardlinks to `suttacentral.net`, given in captions at the beginning of each section were tested 16th June 2020.

☸ ☸ ☸

Introductory remarks 凡例

凡例

一、今卷依用の底本は巴梨聖典出版協會(Pali Text Society)本にして、兼て錫蘭版、暹羅版を參照せり。

一、本文行頭に羅馬數字を以て底本の頁數を附し、彼此參看に便じたり。

一、文中〔 〕印を以て括せる語又は句は、譯者の挿入に係る。

一、文中「……」或は「…乃至…」とあるは、底本に然く省略せるものなり。

一、文中「…〔乃至〕…」とあるは、譯者が便宜上省略せるものなり。

一、文字の右肩に附せる白抜羅馬數字は註の對照番號にして、註の文は各經の最後に之を出したり。

一、固有名詞の中、その音譯の經典に見在するものは可及的に之を採り、義譯は（ ）印に括して添加せり。但し漢譯經典は主としてサンスクリットよりの翻譯なるを以て、その音譯は必ずしも巴梨語のそれに對應すとは言ふべ

からず。

一、假名字を以て表せる發音も亦巴梨語の正確なる音を寫せるものとは言ひ難し。從つて漢字、假名兩者いづれの表音も、その正しきを知る爲には、卷末索隱中の原語に依るを要す。

一、索隱は發音索隱と漢字索隱との二種とし、前者は假名字、原語羅馬字、漢字の順に、後者は漢字、原語羅馬字の順に配し、總て五十音順に列位す。而して漢字索隱には固有名詞の他に術語をも合入したり。

目次　長部經典一

本經は漢譯長阿含卷第十四の梵動經(大正藏一)並に梵網六十二見經(大正藏二一)に相當し、その內容は二部から成つて居る。第一部は、凡夫が如來を讃嘆して語る瑣細卑近な戒に關するもので、此の下に小・中・大の三戒が說いてある。小戒では五戒或は十戒に當るものを述べ、中戒・大戒では此等を更に詳說してある。此の部は長部經典第一所載の大部分の經にも存するもので、所謂修道の大綱の骨子の一部を成し、後に綱目化せらるゝに至つた三學・五分法身・乃至五根・五力の中の戒に當ると共に、斯く綱目化せらるゝに至る根本のものである。第二部は、如來自ら證知し現證して說き給へる甚深難見の諸法に就いて述べたもので、こゝに六十二見が說いてある。經に依ると、此の六十二種の見は、過去に關するものが十八、未來に關するものが四十四で、見の種類から見ると、我と世界との常住論、常無常論、無因論、世界の邊無邊論、詭辯論、死後の有想論、無想論、非有想非無想論、斷滅論、現在涅槃論などに分れるが、其の中心問題は、我と世界との二を出でない。而して此等の說の中には、或は深い思想の根底を缺くも

の、或は他說の折衷補遺に過ぎざるが如きものもあるが、孰れも佛在世當時の人々が盛に考究した所であつて、此の部は、當時に於ける思想界の一縮圖とも見るべく、又此に依つて佛教の立場を明にし、其の占むる地位を知るに極めて重要なるものである。從つて相應部經典中の或る經では、本經に述ぶる所をば、經名として掲げてこれを說いて居り、また中部經典中の或る經には、明に本經に基くもの、或は此を豫想すと考へらるゝものもある位で、阿含經典中に於ける本經の地位の重要なるに注意すべきである。

本經は漢譯長阿含卷第十七の沙門果經(大正藏一)増一阿含卷第三十九の第七經(大正藏一二五)並に寂志果經(大正藏二二)に當る。之を漢譯の諸經と比較するに、漢譯の或るものは、本經の重要なる教義を略說し、或るものは之を混同せるに反して、本經はその記述が詳細にして、且つその內容が極めて鮮明である。經の前半には、六師外道の說を紹介し、後半には、沙門の現世の果報、言ひ換へれば、佛教の中心を成す戒・定・慧の三學に關する詳說が揭げられてゐる。六師外道は、佛時代に於ける反婆羅門主義を表明して起つた思想運動の中でも、最も有力な代表者であるが、本經では之を一群として取り扱ひ、且つ其等の學說と、其の主張者とを併せ揭げて居る點が、殆んど他に例を見ない重大な特徵であると共に、其等の所說と佛教の中心思想とを列べ揭げてゐる

本經は佛時代の一般思想撿討に大なる役割をなすものと謂はねばならない。後半に於ては、梵網經に於ける如く、戒を大・中・小に分說し、此等の戒を具足する比丘の心的狀態としての、諸根の制御、正念正智、知足の體得、五蓋よりの離脫を列擧し、次で歡喜心を得て禪定に入ることを指摘し、更に四禪、六通、四諦の證得から阿羅漢果を得るに至るまでを細說してある。此の後半の部分は、長部經典第一所載の大部分の經に繰り返して現れて居るもので、それ故に其等の諸經に於ては、大抵その箇所は省略されてゐる。之は經配列の次第に因つてなされたもので、本經の此の部分が、より古いとか、或はより根本的であるとかいふ理由に依るものではないが、長部經典を讀む人は、是非この點を注意すべきで、本大藏經では、其等の諸經の省略せる箇所に、便宜上一一本經參照の註を附してある。

本經は漢譯長阿含卷第十三の阿摩晝經(大正藏一)に當る。今之を漢譯と比較するに、その中央部にある三學に關する部分は、本經に於ては之れは省略せられてゐる。蓋しこの部分は旣に前の沙門果經に詳說されてゐるからである。本經の內容は、四姓の中、婆羅門と刹帝利との優劣を論じたもので、卽ち佛が青年婆羅門阿摩晝に對して、釋迦族はオッカーカ王より出たる尊貴なる武族であるが、婆羅門はかの王の下婢かり出た卑族であることを說き、世間で刹帝利を尊重してゐる事實を示して、阿摩晝婆

して之を修する者を沙門又は婆羅門と稱せらるゝことあるも、眞の沙門婆羅門とは、戒具足・心具足・慧具足を得たる者をこそ稱すべきであるとし、此の點に於ては、佛が他の孰れよりも優れ給へることを述べ、又他派出身の者が出家受戒せんとするには、四箇月の期間を置くべきことを述べてある。即ち本經は、苦行が決して證道の方便に非ざるを說かれたものであるが、苦行の種類を詳細に掲げて居る點に注意すべきである。

九　布吒婆樓經……………………木村泰賢譯……………一一五五

本經は漢譯長阿含卷第十七の布吒婆樓經（大正藏一）に當る。その內容は二分の說法より成り、第一分に於ては、主として想を中心として其の生滅一多、想と智、想と我などを問題とし、第二分には、我の得即ち我の正しい解決を示し、兩分の終と初とに、佛所說の法には決定記と不決定記との有ることを加へてある。經に從へば、想は有因有緣、學習に依つて其の生滅があり、此の生滅を想滅智定まで說き及ぼし、次で我と想との關係に入つて、他派に於ては此の二者の關係が了解し難いとして、暗に佛道に入るべきを勸め、更に當時の問題であつた世界の常無常、有限無限、命と身との同異、如來の死後等に關する事は、解脫に關係なき不決定記であるとし、我の常樂を說く外道の說を拆けて、我の得と其の滅に依る功德とを示し、總ては有因有緣であることを明にしたものである。

漢譯には本經に相當するものがない。その內容は、阿難が須婆の問に對して、佛が稱讃して人々を勸導し入住せしめ給ふ法として戒•定•慧の三學を擧げて說明すると、須婆はこの開示に依りて歸依することを述べたものである。

本經は漢譯長阿含卷第十六の堅固經(大正藏一)に當る。その內容は、佛敎に於ける神通觀と神觀と世界觀とを述べたものである。卽ち佛敎に於ては解脫を最高の理想とし、神通の如きは衆生敎化の一方便に過ぎずして、直接かの理想とは何等關係なきものとし、神觀では、諸神を以て生死に輪廻すると共に、佛及び其の敎說を讃へ守護するものと見、世界の邊無邊などの問題を排して、識の滅によりて一切は滅すと述ぶるあたりは、後世の唯識說に發展すべき萌芽とも謂ふべきである。又本經所說の中で、後世の阿毘達磨佛敎に於て論究の課題となつてゐるものも、二三にして止らない。例へば、四大種は何の處に滅するや(婆沙論第一二九)。大梵天が馬勝の徵問を避けんとして憍つて自己を讃歎したのは、梵世に有覆無記の表業の存する證據である(俱舍論第十一)。大梵天が我はこれ梵天なり大梵天なり乃至一切の父なりと稱したのを、梵衆天が信じたのは、見取と戒禁取との二惡見を起したものである(婆沙論第九八)。

等之である。

一二 露遮經 ……………………………… 花山信勝譯 ……………… 三一七

本經は漢譯長阿含卷第十七の露遮經(大正藏 一)に當る。その內容は、沙門婆羅門は善法を證知しても、之を他人に說くべからずとの惡見を生じた露遮婆羅門に對して、是の如きは邪見で、地獄或は畜生に生るべきことを述べ、世には自ら覺せず他をも覺せず、自ら覺せずして他を覺し、自ら覺するも他を覺せざる師があるが、之等は皆非難せらるべきもので、自ら覺して他を覺す師こそ、非難せられざるもので、佛は正に此の師であるとし、三學四諦に關する說法を示したものである。

一三 三明經 ……………………………… 山田龍城譯 ……………… 三三三

本經は漢譯長阿含卷第十六の三明經(大正藏 一)に當る。三明とは詳しくはリグ、サーマ、ヤヂュールの三種の吠陀を指すが、今は一般に吠陀を意味するものとし、三明經は此の吠陀を奉ずる婆羅門に關することを述べたものと解すべきである。佛は二青年婆羅門の求めに應じて極めて自然に法を說いて彼等を滿足せしめ、佛の敎が如何に婆羅門のそれよりも優れてゐるかを、自ら悟らしめられたものである。經には諸の婆羅門古仙の外、ウパニシャッドに關係のある諸派の名も出て居るので、佛時代の婆羅門諸派の一斑を知るのに重要な經典である。佛典の中にタイティリーヤ或は

チャンドーギャなどの名の出てゐる所は、他に殆んど無く、本經の主要人物たるヴーセッタ及びバーラドヴーヂャの如きも、リグ吠陀の傳承者として古代文獻に現はれてゐる點などから見て、本經は古代婆羅門教研究者にとつて興味深いものゝ一であらう。

本經は漢譯長阿含卷第一の大本經(大正藏一)に當る。今兩者を比較するに、本經は漢譯に見るが如き多くの偈文は無く、散文は彼よりも詳しい。その內容は、所謂過去七佛の傳記を述べたものであるが、實は毘婆尸佛に關する記述が大部分を占めてゐる。初に七佛を列擧して各その族・姓・壽・成道の場所・主要の弟子・僧會・父母・都城などを示し、次で毘婆尸佛の傳記に入りて、その入胎より最初の波羅提木叉の誦出に至り、最後に瞿曇佛の淨居天訪問、諸天が毘婆尸佛・瞿曇佛の所で修行して天に生れた事を述べてある。この中、毘婆尸佛の傳記として出す所は、諸佛の常法として、孰れの佛にも必づ出て來る一つの類型的過程であるが、之は佛傳をば王子の出家を物語るものとするものよりも、更に後の段階を示すこと、及びかの佛が成道の時、所謂十二因緣中の無明と行とに言及せざる「十因緣」を說いて居ること、この二つの點は特に注意すべきである。

索隱

Plates

挿圖目次

[Rescans of Cunnigham's images from concordance-page 13.
ページ コンコルダンス13号からのカニガムの画像のより良いスキャン]



1. 毘婆尸佛　大本經三六四頁參照



2. 毘舍婆佛　大本經三六四頁參照



3. 拘樓孫佛　大本經三六四頁參照



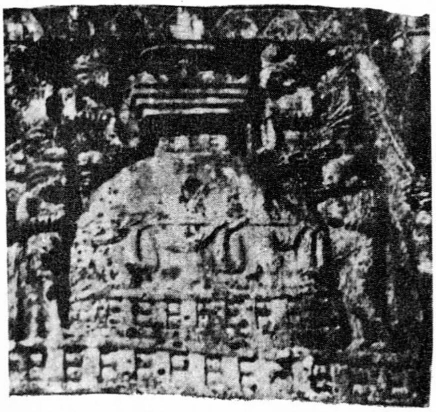
4. 拘那含佛　大本經三六四頁參照

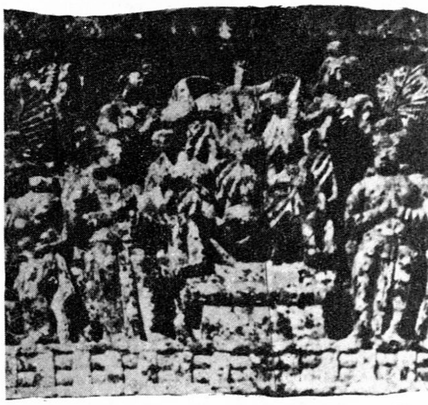


5. 迦 葉 佛　大本經三六四頁參照

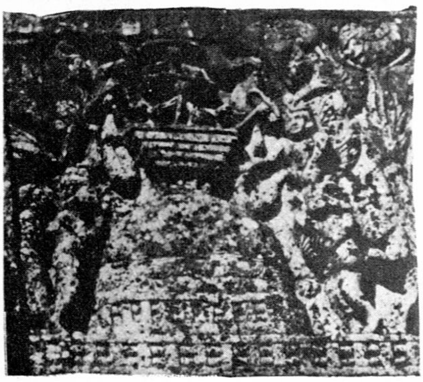


6. 釋迦牟尼佛　大本經三六四頁參照

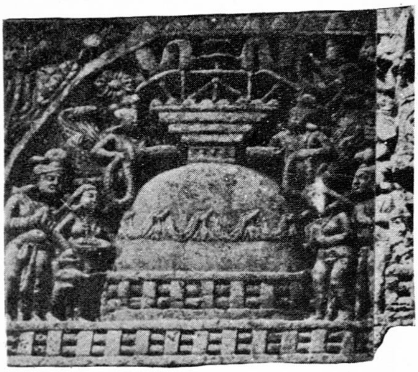


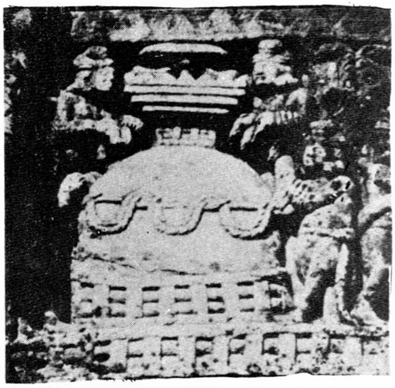


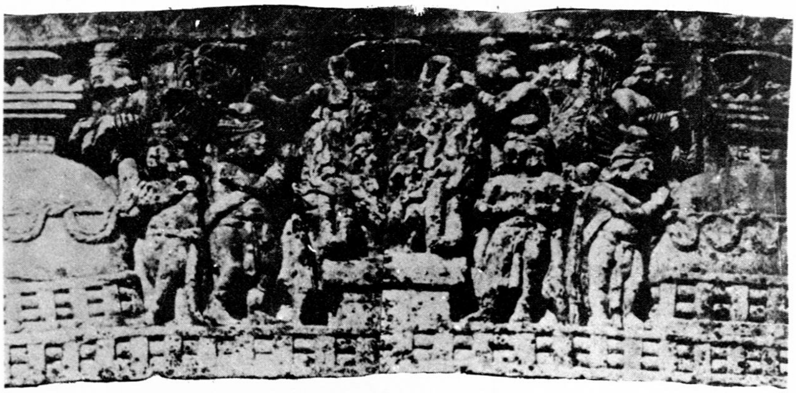




7.〔右上〕過去七佛其一毘婆尸佛　大本經三六二頁參照
8.〔右下〕過去七佛其二　大本經三六二頁參照
9.〔左上〕過去七佛其三　大本經三六二頁參照
10.〔左下〕過去七佛其四　大本經三六二頁參照







11. 〔右上〕過去七佛其五　大本經三六二頁參照
12. 〔左上〕過去七佛其六　大本經三六二頁參照
13. 〔下〕過去七佛其七釋迦牟尼佛　大本經三六二頁參照

戒蘊篇 Sīlakkhandha-vagga

[パーリ]梵網経 (Brahmajāla-sutta)

宇井伯壽 訳

一 梵[1]網經（ブラフマヂャーラ・スッタ）

第一誦品

1.1 一 是の如く我聞く。一時、[2]世尊、五百人の比丘より成る大なる比丘僧伽を伴ひて、王舍城より那爛陀に至る大道を進ませ給へり。一遊行者須卑も亦、その弟子梵施童子を伴ひて、王舍城より那爛陀に至る大道を進み居たり。途中、遊行者須卑は、種々樣々に佛陀を謗り法を謗り僧伽を謗りたるに、之に反してその弟子梵施童子は、又種々樣々に佛陀を讚し法を讚し僧伽を讚したり。かく此の師資二人は、互に正反對なることをいひつゝ、世尊幷に比丘僧伽の後に隨ひ行きぬ。

二 時に世尊はアンバラッティカー園內に於ける國王休憩堂にて、比丘僧伽と倶に一夜の宿をとり給へり。遊行者須卑も亦、アムバラッティカー園內に於ける國王休憩堂にて、弟子梵施童子と倶に一夜の宿をとれり。そこにて又遊行者

須卑は、種々様々に佛陀を謗り法を謗り僧伽を謗りたるに、之に反してその弟子梵施童子は、又種々様々に佛陀を讚し法を讚し僧伽を讚したり。かく此の師資二人は、互に反正對のことをいひつゝ住したり。

三　時に其の夜の曉方、起きて講堂に集り坐せる多數の比丘の間に、次の如き話柄起れり。「希有なり、友よ。未曾有なり、友よ。親しく知り見る阿羅漢等正覺者なる世尊が、衆生の種々なる勝解性をよく透見し給へることや。何となれば、かの遊行者須卑は、種々様々に佛陀を謗り法を謗り僧伽を謗るも、之に反して其の弟子梵施童子は、又種々様々に佛陀を讚し法を讚し僧伽を讚し、かく此の師資二人は、互に反正對なることをいひつゝ、世尊幷に比丘僧伽の後に隨ひ行けばなり」。

四　時に世尊は、此等の比丘の間に於けるこの話柄を知りて、かの講堂に詣り給へり。詣りて設けの座に坐し給ひぬ。坐して世尊は比丘等に曰へり。「如何なる談話の爲に、比丘等よ、今諸子は此處に坐せるや。而して又遮られたる諸子の閑談は何なりしや」。かく言はれて彼等比丘は世尊に白しぬ。「今、師よ、夜の曉方、起きて講堂に集り坐せる吾等弟子等の間に、次の如き話柄起りたり。『希有なり、

…乃至…隨ひ行けばなり』と。弟子等のこの閑話が遮られ、その時世尊來ませるなり」。

五　「比丘等よ、餘人にして、若し予を謗り、若しは法を謗り、若しは僧伽を謗ること[3]あらむに、諸子は之に傷心せず、之を憂恨せず、心に憤怒すべからず。比丘等よ、餘人にして若し予を謗り、若しは法を謗り、若しは僧伽を謗ることあらむに、諸子若し之を忿怒し、若しは之を歡喜せざらむか、これ卽ち諸子に障礙となるべし。比丘等よ、餘人にして予を謗り、若しは法を謗り、若しは僧伽を謗ることあらむに、諸子若し之を忿怒し、若しは之を歡喜せざらむか、爾らば諸子は餘人の善說せるや謬說せるやを判定し得むや」。

「師よ、然ることなし」。

「比丘等よ、餘人にして予を謗り、若しは法を謗り、若しは僧伽を謗ることあらむに、これに就きて諸子は非實を非實として辨別せざるべからず、『かくかくの故にそは事實ならず、かくかくの故にそは眞相を得ず、吾等の間にはかゝることなく、又かゝることは存せず』と。

六　比丘等よ、餘人にして予を讃し、若しは法を讃し、若しは僧伽を讃することあらむに、諸子は之を歡喜せず、之を悅欣せず、心に愉逸すべからず。比丘等よ、餘人にして予を讃し、若しは法を讃し、若しは僧伽を讃することあらむに、諸子若し之を歡喜し悅欣し愉逸せむか、これ卽ち諸子に障礙となるべし。比丘等よ、餘人にして予を讃し、若しは法を讃し、若しは僧伽を讃することあらむに、これに就きて諸子は事實を事實として認定せざるべからず、『かくかくの故にそは事實なり、かくかくの故にそは眞相を得たり、吾等の中にはかゝることあり、又かゝることは存す』と。

七　比丘等よ、實に凡夫が❹如來を讃嘆して語ることは、唯瑣細のことに就きてなるのみ、唯卑近のことに就きてなるのみ、唯戒に關することに就きてなるのみ。然らば、比丘等よ、凡夫が如來を讃嘆して語ることは、如何なる瑣細なることに就きてなりや、卑近なることに就きてなりや、戒に關することに就きてのみなりや」。

小　戒

4 八❺「『沙門瞿曇(ゴータマ)は、殺生を捨てゝ殺生を離れ、杖と刀とを用ひず、慚恥心ありて慈愛

に富み、一切の生類有情を利益するの哀愍に住す』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

『沙門瞿曇は、不與取を捨てゝ、不與取を離れ、與へられたるものを取り、與へられたるものを希求しつゝ、何等盜心なく自ら清淨にして住す』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

『沙門瞿曇は、非梵行を捨てゝ、梵行を修し、遠離の行をなしつゝ、婬欲粗野のことを離れたり』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

九　『沙門瞿曇は、妄語を捨てゝ、妄語を離れ、眞實を語り眞實に從ひ、正直誠心にして世間を欺かず』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

『沙門瞿曇は、兩舌を捨てゝ、兩舌を離れ、此處にて聞きて之を彼處に往きて告げ、此處の人々との離間に至らしむるが如きことなく、又は彼處にて聞きてそを此處に來りて告げて、彼處の人々との離間に至らしむるが如きことなし。是の如くにして離間せる者を和睦せしむる人、親密なる者を益親密ならしむる人として、和合を愛し、和合を好み、和合を喜び、和合を齎らす言語をなす人なり』と、是の如

くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

『沙門瞿曇は、惡口を捨てゝ惡口を離れ、凡て過失なき・耳に樂しき・愛らしき・膽に銘じ・優雅にして・人々に喜ばれ好まるゝ如き、かゝる言語をなす人なり』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して

『沙門瞿曇は、綺語を捨てゝ綺語を離れ、時に適したる語をなし、眞實を語り、義ある言をなし、法に合する語をなし、律義を伴ふ言をなし、明確にして・段落あり・義に適ひ・心に記せらるべき言語をなす人なり』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一〇　『沙門瞿曇は、諸種の種子、諸種の樹木を採伐することを離れ、〔日中〕一食にして、夜中食せず、非時食を離れ、演劇・歌謠・舞樂の娛樂物を見ることを離れ、華鬘・香料・塗香を持し粉し裝ふことを離れ、高牀大床を〔用ふることを〕離れ、金銀を受蓄することを離る。　沙門瞿曇は、生の穀類を受くることを離れ、生肉を受くることを離れ、婦人・少女を受くることを離れ、男女の奴隷を受くることを離れ、牝牡の山羊を受くることを離れ、鷄豚を受くることを離れ、象牛牡牝の馬を受くることを離

れ、耕田荒地を受くることを離れ、使者仲介人の所作をなすことを離れ、賣買をなすことを離れ、秤を欺き[6]升を欺き尺を欺くことを離れ、賄賂・諂詐・虚僞の邪行をなすことを離れ、傷害・殺戮・拘束・剽奪・竊盗・強盗を離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る」。

中戒

一一 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば根より生ずる種子、幹より生ずる種子、節より生ずる種子、枝より生ずる種子、第五として種より生ずる種子の如き諸種の種子と、諸種の樹木とを採伐することに專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の諸種の種子と諸種の樹木とを採伐することをも離る』と。是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

[6]一二 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば食物の貯畜、飲料の貯畜、衣服の貯畜、乘物の貯畜、臥床の貯畜、香料の貯畜、美味の貯畜の如き貯畜物の享樂に專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の

何れの貯畜物を享樂することをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一三　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば演劇・歌謠・舞樂・觀せ物・謠ひ・手鈴・鳴鉢・銅鑼・手品・賤人の輕業・象馬水牛牡牛山羊牡羊鷄鶉の闘技・棒擊・拳闘・角力・演習・列兵・配兵・閲兵の如き娯樂物を見ることに專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの娯樂物を見ることをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一四　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によつて生活し、而も例へば八目碁・十目碁・無盤碁・石蹴・拔取り・骰投げ・棒打ち・手痕占ひ・球抛げ・葉笛・鋤遊び・逆立ち[7]・風車遊び・升遊び・車遊び・弓遊び・文字判じ・他心判じ・傷占ひの如き賭博の放逸處に耽り專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの賭博の放逸處に耽ることをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一五　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば規定の大さを過ぎたる・獸形を脚臺とせる・長き羊毛にて覆へる・文彩ある・白氈に

て覆へる・花を繡せる・綿をつめたる・繪(えが)ける覆を有せる・兩側に緣の垂れたる・片側に緣の垂れたる・寶石を鏤めたる・絹布の覆ある・大毛布を有する・象の覆布を有せる・馬の覆布を有せる・車の覆布を有せる・羚羊の皮を縫へる・良き鹿皮にて覆へる・天蓋を有せる・上下に赤き枕を有せるが如き高牀大牀の使用に專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの高牀大牀の使用をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一六 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば塗身・按摩・沐浴・揉身・鏡・眼の塗料・華鬘・塗香・顏料・香油・手甲・髮飾・手杖・藥袋・剪刀・蓋傘・彩履・冠子・寶珠・拂子・白衣・長袖の如き粉飾の放逸處に耽り專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの粉飾の放逸處に耽ることをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一七 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば國王の話・盜賊の話・大臣の話・軍兵の話・恐怖の話・戰爭の話・食物の話・飮料の話・衣服の話・牀床の話・華鬘の話・香料の話・親戚の話・乘物の話・村落の話・町村の話・都會の話・

[8]國土の話・婦女の話・〔男子の話〕・英雄の話・風評の話・井戸端噂の話・死者の話・統一なき話・世界說の話・海洋說の話・かくありなしの話の如き[7]無益徒勞の話に專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の話をなすをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一八　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば「汝は此の法と律とを知らざるも、吾は此の法と律とを知る、汝にして何ぞ此の法と律とを知るに至らむや」。「汝は邪行をなすも、吾は正行をなす」。「吾が言は相應するも、汝の言は相應せず」。「汝は前にいふべきことを後にいひ、後にいふべきことを前にいひたり」。「汝の熟考せざりしことは直に顚覆せられたり」。「汝は言論を立てしも、負處に墮せり」。「汝の說を脫せむが爲に巡遊せよ、若し能ふべくむば自ら解け」といふ如き諍論に專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの諍論をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

一九　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば「此處に行け、彼處に行け、之を取り來れ、之を彼處に運べ」と命ずる國王・大臣・刹帝利・

婆羅門・家主・童子の爲になすが如き使者・仲介人の所作をなすことに專心して住するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの使者・仲介人の所作をなすことをも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

二〇 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして信施の食によりて生活し、而も諂言し、饒諛し、占相し、禁厭し、利得の上にも利得を貪るものあるに、沙門瞿曇は、是の如き諂言饒諛を離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

大戒

9 二一 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によつて生活し、而も例へば手の占相・卜占・兆相の占ひ・夢の判斷・體相の占ひ・鼠の咬所の占ひ・火の護摩・杓子の護摩・穀の護摩・粉の護摩・米の護摩・熟酥の護摩・油の護摩・口の護摩・血の護摩・支節明・宅地明・刹帝利明・濕婆明・鬼神明・地明・蛇明・毒藥明・蝎明・鼠明・鳥明・鴉明・命數豫言・防箭呪・解獸聲法の如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

二二　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば珠相・杖相・服相・劍相・矢相・弓相・武器相・女相・男相・童子相・童女相・男僕相・女婢相・象相・馬相・水牛相・牡牛相・牛相・山羊相・羊相・鷄相・鶉相・蜥蜴相・耳環相・獸相の如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

二三　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして信施の食によりて生活し、而も例へば「王は進軍すべし、王は進軍せざるべし」。「內國王は著すべし、外國王は退くべし」。10「外國王が著すべし、內國王が退くべし」。「內國王は勝つべし、外國王は負くべし」。「外國王が勝つべし、內國王が負くべし」。「此の者は勝つべし、此の者は負くべし」。と占ふが如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讚嘆して語る。

二四　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば「月蝕あるべし、日蝕あるべし、星蝕あるべし、日月は正道に進むべし、日月は非道に

進むべし、諸星は正道に進むべし、諸星は非道に進むべし、流星隕つべし、天火あるべし、地震あるべし、天鼓鳴るべし、日月星辰の昇沈明暗あるべし、かくかくの果ある月蝕あるべし、…〔乃至〕…かくかくの果ある日月星辰の昇沈明暗あるべし」と占[11]ふが如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するもののあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

二五　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして信施の食によりて生活し、而も例へば「多量の雨あるべし、降雨なかるべし、多量の收獲あるべし、收獲なかるべし、平和來るべし、恐怖あるべし、疫病あるべし、健康來るべし」〔等と占すること〕・印契・計算・數法詩作順世論をなす如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するもののあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

二六　『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば娶ること嫁すること和睦分裂貸金取立貸出幸運にすること・不運にすること墮

胎すること・人を啞とすること・無言ならしむること・擧手せしむること・聾ならしむること・鏡に問ふこと・童女に問ふこと・神懸り・太陽を拜すること・大〔梵天〕に供養すること・口より火を吐くこと・吉祥天を屈請することの如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

12 二七 『又、或る敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活し、而も例へば願をかけること・願を解くこと・地に居て呪を誦すること・元氣を旺盛にすること・消耗せしむること・住所を相すること・地を淨むること・嗽口・沐浴・供犧・吐瀉・下痢・上泄・下泄・頭痛療治・耳に油すること・自の治療・鼻の治療・眼藥をさすこと・眼に油すること・眼手術・外科手術・小兒治療・樹根と藥とを與ふること・藥を取去ることの如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、沙門瞿曇は、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る』と、是の如くに、比丘等よ、凡夫は如來を讃嘆して語る。

比丘等よ、これ即ち凡夫が之を以て如來を讃嘆して語る唯瑣細なる卑近なる戒に關することどもなり』。

二八　「比丘等よ、〔この他に〕如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、能く尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する他の諸法あり。之を以てのみ諸人は如來を如實に讚嘆して、正しく語ることを得む。

然らば、比丘等よ、如何なる〔法〕が如來自ら證知し…〔乃至〕…賢者のみよく解する諸法なりや。

二九　比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、過[8]去を考へ、過去に對する見を持するも
13 のあり。彼等は過去に關して、十八種の根據によりて、種々なる浮[9]說を主張す。彼等敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、過去を考へ、過去に對する見を持するものとして、過去に關して、十八種の根據によりて、種々の浮說を主張するや。

三〇　比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、常住論を抱くあり。彼等は四種の根據によつて、我と世界とを常住なりと說く。彼等敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、常住論として、四種の根據によりて、我と世界とを常住なりと說くや。

三一　今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、例へば一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・百千生多百生多千生多百千生等の種々なる過去に於ける生存をも想起するが如き、か〻る心三昧を逮得するものあり。而して『彼の生に於て予はかくかくの名を有し、かくかくの[10]名字を有し、かくかくの姓に屬し、かくかくの食を食ひ、かくかくの苦樂を感受し、かくかくの命數を有したり。その予はそこより死沒して他生に生じたり。其の生にては、かくかくの名を有し、かくかくの名字を有し、かくかくの姓に屬し、かくかくの食を食ひ、かくかくの苦樂を感受し、かくかくの命數を有したり。その予はそこより死沒して此の生に生じ來れり』と、かく其の事情と境遇とを併せて、種々なる過去に於ける生存を[14]想起す。而して彼は次の如く說く。『我と世界とは常住なり、生產する所なく、山頂の如く常住にして、石柱の立つが如く不動なり。而して諸の有情は、流轉し輪廻し死去し出生するも、猶且『我と世界とは』常住に存す。所以は如何。予は熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によつて、心が三昧に住せる時、例へば一生…乃至…多百

千生等の種々なる過去に於ける生存を想起するが如き、か丶る心三昧を逮得し、而して「彼の生に於て、かくかくの名を有し…乃至…此の生に生じ來れり」と、かく其の事情と境遇とを併せて、種々なる過去に於ける生存を想起し、之によりて、如何に我と世界とが常住にして、生産する所なく、山頂の如く常住、石柱の立つが如く不動、而して諸の有情は流轉し輪廻し死去し出生するも、猶且〔我と世界とは〕常住に存するかを知ればなり』と。

比丘等よ、これ卽ち第一の立場にして、之により之に基づきて、或る沙門婆羅門は、常住論として、我と世界とを常住なりと說くなり。

三二　更に第二に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、常住論として、我と世界とを常住なりと說くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、例へば一成壞・二成壞・三成壞・四成壞・五成壞・十成壞等の種々なる過去に於ける生存を想起するが如き、か丶る心三昧を逮得するものあり。而して『彼の生に於て、予はかくかくの名を有し、…〔乃至〕…猶且〔我と世界

とは〕常住に存するかを知ればなり』と。

比丘等よ、これ即ち第二の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、常住論として、我と世界とを常住なりと説くなり。

三三　更に第三に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、常住論として我と世界とを常住なりと説くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、例へば十成壞・二十成壞・三十成壞・四十成壞等の種種なる過去に於ける生存を想起するが如き、かゝる心三昧を逮得するものあり。
16 而して『彼の生に於て、われはかくかくの名を有し、…〔乃至〕… 猶且〔我と世界とは〕常住に存するかを知ればなり』と。

比丘等よ、これ即ち第三の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、常住論として、我と世界とを常住なりと説くなり。

三四　更に第四に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、常住論として我**と世界とを常住なりと説くや。**

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、推論家審察家なるあり。彼は推論に練られ審察に隨順して、自ら辨知せる所を次の如く云ふ。『我と世界とは常住なり、生産する所なく、山頂の如く常住にして、石柱の立つが如く不動なり、而して諸の有情は、流轉し輪廻し死去し出生するも、猶且〔我と世界とは〕常住に在す』と。比丘等よ、これ卽ち第四の立場にして、之により之に基きて、或沙門婆羅門は、常住論として、我と世界とを常住なりと說くなり。

三五　比丘等よ、これ卽ち彼等沙門婆羅門が、常住論として、四種の根據によりて、我と世界とを常住なりと說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、常住論として、我と世界とを常住なりと說くものは、凡てこの四種の根據によるか、若しは此等の何れにかよるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

三六　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せれたるこれ等の見處[11]は、かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。

17 而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、[12]執取なく解脫せり。

三七　これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

第二誦品

一　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、一分常住一分無常論を抱くものあり。彼等は四種の根據によりて、我と世界とを、一分は常住にして一分は無常なりと說く。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて、一分常住一分無常論として、四種の根據によりて、我と世界とを、一分は常住にして一分は無常なりと說くや。

二　比丘等よ、長時を過ぎて後、何時か或る時、此の世界の壞する時期あり。[13]世界

の壊したる時、諸の有情は、多くは既に光音天に入れるものとなる。彼處にては、彼等は意所成にして、喜を食し、自ら輝き、空中を飛行し、純淨に住しつゝ、長時に斯く住す。

三　比丘等よ、長時を過ぎて後、何時か或る時、此の世界の成ずる時期あり。世界の成じたる時、空虚なる梵宮顯はる。時に一有情の、壽命盡きたるが爲、若しは善根盡きたるが爲、光音天身より死沒して、かの空虚なる梵宮に生ず。彼處にて彼は、意所成にして、喜を食し、自ら輝き、空中を飛行し、純淨に住しつゝ、長時に斯く住す。

四　彼は彼處にて唯獨り長夜住(14)したるが爲に、樂しみなく、〔次の如き〕期望を起す。『さても實(げ)に他の有情の、此の生に來らむことを』と。時に或る有情等の、壽命盡き
18 たるが爲、若しは善根盡きたるが爲、光音天身より死沒し、その梵宮に生じて、彼と共住するあり。彼等も彼處にて、意所成にして、喜を食とし、自ら輝き、空中を飛行し、純淨に住しつゝ、長時に斯く住す。

五　比丘等よ、其の中にて、最初に生れたる有情に、次の如き念起る。『予は梵天な

り、大梵天なり、全能にして、打勝たるゝことなく、何れのものをも見、一切を支配し、世界の自在主にして、一切の創造主・化生主・最上の能生者・一切を制する主・已生未生のものゝ父なり。此處に住する有情は、凡て予之を化生したるなり。所以は如何、前に予は「さても實に他の有情の、此の生に來らむことを」との念を起しぬ。かく予に意願起りて、而してこれ等の有情が此の生に來れるなればなり』と。又後に生れたる彼の有情にも、次の如き念起る。『この君こそ實に梵天なれ、大梵天なれ、全能にして、打勝たるゝことなく、何れのものをも見、一切を支配し、世界の自在主にして、一切の創造主・化生主・最上の能生者・一切を制する主・已生未生のものの父なれ。吾等は此の君梵天によつて化生せられたるなり。所以は如何、吾等は此君の、此處に最初に生れ居たるを見、吾等は後に生れたるものなればなり』と。

六　比丘等よ、此の中にて、最初に生れたる有情は、壽命も一層長く、又一層光輝あり、一層力強きも、之に反して後に生れたる諸の有情は、壽命も比較的短く、又光輝少なく力弱し。然るに、比丘等よ、この後者の一有情が、此の天身より死沒して〔地上の〕此の生に來ること[15]あり。此の生に來れる彼は、家を捨てゝ出家す。家を捨

て丶出家したる彼は、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、上に述べたる其の前生の生存をば想起するも、それ以上をば想起せざるが如き、か丶る心三昧を逮得す。而して彼は次の如く云ふ、『實にかの君、梵天大梵天、全能にして打勝たる丶ことなく、何れのものをも見、一切を支配し、世界の自在主にして、一切の創造主・化生主・最上の能生者・一切を制する主・已生未生のものの父として、吾等の由りて化生せられたるこの(君梵天)こそ、常恒・堅固・常住にして、轉變の性なく、常住に是の如くのみ住すべけれ。之に反して吾等は、この梵天によつて化生せられたるものなるが故に、吾等は無常にして堅固ならず、壽命も短く、死去すべき性質のものとして此の生に來れり』と。

比丘等よ、これ卽ち第一の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常と說くなり。

七 更に第二に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと說くや。

比丘等よ、戲忘と稱せらる丶天あり。彼等は極めて長時に、嬉笑と戲事との喜

樂法に耽著して住す。彼等は極めて長時に、嬉笑と戲事との喜樂法に耽著して住するが爲に、其の憶念は消失す。かく憶念の消失したる彼等諸天は、其の天身より死沒す。

八　比丘等よ、然るに其の中の一有情、其の天身より死沒して(地上の)此の生に來り、此の生存に來れる彼が、家を捨てゝ出家することあり。家を捨てゝ出家せる彼は、熱心精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、上に述べたる前生に於ける生存を想起するも、それ以上をば想起せざるが如き、かゝる心三昧を逮得す。

九　かくして彼は、次の如く云ふ。『實に戲忘天ならざる敬すべき諸天は、極めて長時に、嬉笑と戲事との喜樂法に耽著して住することなし。かく極めて長時に、嬉笑と戲事との喜樂法に耽著して住せざる彼等には、憶念の消失することなく、憶念の消失せざる彼等諸天は、死沒することなく、常恒堅固常住にして、轉變の性
20 なく、常住に是の如くのみ住すべし。之に反して吾等戲忘天は、極めて長時に、嬉笑と戲事との喜樂法に耽著して住し、かく極めて長時に、嬉笑と戲事との喜樂法

に耽著して住せる吾等は、憶念消失し、憶念消失せる吾等は、其の天身より死沒し、無常にして堅固ならず、壽命も短く、死去すべき性質のものとして、此の生に來れり』と。

比丘等よ、是卽ち第二の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くなり。

一〇　更に第三に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基づきて、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くや。

比丘等よ、意憤と稱せらるゝ天あり。彼等は極めて長時に相互に嫉視す。彼等は極めて長時に、相互に嫉視して、相互に其の心憤恚す。かく相互に其の心憤恚して、身體は疲勞し、心は疲勞す。而して彼等諸天は其の天身より死沒す。

一一　比丘等よ、然るに其の中の一有情、其の天身より死沒して、〔地上の〕此の生に來り、此の生に來れる彼は、家を捨てゝ出家することあり。家を捨てゝ出家せる彼は、熱心・精勤・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入りたる時、上に述べたる前生の生存を想起するも、それ以上をば想起せざるが如き、かゝる心三昧

を逮得す。

一二　かくて彼は、次の如く云ふ。『實に意憤天ならざる敬すべき諸天は、極めて長時に、相互に嫉視することなし。かく彼等は極めて長時に、相互に嫉視せずして、相互に其の心憤恚することなし。彼等は相互に其の心憤恚せずして、身體疲勞せず、心疲勞せず。彼等は其の天身より死沒することなく、常恒堅固常住にし
21 て、轉變の性なく、常住に是の如くのみ住すべし。然るに吾等意憤天は、極めて長時に、相互に嫉視し、かく極めて長時に相互に嫉視せる吾等は、相互に其の心憤恚し、相互に心憤恚して、身體疲勞し、心疲勞し、かくて吾等は、其の天身より死沒し、無常にして堅固ならず、壽命も短く、死去すべき性質のものとして、此の生に來れり』と。

比丘等よ、これ卽ち第三の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、一分常住一分無常論として、我(が)と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと說くなり。

一三　更に第四に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、一分常住一分無

常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、推論家・審察家なるあり。彼は推論に練られ、審察に随順して、自ら辨知せる所を次の如く云ふ。『この眼とも、耳とも、鼻とも、舌とも、身とも稱せらるゝ我は、凡てこれ不常不堅固無常にして、轉變の性あるものなれど、之に反してこの心とも、意とも、識とも稱せらるゝ我は、凡てこれ常恒堅固常住にして、轉變の性なく、常住に是の如くのみ住すべし』と。

比丘等よ、これ卽ち第四の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くなり。

一四　比丘等よ、これ卽ち彼等沙門婆羅門が、一分常住一分無常論として、四種の根據によりて、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、一分常住一分無常論として、我と世界とを、一分は常住、一分は無常なりと説くものは、凡てこの四種の根據によるか、若しはこれ等の何れにかよるものにして、この外に(他の根據)あることなし。

一五　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

一六　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、邊無邊論を抱くものあり。彼等は四種の根據によりて、世界の邊無邊なるを說く。此の敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、邊無邊論として、四種の根據によりて、世界を邊無邊なりと說くや。

一七　今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念に

よりて、其の心が三昧に入れる時、世界に關して有邊の想を抱きて住するが如き、か丶る心三昧を逮得するものあり。而して彼は次の如く云ふ。『此の世界は其の周圍に於て有邊なり。[16]所以は如何、予は熱心…乃至…〔正憶念〕によりて、其の心が三昧に入れる時、世界に關して有邊の想を抱きて住するが如き、か丶る心三昧を逮得し、之によつて予は、如何に此の世界が、其の周圍に於て有邊なるやを知ればなり』と。

これ卽ち、比丘等よ、第一の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを説くなり。

一八　更に第二に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを説くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、[23]其の心が三昧に入れる時、世界に關して無邊の想を抱きて住するが如き、か丶る心三昧を逮得するものあり。而して彼は次の如く云ふ。『此の世界は全く限界なく無邊なり。沙門婆羅門にして、此の世界は其の周圍に於て有邊なるが如

く說くは、これ彼等の妄語のみ。此の世界は全く限界なく無邊なり。所以は如何。予は熱心…乃至…(正憶念)によりて、其の心が三昧に入れる時、世界に關して無邊の想を抱きて住するが如き、かゝる心三昧を逮得し、之によつて、如何に此の世界が、全く限界なく無邊なるやを知ればなり』と。

これ卽ち、比丘等よ、第二の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを說くなり。

一九　更に第三に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを說くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、熱心…乃至…(正憶念)によりて、其の心が三昧に入れる時、世界に關して、其の上下に於ては有邊なりとの想を抱き、其の橫に於ては無邊なりとの想を抱きて住するが如き、かゝる心三昧を逮得する あり。かくして彼は次の如く云ふ。『此の世界は有邊にして又無邊なり。沙門婆羅門にして、此の世界は其の周圍に於て有邊なるが如く說くは、これ彼等の妄語のみ。又沙門婆羅門にして、此の世界は全く限界なく無邊なるが如く說くも、

亦これ彼等の妄語のみ。此の世界は有邊にして又無邊なり。所以は如何。予は熱心…乃至…（正憶念）によりて、其の心が三昧に入れる時、世界に關して、其の上下に於ては有邊なりとの想を抱き、其の横に於ては無邊なりとの想を抱きて住するが如き、かゝる心三昧を逮得し、之によつて、如何に此の世界が、有邊にして又無邊なるやを知ればなり』と。

これ即ち、比丘等よ、第三の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを説くなり。

二〇 更に第四に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを説くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、推論家審察家なるあり。彼は推論に練られ、審察に隨順して、自ら辨知せる所を、次の如く云ふ。『此の世界は、有邊にもあらず、無邊にもあらず。沙門婆羅門にして、此の世界は其周圍に於て有邊な
24 るが如く説くは、これ彼等の妄語のみ。又沙門婆羅門にして、此の世界は、全く限界なく無邊なるが如く説くも、亦これ彼等の妄語のみ。更に沙門婆羅門にして、

此の世界は有邊にして又無邊なるが如く說くも、亦これ彼等の妄語のみ。此の世界は、實に有邊なるにもあらず、無邊なるにもあらざるなり』と。

これ卽ち、比丘等よ、第四の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを說くなり。

二一　比丘等よ、これ卽ち彼等沙門婆羅門が、邊無邊論として、四種の根據によりて、世界の邊無邊なるを說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門なりとも、邊無邊論として、世界の邊無邊なるを說くものは、凡てこれ等四種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

二二　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂**滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實**

に知り、執取なく解脱せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

二三 「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、[17]詭辯論を抱くものあり。彼等はそれぞれのことに就きて質問の起されたる時、四種の根據によりて、支離滅裂の言なる詭辯に入る。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、四種の根據によりて、支離滅裂の言なる詭辯論に入るや。

二四 今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、此は善なりと如實に知らず、此は不善なりと如實に知らざるあり。彼思へらく、『予實に此は善なりと如實に知らず、又此は不善なりと如實に知らず。而して予かく此は善なりと如實に知らず、此は不善なりと如實に知らざるが故に、予此は善なりと答へ、或は此は不善な

りと答へたらむには、それに就きて、予に欲、若しは貪、若しは瞋、若しは恚起るべし。
予に欲、若しは貪、若しは瞋、若しは恚起る時、予に妄語起らむ。予に妄語起らば、そ
は予の礙とならむ。予に礙とならば、そは予の障とならむ』と。かく考へて、彼は
妄語をなすを怖れ、妄語をなすを嫌厭して、此は善なりとも答へず、亦此は不善な
25 りとも答へずして、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言
なる詭辯論に入り、『是の如しとも予は考へず然りとも予は考へず、其の他なりと
も予は考へず、然らずとも予は考へず、然らざるにあらずとも予は考へず』と云ふ。

これ卽ち、比丘等よ、第一の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門が、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るものなり。

二五　更に第二に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基づきて、詭辯論として、それぞれのことにつきて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、此は善なりと如實に知らず、又此は

不善なりと如實に知らざるあり。彼思へらく、『予實に此は善なりと如實に知らず、又此は不善なりと如實に知らず。而して予かく此は善なりと如實に知らず、此は不善なりと如實に知らざるが故に、予此は善なりと答へ、或は此は不善なりと答へたらむには、それに就きて予に欲、若しは貪、若しは瞋、若しは恚起るべし。予に欲、若しは貪、若しは瞋、若しは恚起る時、予に取著起らむ。予に取著起らば、そは予に礙とならむ。予に礙とならば、そは予の障とならむ』と。かく考へて、彼は取著を怖れ、取著を嫌厭して、此は善なりとも答へず、亦此は不善なりとも答へずして、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入り、『是の如しとも予は考へず、然りとも予は考へず、其の他なりとも予は考へず、然らずとも予は考へず、然らざるにあらずとも予は考へず』と云ふ。

これ卽ち、比丘等よ、第二の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門が、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、詭辯論に入るものなり。

二六　更に第三に、敬すべき沙門婆羅門が、何により何に基づきて、詭辯論として、

それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、此は善なりと如實に知らず、又此は不善なりと如實に知らざるあり。彼思へらく、『予實に此は善なりと如實に知らず、又此は不善なりと如實に知らず、而して予かく此は善なりと如實に知らず、此は不善なりと如實に知らざるが故に、予此は善なりと答へ、或は此は不善なりと答へたらむには、沙門婆羅門にして、博學精智能く議論に長じ、毛端をも射破する〔弓術家の〕如き精鋭なるものありて、他の意見を自己の智を以て、いはゞ、摧破しつつ來りて、その〔善不善の〕ことに關して、予の意見を難詰し、理由を反問し、誤謬を非難せむ。かく此のことに就きて難詰し反問し非難せむ彼等に、予は解答するを得ざらむ。予が解答し得ざることが、予に礙とならむ。礙とならば、そは予に障とならむ』と。かく考へて、彼は難詰を怖れ難詰を嫌厭して、此は善なりとも答へず、又此は不善なりとも答へずして、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入り、『是の如しとも予は考へず、然りとも予は考へず、

然らずとも予は考へず、然らざるにあらずとも予は考へず』と云ふ。
これ即ち、比丘等よ、第三の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門が、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るものなり。

27

二七　更に第四に、敬すべき沙門婆羅門が、何により何に基きて、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、闇昧愚癡なるあり。彼は闇昧愚癡なるが爲に、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入る。『汝予に若し他世は存するやと問ふことあらむに、予若し他世は存すと考へなば、予は汝に他世は存すと答ふべきも、是の如しとも予は考へず、然りとも予は考へず、其の他なりとも予は考へず、然らずとも予は考へず、然らざるにあらずとも予は考へず。汝予に若し他世は存せざるや、……乃至……他世は存し又存せざるや、他世は存するにもあらず又存せざるにもあらざるや。化生の有情は存するや、化生の有情は存せざるや、化生の有情は存し又存せざるや、化生の有

情は存するにもあらず又存せざるにもあらざるや。善惡業の異熟果は存するや、善惡業の異熟果は存せざるや、善惡業の異熟果は存し又存せざるや、善惡業の異熟果は存するにもあらず又存せざるにもあらざるや。[18]眞人は其の死後に存するや、眞人は其の死後に存せざるや、眞人は其の死後に存し又存せざるや、眞人は其の死後に存するにもあらず又存せざるにもあらざるや、と問ふことあらむに、予若し眞人は其の死後に存するにもあらず又存せざるにもあらずと考へなば、眞人は其の死後に存するにもあらず又存せざるにもあらずと答ふべきも、是の如しとも予は考へず、然りとも予は考へず、其の他なりとも予は考へず、然らずとも予は考へず、然らざるにあらずとも予は考へず』と。

これ卽ち、比丘等よ、第四の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門が、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論をなすものなり。

28 二八　これ卽ち、比丘等よ、沙門婆羅門が、詭辯論として、それぞれのことに就きて**質問の起されたる時、四種の根據によりて、支離滅裂の言なる詭辯論に入るもの**

なり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、詭辯論として、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るものは、凡てこれ等の四種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

二九 比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを知實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讃嘆し、正しく語るを得るなり」。

三〇　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、無因論を抱くものあり。彼等は二種の根據によりて、我と世界とを無因にして起るものなりと說く。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて、無因論として、我と世界とを無因にして起ると說くや。

三一　比丘等よ、無想有情と稱せらるゝ天あり。彼等諸天は、想生ずれば其の天身より死沒す。而して其の中の一有情が、其の天身より死沒して〔地上の〕此の生に來り、此の生に來りて家を捨てゝ出家するあり。家を捨てゝ出家して、彼は熱心・精懃・修定・不放逸・正憶念によりて、其の心が三昧に入れる時、想の起れるを想起
29
するも、それ以上をば想起せざるが如き、かゝる心三昧を逮得す。かくて彼は次の如く云ふ。『我と世界とは無因にして起るものなり。所以は如何。予は以前には存在せざりき、存在せざりしも、今や予は轉變して有情となりたればなり』と。これ卽ち、比丘等よ、第一の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門は、無因論として、我と世界とを無因にして起ると說くなり。

三二　更に第二に、敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、無因論として、我が

と世界とを無因にして起ると說くや。

今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、推論家・審察家なるあり。彼は推論に練られ、審察に隨順して、自ら辨知せる所を次の如く云ふ。『我と世界とは無因にして起るものなり』と。

これ卽ち、比丘等よ、第二の立場にして、之により之に基きて、或る沙門婆羅門が、無因論として、我と世界とを無因にして起ると說くものなり。

三三　これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、無因論として、二種の根據によりて、我と世界とを無因にして起ると說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、無因論として、我と世界とを無因にして起ると說くものは、凡てこれ等二種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に(他の根據)あることなし。

三四　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、(人をして)かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたる

ことを知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以
30 てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

三五　「これ等が卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、過去を考へ、過去に對する見を持するものとして、過去に關し、以上の十八種の根據によりて、種々なる浮說を主張するものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、過去を考へ、過去に對する見を持するものとして、過去に關し、種々なる浮說を主張するものは、凡てこれ等十八種の根據によるか、若しはこれ等の何れにかよるものにして、この外に(他の根據)あることなし。

三六　比丘等よ、之に關して如來は次の如く知る…(乃至)…語るを得るなり」。

三七　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、未來を考へ、未來に對する見を持するものあり。彼等は未來に關し、四十四種の根據によりて、種々なる浮說を主張す。彼等敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、未來を考へ、未來に對する見を持するものとして、未來に關し、四十四種の根據によりて種々なる浮說を主張するや。

31

三八　比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、死後に關する有想論を抱くものあり。彼等は十六種の根據によりて死後に我の有想なることを說く。彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて、死後に關する有想論として、十六種の根據により、死後に我の有想なることを說くや。

彼等は我に關して、『我は病むことなく、死後に有想にして、有色なり』、『我は病むことなく、死後に有想にして、無色なり』、『……………有色にして又無色なり』、『……………有色にもあらず又無色にもあらず』。『我は…有邊なり』、『……………無邊なり』、『……………有邊にして又無邊なり』、『……………有邊にもあらず又無邊にもあらず』。『我は

……一想を有するものなり』、『……異想を有するものなり』、『……少想を有するものなり』、『……無量想を有するものなり』。『我は……一向樂を有するものなり』、『……一向苦を有するものなり』、『……樂苦を有するものなり』、『……不苦不樂なるものなり』と說く。

三九　これ卽ち比丘等よ、沙門・婆羅門が、死後に關する有想論として、十六種の根據により、死後に我の有想なることを說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも死後に關する有想論として死後に我の有想なることを說くものは、凡てこれ等十六種の根據によるか若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

四〇　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實

に知り、執取なく解脱せり。
これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂
32 靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以
てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

第三誦品

一 「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、死後に關する無想論を抱くものあり。彼等は八種の根據によりて、死後に我の無想なることを說く。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて死後に關する無想論として、八種の根據により、死後に我の無想なることを說くや」。

二 彼等は我に關して、『我は病むことなく、死後に無想にして、有色なり』、『………無色なり』、『………有色にして又無色なり』、『………有色にもあらず又無色にもあらず』。『………有邊なり』、『………無邊なり』、『………有邊にして又無邊なり』、『………有邊にもあらず又無邊にもあらず』と說く。

三　これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、死後に關する無想論として、八種の根據によりて、死後に我の無想なることを說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、死後に關する無想論として、死後に我の無想なることを說くものは、凡てこれ等八種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に（他の根據）あることなし。

四　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、（人をして）かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを知實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂
33 靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり』。

五　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、死後に關する非有想非無想論を抱くものあり。彼等は八種の根據によりて死後に我の有想にもあらず無想にもあらざることを說く。彼等敬すべき沙門婆羅門は、何により何に基きて、死後に關する非有想非無想論として、八種の根據により、死後に我の有想にもあらず無想にもあらざることを說くや。

六　彼等は我に關して、『我は病むことなく、死後に非有想非無想にして、有色なり』、『……無色なり』、『……有色にして又無色なり』、『……有色にもあらず、又無色にもあらず』。『……有邊なり』、『……無邊なり』、『……有邊にして又無邊なり』、『……有邊にもあらず、又無邊にもあらず』と說く。

七　これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、死後に關する非有想非無想論として、八種の根據により、死後に我の非有想非無想なることを說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、死後に關する非有想非無想論として、死後に我の非有想非無想なることを說くものは、凡てこれ等八種の根據によるか、若

しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

八　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

34 九　「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして斷滅論を抱くものあり。彼等は七種の根據によりて、〔現に生存しつゝある〕有情の斷滅消失死滅を說く。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて斷滅論として、七種の根據により、現に生存しつ

つある有情の斷滅消失死滅を說くや。

一〇　今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、是の如き說・是の如き見を有するものあり。『君よ、實に此の我は有色にして、四大種より成り、父母より生れ、而して身の壞したる時斷滅し消失して、死後に存することなきが故に、かくて、君よ、此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說く。

一一　之に對して他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の說くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、此の我は猶未だ全く斷滅するにはあらず。君よ、猶他の天的にして有色、欲界に屬し段食に養はるゝ我あり。汝は之を知らず之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後に存することなきが故に、君よ、かくて、此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說く。

一二　之に對して〔更に〕他者はかく云ふ。『君よ、實に汝の說くかゝる我は存す。

予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、此の我は猶未だ、全く斷滅するにはあらず。猶他の天的にして有色、意所成にして、大小一切の肢を具し、一の根をも缺かざる我あり。汝は之を知らず之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後に存することなきが故に、君よ、かくて、此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說く。

一三　之に對して〔更に〕他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の說くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、此の我は猶未だ全く斷滅するにはあらず。君よ、猶他の凡ての方面に於て、色想を超出し、有對の想滅して、異想を憶念せざるが故に、「虛空は無邊なり」との空無邊處に達せる我あり。
35 汝は之を知らず之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後存することなきが故に、君よ、かくて此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說く。

一四　之に對して「更に他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の説くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは説かず。されど、君よ、此の我は猶未だ全く斷滅するにはあらず。君よ、猶他の凡ての方面に於て空無邊處を超出して－識は無邊なり」との識無邊處に達せる我あり。汝は之を知らず之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後存することなきが故に、君よ、かくて此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を説く。

一五　之に對して「更に他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の説くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは説かず。されど、君よ、此の我は猶未だ全く斷滅するにはあらず。君よ、猶他の凡ての方面に於て、識無邊處を超出して、「何物もあることなし」との無所有處に達せる我あり。汝は之を知らず之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後存することなきが故に、君よ、かくて此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を説く。

一六　之に對して〔更に〕他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の說くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、此の我は猶未だ全く斷滅するにはあらず。君よ、猶他の凡ての方面に於て、無所有處を超出して、「此は寂靜なり、此は美妙なり」との非想非非想處に達せる我あり。汝は之を知らず、之を見ざれども、予は之を知り之を見る。此の我は、君よ、身の壞したる時、斷滅し消失して、死後存することなきが故に、君よ、かくて此の我は全く斷滅するなり』と。是の如く或る者は現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說く。

一七　これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、斷滅論として、七種の根據によりて、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、斷滅論として現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を說くものは、凡てこれ等七種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

一八　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくかく

の來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

一九 「比丘等よ、或る沙門婆羅門にして、〔最上〕現在涅槃論を抱くものあり。彼等は五種の根據によりて、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說く。敬すべき彼等沙門婆羅門は、何により何に基きて、最上現在涅槃論として、五種の根據によりて、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說くや。

二〇 今、比丘等よ、或る沙門若しは婆羅門にして、是の如き說・是の如き見を有するあり。『君よ、實に此の我は〔現在に於て〕五欲の樂を滿足し具足して耽る時、則ち、

君よ、此の我は最上現在涅槃に達したるなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說く。

二一　之に對して他の者はかく云ふ。『君よ、汝の說くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、此の我は實に猶未だ最上現在涅槃に達したるにはあらず。所以は如何。〔五〕欲は、君よ、無常にして苦、而も轉變性のものにして、其の轉變性によつて變化するが爲に、憂悲苦惱悶生ずればなり。37 されど、君よ、此の我が諸欲を離れ、不善法を離れ、有尋有伺にして、而も離より生ぜる喜樂ある初禪に達して住する時、則ち、君よ、此の我は最上現在涅槃に達せるなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說く。

二二　之に對して〔更に〕他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の說くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは說かず。されど、君よ、實に此の我は、猶未だ最上現在涅槃に達したるにはあらず。所以は如何。そこには有尋有伺なるが故に、其〔の初禪〕は粗なりと云はるればなり。君よ、實に此の我にして尋伺を滅し、內

心静安となり、心の一境相を得て、無尋無伺にして、而も定より生ぜる喜樂ある第二禪に達して住する時、則ち、君よ、此の我は最上現在涅槃に達せるなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を説く。

二三　之に對して〔更に〕他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の説くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは説かず。されど、君よ實に此の我は猶未だ最上現在涅槃に達せるにはあらず。所以は如何。そこには喜ありて、心躁騷なるが故に、其〔の第二禪〕は粗なりと云はるればなり。然るに、君よ、此の我にして喜を脱し、捨となりて住し、正念正智にして、身によりて樂を感受し、諸の聖者が「捨にして念ある樂住なり」と宣説する第三禪に達して住する時、則ち、君よ、此の我は最上現在涅槃に達せるなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を説く。

二四　之に對して〔更に〕他の者はかく云ふ。『君よ、實に汝の説くかゝる我は存す。予は決してかゝる我は存せずとは説かず。されど、君よ實に此の我は、猶未だ最上現在涅槃に達せるにはあらざるなり。所以は如何。そこには、此は樂なりと

の心の作意あるが故に、其〔の第三禪〕は粗なりと云はるればなり。此の我にして、君よ、實に樂を捨離し苦を捨離し、又以前にありたる喜悅と憂惱とを滅して、不苦[38]不樂にして、而も捨念淸淨なる第四禪に達して住する時、則ち、君よ、此の我は最上現在涅槃に達せるなり』と。是の如く或る者は、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說く。

二五　これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、最上現在涅槃論として、五種の根據により、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說くものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも最上現在涅槃論として、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を說くものは、凡てこれ等の五種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に〔他の根據〕あることなし。

二六　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂

滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脱せり。

これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

二七 「これ卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、未來を考へ未來に對する見を持するものとして、以上四十四種の根據により、未來に關して種々なる浮說を主張するものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、未來に對する見を持するものとして、未來に關して種々なる浮說を主張するものは、凡てこれ等四十四種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この外に「他の根據」あることなし。

二八 比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、「人をして」かくかくの趣に生ぜしめ、かくかく

の來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたる[39]ことをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

　これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美妙、よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

二九　「これ等は卽ち、比丘等よ、彼等沙門婆羅門が、過去を考へ、未來を考へ、過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして以上六十二種の根據により、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するものなり。比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、過去を考へ、未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、過去未來に關して種々なる浮說を主張するものは、凡てこれ等六十二種の根據によるか、若しはこれ等の何れかによるものにして、この

外に〔他の根據〕あることなし。

三〇　比丘等よ、之に關して如來は次のことを知る。『是の如く執せられ、是の如く取せられたるこれ等の見處は、〔人をして〕かくかくの趣に生ぜしめ、かくかくの來生あらしむ』と。如來は啻に之を知るのみならず、更にこれよりも優れたることをも知る。而も其の知に取することなし。取せざるが故に、內心に於て寂滅を知得せり。卽ち、比丘等よ、如來は受の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知り、執取なく解脫せり。

　これ卽ち、比丘等よ、如來自ら證知し現證して說く、甚深にして難見難覺、而も寂靜美、妙よく尋思の境を超え、至微にして、賢者のみよく解する諸法なれば、之を以てのみ、諸人は如來を如實に讚嘆し、正しく語るを得るなり」。

三一　「其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、常住論として、四種の根據により、
40 我と世界とを常住なりと說くも、こは彼等敬すべき沙門婆羅門の不知不見にして受けし所にして、而も愛に囚はれたる動搖せる偏見なるのみ。

三三　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、一分常住一分無常論として、四種の根據により、我と世界とを、一分は常住・一分は無常なりと説くも、こは彼等…〔乃至〕…偏見なるのみ。

三四　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、邊無邊論として、四種の根據により、世界の邊無邊なるを説くも、こは彼等…〔乃至〕…偏見なるのみ。

三五　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、詭辯論として、四種の根據により、それぞれのことに就きて質問の起されたる時、支離滅裂の言なる詭辯論に入るも、こは彼等…〔乃至〕…偏見なるのみ。

三六　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、無因論として、二種の根據により、我と世界とを、無因にして起ると説くも、こは彼等…〔乃至〕…偏見なるのみ。

三七　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、過去を考へ、過去に對する見を有するものとして、以上十八種の根據により、過去に關して種々なる浮説を主張するも、こは彼等…〔乃至〕…偏見なるのみ。

三八　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、死後に關する有想論として、十

六種の根據により、死後に我の有想なるを説くも、こは彼等…(乃至)…偏見なるのみ。

41 **三九** 其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、死後に關する無想論として、八種の根據により、死後に我の無想なるを説くも、こは彼等…(乃至)…偏見なるのみ。

四〇 其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、死後に關する非有想非無想論として八種の根據により、死後に我の非有想非無想なるを説くも、こは彼等…(乃至)…偏見なるのみ。

四一 其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして斷滅論として、七種の根據により、現に生存しつゝある有情の斷滅消失死滅を説くも、こ等は彼…(乃至)…偏見なるのみ。

四二 其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、最上現在涅槃論として、五種の根據により、現に生存しつゝある有情の最上現在涅槃を説くも、こは彼等…(乃至)…偏見なるのみ。

四三 其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、未來を考へ、未來に對する見を

持するものとして、以上四十四種の根據により、未來に關して、種々なる浮說を主張するも、こは彼等…（乃至）…偏見なるのみ。

四四　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、過去を考へ、未來を考へ、過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、以上六十二種の根據により、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するも、こは彼等敬すべき沙門婆羅門の不知不見にして受せし所にして而も愛に囚はれたる動搖せる偏見なるのみ」。

42 四五　「其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、常住論として、四種の根據により、我と世界とを常住なりと說くも、これまた觸を緣とするなり。

四六　其の中…（乃至）…一分常住一分無常論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

四七　其の中…（乃至）…邊無邊論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

四八　其の中…（乃至）…詭辯論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

四九　其の中…（乃至）…無因論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五〇　其の中……（乃至）……過去を考へ過去に對する見…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五一　其の中…（乃至）…死後に關する有想論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五二　其の中…（乃至）…死後に關する無想論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五三　其の中…（乃至）…死後に關する非有想非無想論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五四　其の中…（乃至）…斷滅論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五五　其の中…（乃至）…最上現在涅槃論…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

43 五六　其の中…（乃至）…未來を考へ未來に對する見…（乃至）…これまた觸を緣とするなり。

五七　其の中…（乃至）…過去を考へ、未來を考へ、過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、以上六十二種の根據により、過去未來に關して、種々な

る浮說を主張するも、これまた觸を緣とするなり。

五八　「其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、常住論として、四種の根據により、我と世界とを常住なりと說くも、これ等が凡て觸なくして感受せむこと、この處あることなし。

五九　其の中…〔乃至〕…一分常住一分無常論…〔乃至〕…この處あることなし。

六〇　其の中…〔乃至〕…邊無邊論…〔乃至〕…この處あることなし。

六一　其の中…〔乃至〕…詭辯論…〔乃至〕…この處あることなし。

六二　其の中…〔乃至〕…無因論…〔乃至〕…この處あることなし。

六三　其の中…〔乃至〕…過去を考へ過去に對する見…〔乃至〕…この處あることなし。

44 六四　其の中…〔乃至〕…死後に關する有想論…〔乃至〕…この處あることなし。

六五　其の中…〔乃至〕…死後に關する無想論…〔乃至〕…この處あることなし。

六六　其の中…〔乃至〕…死後に關する非有想非無想論…〔乃至〕…この處あること

なし。

六七　其の中…〔乃至〕…斷滅論…〔乃至〕…この處(ことはり)あることなし。

六八　其の中…〔乃至〕…最上現在涅槃論…〔乃至〕…この處あることなし。

六九　其の中…〔乃至〕…未來を考へ未來に對する見…〔乃至〕…この處あることなし。

七〇　其の中…〔乃至〕…過去を考へ、未來を考へ、過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、以上六十二種の根據により、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するも、これ等が凡て觸なくして感受せむこと、この處あることなし」。

七一　其の中、比丘等よ、何れの沙門婆羅門にして、常住論として、四種の根據により、我(が)と世界とを常住なりと說くも、又何れの沙門婆羅門にして、一分常住一分無
45 常論を、…〔乃至〕…邊無邊論を、…〔乃至〕…詭辯論を、…〔乃至〕…無因論を、…〔乃至〕…過去の考を、…〔乃至〕…死後に關する有想論を、…〔乃至〕…死後に關する無想論を、…〔乃

至〕…死後に關する非有想非無想論を、…〔乃至〕…斷滅論を、…〔乃至〕…〔最上〕現在涅槃論を、…〔乃至〕…[19]過去の考を、…〔乃至〕…未來の考を、…〔乃至〕…過去を考へ、未來を考へ、過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、これ等六十二種の根據により、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するも、凡てこれ數々六觸處を觸して感受するものにして、この觸には受を緣として愛起り、愛を緣として取起り、取を緣として有起り、有を緣として生起り、生を緣として老死憂悲苦惱悶起る。比丘等よ、故に比丘にして、六觸處の集と滅と味著と過患と出離とを如實に知らば、彼は則ち、これ等凡てよりも優れたることを知るなり。

七二 比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、過去を考へ、或は未來を考へ、又は過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するものは、凡て皆この六十二種の根據によりて網羅せられ、其の中に囚はれて跳躍し、其の中に攝せられ網羅せられて跳躍するなり。

恰も、比丘等よ、老巧なる漁夫若しは漁夫の子弟が、細き目の網を以て小池を覆ひ、自ら『此の池に住む何れの粗大なる魚にても、凡て網羅せられ、其の中に捕はれ

て跳躍し、其の中に攝せられ網羅せられて跳躍す』と考へ得るが如く、是の如く、比丘等よ、何れの沙門若しは婆羅門たりとも、過去を考へ、或は未來を考へ、又は過去未來を考へ、過去未來に對する見を持するものとして、過去未來に關して、種々なる浮說を主張するものは、凡て皆この六十二種の根據によつて網羅せられ其の中に捕はれて跳躍し、其の中に攝せられ網羅せられて跳躍するなり。

七三　比丘等よ、如來の身は、生へ導くものを斷ち切られたるものとして住す。この身の住せむ間は、人天は之を見る。されど身壞し命終りて後は、人天は之を見ざるべし。

恰も、比丘等よ、一束の菴羅樹の莖の伐られたる時は、其の莖に茂れる何れの菴羅果も、皆それに隨ひて根より斷たるゝが如く、是の如く、比丘等よ、如來の身は生へ導くものを斷ち切られたるものとして住し、その身の住する間は、人天は之を見るも、身壞し命終りて後は、人天は之を見ざるべし」と。

七四　此の如く說かれたる時、長老阿難は世尊に白して言く、「希有なり、師よ、未曾有なり、師よ、此の法門をば、師よ何と名づくべきや」。

「然らば今、阿難よ、汝は此の法門を義網と名づけて之を持すべし、法網と名づけて之を持すべし、梵網と名づけて之を持すべし、見網と名づけて之を持すべし、無上戰勝と名づけて之を持すべし」。

世尊はかく曰へり。歡喜せる比丘等は、世尊の所説を信受せりと。[20] 而して此授記經の說かれたる時、一千世界が震動せりといふ。

註❶梵網經（Brahmajālasutta）は、漢譯長阿含には梵動經とあれど、チャーラは網の義なれば、「梵網經」となすを可とす。異譯に梵網六十二見經ありて、網の意味を詮はす。

❷世尊（Bhagavat）は、薄伽梵と音譯すること數々なれど、今は世尊と譯したり。

❸底本には、前節の最後と同じく、「世尊幷に比丘僧伽の後に隨ひ行きぬ」（Bhagavantaṃ piṭṭhito piṭṭhito anubaddhā honti bhikkhu-saṅghañ ca）とあれど、これ不合理なれば他の寫本に「住す」（viharanti）とあるを取れり。

❹如來（Tathāgata）は阿含にては佛陀が自稱として此語を用ふる場合と、他のものが佛陀を尊稱して此の語を用ふる場合とあり。今は前者なり。

❺第八節より第二十七節に至る諸節は、以下の長部經典第一卷の各經の殆ど凡てに存す

れば、そこでは適宜省略せられたり。次の沙門果經にて知らるゝ如く、これが所謂修行道の大綱の骨子の一部をなすなり。修行道の大綱は、後に戒・定・慧の三學、戒・定・慧・解脱の四法、戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分、又は信・戒・念・定・慧の五根及び五力の如くに、綱目化せらるゝ根本をなすものにして、第八節より第二十七節に至る諸節は、これ等の中に戒に當るものなり。此の點は長部經典二の大般涅槃經に、既に三學四法に綱目化せられ居るより見て明なり。

❻升の原語 kaṁsa は、銅の意なれば、之を貨幣となす說あれど、漢譯には秤升尺に對して斗秤又は斤斗寸尺とありて、必ず斗を有すれば、今之に參照して「升」と譯せり。或は kaṁsa は梵語の karṣa に對するやも知れず。karṣa は重さ又は量の名なり。

❼「無益徒勞の話」の原語 tiracchāna -kathā は、「獸の話」の意味なれど、漢譯に遮道無益之言とある如く、何等道の爲の益とならざる無駄の話をいふなり。

❽「過去を考へ」(pubbanta-kappikā)の pubbanta は、「前邊」と譯すべく「過去」を指し、kappika は kappa より派生せるも、此 kappa は、こゝにては、直に通常の「劫」の意にはあらざるべく、從つて kappika は「考へて」と譯して可なるべし。四三頁の「未來を考へ」(aparantakappikā) もこれに准ず。

❾「浮說」の原語 adhivutti-pada は、語其ものに「浮虛」の意味はなきも、こゝには其の意味にて用ひられ居ること、註釋者佛音のいふが如し。

❿名字(gotta)は、通常の姓なり。次の姓(vaṇṇa)は、婆羅門・刹帝利・毘舍・首陀羅の四姓の何れかを指す。

⓫見處 (diṭṭhiṭṭhāna) の「處」ṭhāna は、上には「立場」と譯せり。

⓬「執取なく」の原語 anupādā は、「無餘にして」と譯するも可なり。後世に所謂無餘涅槃の古き言詮はしなり。

⓭「世界の壞したる時」の原語 saṁvaṭṭamāno loko は、saṁvaṭṭamāne loke の誤なりといふ說に從ふべし。

⓮「住したる」の原語 nibbusitattā は、殆ど他に見出されざる文字にして、辭書には不安の意味ありとなせど疑はし。今は單に「住したること」の意味に見る。nirvasitatva に當る。勿論離れて住したることの意味にても可なり。

⓯原文に ṭhānaṁ kho pan' etaṁ vijjati yaṁ … とありて、yaṁ 以下にこの後者の一有情が云々と述べらるゝなり。ṭhāna は處(コトハリ)の意にて yaṁ 以下を指してこの處ありといふ意味なり。今は單に「ことあり」と譯せるも、あるやも知れずの意味ならずして、必ずあるを意味す。故に單に「來るあり」と譯するも可なり。

⓰原語 parivaṭumo は、註釋にも解釋なく、漢譯にも相當する譯字なし。英譯に a path could be traced round it と譯され、獨譯に rings abgezirkelt と譯さる。何か綴に誤あるべしともいふ。次の無邊及び有邊無邊の二說の文と比較すれば、意味は「周圍」に關する點を指すと推定せらる。

⓱原語 amarā-vikkhepika の amarā は「鰻」、「vikkhepa は通常「散亂」と譯さるゝ語なれど、こゝにては鰻ののたくること、質問に對して鰻ののたくる如き支離滅裂ののたくりごとを答としていふを指す。「詭辯論」は全く義譯なり。漢譯に異問異答ともあり。又共諍所言各異言教も之に當る。

⑱眞人(Tathāgata)は、如來の原語と同じ。如來は佛陀の自稱なること阿含經藏にて通例なれど、こゝにては詭辯論者の用ふる語にて佛陀を指す理なし。註釋者も此の場合には有情の意味と同じとなす。此の經の說時とせらるゝ頃に、外道の間、又は佛弟子の間に、佛陀の死後を問題とすべきが如きことのあるべき理なし。故に如來と譯さずして、單に眞人と譯したり。

⑲前には之に對する說なし。恐らく混入なるべし。

⑳此「と」は、最初の「是の如く我聞く」に對す。

沙門(しゃもんが)果経(ぎょう) (Sāmaññaphala-sutta)

羽溪了諦(はたに りょうたい)訳

二 沙門果經（サーマンニャパラ・スッタ）

47 一 是(かく)の如く我(われ)聞く。或る時、世尊、王舎城の❶小兒醫師なる耆婆(ヂーヴァカ)の菴羅(アンバ)園に在(まし)まして、千二百五十人の大比丘衆と倶なりき。その時、摩掲陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、第四月カッティカ月の十五日、滿月の夜、布薩の日に際し、その大臣達に圍繞せられて、華麗なる宮殿の高樓に坐しゐたりき。かくて、摩掲陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、布薩の日に際して、感興の語を發して言ひぬ。「ああ實(げ)に愛すべきかな、月明の夜は。あゝ實に麗しきかな、月明の夜は。あゝ實に樂しきかな、月明の夜は。あゝ實に和(なご)やかなるかな、月明の夜は。あゝ實に幸多きかな、月明の夜は。今、我等如何なる沙門若しくは婆羅門に近侍して、以て近侍する我等の心を悅豫せしめ得べきや」と。

二 こゝに於て、大臣の一人は、摩掲陀國王にして韋提希の子なる阿闍世に奏して言(いは)く、「大王よ、茲に不蘭迦葉(プーラナカッサパ)といふものあり。僧伽の主、敎團の元首たり。彼は

敎團の導師にして、知識博く、令名高し。一派の開祖にして、衆人に尊崇せらる。出家して歳久しく、經驗に富める長老なり。大王はかの不蘭迦葉に近侍し給へかし。おそらく彼は、近侍し給へる大王の御心を悅豫せしめまつらむ」と。かく奏上せしも、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、默然として〔應（こた）へざりき〕。

48

三 その時、他の大臣も亦、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世に奏して言く、「大王よ、茲に末伽梨瞿舍利（マッカリゴーサーラ）といふものあり。僧伽の主、敎團の元首たり。彼は敎團の導師にして、知識博く、令名高し。一派の開祖にして、衆人に尊崇せらる。出家して歳久しく、經驗に富める長老なり。大王はかの末伽梨瞿舍利に近侍し給へかし。おそらく彼は、近侍し給へる大王の御心を悅豫せしめまつらむ」と。かく奏上せしも、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、默然として〔應へざりき〕。

四 その時、他の大臣も亦…〔乃至〕…阿耆多翅舍欽婆羅（アヂタケーサカンバラ）といふものあり…〔乃至〕…默然として〔應へざりき〕。

五 その時、他の大臣も亦…〔乃至〕…婆浮陀迦旃那（バクダカッチャーヤナ）といふものあり…〔乃至〕…默然

として〔應へざりき〕。

六　その時、他の大臣も亦…〔乃至〕…散若夷毘羅梨沸といふものあり…〔乃至〕…默然として〔應へざりき〕。

七　その時、他の大臣も亦…〔乃至〕…尼乾子といふものあり…〔乃至〕…默然として49〔應へざりき〕。

八　その時、小兒醫師なる耆婆は、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世より程遠からざる處に、默然として坐せり。かくて、阿闍世王は耆婆に言ひぬ。

「爾、予が忠良なる耆婆よ、何故に爾は今沈默せるや」。

「大王よ、茲に世尊・應供・等正覺者ありて、千二百五十人の大比丘衆と倶に、我等の菴羅園に住し給ふ。而して世尊瞿曇に就きて、是の如き美しき名稱起れり。『實にかの世尊は、かくて、應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊なり』と。大王はかの世尊に近侍し給へかし。おそらく世尊は、近侍し給へる大王の御心を悅豫せしめまつらむ」。

「然らば、予が忠良なる耆婆よ、乘象を裝鞍せよ」。

九　「大王よ、然り」と、小兒醫師なる耆婆は王に答へて、五百の牝象と、王の自用たる龍象とを裝鞍し、王に奏して言く、「大王よ、乘象は裝鞍せられたり。いざ、御意のままに擧措あらせ給へ」と。

その時、王は五百の牝象に夫々彼の婦人を乘せ、〔自らは〕自用の龍象に乘り、炬火を持つ者を伴ひ、大王の威嚴を以て王舍城より出でて、小兒醫師なる耆婆の菴羅園に赴きぬ。

一〇　かくて、菴羅園より程遠からざる處に到るや、王は〔突如〕恐怖心に襲はれて、
50 總身戰慄し、身毛竪立せり。而して畏怖と驚愕とに滿ち、身毛竪立せし王は、小兒醫師なる耆婆に言ひぬ。

「予が忠良なる耆婆よ、爾は予を計るにはあらざるか。予が忠良なる耆婆よ、爾は予を欺くにはあらざるか。予が忠良なる耆婆よ、爾は予を敵手に渡すにはあらざるか。實に〔茲に〕千二百五十人の大比丘衆ありて、しかもそれより〔發(おこ)る〕何等の騷音もなく、噯の響も咳の音も絶えてなきこと、如何にしてあり得べきや」。

「大王よ、畏怖し給ふ勿れ。大王よ、臣は君を計りまつるにあらず、君を欺きまつ

るにあらず、敵手に君を渡しまつるにあらず。大王よ、進御あらせ給へ。大王よ、進御あらせ給へ。かの周廊には燃燈輝き亘れり」。

一一　かくて、王はその龍象の〔通過し得るかぎりの〕地上を、それに乗じて進み行き、然る後下乗して、かの周廊の入口に歩を運びて近づきぬ。近づきて、耆婆に言へり。

「予が忠良なる耆婆よ、世尊は今何處に在(ましま)すや」。

「大王よ、世尊は彼處に在す。大王よ、中央の柱の傍に、世尊は東面して、比丘衆に向ひて坐し給ふ」。

一二　かくて、王は世尊に近づけり。近づきて一隅に坐し、一隅に坐し竟りて王は、恰も清澄なる湖水の如く默然として靜坐せる比丘衆を見渡し、感興の語を發して言ひぬ。「今この比丘衆の具ふる如き寂靜を、予の太子優陀夷跋陀(ウダーキバッダ)も具へかし」と。〔その時、世尊は王に告げ給へり〕。

「大王よ、卿は卿の愛するものに思ひを寄せ給ふや」。

「然り、大徳よ、予は太子優陀夷跋陀を愛す。今この比丘衆の具ふる如き寂靜を、

予の太子優陀夷跋陀も具へかし」。

一三　かくて、王は世尊に恭敬頂禮し、比丘衆に合掌禮拜して、一隅に坐せり。一
51 隅に坐し竟りて、世尊に白しぬ。

「大徳よ、若し世尊にして質問を發することを予に許させ給はば、予は世尊に聊か問ひまつらんと欲す」。

「大王よ、卿の欲するまゝに問ひ給ふべし」。

一四　「大徳よ、（世には）種々なる技能職業（のもの）あり。例へば、調象師・調馬師・車術師・弓術師・軍旗手・元帥・戰士・高級武官・軍事探偵・大龍の如き勇士・裝甲兵・奴隷出身者・料理人・理髮師・浴僕・製菓者・編鬘者・漂白者・織物師・籠製造人・陶師・算數家・印章づき指環製造人、その他かくの如き世に知らるゝ種々なる技能職業のもの――彼等は皆、目に見ゆる彼等の技能の報酬を、現世に於て享受し、以て自身を幸福にし安樂ならしめ、父母を幸福にし安樂ならしめ、妻子を幸福にし安樂ならしめ、知友を幸福にし安樂ならしめ、また沙門婆羅門に對しては、天界に生れて天界の安隱なる福報を獲べき尊勝なる布施を捧ぐ。大徳よ、是の如く、現世に於ける目に見ゆる

沙門〔生活〕の果報を、施設するを得給ふや」。

一五　「大王よ、卿は嘗て卿の此の質問を、他の沙門婆羅門に致されしや否やを、記憶せらるゝや」。

「然り、大德よ、予は嘗て予の此の質問を、他の沙門婆羅門に致せしことを記憶す」。

「然らば、彼等は如何に應答せしや。大王よ、若し支障なくば、これを語らるべし」。

「大德よ、世尊若しくは世尊の如き御方の在す處にては、これを語るも絕えて支
52 障なかるべし」。

「然らば、大王よ、語らるべし」。

一六　「大德よ、或る時、予は不蘭迦葉（プーラナカッサパ）を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『迦葉よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり。例へば、調象師・調馬師・車術師・弓術師・軍旗手・元帥・戰士・高級武官・軍事探偵・大龍の如き勇士・裝甲兵・奴隸出身者・料理人・理髮師・浴僕・製菓者・編鬘者・漂白者・織物師・籠製造人・陶師・算數家・印章づき指環製造人、その他かくの如き世に知らるゝ種々なる技能職業のもの――彼等は皆、目に見

ゆる彼等の技能の報酬を、現世に於いて享受し、以て自身を幸福にし安樂ならしめ、父母を幸福にし安樂ならしめ、妻子を幸福にし安樂ならしめ、知友を幸福にし安樂ならしめ、また沙門婆羅門に對しては、天界に生れて天界の安穩なる福報を獲べき尊勝なる布施を捧ぐ。迦葉よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設するを得るや』と。

一七　かく問はれて、大德よ、不蘭迦葉は予に次の如く言へり。『大王よ、實に〔如何なることをか〕爲し、若しくは爲さしむるもの、切斷し、若しくは切斷せしむるもの、苦しめ、若しくは苦しましむるもの、惱まし、若しくは惱まさしむるもの、戰慄（をのの）かし、若しくは戰慄かしむるもの、生命を害するもの、與へられざるを取るもの、家の墻壁を侵して入るもの、掠奪をなすもの、盜竊をなすもの、追剝をなすもの、他人の妻と通ずるもの、妄語をなすもの、これ等をなすものによりて、何等罪惡は犯さるゝことなし。もし人ありて、剃刀の如き尖鋭なる輪寶を以て、この地上の衆生を一肉聚一肉塊となすとも、これに因りて罪惡の生ずることなく、また罪惡の果報あることなし。人ありて、恒河の南岸に行きて、殺戮し、また殺戮せしめ、切斷し、また

切斷せしめ、苦しめ、また苦しましむとも、これに因りて罪惡の生ずることなく、また罪惡の果報あることとなし。人ありて、恒河の北岸に行きて、布施し、また布施せしめ、祭祀し、また祭祀せしむとも、これに因りて功德の生ずることなく、また功德の果報あることとなし。布施によるも、調御によるも、禁戒によるも、實語によるも、
53 これに因りて功德の生ずることなく、また功德の果報あることとなし』と。

一八 かくの如く、大德よ、實に不蘭迦葉は、予によりて現世に於ける沙門〔生活〕の果報を問はれて、[2]非業を說けり。譬へば、大德よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、ラブヂャ〔麪麵樹〕のそれに就きて說明し、また麪麵樹の果實に就きて質問せられて、菴羅樹のそれに就きて說明せるが如く、かくの如く、大德よ、實に不蘭迦葉は、現世に於ける沙門〔生活〕の果報を問はれて、非業を說けり。されど、大德よ、予に次の如き想念起りぬ。『實に予の如きもの、如何にして、予の領內に住する沙門婆羅門に、不快を與へて然るべしと思ひ得んや』と。故に、大德よ、予は彼の言說に對して、稱讚もせず、また非難もせざりき。稱讚もせず非難もせずして、予は內心不滿を抱きつゝも、何等不滿の言を發せず、平靜に彼の所說を〔聽〕受して、〔しかも〕こ

れを尊重せずして起座退出したり。

一九　大徳よ、或る時、予は末伽梨瞿舍利(マッカリゴーサーラ)を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『瞿舍利よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり。…乃至…瞿舍利よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設するを得るや』と。

二〇　かく問はれて、大徳よ、末伽梨瞿舍利は次の如く言へり。『大王よ、有情の染汚には、因もなく緣もなし。有情は無因無緣にして染汚なり。有情の清淨には、因もなく緣もなし。有情は無因無緣にして清淨なり。自作もなく、他作もなく、人の作もなく、また力もなく、精進もなく、人の體力もなく、人の氣力もなし。一切の有情、一切の生物、一切の有類、一切の靈魂は、自在力なく、無力無精進にして、〔豫ての〕決定と、❸結合と、自然の性質とによりて、互に變異し、❹六種の階級に於いて、樂と苦とを受く。實に百四十萬種の生門を首(はじめ)として、六千及び六百種の生門あり。
54 五百種の業、五種の業、三種の業、一業、半業あり。六十二種の道跡あり。六十二種の中劫あり。六種の階級あり。八種の人地あり。四千九百種の生業あり。四

千九百の遊行者、四千九百の龍土、二千の根、三千の地獄、三十六の塵界、七想胎、七無想胎、七節胎、七天、七人、七鬼、七池、七❺林、七百林、七嶮、七百嶮、七夢、七百夢あり。八百四十萬大劫ありて、この間、愚者も賢者も流轉輪廻して、苦の終〔滅〕を爲すべし。この間に於いて、「我はこの戒行と苦行と梵行とによりて、未熟業を成熟せしめ、或は已熟業を忍受しつゞけて、これを滅盡せむ」といふことなし。實にかくの如く、桝によりて量り定められたる樂と苦とは、輪廻中に於ては終〔滅〕することなく、また消長し增減することなし。恰も投げられたる絲毬が、〔その捲かれたる絲の〕終るまで解けゆくが如く、愚者も賢者も、流轉輪廻を完了して後、始めて苦の終〔滅〕を爲すべし』と。

二一　かくの如く、大德よ、末伽梨瞿舍利は、現世に於ける沙門〔生活〕の果報を問はれて、❻輪廻淨化を說けり。譬へば、大德よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、麵麭樹のそれに就きて說明し、また麵麭樹の果實に就きて質問せられて、菴羅樹のそれに就きて說明せるが如し。かくの如く、大德よ、實に末伽梨瞿舍利は、現世に於ける沙門〔生活〕の果報を問はれて、輪廻淨化を說きぬ。されど、大德よ、予に次の

如き想念起れり。『實に、予の如きもの、如何にして、予の領内に住する沙門婆羅門に、不快を與へて然るべしと思ひ得んや』と。故に、大德よ、予は彼の言說に對して、
55 稱讚もせず、また非難もせざりき。稱讚もせず、また非難もせずして、予は內心不滿を抱きつゝも、何等不滿の言も發せず、平靜に彼の所說を〔聽〕受して、〔しかも〕これを尊重せずして起座退出せり。

二二　大德よ、或る時、予は阿者多翅舍欽婆羅を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『阿者多翅舍欽婆羅よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり。…乃至…阿者多翅舍欽婆羅よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設し得るや』と。

二三　かく問はれて、大德よ、阿者多翅舍欽婆羅は、予に次の如く言へり。『大王よ、布施なく、供犧なく、祭祀なし。善惡業の異熟果もなく、今世もなく、他世もなく、母もなく、父もなく、化生の有情もなし。沙門婆羅門にして正住正行し、今世他世をすべて自ら知り證して〔他に〕知らしむるもの、世間にあることなし。人は四大種

より成り、死せば、地は地身に還歸し、水は水身に還歸し、火は火身に還歸し、風は風身に還歸し、諸根は虚空に轉入す。〔四〕人のものが、第五[7]としての擔架によりて屍體を取りて〔運び〕行き、火葬場に達するまで〔讃嘆の〕語を發するも、〔燒かれて殘れる〕彼の骨は鴿色となり、彼の供物は灰となる。布施の説は、ただ愚者のなすところなり。若し人〔死後の〕存在を説かば、これ無根の妄説のみ。愚者も賢者も、身終らば斷滅し消失して、死後に存する何物もあることなし』と。

二四 かくの如く、大徳よ、阿耆多翅舍欽婆羅は、沙門〔生活〕の現世の果報を問はれて、斷滅論を説きぬ。譬へば、大徳よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、麵麭樹のそれに就きて説明し…〔乃至〕…これを尊重せずして起座退出せり。

二五 大徳よ、或る時、予は婆浮陀迦旃那（パクダーカッチャーヤナ）を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『婆浮陀迦旃那よ、〔この世には〕種々なる技能職業のもの〕あり…乃至…婆浮陀迦旃[56]那よ、是の如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設するを得るや』と。

二六 かく問はれて、大徳よ、婆浮陀迦旃那は予に次の如く言へり。『大王よ、この

七身は作られず、作らしめられず、創造せられず、創造せしめられざるものにして、何ものをも生産することなく、山頂の如く常住にして、直立せる石柱の如く不動なり。これ等は動搖せず轉變せず、相互に侵すことなく、相互に樂にも苦にもまた樂苦にも導くことなし。七とは何ぞや。地身・水身・火身・風身・樂・苦及び第七に靈魂これなり。この七身は、作られず、作らしめられず、創造せられず、創造せしめられざるものにして、何ものをも生産することなく、山頂の如く常住にして、直立せる石柱の如く不動なり。これ等は動搖せず轉變せず、相互に侵すことなく、相互に樂にも苦にもまた樂苦にも導くことなし。この故に、能殺者なく、亦殺さしむる者もなく、能聞者なく、亦聞かしむる者もなく、能識者なく、亦識らしむる者もなし。若し人利刀を以て他の頭を切斷せむに、それに依りて何人も何人の生命を奪ふことなし。唯これ七身の間隙に刀劍の貫通せしに過ぎず』と。

57 **二七**　かくの如く、大德よ、婆浮陀迦旃那は、沙門〔生活〕の現世の果報を問はれて、他の見地よりして他のことを説きぬ。譬へば、大德よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、麵麭樹のそれに就きて説明し…〔乃至〕…これを尊重せずして起座退出

せり。

二八　大德よ、或る時、予は尼乾子（ニガンタナータプッタ）を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『尼乾子よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり……乃至……尼乾子よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設するを得るや』と。

二九　かく問はれて、大德よ、尼乾子は予に次の如く言へり。『大王よ、尼乾子は玆に四種の禁戒による制御をなす。大王よ、如何にして尼乾子は四種の禁戒による制御をなすや。大王よ、玆に尼乾子は凡ての水を用ゐることを禁じ、凡ての惡を制し、凡ての惡を離れ、凡ての惡の制御に達す。かくの如く、大王よ、尼乾子は四種の禁戒による制御をなせり。かるが故に、大王よかゝる尼乾子は、心が最高の極致に達したるもの、心が抑制せられたるもの、心が安定せるものと稱せらる』と。

[58]三〇　かくの如く、大德よ、尼乾子は沙門〔生活〕の現世の果報を問はれて、四種の禁戒を說きぬ。譬へば、大德よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、麵麭樹のそれに就きて說明し、……〔乃至〕……これを尊重せずして起座退出せり。

三一　大德よ、或る時、予は散若夷毘羅梨沸を訪れぬ。訪れて彼と友情儀禮の會釋をとり交して、一隅に坐せり。一隅に坐し竟りて、予は彼に次の如く語れり。『散若夷毘羅梨沸よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり……乃至……散若夷毘羅梨沸よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を施設するを得るや』と。

三二　かく問はれて、大德よ、散若夷毘羅梨沸は、予に次の如く言へり。『汝若し「他世有りや」と我に問はむに、我若し「他世有り」と考へたらんには、「他世有り」と汝に答ふべし。されど、我は斯くとも考へず、然りとも考へず、その他なりとも考へず、然らずとも考へず、然らざるに非ずとも考へず。汝若し「他世無きや」……乃至……「他世有り又無きや」。「他世有るに非ず又無きに非ざるや」。――「化生の有情有りや」。「化生の有情無きや」。「化生の有情有り又無きや」。「化生の有情有るに非ず又無きに非ざるや」。――「善惡業の異熟果有りや」。「善惡業の異熟果無きや」。「善惡業の異熟果有り又無きや」。「善惡業の異熟果有るに非ず又無きに非ざるや」。――[8]「如來
59 は死後存するや」。「如來は死後存せざるや」。「如來は死後存し又存せざるや」。「如

來は死後存するに非ず又存せざるに非ざるや」と我に問はむに、我若し「如來は死後存するにも非ず又存せざるにも非ず」と考へたらむには、「如來は死後存するにも非ず又存せざるにも非ず」と汝に答ふべし。されど、我は斯くとも考へず、然りとも考へず、その他なりとも考へず、然らずとも考へず、然らざるに非ずとも考へず』と。

三三 かくの如く、大德よ、散若夷毘羅梨沸は沙門〔生活〕の現世の果報を問はれて、矯亂を說きぬ。譬へば、大德よ、菴羅樹の果實に就きて質問せられて、麵麹樹のそれに就きて說明し、…〔乃至〕…これを尊重せずして起座退出せり。

三四 大德よ、予は世尊に對しても問ひまつらむ。『大德よ、〔この世には〕種々なる技能職業〔のもの〕あり。…乃至…大德よ、かくの如く、現世に於ける目に見ゆる
60 沙門〔生活〕の果報を施設することを得給ふや』と。

「大王よ、我は〔それをなし〕能ふ。いざ、大王よ、我はこの點に就きて卿に問はむ。卿の欲するまゝに答へらるべし。

三五 大王よ、如何に思惟せらるゝや。茲に卿の臣下たる一奴僕ありとせよ。

彼は〔卿の爲に〕勤務をなし、夙に起き深更に寢ね、〔卿の〕雜役を聽き、顏色を和らげ、愛語を語り、〔卿の〕機嫌を害せざらむと努めり。彼惟へらく、『功德の果報とその成熟とは、實に稀有なるかな、未曾有なるかな。この摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は人間にして、我も亦人間なり。然るに、この王は五欲の樂を保持し具足して、喜戲する神の如く思はるゝに、我はこれに反して、彼の奴隷にして、〔彼の爲に〕勤務をなし、夙に起き深更に寢ね、〔彼の〕雜役を聽き、顏色を和らげ、愛語を語り、〔彼の〕機嫌を害せざらむと努む。實に〔我も亦彼の如くあるを得むが爲に〕、我も亦彼の〔なしたる如き〕功德をなさむ。いざ、我は鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せむ』と。而して彼はその後、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せり。かく出家して、彼は身語意の制御に住し、最小限の食物と衣服とに滿足し、離世閑居を樂しめり。卿の臣下、彼に就きて卿に奏して言く、『願くば、大王よ、知しめし給へ、かの男は〔もと〕大王の奴僕にして、〔大王の爲に〕勤務をなし、夙に起き深更に寢ね、雜役を聽き、顏色を和らげ、愛語を語り、〔大王の〕機嫌を害せざらむと努めり。大王よ、後に彼は鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、

家なきものとなりて出家せり。かく出家して、彼は身語意の制御に住し、最小限の食物と衣服とに滿足し、離世閑居を樂しめり』と。その時、卿は言ひ給ふや、「かの男を予の許に還らしめ、再び奴僕となりて、〔予の爲に〕勤務をなし、夙に起き深更に寢ね、雜役を聽き、顏色を和らげ、愛語を語り、〔予の〕機嫌を害せざらむと努めしむべし』と」。

61 **三六** 「大德よ、然らず。寧ろ予等は、先づ彼に敬禮會釋をなし、座より起つて、彼を座に屈請せむ。而して上衣と施食と宿舍と、疾病の爲の醫藥と、用具とを彼に供へて、如法に彼を保護し覆蓋し收藏すべし」。

「大王よ、卿は如何に思惟せらるゝや。若し果して然らば、目に見ゆる沙門〔生活〕の果報ありや否や」。

「大德よ、確かに然らば、目に見ゆる沙門〔生活〕の果報あり」。

「大王よ、これ實に現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の第一の果報として、我が施設するところのものなり」。

三七 「大德よ、かくの如き現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報を〔なほこの〕

他にも施設し得給ふや」。

「大王よ、〔我はそれをなし〕能ふ。いざ、大王よ、我はこの點に就きて卿に問はむ。卿の欲するまゝに答へらるべし。

大王よ、如何にこれを思惟せらるゝや。茲に卿の臣下たる一農夫ありとせよ。彼は家業に從事し、租税を納めて、卿の財寶を增益せり。一日、彼思惟すらく、『稀有なるかな、未曾有なるかな。この摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は人間にして、我も亦人間なり。然るに、この王は五欲の樂を保持し具足して、喜戲する神の如く思はるゝに、我はこれに反して、彼の農夫にして、家業に從事し、租税を納めて、彼の財寶を增益す。實に〔我も亦彼の如くあるを得むが爲に〕我も亦彼の〔なしたる如き〕功德をなさむ。いざ、我は鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せむ』と。而して彼はその後、多少の財産と多少の親族とを捨てゝ、鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せり。かく出家して、彼は身語意の制御に住し、最少限の食物と衣服とに滿足し、離世閑居を樂しめり。卿の臣下、彼に就きて卿に奏して言く、『願くば、大王よ、知しめし給へ、かの男は〔もと〕

大王の農夫にして、家業に從事し、租税を納めて、大王の財寶を增益したり。大王よ、彼は後に鬚髪を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家したり。かく出家して、彼は身語意の制御に住し、最少限の食物と衣服とに滿足して、離世閑居
62 を樂しめり』と。その時、卿は言ひ給ふや、『かの男を予が許に還らしめ、再び農夫となりて、家業に從事し、租税を納めて、予が財寶を增益せしむべし』と。

三八 「大德よ、然らず。寧ろ予等は、先づ彼に敬禮會釋をなし、座より起つて、彼を座に屈請せむ。而して上衣と施食と宿舍と、疾病の爲の醫藥と、用具とを彼に供へて、如法に彼を保護し覆蓋し收藏すべし」。

「大王よ、卿は如何に思惟せらるゝや。若し果して然らば、目に見ゆる沙門〔生活〕の果報ありや否や」。

「大德よ、確かに然らば、目に見ゆる沙門〔生活〕の果報あり」。

「大王よ、これ實に現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の第二の果報として、我が施設するところのものなり」。

三九 「大德よ、かくの如き現世に於ける目に見ゆる沙門〔生活〕の果報にして、これ

等兩者よりも更により微妙殊勝なるものを施設し得給ふや」。

「大王よ、〔我はそれをなし〕能ふ。いざ、大王よ、諦聽し善思し給へ。我は〔そを〕說かむ」。

「然り、大德よ」と、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、世尊に報へまつりぬ。

世尊は次の如く說き給へり。

四〇　「大王よ、今世に如來出現し、〔如來は〕應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊なり。如來は天界・魔界・梵天界を含むこの世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを、獨自に證悟して說示す。如來は初も善く、中も善く、終も善く、文義共に具足したる敎法を宣べ、比なき完全淸淨なる梵行を敎ふ。

四一　家長若しは家長の子、若しは他の〔劣れる〕階級に生れたるもの、如來の敎法
63 を聽き、聽き竟りて、如來に對する信仰を獲得し、如來に對する信仰を獲得して、彼はかく熟考せり。『障礙なるかな、塵道なる家居。自由なるかな、出家の生活。完全淸淨にして螺鈿の如く耀く梵行を一向に修することは、家に住するものにと

りては容易にあらず。いでや、我は鬚髪を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せむ」と。その後、彼は多少の財産と多少の親族とを捨てゝ、鬚髪を剃除し、袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せり。

四二　かくして出家せるものは、波羅提木叉の制禁によりて、持戒に住し、正行を精勤して、小罪にも怖畏を見、學處を受けて學修す。清淨なる身業語業を具足して、清淨なる生活を營み、戒を具足して諸根の門を守護し、正念正智を具足し、滿足す。

四三　❾大王よ、如何にして比丘は戒を具足するや。大王よ、玆に比丘あり、殺生を捨てゝ殺生を離れ、杖と刀とを用ひず、羞恥の念あり、慈悲心に充ち、一切の生物有類を利益し憐愍に住す。これ又比丘の戒の一部分なり。

不與取を捨てゝ不與取を離れ、與へられたるものを取り、與へられたるものを希求しつゝ、何等盜心なく自ら清淨となりて住す。これ又比丘の戒の一部分なり。

非梵行を捨てゝ梵行を修し、汚濁を離れて婬法を離る。これ又比丘の戒の一

部分なり。

四四　沙門瞿曇は、妄語を捨てゝ、妄語を離れ、眞實を語り、眞實を外れず、誠實にして信頼せられ、世間を欺かず。これ又比丘の戒の一部分なり。

兩舌を捨てゝ、兩舌を離れ、此處にて聞き、そを彼處に往いて告げて、此等の人々
64 を離間せしむることなく、又彼處にて聞き、そを此處に來りて告げて、此等の人々
を離間せしむることなし。かく、離間せる者を和せしめ、親密なる者を更に親密ならしめ、和合を愛し、和合を好み、和合を喜び、和合を齎らす。これ又比丘の戒の一部分なり。

惡口を捨てゝ、惡口を離れ、凡て過失なき、耳に樂しき、愛らしき、肝に銘じ、優雅にして、多數の人に喜ばれ好まるゝ如き語をなす。これ又比丘の一部分なり。

綺語を捨てゝ、綺語を離れ、時に應じて語り、眞實を語り、法を語り、義を語り、律儀を語り、明確にして、段落あり、義に適ひ、心に銘記せらるべき語をなす。これ又比丘の戒の一部分なり。

四五　諸種の種子・諸種の樹木を伐採することを離れ、「日中」一食にして夜中食せ

ず、非時食を離れ、演劇・歌謡・舞楽の娯楽物を観ることを離れ、華鬘・香料・塗香を持し粉装することを離れ、高牀・大床を〔用ふることを〕離れ、金銀を受蓄することを離る。生の穀類を受くることを離れ、生肉を受くることを離れ、婦人・少女を受くることを離れ、男女の奴隷を受くることを離れ、牝牡の山羊を受くることを離れ、鶏・豚を受くることを離れ、象・牛・牡牝の馬を受くることを離れ、耕田荒地を受くることを離れ、使者・仲介人の所作をなすことを離れ、賣買をなすことを離れ、秤を瞞著し・升を瞞著し・尺を瞞著することを離れ、賄賂・譎詐・虚偽の邪行をなすことを離れ、傷害・殺戮・捕縛・劫奪・窃盗・強盗を離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

四六　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、根より生ずる種子、幹より生ずる種子、節より生ずる種子、枝より生ずる種子、第五に種より生ずる種子の如き諸種の種子と、諸種の樹木とを伐採することに
65 専心して住するものあるに、是の如き等の諸種の種子と諸種の樹木とを伐採することを離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

四七　或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へ

ば、食物の貯蓄、衣服の貯蓄、乘物の貯蓄、臥床の貯蓄、香料の貯蓄、美味なるもの、貯蓄の如き貯蓄物の享樂に專心して住するものあるに、是の如き等の何れの貯蓄物をも享樂することを離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

四八　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、演劇・歌謠・舞樂・見世物・謠ひ・手鈴・鳴鉢・銅羅・手品・賤人の輕業・象馬水牛牡牛山羊牡羊鷄鶉の鬪技・棒撃・拳鬪・角力・演習・列兵・閱兵の如き娛樂物を觀ることに專心して住するものあるに、是の如き等の何れの娛樂物をも觀ることを離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

四九　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、八目碁・十目碁・無盤碁・石蹴・拔取り・骰子投げ・棒打ち・手痕占ひ・球抛げ・葉笛・鋤遊び・逆立ち・風車遊び・升遊び・車遊び・弓遊び・文字判じ・他心判じ・傷占ひの如き賭博の放逸處に耽り專心して住するものあるに、是の如き等の何れの賭博の放逸處に耽ることをも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五〇　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食により生活して、而も例へ

ば、規定の大さを過ぎたる獸形を脚臺とせる、長き羊毛にて覆へる、文彩ある、白氈にて覆へる、花を繡せる、綿をつめたる、畫ける覆を有せる、兩側に緣の垂れたる、片側に緣の垂れたる、寶石を鏤めたる絹布の覆ある、大毛布を有する、象の覆布を有せる、馬の覆布を有せる、車の覆布を有せる、羚羊の皮を縫へる、良き鹿皮にて覆へる、天蓋を有せる、上下に赤き枕を有せる如き高牀・大床〔の使用〕に專心して住するものあるに、是の如き等の何れの高牀・大床〔の使用〕をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五一　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、塗身・按摩・沐浴・揉身・鏡・眼の塗料・華鬘・塗香・顏料・香油・手甲・髮飾・手杖・藥袋・剪刀・蓋傘・彩履・冠子・寶珠・拂子・白衣・長袖の如き紛飾の放逸處に專心して住するもののあるに、是の如き等の何れの紛飾の放逸處に耽ることをも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五二　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、國王の話・盜賊の話・大臣の話・軍兵の話・恐怖の話・戰爭の話・食物の話・飲料の話・

衣服の話・牀床の話・華鬘の話・香料の話・親戚の話・乘物の話・村落の話・町村の話・都會の話・國土の話・婦女の話・(男子の話)・英雄の話・風評の話・井戸端の話・死者の話・雜話・世界說の話・海洋說の話・斯くありなしの話の如き無益徒勞の話に專心して住するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の話をもなすことを離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五三　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、『汝は此の法と律とを知らざるも、吾は此の法と律とを知る、汝にして何ぞ此の法と律とを知るに至らむや』。『汝は邪行をなすも、吾は正行をなす』。『吾が言は相應するも、汝の言は相應せず』。『汝は前に云ふべきことを後に云ひ、後に云ふべきことを前に云ひたり』。『汝の熟考せざりしことは直に顚覆せられたり』。『汝は言論を立てしも、負處に墮せり』。『汝の說を脫せむが爲に巡遊せよ、若し能ふべくむば自ら解け』といふが如き諍論に專心して住するものあるに、是の如き等の何れの諍論をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五四　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例

67 へば『此處に行け、彼處に行け、此を取り來れ、此を彼處に運べ』と命ずる國王・大臣・刹帝利・婆羅門・家主・童子の爲になす如き使者・仲介人の所作をなすことに專心して住するもののあるに、是の如き等の何れの使者・仲介人の所作をなすことをも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五五　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して而も諂言し、饒訣し、占相し、禁厭し、利得の上にも利得を貪るもののあるに、是の如き諂言饒訣を離る。これ又比丘の戒の一分なり。

五六　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して而も例へば、手相の占相・卜占・兆相の占ひ・夢の判斷・體相の占ひ・鼠の咬所の占ひ・火の護摩・杓子の護摩・穀の護摩・粉の護摩・米の護摩・熟酥の護摩・油の護摩・口の護摩・血の護摩・支節明・宅地明・刹帝利明・濕婆明・鬼神明・地明・蛇明・毒藥明・蝎明・鼠明・鳥明・鴉明・命數豫言・防箭呪・解獸聲法の如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するもののあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五七　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して而も例

68

へば、珠相・杖相・服相・劍相・矢相・弓相・武器相・女相・男相・童子相・童女相・男僕相・女婢相・象相・馬相・水牛相・牡牛相・牛相・山羊相・羊相・鷄相・鶉相・蜥蜴相・耳環相・龜相・獸相の如き無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五八　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して而も例へば、『王は進軍すべし、王は進軍せざるべし』。『內國王は著すべし、外國王は退くべし』。『外國王が著すべし、內國王が退くべし』。『內國王は勝つべし、外國王は負くべし』。『外國王が勝つべし、內國王が負くべし』。『斯く此の者は勝つべし、此の者は負くべし』と占ふ如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

五九　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して而も例へば、『月蝕あるべし、日蝕あるべし、星蝕あるべし、日月は正道に進むべし、日月は非道に進むべし、諸星は正道に進むべし、諸星は非道に進むべし、流星隕つべし、天火あるべし、地震あるべし、天鼓鳴るべし、日月星辰の昇沈明暗あるべし、斯々の果ある月蝕あるべし……(乃至)……斯々の果ある日月星辰の昇沈明暗あるべし』と占ふ如

き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部なり。

六〇　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例

69 へば『多量の雨あるべし、降雨なかるべし、多量の收穫あるべし、收穫なかるべし、平和來るべし、恐怖あるべし、疫病あるべし、健康來るべし』〔等と占すること〕・印契・計算・數法・詩作・順世論をなす如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

六一　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、娶ること・嫁すること・和睦・分裂貸金取立・貸出・幸運にすること・不運にすること・墮胎すること・人を啞とすること・無言ならしむること・擧手せしむること・聾ならしむること・鏡に問ふこと・童女に問ふこと・神懸り・太陽を拜すること・大〔梵天〕を供養すること・口より火を吐くこと・吉祥天を屈請することの如き無益徒勞の明によつて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

六二　又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、願をかけること・願を解くこと・地に居て呪を誦すること・元氣を旺盛にすること・消耗せしむること・住所を相すること・地を淨むること・嗽口・沐浴・供犧・吐瀉・下痢・上泄・下泄・頭痛療治・耳に油すること・目の治療・鼻の治療・眼藥をさすこと・眼に油すること・眼手術・外科手術・小兒治療・樹根と藥とを與ふること・藥を取去ることとの如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。

六三　大王よ、この比丘にして是の如く戒を具足せば、戒によりて制御せるが故に、何處に於ても怖畏を感ぜざるなり。大王よ、恰も灌頂卽位してその敵を降伏
70 せる刹帝利が、敵の爲に何處に於ても怖畏を感ぜざる如く、比丘にして戒を具足せるものは、戒によりて制御せるが故に、何處に於ても怖畏を感ぜざるなり。この聖なる戒蘊を具足して、彼はその內心に無垢純淨なる安樂を感受す。かくして、大王よ、比丘は戒を具足せるなり。

六四　大王よ、また如何にして比丘は諸根の門を保護するや。大王よ、茲に比丘

ありて、眼〔根〕を以て色〔境〕を見る時、〔總〕相をも執らず、また別相をも執らざるなり。彼若し抑制することなく作用せば貪愛憂悲過惡・不淨法を伴ふべき眼根を制御し、以て眼根を護り、眼根を制御に歸せしむ。耳〔根〕を以て聲〔境〕を聞く時…乃至…鼻〔根〕を以て香〔境〕を嗅ぐ時…乃至…舌〔根〕を以て味〔境〕を味ふ時…乃至…身〔根〕を以て觸〔境〕に觸るゝ時…乃至…意〔根〕を以て法〔境〕を知る時、〔總〕相をも執らず、また別相をも執らざるなり。彼若し抑制することなく作用せば貪愛・憂悲・過惡・不淨法を伴ふべき意根を制御して、以て意根を護り、意根を制御に歸せしむ。この聖なる諸根の制御を具足して、彼は内心に無垢純淨なる安樂を感受す。かくして、大王よ、比丘は諸根の門を保護するなり。

六五　大王よ、また如何にして比丘は正念正智を具足するや。大王よ、茲に比丘ありて、進むも退くも共に正智を以てし、直視するも周視するも亦共に正智を以てす。また手足を屈伸する時、下衣と上衣と鉢とを持する時、飲み食ひ嚙み味ふ時、大小便の時、行住坐臥の時、覺醒の時、語る時、默する時、いづれも正智を以てす。[71]かくして、大王よ、比丘は正念正智を具足するなり。

六六　大王よ、また如何にして比丘は滿足するや。大王よ、玆に比丘ありて、その身を保つ上衣と、その體を養ふ施食とに滿足して、何處に往くにも、これ等を持して往くなり。譬へば、大王よ、翼を有する鳥の、何處に飛ぶにも、その翼を持して飛ぶが如し。かくの如く、大王よ、比丘はその身を保つ上衣と、その體を養ふ施食とに滿足して、何處に往くにも、これ等を持して往くなり。かくして、大王よ、比丘は滿足するなり。

六七　この聖なる戒蘊と、聖なる諸根の制御と、聖なる正念正智と、この聖なる滿足とを具足して、彼は空閑處・樹下・山岳・峽谷・巖窟・塚間・藪林・露天〔野〕處・藁堆上の〔如き〕離世閑居を選ぶ。而して彼は施食を受けて還り、食し竟りて結跏趺坐し、身を端くして深正念に安住す。[10]

六八　彼は世間に對する貪欲を棄てゝ、貪欲なき心に住し、貪欲より〔離れて〕心を淨化す。
害心と瞋恚とを棄てゝ、不害心に住し、一切の生物有類を利益慈愍して、害心と瞋恚とより〔離れて〕心を淨化す。

惛沈（こんじん）と睡眠とを棄て丶、惛沈と睡眠との離脱に住し、想を耀かし、正念正智にして、惛沈と睡眠とより〔離れて〕心を淨化す。

掉擧（じょうご）と惡作とを棄て丶、心輕擧に住し、內部の寂靜なる心を以て、掉擧と惡作とより〔離れて〕心を淨化す。

疑を棄て丶、疑の離脱に住し、淨法に於て疑あることなく、疑より〔離れて〕心を淨化す。

六九　大王よ、また譬へば人ありて、負債を以て生業を營み、その生業繁榮して、舊負債の元金を償却することを得、なほ殘額ありて、妻を扶持することを得たらむが如し。その時、彼思惟すらく、『我嘗て負債を以て生業を營み、その生業繁榮し
72
て、負債の元金を償却し、なほ殘額ありて妻を扶持することを得たり』と。而して彼はそを喜びて悅樂せり。

七〇　大王よ、また譬へば人ありて、病に罹りて惱まされ、重患の〔爲に〕食物をも味ひ得ずして、體力また消失せり。されど、その後彼はこの疾病より脱却し、食物を味ふことを得て、體力を恢復したらむが如し。その時、彼思惟すらく、『我嘗て病に

罹りて惱まされ、重患の〔爲に〕食物をも味ひ得ずして、體力また消失せり。されど、今や我この疾病より脫却し、食物を味ふことを得て、體力を恢復せり』と。而して彼はそを喜びて悅樂せり。

七一　大王よ、また譬へば人ありて、牢獄に繫がれたりしも、その後彼は、安樂に健全に、また彼の財物を減損することなくして、この牢獄より解放せらるゝを得たらむが如し。その時、彼思惟すらく、『我嘗て牢獄に繫がれたりしも、今や安穩に健全に、また我が財物を減損することなくして、この牢獄より解放せらるゝことを得たり』と。而して彼はそを喜びて悅樂せり。

七二　大王よ、又譬へば人ありて、奴隸となり、自己に隸屬せずして他人に隸屬し、自己の欲するまゝに往くこと能はざりしに、後に彼は奴隸の境遇より解放せらるゝことを得、自己に隸屬して他人に隸屬せず、獨立自由となりて、自己の欲するまゝに往くことを得たらむが如し。その時、彼思惟すらく、『我嘗て奴隸となり、自己に隸屬せずして他人に隸屬し、自己の欲するまゝに往くこと能はざりしに、今や我奴隸の境遇より解放せらるゝことを得て、自己に隸屬して他人に隸屬せ

ず、獨立自由となりて、自己の欲するまゝに往くことを得たり』と。而して彼はそれを喜びて悦樂せり。

73

七三　大王よ、また譬へば人ありて、富裕にして財豊かなりしが、曠野の路に踏み込みて、食を求むること能はず、危險に〔怖れ戰きぬ〕。されど後に彼はこの曠野を出でて、安穩無難にして怖畏なき村落に安著したらむが如し。その時、彼思惟すらく、『我嘗て富裕にして財豊かなりしが、曠野の路に踏み込みて、食を求むること能はず、危險に〔怖れ戰きぬ〕。されど今や我この曠野を出でて、安穩無難にして怖畏なき村落に安著することを得たり』と。而して彼はそを喜びて悦樂せり。

七四　大王よ、比丘は此等の五蓋を捨てざる自己を觀ること、猶し負債と疾病と牢獄と奴隷の境遇と曠野の路とを觀るが如し。されど、大王よ、比丘は此等の五蓋を捨てたる自己を觀ること、猶し無債と無病と出獄と自由と安穩とを觀るが如し。

七五　かの五蓋を捨て去りたる自己を觀るものには歡喜生し、歡喜せるものには喜生じ、喜を懷くものには身安穩となり、身安穩となれば樂を覺え、樂となれば

心三昧に入る。彼は諸欲を去り不善法を離れて、有尋有伺（うじんうし）にして、離より生ずる喜と樂とのある初禪に達して住す。彼は離より生ずる喜と樂とを以て、其の身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。

74 **七六**　譬へば大王よ、熟練せる湯屋の浴僕若しくはその徒弟が、金盥に洗粉を撒き、これに水を滴々注ぎて混ぜむに、洗粉は潤ひ潤ひによりて碎け、その內外共に潤ひを以て周遍して漏るゝことなきが如し。是の如く、大王よ、比丘は離より生ずる喜と樂とを以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現在の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

七七　大王よ、さらにまた比丘ありて、尋伺を滅して、內心靜安となり、心專一となり、無尋無伺にして、定より生ずる喜と樂とのある第二禪に達して住す。彼は定より生ずる喜と樂とを以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れ

として定より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。

七八　譬へば、大王よ、水の湧出する深泉ありて、これに東方より水の流入することなく、西方より水の流入することなく、北方より水の流入することなく、南方より水の流入することなく、而して神は時々驟雨を與ふべし。[11]而もこの深泉より冷水の流、湧出して、冷水を以てこの深泉を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、深泉いづことして冷水を以て洽普せられざるはなきが如し。是の如く、大王よ、比丘は定より生ずる喜と樂とを以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして定より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

七九　大王よ、さらに又比丘ありて、喜を離れて、捨となりて住し、正念正智にして、身を以て樂を感受し、唯、諸聖人が『これ捨にして正念樂住なり』と說ける第三禪に達して住す。彼は喜なき樂を以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして喜なき樂を以て洽普せられざるはなし。

八〇　譬へば、大王よ、青蓮池・紅蓮池・白蓮池ありて、皆水中に生じ、水中に長じ、水中に浸り、水底より營養を引きあげ、その頂より根に至るまで、冷水を以て潤漬せられ周遍せられ盈溢せられ充滿せられ、青蓮・紅蓮・白蓮何れとして冷水を以て洽普せられざるはなきが如し。是の如く、大王よ、比丘は喜なき樂を以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして喜なき樂を以て洽普せられざるはなし。

これ亦、大王よ、沙門[生活]の現世の果報にして、前のそれよりも微妙殊勝なるものなり。

八一　大王よ、さらに又比丘ありて、樂を捨て苦を離れ、前に感じたる悅と憂とを共に滅したるため、不苦不樂にして捨念清淨となれる第四禪に達して住す。彼は純淨なる心を以てその身を遍滿して坐し、その全身何れとして純淨なる心を以て洽普せられざるはなし。

76

八二　譬へば、大王よ、人ありて、頭より足に至るまで、白淨衣を以て被覆して坐せむに、その全身何れとして白淨衣を以て洽普せられざるはなきが如し。是の如

く、大王よ、比丘は純浄なる心を以てその身を遍満して坐し、その全身何れとして純浄なる心を以て洽普せられざるはなし。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

八三　是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を智見に傾け注ぐ。而して彼は次の如く知る。『我がこの身は色(しき)より成り、四大種より成り、父母の生むところ、飯と粥との長養せしものにして、無常・破壞・粉碎・斷絕・壞滅の法なり。また我が識はこれに依存し、これに關聯せるものなり』と。

八四　譬へば、大王よ、琉璃寶珠ありて、美麗にして玉質優秀、八面體をなし、よく磨かれて耀きわたり、淸澄無濁にして、一切の〔美〕相を具足し、濃青色、若しくは濃黃色、若しくは赤色、若しくは純白色若しくは淡黃色の綖、これに通されたらむに、具眼の人これを手にしてよく觀察し、『この琉璃寶珠は美麗にして玉質優秀、八面體をなし、よく磨かれて耀きわたり、淸澄無濁にして、一切の〔美〕相を具足し、濃青色、若

しくは濃黄色、若しくは赤色、若しくは純白色、若しくは淡黄色の絲通さる』と知るべきが如し。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を智見に傾け注ぐ。而して彼は次の如く知る。『わがこの身は色より成り、四大種より成り、父母の生むところ、飯と粥との長養せしものにして、無常・破壞・粉碎・斷絶・壞滅の法なり。また我が識はこれに依存し、これに關聯せるものなり』と。

77 これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

八五　是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は意所成の身を化作することに心を傾け注ぐ。而して彼はその色身より意所成にして一切の〔大〕肢と小肢と異常なる根とを有する他の身を化作す。

八六　譬へば、大王よ、人ありて、們叉(ムンヂャ)草よりその葦を引拔きたらむに、彼思惟すら

く、『こは們叉草なり、こは葦なり。們叉草と葦とは別物なり。されど們叉草より葦は引抜かれたり』と。

また譬へば、大王よ、人ありて、刀を鞘より引抜きたらむに、彼思惟すらく、『こは刀なり、こは鞘なり。刀と鞘とは別物なり。されど鞘より刀は引抜かれたり』と。

また譬へば、大王よ、人ありて、蛇を蛇皮より引出したらむに、彼思惟すらく、『こは蛇なり、こは蛇皮なり。蛇と蛇皮とは別物なり。されど蛇皮より蛇は引出されたり』と。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は意所成の身を化作することに心を傾け注ぐ。而して彼はその色身より、意所成にして一切の〔大〕肢と小肢と異常なる根とを有する他の身を化作す。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

八七 是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せ

むとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は種々なる神通に心を傾け注ぐ。而して彼は種々なる神通を證得す。〔卽ち〕一〔身〕にして多〔身〕となり、多〔身〕にして一〔身〕となり、〔或は〕身を現はし、〔或は〕身を隱し、壁を通過し、墻を透過し、障礙なくして山をも行くこと、恰も空中に於けるが如く、大地に出沒すること恰も水に於けるが如く、沈むことなくして水上を渉ること、恰も地上に於けるが如く、空中に於て趺坐のまゝ經行すること、恰も翼を有する鳥の如く、かの大神力あり大威德ある日月を能く手を以て捫摸し、梵天界にまでも身を以て到達す。

78 八八　譬へば、大王よ、熟練せる陶師若しくはその徒弟が、能く整へられたる泥土を以て、その欲するまゝに種々の容器を製作し完成するが如し。

また譬へば、大王よ、熟練せる象牙師若しくはその徒弟が、能く整へられたる象牙を以て、その欲するまゝに種々の象牙〔の彫物〕を製作し完成するが如し。

また譬へば、大王よ、熟練せる金工若しくはその徒弟が、よく整へられたる黃金を以て、その欲するまゝに、種々の容器を製作し完成するが如し。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動

せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は種々なる神通に心を傾け注ぐ。而して彼は種々なる神通を證得す。〔卽ち〕一〔身〕にして多〔身〕となり、多〔身〕にして一〔身〕となり、〔或は〕身を現はし、〔或は〕身を隱し、壁を通過し、墻を透過し、障礙なくして山をも行くこと、恰も空中に於けるが如く、大地に出沒すること、恰も水に於けるが如く、沈むことなくして水上を渉ること、恰も地上に於けるが如く、空中に於て趺坐のまゝ、經行すること、恰も翼を有する鳥の如く、かの大神力あり大威神ある日月を能く手を以て捫摸し、梵天界にまでも身を以て到達す。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

八九　是くの如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を天耳界に傾け注ぐ。而して彼は清淨にして人間〔の耳界〕を超越せる天耳界を以て、人天兩界及び遠近双方の音聲を聞く。

九〇　譬へば、大王よ、人ありて、道路を通行し、太鼓の響・小鼓の響・海螺・打鐶・鑵鼓の

響を聞きたらむに、彼思惟すらく、『そは太鼓の響なり。そは小鼓の響なり。そは海螺・打鑼・鑼鼓の響なり』と。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を天耳界に傾け注ぐ。而して彼は淸淨にして人間〔の耳界〕を超越せる天耳界を以て、人天兩界及び遠近双方の音聲を聞く。

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

九一　是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時比丘は心を〔他〕心證解智に傾け注ぐ。而して彼は自己の心を以て他の衆生・他の人間の心に徹して、次の如く證知す。

貪欲ある心を貪欲ある心なりと證知す。

貪欲を離れたる心を貪欲を離れたる心なりと證知す。

瞋恚ある心を瞋恚ある心なりと證知す。
瞋恚を離れたる心を瞋恚を離れたる心なりと證知す。
愚痴ある心を愚痴ある心なりと證知す。
愚痴を離れたる心を愚痴を離れたる心なりと證知す。
凝湛せる心を凝湛せる心なりと證知す。
散亂せる心を散亂せる心なりと證知す。
廣大なる心を廣大なる心なりと證知す。
廣大ならざる心を廣大ならざる心なりと證知す。
有上なる心を有上なる心なりと證知す。
無上なる心を無上なる心なりと證知す。
定ある心を定ある心なりと證知す。
定なき心を定なき心なりと證知す。
解脱せる心を解脱せる心なりと證知す。
解脱せざる心を解脱せざる心なりと證知す。

九二　譬へば、大王よ、美裝を好む男女、若しくはうら若き少年少女ありて、潔白清澄なる鏡、若しくは水鉢に映れる已が顏の相を注視して、若し耳環を挿める時は耳環を挿めりと知り、耳環を挿まざる時は耳環を挿まずと知る如く、實に是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を〔他〕心證解智に傾け注ぐ。而して彼は自己の心を以て他の衆生・他の人間の心に徹して、次の如く證知す。

貪欲ある心を貪欲する心なりと證知す。

貪欲を離れたる心を貪欲を離れたる心なりと證知す。

瞋恚ある心を瞋恚ある心なりと證知す。

瞋恚を離れたる心を瞋恚を離れたる心なりと證知す。

愚痴ある心を愚痴ある心なりと證知す。

愚痴を離れたる心を愚痴を離れたる心なりと證知す。

凝湛せる心を凝湛せる心なりと證知す。

散亂せる心を散亂せる心なりと證知す。

廣大なる心を廣大なる心なりと證知す。
廣大ならざる心を廣大ならざる心なりと證知す。
有上なる心を有上なる心なりと證知す。
無上なる心を無上なる心なりと證知す。
定ある心を定ある心なりと證知す。
定なき心を定なき心なりと證知す。
解脱せる心を解脱せる心なりと證知す。
解脱せざる心を解脱せざる心なりと證知す。

九三 是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を宿住隨念智に傾け注ぐ。而して彼は宿世に於ける種々なる住處、例へば、一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・十萬生・幾壞劫・幾成劫・幾成壞劫を隨念し、『かの處に於て、我は是の如き名を有し、是の如き族に生れ、是の如き階級に屬し、是の如き飯食を取り、是の如き苦樂を享受し、是の如き壽量を有しぬ。我その處よ

り死去して他處に生れ、そこにて我是の如き名を有し、是の如き族に生れ、是の如き階級に屬し、是の如き飯食を取り、是の如き苦樂を享受し、是の如き壽量を有しぬ。而して我その處より死去してこの處に來生せり』と、形相と方處とを具して種々なる宿世の住處を隨念す。

九四　譬へば、大王よ、人ありて、己が聚落より他の聚落に到り、またその聚落より他の聚落に赴き、〔更に〕その聚落より己が聚落に歸來したらむに、その時彼自ら想念せり、『我は我が聚落より某聚落に到り、そこにて是の如く住し、是の如く坐し、是の如く語り默しぬ。我この聚落よりまた他の聚落に赴き、そこにて是の如く住し、是の如く坐し、是の語り默しぬ。而して我その聚落より我が聚落に歸來
82 せり』と。

實に是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を宿住隨念智に傾け注ぐ。而して彼は宿世に於ける種々なる住處、倒へば、一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・十萬生・幾壞劫・幾成劫・幾成壞劫を隨

念し、『かの處に於て、我是の如き名を有し、是の如き族に生れ、是の如き階級に屬し、是の如き飯食を取り、是の如き苦樂を享受し、是の如き壽量を有しぬ。我その處より死去して他處に生れ、そこにて我是の如き名を有し、是の如き族に生れ、是の如き階級に屬し、是くの如き飯食を取り、是の如き苦樂を享受し、是の如き壽量を有しぬ。而して又その處より死去してこの處に來生せり』と、形相と方處とを具して種々なる宿世の住處を隨念す。

これ亦大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

九五　是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を死生智に傾け注ぐ。而して彼は人界に超越せる天眼を以て衆生を觀察し、衆生の死してはまた生るゝを見、衆生の爲したる業に應じて、賤しきと貴きと、美しきと醜きと、幸福と不幸とを證知す。卽ち『諸賢よ、此等の衆生は身・語・意の惡業を具し、聖者を譏り、邪見を懷き、邪見の業を取得せり。彼等はその身壞して死後、惡生・惡趣・地獄に生ぜり。

83

諸賢よ、此等の衆生は身・語・意の善業を具し、聖者を譏らず、正見を懷き、正見の業を取得せり。彼等はその身壞して死後、善趣・天界に生ぜり』と。是の如く、彼は人界に超越せる淸淨なる天眼を以て衆生を觀察し、衆生の死してはまた生るゝを見、衆生の爲したる業に應じて、賤しきと貴きと、美しきと醜きと、幸福と不幸とを證知す。

九六　譬へば、大王よ、四衢街道の中央に建てられたる家の階上に、眼を有てる人ありて、人々が家に出入し、また車道人道を往來し、また四衢街道の中央に坐せるを見たらむに、彼思念すらく、『此等の人々は家に出入し、車道人道を往來し、四衢街道の中央に坐せり』と。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を死生智に傾け注ぐ。而して彼は人界に超越せる淸淨なる天眼を以て衆生を觀察し、衆生の死してはまた生るゝを見、衆生の爲したる業に應じて、賤しきと貴きと、美しきと醜きと、幸福と不幸とを證知す。

84

これ亦、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。

九七　是の如く、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を漏盡智に傾け注ぐ。而して彼は『こは苦なり』と如實に證知し、『こは苦の集なり』と如實に證知し、『こは苦の滅なり』と如實に證知し、『こは苦の滅に到る道なり』と如實に證知す。『此等は漏なり』と如實に證知し、『こは漏の集なり』と如實に證知し、『こは漏の滅なり』と如實に證知し、『こは漏の滅に到る道なり』と如實に證知す。是の如く知り、是の如く見るが故に、その心は欲漏より解脫し、有漏より解脫し、無明漏より解脫して、『解脫に於て解脫せり』との智慧生じ、『生は盡き、梵行は修せられ、爲すべきことは爲され竟りて、更に此の生に來ることなし』と證知す。

九八　譬へば、大王よ、峽谷に澄明淨潔にして汚濁なき水池ありて、眼を有てる人その岸に立ちて、牡蠣の殼・砂利・礫、及び魚群の或は動き或は止まれるを見たらむに、彼思念すらく、『實にこの水池は澄明淨潔にして汚濁なし。この處に牡蠣の

穀・砂利・礫、及び魚群の或は動き或は止まれるあり』と。

是の如く、大王よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、しかも安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を漏盡智に傾け注ぐ。而して彼は『こは苦なり』と如實に證知し、『こは苦の集なり』と如實に證知し、『こは苦の滅なり』と如實に證知し、『こは苦の滅に到る道なり』と如實に證知す。『此等は漏なり』と如實に證知し、『こは漏の集なり』と如實に證知し、『こは漏の滅なり』と如實に證知し、『こは漏の滅に到る道なり』と如實に證知す。是の如く知り、是の如く見るが故にその心は欲漏より解脫し、有漏より解脫し、無明漏より解脫して、『解脫に於て解脫せり』との智慧生じ、『生は盡き、梵行は修せられ、爲すべき
85 ことは爲され竟りて、更に此の生に來ることなし』と證知す。

これ實に、大王よ、沙門〔生活〕の現世の果報にして、前のそれよりも更に微妙殊勝なるものなり。大王よ、かゝる沙門〔生活〕の現世の果報より更に勝れたる沙門〔生活〕の現世の果報は、他に絕えてあることなし」と。

九九　是の如く世尊の說示し給ひし時、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍

世は、世尊に白して言く、「殊勝なるかな、大德よ。殊勝なるかな、大德よ。譬へば人ありて、倒されたるを起し、覆はれたるを現はし、迷へるものに道を示し、具眼者は物を見るならむとて、暗黑中に芝麻油の燃燈を揭ぐるが如く、是の如く、世尊は種々の方便を以て法を說示し給へり。大德よ、予は今自ら世尊に歸依し、法に歸依し、比丘衆に歸依し奉る。願くば世尊、自今已後壽命の終るまで、「三寶に歸依せる優婆塞として予を攝受し給へ。予は狂愚なるまゝに、痴冥なるまゝに、不善なるまゝに、罪過によりて制伏せられ、王權を獲得せむが爲に、予はかの正しき父法王を弑しぬ。大德よ、予は罪過を罪過として確認し、以て將來必ず自制すべきことを、世尊の受納し給はむことを」。

一〇〇 「實に、大王よ、狂愚なるまゝに、痴愚なるまゝに、不善なるまゝに、罪惡が卿を制伏して、かの正しき卿の父法王を弑せしめたるなり。されど大王よ、卿は罪過を罪過として認め、法に從ひてそれを懺悔せらるゝが故に、それに關する卿の懺悔を、我受納すべし。蓋し大王よ、若し人ありて、罪過を罪過として認めて、それを如法に懺悔し、以て將來自制をなさば、これ聖者の律の繁榮する所以なればな

り」。

一〇一　是の如く世尊の曰ひし時、阿闍世王は世尊に白して言く、「いざ、大德よ、予は今往かむ。予は多忙にして、多くの爲すべきことを有てり」。

「然らば、大王よ、欲するまゝになし給ふべし」。

かくて、摩揭陀國王にして韋提希の子なる阿闍世は、世尊の敎に歡喜し隨喜して、座より起ちて世尊に會釋し、圍繞の禮をなして退出せり。

一〇二　かくて、阿闍世王の退出後久しからずして、世尊は比丘等を呼びて曰へり。「比丘等よ、かの王は衷心感激して悔過せり。比丘等よ、若しかの王にして、正しき父法王を弑せざりせば、王は今この座に於て塵垢を離れたる法眼を生じたるなるべし」と。

是の如く世尊は說き給ひぬ。比丘衆は世尊の說法に歡喜し隨喜せり。

86

註❶小兒醫師耆婆（Jīvaka komārabhacca）、佛音は律藏大品の傳說に基きて、耆婆が娼婦の子に

して捨てられたるを、無畏(Abhaya)王子に拾はれ、なほ生命ありし故、Jīvaka(生きるもの)と呼ばれ、王子に養育されたるより、Komārabhacca(王子によりて育てられしもの)と名づけられたりと註すれども、律藏小品には、小兒の醫師なる故に、Komārabhacca(小兒を看るもの)と呼ばれたりとし、なほ寂志果經には、この語が童子醫王と譯されて居る故、今はこの說に從ひて「小兒醫師」と譯したり。但し文獻に徵する限り、彼の治療せし者は皆大人にして、小兒にあらざるが故に、疑問の餘地なしとせず。

❷非業(akiriya)は、一切の行業を無意義無功用なりと否定し、その果報影響をも否認することを意味す。

❸結合(saṅgati)は、何れかの階級狀態境遇に結合すること若しくは結合したることを意味する言葉なり。あらゆる個性的特殊的なるものも、皆その結合せる階級狀態に於けるその地位に從ふといへり。

❹六種の階級(cha abhigātyo)とは、黑・青・赤・黃・白・純白の六種の色を以て當時の人々を分類したるものにて黑より漸次白の度を增すに從て優れたる人を配す。

❺七林の「林」(paṭuva)はその意義明かならず。リス・デヸッヅ氏の巴英辭典ではpaṭuvaの異形pacuṭaの項にganṭhika(block or knot)の義に解せられる場合のあることが示されて居る。本文前後の關係上これが地理に關係せる語なるべき故、今假に樹木の集團卽ち「林」と譯せり。

❻輪廻淨化(saṁsara-suddhi)の「淨化」suddhiは、dukkhassānta(苦の終滅)の義なり。一定の期間

輪廻して始めて苦の終滅に到るなり。

❼「第五としての擔架」とは四人のものが一つの擔架によりて屍體を運ぶ故に、擔架は第五の運搬者となるなり。

❽如來（Tathāgata）は佛陀の尊稱なりと雖も、こゝにては、一般人間を代表せるものの意に解すべし。

❾以下六二に至る戒に關する敎說は、梵網經第一誦品八―二七と同文なり。但し梵網經に於ける「沙門瞿曇」といふ名の代りに本經に於いては「比丘」とせられ、また兩經共に各小戒の說明の結語として夫々反覆せる同一形の一句が、兩者相違せるのみなり。

❿原語 pārimukhaṁ satiṁ の parimukha は、本來「面を覆ふ」といふ意味にして、「面前に」といふ副詞形に譯さるる語なれど、他方に於て智力の活動狀態を示して、油斷なき注意深き意識狀態を意味するが故に、これ次に續く正念（sati）の形容語と見て、兩語を併せて、「深正念」と譯したり。

⓫中部經典第三九經に、これと同じ文ありて、それには「驟雨を與へざるべし」とあり。文全體の意よりすれば、「與へざるべし」を妥當とすと思はるれども、今は原文のまゝに、「與ふべし」と譯せり。第九卷中部經典一參照。

阿摩昼経(あまちゅうぎょう) (Ambaṭṭha-sutta)

長井真琴(ながいまこと) 訳

三　阿摩晝經（アンバッタ・スッタ）

第一誦品

37

一　是(かく)の如く我(われ)聞く。或る時佛は五百人の大比丘衆と倶に拘薩羅(コーサラー)國を遊行して、伊車能伽羅(イッチャーナンカラ)と名づくる拘薩羅國なる婆羅門の村に赴き給へり。かくて佛は伊車能伽羅林に止住し給ひぬ。爾(そ)の時、沸伽羅(ポッカラ)娑羅(サーティ)婆羅門は郁伽羅(ウッカッタ)城に止住したり。この城は人畜繁榮し、草木池水穀類豐富なる王領地にして、拘薩羅國王波斯匿(パセーナディ)より授けられし淨施の拜領地なりき。

二　沸伽羅娑羅婆羅門は斯く聞きぬ。「釋迦族より出家せる釋子沙門瞿曇(ゴータマ)は、拘薩羅國を遊行して、五百人の大比丘衆と倶に伊車能伽羅村に到著し、その伊車能伽羅林に止住し給ふ。この尊き瞿曇に是の如く美はしき名聲揚れり。『かく世尊は、應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀世尊なり』と。彼は天界・魔界・梵天界を含む此の世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを、獨自に證悟して

88 説示し給ふ。彼は初も善く、中も善く、終も善き、文義具備せる教法を説き、完全無缺の純淨なる梵行を明らかにす。善き哉、是の如きの❶眞人を見んことや」と。

三　爾の時、沸伽羅娑羅（ポッカラサーティ）婆羅門に阿摩晝（アンバッタ）といへる若き婆羅門の弟子ありて、聖典を讀誦し、呪を執持し、三吠陀及び吠陀名義集楷書（知明）・語源論・第五に古傳説に通曉し、語法論を解し、順世論及び大人相に關しては之を究明して遺漏あるなく、師傳の三明の聖語に於て精通せざるなく、師に對して、「我が知るところ、汝これを知り、汝の知るところ、我これを知る」といひ得る者なりき。

四　時に沸伽羅娑羅婆羅門は、阿摩晝青年婆羅門に告げて言く、「阿摩晝よ、かの釋迦族より出家したる釋子沙門瞿曇は、拘薩羅國を遊行して、五百人の大比丘衆と倶に伊車能伽羅村に到著し、その伊車能伽羅林に止住す。この尊き瞿曇に美はしき名聲揚れり。『かく世尊は、應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊なり』と。……乃至……善き哉、是の如きの眞人を見んことや。いでや、阿摩晝よ、汝は沙門瞿曇の所に赴くべし。行きて沙門瞿曇に就きて、彼の尊き瞿曇に對して是の如きの名聲揚れるや否や、將た又、尊き瞿曇は斯くもあるべき

人なりや否やを知るべきなり。かくて我等は尊き瞿曇を知るべきなり」と。

五 「然らば我如何にして、尊き瞿曇に就き是の如き事實を知ることを得べきや」。「阿摩晝よ、吾等の神典に三十二大人相の説傳へられたり。此等の諸相を具備せる大人には二つの行路ありて、その他には無し。若し家にあらば、轉輪聖王となり、正義あり信念ある王となり、四海を征服して國土を安穩ならしめ、七寶身に備はる。彼には次の如き七寶あり。輪寶・象寶・馬寶・摩尼寶・玉女寶・居士寶と第七に將軍寶これなり。彼に一千以上の王子あり。豪勇にして軀幹偉大に、有らゆる外敵を粉碎すべく、彼はその國境大海に至れるこの大地をも、刀杖を用ひず、正義により征服して住すべし。若し出家せば、この世に於て應供・等正覺となり、煩惱の纒布を剝ぐべし。阿摩晝よ、我は神典の授與者にして、汝はその執持者たり」

六 「しか致すべし」と、阿摩晝青年婆羅門は、沸伽羅娑羅に答へて席を立ち、沸伽羅娑羅に敬禮をなして、牝馬の車に打ち乘り、數多の青年婆羅門と倶に伊車能伽羅林に赴けり。車の通ずる所まで車に乘り、下車して徒歩にて園林に入れり。

七 爾の時、多くの比丘等は、露地にて遊歩しつゝありき。阿摩晝青年婆羅門は、

かの比丘等の許に到りて、比丘等に告げて言く、「今、かの尊者瞿曇は何處にありや。我等はかの尊者瞿曇を見んとて來れるなり」と。

八　時に比丘等は斯く思惟せり。「この阿摩晝青年婆羅門は名門の出身にして、著名なる婆羅門沸伽羅娑羅の弟子なり。佛にありても是の如き善男子との對話は苦しからざるべし」と。彼等は阿摩晝青年婆羅門に告げて言く、「阿摩晝よ、彼處に戶の締れる香房あり。靜かに近づき、徐行して玄關に入り、咳をなして門を敲け。佛は戶を開き給ふべし」と。

九　時に阿摩晝青年婆羅門は、戶の締れる香房へと靜かに近づき、徐行して玄關に入り、咳をなして門を敲けば、佛は戶を開き給ひ、阿摩晝青年婆羅門は內に入り
90 ぬ。他の青年婆羅門等も入り來りて、佛と挨拶して慇懃の言葉を交し一面に坐しぬ。阿摩晝は步みながら、坐せる佛と何か挨拶の辭を交し、立ちながら、坐せる佛と何か挨拶の辭を交しぬ。

一〇　時に佛は阿摩晝に告げて曰(のたまは)く、「阿摩晝よ、汝の師又は師の師たる長老婆羅門と對談するに當りて、今步きながら立ちながら、坐せる我と何か挨拶の辭を

交せるが如くになすべきや」。
「瞿曇よ、婆羅門は相互に、或は歩きながら、或は立ちながら、或は坐しながら、或は臥しながら、語り合ふこそ相應(ふさは)しけれ。されど瞿曇よ、禿頭の沙門、そは卑俗にして黒法を習ひ❷下劣なり。彼等と對談するには、今汝瞿曇となせるが如くすべきなり」

一一 「阿摩晝よ、汝此處に來れるは、望むところあればなるべし。來訪の目的を善く思念すべし。阿摩晝青年婆羅門は修養を缺けるも、修養ある身なりとの慢心あり。抑これ修養を缺けるが爲に非ずして何ぞや」。

一二 時に阿摩晝は、佛より修養を缺くとの言葉もて話しかけられて、怒り喜ばず、沙門瞿曇は我に對して惡意あるものなるべしとて、佛を攻撃し、佛を侮蔑し、佛を誹謗しつゝ、佛に告げて言く、「瞿曇よ、釋迦族の生れは險惡なり。瞿曇よ、釋迦
16 族の生れは粗暴なり。瞿曇よ、釋迦族の生れは輕率なり。瞿曇よ、釋迦族の生れは饒舌なり。げに卑俗の者にてありながら、婆羅門を褒めず、婆羅門を重んぜず、婆羅門を好まず、婆羅門を敬はず、婆羅門を禮せず。瞿曇よ、げに此等の釋迦族は

卑俗の身ながら、婆羅門を尊重供養禮拜せざるは相應しからず」と。是の如く阿摩晝青年婆羅門は始めて、釋迦族に對して卑俗なりとの語を放ちぬ。

一三　「阿摩晝よ、何故に釋迦族は汝を憤らしめしや」

「瞿曇よ、一時、我、師沸伽羅娑羅婆羅門のさる所用ありて、迦毘羅衞城に赴き、釋迦族の公會堂に到れり。爾の時、數多の釋迦族の諸王と王子とは、高き座に在りて各自擽ぐりて哄笑し戯弄せり。必ずや我を嘲笑したるものなるべく、何人も我を席に案内せざりき。瞿曇よ、げに釋迦族は卑俗の身ながら、婆羅門を尊重供養禮拜せざるは相應しからず」と。かくて阿摩晝は再度、釋迦族に對して卑俗なりとの語を放ちぬ。

一四　「阿摩晝よ、鶉てふ小鳥は、己が巣の中に在りて思ふが儘に囀づるなり。阿摩晝よ、かの迦毘羅衞城は釋迦族の本地なり。されば、阿摩晝のかゝる瑣事よりして憤るは相應しからず」。

一五　「瞿曇よ、刹帝利・婆羅門・吠舍首陀羅なる此等の四姓あり。此等四姓の刹帝利・吠舍首陀羅は、正しく婆羅門に奉仕すべきものなり。然るに釋迦族は卑俗の

92
身ながら、婆羅門を尊重供養禮拜せざるは相應しからず」と。かくて阿摩晝は三度、釋迦族に對して卑俗なりとの語を放ちぬ。

一六　佛はかく思惟し給ひき。「かの阿摩晝の、卑俗なりとの語を以て釋迦族を破毀するは、極めて強暴なり。いでや我、姓氏に就きて尋問すべし」とて、佛は阿摩晝に斯く曰へり。

「阿摩晝よ、汝は如何なる姓氏なりや」。

「瞿曇よ、我はカンハーヤナと申す〔姓氏〕なり」。

「阿摩晝よ、汝の母父系の昔の姓氏より考ふるに、釋迦族は主人より出でしものにして、汝は釋迦族の家僕女の子孫なり。阿摩晝よ、釋迦族はオッカーカ王を祖先とす。阿摩晝よ、昔オッカーカ王は、その寵愛せる妃の王子に王位を讓らんと欲して、年長の王子オッカームカ・カランドゥ・ハッティニーヤ・シーニプラの四人を國外に放逐せり。彼等は國外に擯出せられて、雪山の麓なる湖水の畔、大なるサーカ樹の森のある所に住居を定めぬ。彼等は血統の亂れんことを恐れ、己が姉妹を配偶となせり。

93

阿摩晝よ、是に於てオッカーカ王は隨從の大臣等に告げて言く、『今や、王子等は何處にありや』。

『王よ、雪山の麓なる湖水の畔、大なるサーカ樹の森のある所に、今や王子等は住し、その血統の亂れんことを恐れて、自身の姉妹を配偶となせり』。

阿摩晝よ、その時、オッカーカ王は歡喜の餘り、この語を發せり。『げに[3]サクヤ(能)なる王子なるかな、げに最上サクヤ(能)なる王子なるかな』と。

阿摩晝よ、爾來サクヤ(釋迦)族とは名けられたり。彼こそは釋迦族の先祖なり。

阿摩晝よ、オッカーカ王にディサー(方面)といへる下婢ありて、黑き兒を生みき。生るゝやカンハ(黑)は聲を擧げて言く、『母よ、我を洗へ、母よ、我を浴せしめよ。母よ、この不淨物より我を脫せしめよ。汝の役に立つこともあるべし』と。阿摩晝よ、今人々は、惡鬼なり惡鬼なりと呼びければ、阿摩晝よ、爾の時より人々は、惡鬼をカンハ(黑)とは名けぬ。人々は斯く云へり、『此の者は生るゝや話しかけぬ、カンハ(黑)生れて惡鬼は生ぜり』と。阿摩晝よ、爾來カンハーヤナ族と名けられ、彼はカンハーヤナ族の先祖とはなれり。阿摩晝よ、かく汝の母父系の姓氏を辿り行け

ば、釋迦族は尊貴の子孫にして、汝は釋迦族の下婢の子孫なり」

一七　かく言はれて、彼等青年婆羅門は佛に告げて言く、「尊者瞿曇よ、阿摩晝青年婆羅門を、苛酷にも下婢の子孫なりてふ言葉を以て破毀する勿れ。瞿曇よ、阿摩晝青年婆羅門は良き生れなり、阿摩晝青年婆羅門は良家の子なり、阿摩晝青年婆羅門は博聞なり、阿摩晝青年婆羅門は美聲なり、阿羅晝青年婆羅門は博學なり。されば瞿曇と倶に、此の事に關して問答することを得べし」

一八　時に佛は彼等青年婆羅門に斯く告げ給ひき。「青年婆羅門等よ、若し汝等にして、阿摩晝青年婆羅門は生れ惡し、阿摩晝青年婆羅門は良家の子に非ず、阿摩晝青年婆羅門は博聞に非ず、阿摩晝青年婆羅門は惡聲なり、阿摩晝青年婆羅門は無知なり、阿摩晝青年婆羅門は沙門瞿曇と此事に關して問答すること能はずと、かく思ひなば、阿摩晝青年婆羅門を除きて、汝等我と倶に此の事に關して互に語るべし。若し汝等にして、阿摩晝青年婆羅門は良き生れなり、阿摩晝青年婆羅門は良家の子なり、阿摩晝青年婆羅門は博聞なり、阿摩晝青年婆羅門は美聲なり、阿摩晝青年婆羅門は博學なり、阿摩晝青年婆羅門は沙門瞿曇と此の事に關して問

答することを得べしと、かく思ひなば、汝等を除きて、阿摩晝青年婆羅門は我と倶に此の事に關して互に語るべし」。

一九　「瞿曇よ、阿摩晝青年婆羅門は良き生れなり、阿摩晝青年婆羅門は良家の子なり、阿摩晝青年婆羅門は博聞なり、阿摩晝青年婆羅門は美聲なり、阿摩晝青年婆羅門は博學なり、沙門瞿曇と此の事に關して問答することを得べし、我等は沈默せむ。阿摩晝青年婆羅門は瞿曇と倶に此の事に關して問答すべし」。

二〇　時に佛は阿摩晝青年婆羅門に斯く告げ給へり。「阿摩晝よ、汝に對してこの理由ある問は起る、不本意ながらも明らかに解答すべし。若し明らかに解答をなさず、異答をなし、或は沈默し、或は立ち去らんには、卽座に汝の頭は七裂すべし。阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は婆羅門の大長老阿闍梨の、その叉師等の語るを聞かざりしや。カンハーヤナ族は何處より由來し、カンハーヤナ族の祖95先は何人なりや」。

阿摩晝青年婆羅門は斯く言はれて沈默せり。佛は再度問ひ給へるに、再度とも沈默せり。

時に佛は阿摩晝青年婆羅門に斯く告げ給へり。「阿摩晝よ、今解答すべし、今汝の沈默を守る時に非ず。阿摩晝よ、如來より三度まで、理由ある問をかけられて解答せざる者は、卽座にその頭は七裂すべし」。

二一　爾の時、金剛杵を手にせる帝釋天は、大なる鐵塊の赤熱して光明赫灼たるを執りて、阿摩晝青年婆羅門の頭上の虛空に住せり。「彼謂へらく」、「若し阿摩晝青年婆羅門にして、佛より三度まで理由ある問をかけられて解答せざらんには、卽座にその頭を七裂となすべし」と。佛にも阿摩晝にも、この金剛杵を手にせる帝釋天は見えたり。阿摩晝青年婆羅門はこれを見て、恐れ怖れて身毛竪立し、佛に守護を求めんとて近寄り、佛に斯く告げぬ。

「尊者瞿曇の曰ひしことや如何に。再び尊者瞿曇は語らるべし」。

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は婆羅門の大長老阿闍梨等の語るを聞かざりしや。カンハーヤナ族は何處より由來し、カンハーヤナ族の祖先は何人なりや」。

「尊者瞿曇よ、我は尊者瞿曇の言はれし如く、その如くに承り居れり。カンハー

ヤナ族はそれより由來し、彼はカンハーヤナ族の祖先なりと」。

二二　かく言はれし時、青年婆羅門等は大叫喚し、「阿摩晝青年婆羅門は生れ惡し、阿摩晝青年婆羅門は良家の子に非ず、阿摩晝青年婆羅門は釋迦族の下婢の子にして、阿摩晝青年婆羅門の主人は釋迦族なりき。吾等は正しきを語る沙門瞿曇を、他を非難すべき人とは思はざりしなり」と。

二三　爾の時、佛は斯く思惟し給へり。「此等の青年婆羅門が、阿摩晝青年婆羅門を、下婢の子孫なりてふ語を以て攻擊するは餘りに酷なり。いでや、我「この攻擊より脫せしめん」と。

時に佛は彼等青年婆羅門に告げ給へり。「青年婆羅門等よ、汝等は阿摩晝青年婆羅門を、下婢の子孫なりてふ語を以て攻擊する勿れ。かのカンハ(黑)は偉大なる仙人となれり。彼は南方の人民の間に行き、梵天の呪文を學習し終りて、オッカーカ王の所に近づき、王女クッダルーピーを懇望せり。オッカーカ王は『咄、此輩、我が下婢の子孫に過ぎざるに、何事ぞ王女クッダルーピーを懇望せんとは』として、彼に對して憤怒の心を起し、馬蹄形の箭を番ひたるも、彼は箭を放つことも、そ

を取り除くことも能はざりき。青年婆羅門等よ、時に諸大臣・諸侍臣はカンハ仙人に近づきて斯く言へり。

『尊者よ、王をして安全ならしめよ。尊者よ、王をして安全ならしめよ』。

『王は安全なるべし。されど、王若し下方に箭を放ち給はば、王の領土は悉くその地龜裂するに至るべし』。

『尊者よ、王をして安全ならしめよ、國土をも安全ならしめよ』。

『王は安全なるべし、國土は安全なるべし。されど、王若し上方に箭を放ち給はば、王の領土は悉く七年間降雨なかるべし』。

『尊者よ、王をして安全ならしめよ、國土をも安全ならしめよ、雨は降らしめよ』。

『王は安全なるべし、國土も安全なるべし、雨も降るべし。されど、王は第一王子にこの箭を立つべし。王子は安全にして、身の毛も動かざるべし』。

青年婆羅門等よ、時に諸大臣はオッカーカ王に告げて言く、『オッカーカ王は第一王子に箭を立て給ふべし。王子は安全にして、身の毛も動かざるべし』と。

時に、オッカーカ王は第一王子に箭を立てしが、王子は安全にして、身の毛も動

97 かざりき。時に王は畏怖し、梵罰に戰慄して、王女クッダルーピーを與へぬ。青年婆羅門等よ、汝等は阿摩晝青年婆羅門を、下婢の子孫なりてふ語を以て攻撃する勿れ、そは酷なり、彼カンハー(黑)は偉大なる仙人なりき」。

二四　爾の時、佛は阿摩晝青年婆羅門に告げ給へり。

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。今、刹帝利の童子ありて、婆羅門の童女と同居を構へ、同居の結果として男子生れたりとせん。この刹帝利の童子によりて婆羅門の童女に生れたる男子は、婆羅門の間にありて、座席或は水を受くることを得るや」。

「瞿曇よ、得べし」。

「又、婆羅門は彼をして、亡者供養會に於て、或は祝宴に於て、或は犧牲祭に於て、或は饗宴に於て、食事をなさしむるや」。

「瞿曇よ、食事をなさしむべし」。

「又、婆羅門は彼に呪文を口傳するや」。

「瞿曇よ、傳授すべし」。

「又、婆羅門女の間に、彼を排斥することなきや」。
「瞿曇よ、排斥することなからん」。
「又、刹帝利は刹帝利即位灌頂を、彼が爲に行ふや」。
「瞿曇よ、さること無し」。
「何故ぞや」。
「瞿曇よ、母系不純なるが故なり」。

二五 「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。今、婆羅門の童子ありて、刹帝利の童女と同居を構へ、同居の結果として男子生れたりとせん。この婆羅門の童子によりて刹帝利の童女に生れたる男子は、婆羅門の間にありて、座席或は水を受くることを得るや」。
「瞿曇よ、得べし」。
「又、婆羅門は彼をして、亡者供養會に於て、或は祝宴に於て、或は犧牲祭に於て、或は饗宴に於て、食事をなさしむるや」。
「瞿曇よ、食事をなさしむべし」。

「又、婆羅門は彼に呪文を口傳するや」。

「瞿曇よ、傳授すべし」。

「又、婆羅門女の間に、彼を排斥することなきや」。

「瞿曇よ、排斥することなからん」。

「又、刹帝利は刹帝利卽位灌頂を彼が爲に行ふや」。

「瞿曇よ、さること無し」。

「何故ぞや」。

「瞿曇よ、父系不純なるが故に」。

二六　「かく、阿摩晝よ、女と女とを比ぶるも、男と男とを比ぶるも、刹帝利は優れ、婆羅門は劣れるなり。阿摩晝よ、汝の意に於て如何。今婆羅門の人々が或る婆羅門を、何かの惡事よりして、その頭を剃り❺灰を撒きかけて、或は國土より、或は都市より追放することありとせん。かくても彼は、婆羅門の間にありて、座席或は水を受くることを得るや」。

「瞿曇よ、得ざるべし」。

「又、婆羅門は彼をして、亡者供養會に於て、或は祝宴に於て、或は犠牲祭に於て、或は饗宴に於て、食事をなさしむるや」。

「瞿曇よ、食事をなさしめざるべし」。

「又、婆羅門は彼に呪文を口傳するや」。

「瞿曇よ、傳授せざるべし」。

「又、婆羅門女の間に、彼を排斥することなきや」。

「瞿曇よ、排斥すべし」。

二七 「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。今、刹帝利の人々が或る刹帝利を何かの悪事よりして、その頭を剃り灰を撒きかけて、或は國土より、或は都市より追放することありとせん。かくても彼は、婆羅門の間にありて、座席或は水を受くることを得るや」。

「瞿曇よ、得べし」。

「又、婆羅門は彼をして、亡者供養會に於て、或は祝宴に於て、或は犠牲祭に於て、或は饗宴に於て、食事をなさしむるや」。

「瞿曇よ、食事をなさしむべし」。

「又、婆羅門は彼に呪文を口傳するや」。

「瞿曇よ、傳授すべし」。

「又、婆羅門女の間に彼を排斥することなきや」。

「瞿曇よ、排斥せざるべし」。

「然らば阿摩晝よ、茲に一人の刹帝利ありて、最上の罪惡を犯さば、刹帝利の人々
99 は彼を、その頭を剃り灰を撒きかけて、或は國土より、或は都市より追放すべし。
阿摩晝よ、かく刹帝利の最上の罪惡を犯すことありとも、尚刹帝利は優れ、婆羅門
は劣れるものなり。

二八　阿摩晝よ、梵天サナンクマーラ(常童子)は偈を説きて言く、

種姓を尊ぶ人々の間には
刹帝利は最勝のものにして
人天の中に在りては
智德成就の人最も尊し、と。

阿摩晝よ、梵天サナンクマーラは、善く偈を唱へて拙なからず、善く説きて拙なからず、意義を具して無意義に非ず。我も亦これを承認し、我も亦かくは説くなり。

種姓を尊ぶ人々の間には
刹帝利は最勝のものにして
人天の中に在りては
智徳圓滿の人最も尊し、と」。

第二 誦品

一 「瞿曇よ、その徳〔行〕とは何ぞや。その智〔明〕とは何ぞや」。「阿摩晝よ、この無上の智德成就てふことには、生れの論議・姓の論議・慢の論議など――『汝は我ほどの資格あり、汝は我ほどの資格なし』などいふ――は説かれざるなり。阿摩晝よ、嫁を娶ること・或は嫁に遣ること・或は嫁の遣り取りなどの話のある所に、生れの論議・姓の論議・慢の論議など――『汝は我ほどの資格あり、汝は

我ほどの資格なし』などいふ――はあるものなり。阿摩晝よ、或は生れの論議に
束縛せられ、或は姓の論議に束縛せられ、或は慢の論議に束縛せられ、或は嫁の遣
100 り取りの話に束縛せらるゝほどの人々は、實に無上の智德成就より遠ざかるこ
と甚だしきなり。阿摩晝よ、生れの論議の束縛と、姓の論議の束縛と、慢の論議の
束縛と、嫁の遣り取りの話の束縛を斷じて後、無上の智德成就は實現せらる」。

二　「瞿曇よ、何をか德〔行〕となし、何をか智〔明〕となすや」。

「阿摩晝よ、今世に如來出現し、〔如來は〕應供・等正覺…乃至…かくして、阿摩晝よ、比丘は戒を具足せるなり。〔沙門果經四〇―六三參照〕。

…乃至…初禪に達して住す。これ又彼の德〔行〕の一部分なり…乃至…第四禪に達して住す。これ又彼の德〔行〕の一部分なり。阿摩晝よ、これその德〔行〕なり。〔同經七五―八二參照〕。

…乃至…心を智見に傾け注ぐ…乃至…これ又彼の智〔明〕の一部分なり…乃至…更に此の生に來ることなし。これ又彼の智〔明〕の一部分なり。阿摩晝よ、これその智〔明〕なり。〔同經八三―九八參照〕。

101

阿摩晝よ、かゝる比丘は、智成就とも、德成就とも、智德成就とも稱せらるゝなり。阿摩晝よ、この智德成就より高き或は優れたる智德成就は、他に存することなし。

三 阿摩晝よ、この無上の智德成就に對する失敗の原由たるもの四あり。何をか四となす。阿摩晝よ、沙門或は婆羅門ありて、この智德成就の境に到達せずして、道士の資具を棒にて擔ひ、落ちたる果實を食とする行者たるべしとて、空地の森林に深く入るなり。彼は正に智德成就者の侍者となるに過ぎざるべし。阿摩晝よ、これ無上の智德成就に對する第一の失敗の原由なり。

阿摩晝よ、更に沙門或は婆羅門ありて、この無上の智德成就の境に到達せず、落ちたる果實を食とする境にも到達せずして、鋤と籠とを取りて、我、莖・根・果を食とする行者たるべしとて、空地の森林に深く入るなり。彼は正に智德成就者の侍者たるに過ぎざるべし。阿摩晝よ、これ無上の智德成就に對する第二の失敗の原由なり。

阿摩晝よ、更にまた沙門或は婆羅門ありて、この無上の智德成就の境に到達せず、落ちたる果實を食とする境にも到達せず、莖・根・果を食とする境にも到達せず

して、村の境、町の境に護摩堂を作りて火に事（つか）ふるなり。彼は正に智德成就者の侍者たるに過ぎざるべし。阿摩晝よ、これ無上の智德成就に對する第三の失敗の原由なり。

阿摩晝よ、更にまた沙門或は婆羅門ありて、この無上の智德成就の境に到達せず、落ちたる果實を食とする境にも到達せず、莖・根・果を食とする境にも到達せず、事火の境にも到達せずして、大道の四辻に四門の家を造り、『此等の四方より沙門或は婆羅門の來ることあらば、我、力を盡して饗應すべし』とて給仕するなり。彼は正に智德成就者の侍者たるに過ぎざるべし。阿摩晝よ、これ無上の智德成就に對する第四の失敗の原由なり。

かく、阿摩晝よ、無上の智德成就に對する此等の四つの失敗の原由あるなり。

四 阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は汝の師と共にこの無上の智德成就の資格ありと認むるや」。

「瞿曇よ、認めざるなり。瞿曇よ、我は我が師と共に如何なる資格の者なりや。無上の智德成就とは如何なるものなりや。瞿曇よ、我は我が師と共に無上の智

徳成就より遠ざかり居るなり」。

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝も無上の智徳成就に達し得ずして道士の資具を棒にて擔ひ、我は我が師と共に落ちたる果實を食とする者たるべしとて、空地の森林に入るや」。

「瞿曇よ、さることとなし」

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝はこの無上の智徳成就の境に到達せず、落ちたる果實を食とする境にも到達せずして、鋤と籠とを取り、我は我が師と共に莖・根・果を食とする者たるべしとて、空地の森林に入るや」。

「瞿曇よ、さることとなし」。

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は汝の師と共にこの無上の智徳成就の境に到達せず、落ちたる果實を食とする境にも達せず、莖・根・果を食とする境にも到達せずして、村の境、町の境に護摩堂を作り、火に事ふる者として住するや」。

「瞿曇よ、さることとなし」。

「阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は汝の師と共にこの無上の智徳成就の境に

到達せず、落ちたる果實を食とする境にも到達せず、莖・根・果を食とする境にも到達せず、事火の境にも到達せずして、大道の四辻に四門の家を造り、『此等の四方より沙門或は婆羅門の來ることあらば、我、力を盡して饗應すべし』とて住するや」。

「瞿曇よ、さることとなし」。

五 「阿摩晝よ、汝は汝の師と共に無上の智德成就に就きては全く資格を缺けるものなり。又無上の智德成就の爲には四つの失敗と看做すべきものに就きても、汝は汝の師と共に全く資格を缺けるものなり。阿摩晝よ、汝の師たる婆羅門沸伽羅娑羅は、この言を吐けり。『禿頭の沙門にして・卑俗なる・黑法を習へる・下劣なる彼等は何者ぞ、三明に通ずる婆羅門と對談するとは何事ぞ』と。而して自らは劣れる行をも成就し得ざるなり。阿摩晝よ、師たる婆羅門沸伽羅娑羅の言が、如何程まで汝に禍を蒙らしめしかを見るべし。

六 阿摩晝よ、婆羅門沸伽羅娑羅は、拘薩羅國の波斯匿王の供養を受け居るも、而も拘薩羅國の波斯匿王は、彼に對面をだに許さず。王が彼と協議するや、幕を隔てゝ協議するなり。阿摩晝よ、正しく純なる施食を受くる者に、拘薩羅國の波斯

匿王は、如何なれば對面するを許さざるや。阿摩晝よ、師たる婆羅門沸伽羅娑羅の言が、如何程まで汝に禍を蒙らしめしかを見るべし。

七　阿摩晝よ、汝の意に於て如何。今拘薩羅國の波斯匿王は、或は象の首に坐し、或は馬の背に坐し、或は車の敷具の上に立ちて、大臣又は諸王子と、何事かを議するとせよ。王が其場所より出でて一方に立てる時、首陀羅族の者、又は首陀羅の下僕來るとせよ。彼〔首陀羅族の者又は首陀羅の下僕〕かの場所に立ちてその事を議し、『かくも拘薩羅國の波斯匿王は語れり』と云はんに、彼が王の語りしことを語り、或は王の語りしことを語る間、彼は王又は副王にてあり得べきや」。

「瞿曇よ、さることなし」。

八　「阿摩晝よ、汝は是の如きものなり。『昔婆羅門の諸仙人——例へば、阿咤摩・婆摩・婆摩提婆・毘婆審咤・耶婆提伽・鴦耆羅・跋羅陀皤闍・婆摩咤・迦葉・婆咎の如き——ありて、祕典を作り祕典を誦せしが、今の婆羅門は、其等の古き祕典の聖句の、歌はれ語られ集められたるを、眞似て歌ひ、眞似て語り、說かれたるを眞似て說き、告げられたるを眞似て告ぐるに過ぎず。かく我〔阿摩晝〕は師と共に其等の祕典をば誦

するなり』と。此の故に、汝は仙人となり又は仙人の道に入りたりとの理由なかるべし。

九　阿摩晝よ、汝の意に於て如何。汝は、婆羅門の長老たる師、又は師の師たる人人の語るを聞かざりしや。昔婆羅門の諸仙人――例へば阿咤摩…〔乃至〕…婆咎の如き――ありて、祕典を作り祕典を誦せしが、今の婆羅門は、其等の古き祕典の聖句の、歌はれ語られ集められたるを眞似て歌ひ眞似て語り、說かれたるを眞似て說き、告げられたるを眞似て告ぐるに過ぎず〔と〕。今汝及び汝の師のなす如く、彼等〔古仙〕はよく沐浴し、油を塗り、髮髯を整へ、華鬘瓔珞を身に飾り、白衣を著し、五慾の樂に耽りしや」。

105 「瞿曇よ、さることなし」。

一〇　「今汝及び汝の師のなす如く彼等は白米の飯・種々の汁・種々の味附を食とせしや」。

「瞿曇よ、さることなし」。

「今汝及び汝の師のなす如く、彼等は美装の婦人を侍らしめしや」。

「瞿曇よ、さることとなし」。
「今汝及び汝の師のなす如く、彼等は尾の裝はれたる馬の車に、長き棒もて鞭打ちつゝ運ばれ行きしや」。
「瞿曇よ、さることとなし」。
「今汝及び汝の師のなす如く彼等は濠を深くし門を堅くし城壁を高くして、長劍を帶べる丈夫によりて守りしや」。
「瞿曇よ、さることとなし」。
「かく、阿摩晝よ、汝は汝の師と共に、仙人又は仙人たるべき道に入らざるなり。されば、阿摩晝よ、何人と雖も、我に就きて疑ひ或は惑ひある者は、我に問ふべし。我は說明をなさん」。

一一　爾の時、佛は大房舍より出でて經行を始め給へり。時に青年婆羅門阿摩晝は、佛の經行に隨ひ行けるに、佛身に於て三十二の大人相を數へ求めぬ。阿摩106晝は佛身に於て、二相を除く〔他の〕大人相は盡くこれを觀取せり。〔されど〕二の大人相、卽ち陰馬藏相と廣長舌相に於て、疑惑の念を生じて心定まらず、信心起らざ

りき。

一二　佛は此の事を知りて、阿摩晝が佛の陰馬藏を見得る如き神通力を示し給ひ、更に佛は舌を出して、兩耳竅・兩鼻孔を舐め額の全圓をも舌を以てこれを覆ひ給へり。

時に阿摩晝は斯く思ひぬ。「沙門瞿曇は、三十二の大人相をば悉く具備せざることなし」と。かくて佛に向ひて斯く白しぬ。

「瞿曇よ、いでや今、我等は去るべし、多用多忙なればなり」。

「阿摩晝よ、汝今隨意たるべし」。

時に阿摩晝は、馬車に乘りて出で行けり。

一三　爾の時、婆羅門沸伽羅娑羅は、婆羅門の大衆と倶に郁伽羅（ウッカッタ）より出で、己が學園に於て、阿摩晝を待ちつゝ坐し居たりき。時に阿摩晝は、その學園に赴けり。乘物の通ずる所まで乘物にて行き、而して乘物より降り、徒歩にて婆羅門沸伽羅娑羅の所に近づけり。近づきて沸伽羅娑羅に挨拶をなし、一方に坐しぬ。沸伽羅娑羅は阿摩晝に向ひて斯く告げぬ。

一四 「阿摩晝よ、かの尊者瞿曇を見しや否や」。

「我等は尊者瞿曇を見たり」。

「阿摩晝よ、かの尊者瞿曇に、噂の如き名聲揚れるに相違なきや。彼尊者瞿曇は、それほどの人たるに相違なきや」。

「尊者瞿曇には、噂の如き名聲揚れるに相違なく、彼尊者瞿曇は、それほどの人たるに相違なし。彼は三十二大人相を具備して缺くる所なきなり」。

「阿摩晝よ、沙門瞿曇と汝との〔間に〕何かの對話行はれしや」。

「沙門瞿曇と我との對話行はれたり」。

「如何なる對話なりしや」。

阿摩晝は佛との對話をその儘、總て沸伽羅娑羅に語りき。

一五 斯く語られし時、沸伽羅娑羅は阿摩晝に告げて言く、「咄、何事ぞ、我等の似而非學者。是の如き用務の果し方をなす者は、其の身分散じて死後は地獄に墮つべし。阿摩晝よ、汝は彼瞿曇を攻め立てゝ語りしに、却つて彼瞿曇は我等の祕事をも暴露して語れり。咄、何事ぞ我等の似而非學者。是の如き用務の果し方

をなす者は、其の身分散じて死後は地獄に墮つべし」と。彼は怒りて阿摩晝を足もて蹴り退け、直に佛を見んとし佛に近づかんと欲しぬ。

108
一六　爾の時、他の婆羅門等は沸伽羅娑羅に告げて言く、「今日、時既に遲く、沙門瞿曇を見んとて近づくべきに非ず。明日、尊者沸伽羅娑羅は沙門瞿曇を見んとて近づくべきなり」と。

かくて沸伽羅娑羅は、自宅に嚼食・噉食を準備して車に載せしめ、篝火を持たしめて、郁伽羅を立ち伊車能伽羅林に赴きぬ。車の通ずる所まで車にて行き、而して車より降り、徒歩にて佛の所に近づけり。近づきて佛と挨拶の辭を交し、而して一方に坐せり。一方に坐せる沸伽羅娑羅婆羅門は斯く言へり。

一七　「瞿曇よ、我が弟子阿摩晝は來りしや」。

「汝の弟子阿摩晝は來れり」。

「瞿曇よ、阿摩晝と何かの對談ありしや」。

「ありたり」。

「如何なる對談なりしや」。

爾の時、佛は對談の一切を沸伽羅娑羅に語り給ひぬ。沸伽羅娑羅は斯くと語られて佛に言へり。

「瞿曇よ、阿摩晝は愚物なり、希はくは尊者瞿曇の阿摩晝を聽（ゆる）されんことを」。

「婆羅門よ、阿摩晝は安穩の身たれ」。

一八 爾の時、沸伽羅娑羅婆羅門は、佛身に於て三十二大人相を數へ求めぬ。沸伽羅娑羅は、佛身に三十二相の中、二相を除きて大部分を認めたり。〔ただ〕陰馬藏と廣長舌との二大人相に就き、疑惑の念を生じて心定らず、信心起らざりき。

一九 佛は此事を知り、沸伽羅娑羅が佛の陰馬藏を見得る如き神通力を示し給ひ、更に舌を出して、兩耳竅・兩鼻孔を舐め、額の全圓を舌を以てこれを覆ひ給ひぬ。

時に沸伽羅娑羅は斯く思へり。「瞿曇は三十二の大人相を具備して缺くる所なし」と。かくて佛に白して言く、「尊者瞿曇は、今日より比丘衆と俱に食事を受くることを我に聽（ゆる）させ給へ」と。佛は默然を以て承諾し給へり。

二〇 爾の時に沸伽羅娑羅は佛の承諾を知りて、佛に時刻を告げて言へり。「尊者瞿曇よ、時刻なり、食事の準備成れり」と。時に佛は朝時、下衣を著し上衣と鉢と

を携へて、比丘衆と倶に沸伽羅娑羅の居宅に近づき、近づきて設けの座席に著き給へり。

爾の時、沸伽羅娑羅は、美味なる嚼食と噉食とを以て、手づから佛を饗應して滿足せしめ、辭するに至るまで勸めまつり、年少婆羅門等は比丘衆を接待したり。時に沸伽羅娑羅は佛の食事竟りて鉢と手とを洗ひ給へるを見て、他の低き座席を取りて一方に坐しぬ。

110

二一　一方に坐せる沸伽羅娑羅に對して、佛は順序ある說話をなし給へり。卽ち布施の說話、持戒の說話、天上の說話、諸慾の災厄と邪惡と汚穢と、出離の利益とを說き給へり。

佛は、沸伽羅娑羅の心が準備せられ、柔軟となり、障の除かれ、鬱勃として信念の起れるを知り給ひし時、諸佛の證悟せる法義、卽ち苦と、苦の原因と、その滅盡と、その道とを說き給へり。恰も汚れなき純白の布の正しく染色を取るが如く、その如くに、その座に於て沸伽羅娑羅に、「如何なるものと雖も、集起せるものは總てこれ滅盡すべき本質のものなり」との遠塵離垢の法眼生ぜり。

二二　爾の時、沸伽羅娑羅は法を見、法に達し、法を悟り、法に沒入し、疑を度(わた)り、惑を去り、確信を得、師(佛)の敎にのみ依りて他に依らず、佛に白して言く、「善き哉瞿曇、善き哉瞿曇、恰も覆(くつが)へされたるを引き起し、蔽はれたるを開き、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るならんとて、暗黑中に燈明を持ち來るが如く、その如くに、瞿曇は種々の方便によりて法を說き明かし給ひぬ。瞿曇よ、この我は、妻子弟子眷屬と倶に、尊者瞿曇と法と比丘衆とに歸依すべし。尊者瞿曇は、今日より命終るまで、歸依する優婆塞として我を攝受し給へ。尊者瞿曇は郁伽羅に於ける他の優婆塞の家々に近づき給ふが如く、沸伽羅娑羅の家にも近づき給へ。玆に年少婆羅門の男女にして、挨拶をなし、起立の禮をなし、座蓆と水とを與へ、信心を起す者は、永く彼等の爲に利益と安樂とをあらしむべし」。

「婆羅門よ、その言や善し」と(佛は曰へり、と)。

註❶原語 arahat は阿羅漢・應供・應眞とも譯さるゝも、今は眞人と譯せり。

❷原語bandhupādāPaccaは「親族の足より出生したる」の義なるが、佛音の註によれば、bandhu（親族）とは、brahmā（梵天）の義なりといふ。思ふに之は婆羅門族より親みて言ふ言葉なるべし。婆羅門族よりいへば、婆羅門族は梵天の口より、刹帝族は胸より、毘舍族は臍より、首陀羅族は膝より、沙門は足より生るといふ。玆には沙門を卑しめていふ意なれば「下劣なり」と譯せり。

❸原語sakyaは「能力ある」の義故「能」と譯せるも、サーカ樹林のサーカsākaに關聯するものなり。

❹原文にはyakkho（夜叉）とあるも、佛音の註にはsakko-devarājāのことなりとあり。故に「帝釋」と譯したり。

❺原文assa-pūtena vadhitvāは、一本にbhassapūṭena vadhitvāとあり。佛音の註にはbhasmapūṭena sise chārikaṁ okiritvā（灰の容器にて頭に灰を撒きかくる）と云へり。今これに從いて譯せり。

四 種徳經（ソーナダンダ・スッタ）

111 一 是の如く我聞く。一時、世尊、鴦伽國に於て五百の大比丘衆と共に遊行しつゝ瞻婆城に到り給ひ、彼處瞻婆に於て、世尊は伽伽蓮池の畔に止宿し給へり。

爾の時、婆羅門ソーナダンダ（種徳）は瞻婆城に住しぬ。この城は生活に餘裕あり、草木水に富み、穀物に富める王領地にて、摩掲陀の王斯尼喩頻婆娑羅によりて與へられたる淨施の拜領地なりき。

二 爾の時、瞻婆に住せる婆羅門の家長は、是の如く聞けり。「釋迦族より出家せる我が釋子沙門瞿曇は、今五百の大比丘衆と共に遊行しつゝ瞻婆に到り、伽伽蓮池の畔に止宿し給ふ。世尊瞿曇に是の如く美はしき名稱揚れり。『かく、かの世尊は阿羅漢なり、等正覺者なり、明行具足者なり、善逝なり、世間解者なり、最上者なり、調御丈夫なり、人天の師なり、覺者なり、世尊なり』と。世尊は、天界・魔界・梵天界を含むこの世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを、獨自に證悟して他の爲に說示し給ふ。

世尊は初も善く、中も善く後も善き法を説き、文義具足せる、完く善き、全く清淨なる梵行を示し給ふ。是の如き類の阿羅漢に會ふは善きことなり」と。

112 而して瞻婆に住せる婆羅門の戸主は、一團一團隊伍をなして瞻婆を出で、かの伽伽蓮池の畔に赴かんとせり。

三　爾の時、種德婆羅門は午睡の爲屋上に登り居たり。種德婆羅門は、瞻婆に住せる婆羅門の家長等の、瞻婆を出でゝ一團一團隊伍をなし、かの伽伽蓮池の畔に赴くを見たり。見たる後侍者に言へり。

「侍者よ、何を以ての故に、瞻婆に住せる婆羅門の家長等は一團一團隊伍をなし、瞻婆を出でゝかの伽伽蓮池の畔に赴かんとするや」。

「釋子沙門瞿曇は釋迦族より出家し、〔彼は〕鴦伽國に於て五百の大比丘衆と共に遊行しつゝ瞻婆に至り、伽伽蓮池の畔に止宿せり。〔時に〕世尊瞿曇に、次の如く美しき名稱揚れり。『かく、かの世尊は阿羅漢なり、等正覺者なり、明行具足者なり、善逝なり、世間解者なり、最上者なり、調御丈夫なり、人天の師なり、覺者なり、世尊なり』と。彼瞿曇を見んとて、此等の人々は進むなり」。

「侍者よ、然らば瞻婆に住せる婆羅門の家長等の許に赴き、赴きたる後、瞻婆に住せる婆羅門の家長等に斯く言へ。『卿等待つべし。婆羅門種德も沙門瞿曇を見に行かんとす』と、かく婆羅門種德は言へりと」。

「諾」と婆羅門種德に答へて侍者は、瞻婆に住せる婆羅門の家長に近づき、近づきたる後、瞻婆に住せる婆羅門の家長に斯く言へり。「婆羅門種德は斯く言へり。『卿等待つべし、婆羅門種德も沙門瞿曇を見に行くべし』と」。

113

四 その時、五百の婆羅門は、さる用務を帶び、各方面の國々より來りて瞻婆に止宿し居たり。彼等婆羅門は「婆羅門種德は沙門瞿曇を見に行くべし」てふ風聞を聞きぬ。

時に彼等婆羅門は、婆羅門種德に近づき、近づきたる後、婆羅門種德に斯く言へり。

「尊敬すべき種德が沙門瞿曇を見に行かんとするは、事實なりや否や」。

「諸卿よ、我は斯く考へぬ。我も亦沙門瞿曇を見に行くべしと」。

「尊敬すべき種德は沙門瞿曇に會ひに赴くべからず。尊敬すべき種德が沙門

瞿曇に會ひに行くことは至當ならず。若し尊敬すべき種德にして、沙門瞿曇に會ひに行かんには、卿種德の名聲は減じ、沙門瞿曇の名聲は揚らん。卿種德の名聲は減じ、沙門瞿曇の名聲は揚らんとするが故に、この點に於て、卿種德が沙門瞿曇に會ひに行くは宜しからず。却つて沙門瞿曇こそ卿種德に會はんとして來るべけれ。

五　何となれば、卿種德は、母系父系倶に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父に遡るも〔是より〕外れず、系譜に關して他より非難せらるること無ければなり。尊敬すべき種德は、母系父系倶に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父に遡るも〔是より〕外れず、系譜に關して他より非難せられたること無きが故に、この點に於ても、尊敬すべき種德は沙門瞿曇に會ひに行くべきに非ず。却つて沙門瞿曇こそ尊敬すべき種德に會はんとして來るべけれ。

尊敬すべき種德は、富みて大財寶あり、大富裕なり……乃至……

114 尊敬すべき種德は、諷誦者なり、持呪者なり、三吠陀に通曉し、吠陀名義集・楷畫(知明)・語源論・第五に古傳說に通曉し、語法論・順世論・大人相を知悉す。

尊敬すべき種徳は、美しく、見よく、威容あり、色は麗しき蓮花の如く、優れたる姿を有し、優れたる威嚴を有し、卑しからざる容姿なり。

尊敬すべき種徳は、徳あり、徳を修め徳を修めて全し。

尊敬すべき種徳は、朗かに談り朗かに述べ、優雅に語り、明瞭にして嗄聲ならざる、而して意義を明確に表す辯才あり。

尊敬すべき種徳は、多くの師中の師たり。三百の青年に呪の暗誦を敎へ、多數の青年は、尊敬すべき種徳に從ひて呪を習はんと熱望して、各地各國より來る。

尊敬すべき種徳は、齡高く、年歯を累ね、經驗に富み、老境に達す。〔之に反して〕沙門瞿曇は年若き青年出家者なり。

尊敬すべき種徳は、摩揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅に尊敬され、重んぜられ、敬はれ、崇められ、尊ばる。

尊敬すべき種徳は、婆羅門沸伽羅娑羅に尊敬され、重ぜられ、敬はれ、崇められ尊ばる。

尊敬すべき種徳は、生活に餘裕ある、草木水に富み穀物に富める王領地にして、摩

揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅によりて與へられたる淨施の拜領地なる瞻婆城に住せり。尊敬すべき種德は、生活に餘裕ある、草木水に富み穀物に富める王領地にして、摩揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅によりて與へられたる、淨施の拜領地なる瞻婆城に住すてふ理由によりても、尊敬すべき種德は沙門瞿曇に會ひに行くべからず。却つて沙門瞿曇こそ尊敬すべき種德に會はんとして來るべけれ」と。

六　斯く言へるを聞きて、婆羅門種德は彼等婆羅門に斯く言ひぬ。

「卿等よ、然らば我が言を聽け。我は尊敬すべき瞿曇に會ひに行くは至當にして、彼瞿曇が我等に會はんとして來るは至當ならず。

卿等よ、實に沙門瞿曇は、母系父系俱に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父まで遡るも、是より外れず、系譜に關して他より非難せられたることなし。沙門瞿曇は母系父系俱に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父まで遡るも、是より外れず、系譜に關して他より非難せられたることなきが故に、この點に於ても、尊敬すべき瞿曇は我等に會はんとて來るべからず。却つて我等こそ尊敬すべき瞿曇に會ひに行くべきなり。

沙門瞿曇は、多くの親族の群を棄てゝ出家したり。

實に沙門瞿曇は、地中に埋れたる、又は地上にある、多くの金塊を捨てゝ出家したり。

實に沙門瞿曇は青年にして、漆黑の髪を有ち、美しさ若さを有するに拘らず、友を捨てゝ出家したり。

實に沙門瞿曇は、父母の不同意なるにも拘らず、又父母は涙の面をなし、涕泣せるにも拘らず、髮髭を剃り去り、袈裟を著し、家居を廢し、家を去りて、出家生活に入れり。

實に沙門瞿曇は美しく、見よく、威容あり、色は麗しき蓮花の如く、優れたる姿を有し、優れたる威嚴を有し、卑しからざる容姿なり。

實に沙門瞿曇は、戒を具し、高貴なる德を有し、善なる德を有し、善なる德を完具せり。

實に沙門瞿曇は、朗かに談り、朗かに述べ、優雅に語り、明瞭にして嗄聲ならざる、而して意義を明確に表す辯才あり。

沙門瞿曇は多くの師中の師たり。
實に沙門瞿曇は、欲と貪とを滅し、〔心の〕動搖を離れたり。
實に沙門瞿曇は、業論者・行爲論者にして、彼こそ婆羅門族に過失なき尊信を起さしむ。
實に沙門瞿曇は、高貴なる刹帝利族より出家したり。
卿等よ、實に沙門瞿曇は、繁榮にして大なる財產あり、大に富裕なる種姓より出家したり。
卿等よ、實に人々は沙門瞿曇に質問をなさんと、遠國遠地より遙々來るなり。
卿等よ、實に數千の天人は、沙門瞿曇に全く歸依をなせり。
卿等よ、實に沙門瞿曇の名聲は弘まれり、『かの世尊は、阿羅漢・等正覺者・明行具足者・善逝・世間解者・最上者・調御丈夫・人天師・覺者・世尊なり』と。
卿等よ、實に沙門瞿曇は三十二大人相を具足す。
卿等よ、實に沙門瞿曇は、總ての人に善來と告げ、親しく語り、挨拶鄭重にして、澁面を作らず、親しみ易く、先づ口を開く人なり。

卿等よ、實に沙門瞿曇は、四衆に尊敬され、重ぜられ、敬はれ、崇められ、尊ばる。

卿等よ、實に多くの人天は沙門瞿曇を信仰す。總て沙門瞿曇の止宿する村邑には、非人は人間を惱まさず。

卿等よ、實に沙門瞿曇は教團を有し、教團の師主として、多くの教祖中の最上者として稱揚せらる。

又沙門瞿曇は、かの沙門婆羅門が名稱を得るが如き名稱を得るには非ず。彼には無上の明行足としての名稱揚がれり。

卿等よ、實に摩掲陀國王斯尼喩頻婆娑羅は、その諸王子・諸妃・諸侍從・諸重臣と倶に沙門瞿曇に歸依せり。

卿等よ、實に拘薩羅國王波斯匿は、その諸王子・諸妃・諸侍從・諸重臣と倶に沙門瞿曇に歸依せり。

卿等よ、實に沸伽羅娑羅婆羅門は、その諸子・諸夫人・諸侍者・諸臣と倶に沙門瞿曇に歸依したり。

卿等よ、實に沙門瞿曇は、摩掲陀國王斯尼喩頻婆娑羅に尊敬され、重ぜられ、敬はれ、

崇められ、尊ばる。

卿等よ、實に沙門瞿曇は、拘薩羅國王波斯匿に尊敬され、重ぜられ、敬はれ、崇められ、尊ばる。

卿等よ、實に沙門瞿曇は、沸伽羅娑羅婆羅門に尊敬され、重ぜられ、敬はれ、崇められ、尊ばる。

卿等よ、實に沙門瞿曇は瞻婆に至りて、伽伽蓮池の畔に止宿せり。我等の村地に來れる沙門或は婆羅門は、總て我等の客なり。而して客は之を尊敬し、重んじ、敬ひ、崇め、尊ばざるべからず。かの瞻婆に到著して瞻婆の伽伽蓮池の畔に止宿せる沙門瞿曇は、我等の客なり。而して客は之を尊敬し、重んじ、敬ひ、崇め、尊ばざるべからず。この點に於ても、尊敬すべき瞿曇が我等に會はんとて來るは至當ならず。我等こそかの尊敬すべき瞿曇に會ひに行くが至當なり。

卿等よ、實に我は、かの尊敬すべき瞿曇に就いて、是の如き美點を知悉す。されど是の如き美點にて、かの尊敬すべき瞿曇の總てを盡せるには非ず。何となれば、かの尊敬すべき瞿曇の美點は、量り知るべからざればなり」。

七　斯く言はれたる時、彼等婆羅門は、かの婆羅門種德に斯く言へり。「尊敬すべき種德は、沙門瞿曇を賞讚したり。たとひ、尊敬すべき瞿曇が、此處より百由旬を距て丶止宿すとも、彼に會はんとて、信仰ある人々は糧食を携へて近づき行くが適當ならん。さらば我等皆倶に、沙門瞿曇に會ひに行かばや」と。かくて婆羅門種德は、婆羅門の大群集と倶に伽伽蓮池に赴けり。

八　當に林中を通過せんとしける時、婆羅門種德の心に是の如き念起りぬ。「我若し沙門瞿曇に質問をなさんに、その時沙門瞿曇は、『婆羅門よ、その質問は斯く尋ぬべからず。婆羅門よ、その質問は斯く尋ぬべし』と我に告げなば、その爲に、かの座にある人々は我を斯く輕蔑せん。『この婆羅門種德は無知なり、未熟者なり。彼は沙門瞿曇に質問をすら適當になす能はず』と。かくてかの會衆が斯く輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減ぜん。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依るが故に。また若し沙門瞿曇にして我に質問をなすことあらんに、我は彼の質問に答ふとも、依つて以て彼の意に適はざるべし。而して沙門瞿曇はその時我に言はん。『婆羅門よ、その質問に是の如く答ふ

べからず。婆羅門よ、その質問に是の如く答ふべし』と。かの座にある人々は、我を輕蔑して斯く言はん。『この婆羅門種德は無知なり、未熟者なり。彼は沙門瞿曇の質問に答ふるも、その意に適ふこと能はず』と。かくて若しかの會衆が斯く輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減ずべし。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依るが故に。されど、かく近づき來りて、而も沙門瞿曇に會はずして、沙門瞿曇の許を引き返したらんには、かの會衆は我を輕蔑して言はん。『婆羅門種德は無知なり、未熟者なり。傲慢なれど、彼は恐れて沙門瞿曇に會ひに行く能はず、斯く近づき來りつゝも、沙門に會はずして、沙門瞿曇の許より再び引き返すとは』と。若しかの會衆が斯く言はゞ、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減少せん。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依るが故なり』と。

九　斯くて婆羅門種德は、世尊の止宿し給ふ所に近づきぬ。近づきて後、彼は世尊と親しく挨拶を交換し、禮儀正しく慇懃なる敬意を表し合ひて、一方に座せり。瞻婆城の婆羅門族の家長の中には、或は世尊を禮して一方に坐せるあり、或は

世尊と親しく挨拶を交し、禮儀正しく慇懃なる敬意を表し合ひて一方に坐せるあり、或は合掌を捧げて一方に坐せるあり、或は姓名を告げて一方に坐せるあり、或は默々として一方に坐せるもあり。

一〇 婆羅門種德は尙も深く〔次の如く〕考へつゝ坐し居たり。「我若し沙門瞿曇に質問をなさんに、その時沙門瞿曇は、『婆羅門よ、その質問は斯く尋ぬべからず。婆羅門よ、その質問は斯く尋ぬべし』と我に告げなば、その爲に、かの座にある人々は我を斯く輕蔑せん。『この婆羅門種德は無知なり、未熟者なり。』彼は沙門瞿曇に質問をすら適當になす能はず』と。かくてかの會衆が斯く輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減ぜん。何となれば、我等の收入は、我等の名譽に依るが故に。また若し沙門瞿曇にして我に質問をなすことあらんに、我は彼の質問に答ふとも、依つて以て彼の意に適はざるべし。而して沙門瞿曇はその時我に言はん。『婆羅門よ、その質問に是の如く答ふべからず。婆羅門よ、その質問に是の如く答ふべし』と。かの座にある人々は、我を輕蔑して斯く言はん。『この婆羅門種德は無知なり、未熟者なり。彼は沙門瞿曇の質問に答

ふるも、その意に適ふこと能はず』と。かくて若しかの會衆が斯く輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減ずべし。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依るが故に。嗚呼、若し沙門瞿曇にして、我が師が授けし三吠陀に關して質問をなさんには、實にその質問に對し、我は答をなして彼の心に適ふことを得べけん」と。

一一　爾の時、世尊は婆羅門種德の心に抱ける念を知りて、かく思惟し給へり。「この婆羅門種德は自ら思ひ惱めり。我は婆羅門種德に、彼の師傳の三吠陀に關する質問をなさん」と。

爾の時、世尊は婆羅門種德に斯く曰(のたま)へり。「婆羅門よ、何を具さば、婆羅門は婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざるや」と。

120

一二　爾の時、婆羅門種德は斯く思ひぬ。「嗚呼、こは我が願ひ、希望し、要求し、望めることとなりき。『沙門瞿曇は我に、我が師傳の三吠陀に關する質問をなせよかし。然らんには、實にかの質問に對し、我は返答をなして彼の意に適ふならん』とは。

今實に沙門瞿曇は我に、我が師傳の三吠陀に關する質問をなせり。實に我はその質問に答へて彼の心に適ふことを得ん」と。

一三　爾の時、婆羅門種德は直立して會衆を見廻し、世尊に白して言く、「我が瞿曇よ、婆羅門にして五つの特色を具する者は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざるなり。五とは何ぞや。(一)卿よ、婆羅門にして母系父系倶に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父まで遡るも(是より)外れず、系譜に關して他より非難せられず。(二)彼は聖典を讀誦し、呪を執持し、三吠陀及び吠陀名義集・楷書(知明)・語源論・第五に古傳說を知悉し、語法論・順世論及び大人相を知悉す。(三)彼は美しく、見よく、威容あり、色は麗しき蓮花の如く、優れたる姿を有し、優れたる威嚴を有し、卑しからざる容姿なり。(四)彼は德あり、德を修め、德を修めて全し。(五)彼は學高く(供物を捧げ蘇油を捧ぐる)護摩捧持者中の第一若しくは第二の賢者たり。我が瞿曇よ、婆羅門にして此等の五つの特色を具する者は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざるなり」。

一四　「婆羅門よ、此等の五つの特色の中、一の特色を除外して他の四を具する者も、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざるものと言ひ得るや」。

「我が瞿曇よ、そはあり得ん。何となれば、我が瞿曇よ、我等は五の中より容色を除くを得るなり。容色何かあらん。婆羅門にして母系父系倶に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父まで遡るも（是より）外れず、系譜に關して他より非難を加へられず、聖典を讀誦し、呪を執持し、三吠陀及び吠陀名義集・楷書（知明）・語源論・第五に古傳說を知悉し、語法論・順世論・大人相を知悉し、また德あり、德を修め、德を修め全ふし、學高く護摩捧持者中の第一若しくは第二の賢者たる者は、我が瞿曇よ、此等の四を有せる婆羅門は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るなり」。

一五　「婆羅門よ、此等四つの特色の中、一つの特色を除外して他の三を具する者も、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るや」。

「我が瞿曇よ、そはあり得ん。何となれば、我が瞿曇よ、我等は四の中より呪を除き得るなり。呪何かあらん。婆羅門にして母系父系倶に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父まで遡るも(是より)外れず、系譜に關して他より非難せられず、德あり、德を修め、德を修め全ふし、又學高く、護摩捧持者中の第一若しくは第二の賢者たる者は、我が瞿曇よ、此等の三つを具せる婆羅門は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るなり」。

一六 「婆羅門よ、此等の三つの特色の中、一の特色を除きて他の二を具する者も、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るや」。

「我が瞿曇よ、そはあり得ん。何となれば、我が瞿曇よ、我等は三の中より生れを除き得るなり。生れ何かあらん。婆羅門にして德あり、德を修め、德を修め全ふし、又學高く、護摩捧持者中の第一若しくは第二の賢者たる者は、我が瞿曇よ、此等の二つを具する婆羅門は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るなり」。

一七　斯く言はれたる時、彼等婆羅門は種徳婆羅門に斯く言へり。「尊敬すべき種徳よ、かく言ふ勿れ。尊敬すべき種徳よ、かく言ふ勿れ。尊敬すべき種徳は、我等の容色を輕んずるのみならず、呪を輕んじ、生れをも輕んぜんとす。尊敬すべき種徳は、ひとへに沙門瞿曇の語に隨從するものなり」と。

一八　爾の時、世尊は此等婆羅門に曰（のたま）へり。「婆羅門よ、若し汝等婆羅門にして、種徳婆羅門は博聞に非ず、種徳婆羅門は美聲ならず、種徳婆羅門は賢明ならず、種徳婆羅門は沙門瞿曇と是の如き言論に於て對論するは不充分なりと思ひなば、種徳婆羅門を中止させ、汝等我と共に議論せよ。されど、若し汝等婆羅門にして、種徳婆羅門は多聞なり、種徳婆羅門は美聲なり、種徳婆羅門は賢明にして、種徳婆羅門は沙門瞿曇と是の如き言論に於て對論するに充分なりと思ひなば、汝等自ら中止して、種徳婆羅門をして我と共に議論せしむべし」と。

一九　かく言はれて種徳婆羅門は次の如く言へり。「尊敬すべき瞿曇は待たせ給へ。尊敬すべき瞿曇は默させ給へ。我は此等の人に對して、正しく應答せん」と。

爾の時、種德婆羅門は此等の婆羅門に斯く言へり。「尊敬すべき卿等は斯く言ふ勿れ、尊敬すべき卿等は斯く言ふ勿れ。『尊敬すべき種德は我等の容色を輕んじ、呪を輕んじ、生れを輕んず。尊敬すべき種德は、ひとへに沙門瞿曇の語に隨從す』と。卿等よ、我は容色も、呪も、生れも輕んずるものには非ず」と。

二〇　爾の時、種德婆羅門の甥なる鴦伽（アンガカ）と名づくる若き婆羅門、かの一座に侍（はべ）りき。時に種德婆羅門は彼等婆羅門に斯く言へり。

「尊敬すべき卿等は、我が甥たるこの鴦伽を見給ふや」。

「卿よ、然り」。

「さらば卿等よ、鴦伽青年は美しく、見（みめ）よく、威容あり、色は麗しき蓮花の如く、優れたる姿を有し、優れたる威嚴を有し、卑しからざる容姿なり。この會座の何人と雖も、沙門瞿曇を除きては、容色に於て彼に比肩するものなからん。卿等よ、鴦伽は聖典を讀誦し、呪を執持し、三吠陀及び吠陀名義集・楷書（知明）・語源論・第五に古傳説を知悉し、語法論・順世論・大人相を知悉す。我は彼に呪を敎へたるなり。又卿等よ、鴦伽青年は母系父系倶に生れ正しく、血統淸淨にして、七世の祖父まで遡

るも〔是より〕外れず、系譜に關して他より非難せられず。我は彼の父母を知れり。卿等よ、若し鴦伽青年が生物を殺し與へられざるを取り、邪淫をなし、妄語をなし、飲酒したらんには、卿等よ彼の容色に何の益あらんや。呪も何かせん。生れも何かせん。卿等よ、婆羅門にして、徳あり、徳を修め、徳を修め全うし、又學高く護摩捧持者中の第一若しは第二の賢者たる者は、卿等よ、此等の二を具せる婆羅門は、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざる者と言ひ得るなり」と。

二一　「婆羅門よ、此等の二つの特色の中、一つの特色を除外して他の一つを具せる者も、婆羅門と稱するを得、『我は婆羅門なり』と言ひて、而もその言は正しく、妄語に墮せざるものと言ひ得るや」。

「瞿曇よ、然らず。何となれば、瞿曇よ、慧は戒によりて清められ、戒は慧によりて清めらる。戒と同じく慧あり、慧と同じく戒あり。戒ある者に慧あり、慧ある者に戒あり。戒と慧とは、この世に於ける最上なるものと稱せらる。我が瞿曇よ、恰も手を以て手を洗ふが如く、或は足を以て足を洗ふが如く、是の如く、我が瞿曇

よ、慧は戒によりて清められ、戒は慧によりて清めらる。戒と同じく慧あり、慧と同じく戒あり。戒ある者に慧あり、慧ある者に戒あり。戒と慧とは、この世に於ける最上なるものと稱せらる」。

二二　「婆羅門よ、是の如し、慧は戒によりて清められ、戒は慧によりて清めらる。戒と同じく慧あり、慧と同じく戒あり。戒ある者に慧あり、慧ある者に戒あり。戒と慧とは、この世に於ける最上なるものと稱せらる。然らば、婆羅門よ、戒とは何ぞや、慧とは何ぞや」。

「我が瞿曇よ、我等はこの事に就きて單にこれのみを知る。善い哉、尊敬すべき瞿曇にはこの所説の意義明らかなるべし」。

二三　「婆羅門よ、さらば聽け、善く思念せよ、我説かん」。

「卿よ、諾」と、婆羅門種徳は世尊に答へたり。

世尊は次の如く曰へり。

「婆羅門よ、今世に如來出現し、［如來は］應供・等正覺…乃至…斯くして、婆羅門よ、比丘は戒を具足せるなり。〔沙門果經四〇―六三參照〕。

…乃至…初禪に達して住す…乃至…第二禪…乃至…第三禪…乃至…第四禪に達して住す…乃至…心を智見に傾け注ぐ…乃至…これ又彼の慧の一部分なり…乃至…更に此の生に來ることなしと證知す。これ又彼の慧の一部分なり。婆羅門よ、これその慧なり」。〔同經七五―九八參照〕。

二四　斯く說き給へる時、婆羅門種德は世尊に白して言く、「我が瞿曇よ、秀逸なり。我が瞿曇よ拔群なり。我が瞿曇よ、恰も既倒を挽回し、覆はれたるものを露し、路に迷へる者に正しき方向を指示し、眼ある者は物を見るならんとて暗の中に油燈を持ち來るが如く、是の如く、尊敬すべき瞿曇は種々の方便を以て、法を我等に說き明し給ひぬ。我は世尊瞿曇に歸依し、その法にもその敎團にも歸依し奉る。而して尊敬すべき瞿曇は、我を今日より以後、命終るまで、歸依せる優婆塞として攝受し給へ。尊敬すべき瞿曇は、敎團の人々と共に、明日の食事を攝り給はんことを我に許させ給へ」と。

世尊は默然によりて承認をなし給へり。爾の時、婆羅門種德は、世尊の承認を知りて、席より立ち、世尊に挨拶をなし、右繞の禮をなして去れり。

時に婆羅門種德は、その夜の間に、己が家に於て美味なる硬軟の食物の用意をなし、「我が瞿曇よ、時刻なり、食事は用意されたり」とて、世尊に食事の時を告げしめたり。

二五 爾の時、世尊は早朝に下衣を著し、鉢と外衣とを取りて、比丘衆と共に種德婆羅門の家に近づき、近づきて後、設の席に坐し給へり。婆羅門種德は、佛を上首とする比丘の敎團に、自ら手によつて、美味なる硬軟の食物を供して、歡ばしめ滿足せしめたり。世尊が食事を終りて、鉢と兩手とを淸め給へる時、婆羅門種德は、下席を取りて一方に座せり。一方に坐したる後、婆羅門種德は、世尊に次の如く白し上げぬ。

二六 「我が瞿曇よ、若し我会座の中にある時、席より立ちて世尊瞿曇を敬禮せば、會座の者は我を輕蔑せん。會座の者が斯く輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。我が名譽の減少と共に、我が收入も減ぜん。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依れるが故なり。

我が瞿曇よ、若し、我會座にありて合掌を差し出さば、尊敬すべき瞿曇は、我の爲

に、自ら座を立ちたる禮としてぞれを受け給へ。

我が瞿曇よ、又若し、我會座にありて頭巾を取り去らば、尊敬すべき瞿曇は我の爲に、頭を下げたる禮として、そを受け給へ。

我が瞿曇よ若し我車に乘りたる時、車より下りて世尊瞿曇を敬禮せば、會座の者は我を輕蔑せん。會座我を輕蔑せば、我が名譽は減ぜん。名譽の減少と共に、我が收入も減ぜん。何となれば、我等の收入は我等の名譽に依れるが故なり。

我が瞿曇よ、若し我又車に乘れる時、答杖を差し上げなば、尊敬すべき瞿曇は我の爲に、車より下りたる禮として、そを受け給へ。

我が瞿曇よ、若し我車に乘れる時、手を振らば、尊敬すべき瞿曇は我の爲に、頭を下げたる禮として、そを受け給へ」。

二七 爾の時、世尊は婆羅門種德に法話を以て教誡し、激勵せしめ、歡喜せしめ、座より立ちて去り給へり。

究羅檀頭経 (Kūṭadanta-sutta)

127

五　究羅檀頭經（クータダンタ・スッタ）

一　是の如く我聞く。一時、佛は五百人の大比丘衆と倶に、摩掲陀國を遊行して、佉菟婆提と稱する摩掲陀國なる婆羅門村に入り給へり。かくて佛は、佉菟婆提に在るアンバラッティカー園に止住し給へり。

爾の時、究羅檀頭婆羅門は佉菟婆提に止住しぬ。この城は人畜繁榮し、草木・池水・穀類豐富なる王領地にて、摩掲陀國の斯尼喩頻婆娑羅王より授けられし淨施の拜領地なりき。爾の時、究羅檀頭婆羅門の爲に、盛大なる犧牲祭行はれんとして、七百の牡牛、七百の若き牡牛、七百の若き牝牛、七百の牝羊、七百の牡羊は、犧牲の爲に祭壇の柱の近くに運ばれたり。

二　佉菟婆提の婆羅門及び在家の人々は聞きぬ。「釋迦族より出家せる釋子沙門瞿曇は、五百人の大比丘衆と倶に、摩掲陀國を遊行して、佉菟婆提に在るアンバラッティカー園に止住し給ふ。この世尊瞿曇には是の如く善き名稱揚れり。

128

『かくかの世尊は應供·等正覺·明行足·善逝·世間解·無上士·調御丈夫·天人師·佛·世尊なり』と。彼は天界·魔界·梵天界を含む此の世界、沙門·婆羅門·天·人衆のことを、自ら證悟して說示し給ふ。彼は初も善く、中も善く、終も善き、文義具備せる法を說き、完全圓滿にして純淨なる梵行を明かにし給ふ。かゝる眞人を見んことや善し」と。

玆に於て、佉兔婆提の婆羅門及び在家の人々は、佉兔婆提より出で、群をなし隊をなしてアンバラッティカー園に近づきぬ。

三　爾の時、究羅檀頭婆羅門は樓上にありて午睡に入らんとせしが、佉兔婆提の婆羅門及び在家の人々が、佉兔婆提より出で群をなし隊をなして、アンバラッティカー園に近づかんとするを見て、侍者に告げて言へり。

「侍者よ、佉兔婆提の婆羅門及び在家の人々が佉兔婆提より出で、群をなし隊をなしてアンバラッティカー園に近づくは何故ぞ」。

「釋子沙門瞿曇は、釋迦族より出家したり。[彼は]五百人の大比丘衆と倶に摩揭陀國を遊行して、佉兔婆提に在るアンバラッティカー園に止住す。この世尊瞿曇には、かくの如く善き名聲揚れり。『かく、かの世尊は、應供·等正覺·明行足·善逝·世

間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊なり』と。その世尊瞿曇を見んとて、彼等は近づくなり」と。

四　時に究羅檀頭婆羅門は斯く考へぬ。「我はこの事を聞けり。『沙門瞿曇は、三種の犧牲祭式と十六祭法とに就きて知るところあり』と。然るに我は三種の犧牲祭式と十六祭法とを知らずして、今や盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。いで
129 や、我、沙門瞿曇の所に到りて、三種の犧牲祭式と十六祭法とを問はばや」と。

彼はかの侍者に告げて言く、「侍者よ、さらば佉兔婆提の婆羅門及び在家の人々の許に行きて、佉兔婆提の婆羅門及び在家の人々に斯く語るべし。『究羅檀頭婆羅門は斯く言へり、諸師待つべし、究羅檀頭婆羅門も沙門瞿曇を見ん爲に行くべしと』と」

「宜なり」とて、侍者はその命を受けて斯くと彼等に告げぬ。

五　爾の時、佉兔婆提に於て、數百人の婆羅門は、究羅檀頭の盛大なる犧牲祭に侍らんとて居住せるが、「究羅檀頭は沙門瞿曇を見に行くべし」と聞きて、彼に近づきて〔言へり〕。

「尊者究羅檀頭の、沙門瞿曇を見んとて行かんとするは事實なりや」。

「然り。我も亦沙門瞿曇を見んとて行かんとす」。

六 「尊者究羅檀頭は沙門瞿曇を見んとて行くべからず。尊者究羅檀頭は沙門瞿曇を見んとて行かんことは相應しからず。若し尊者究羅檀頭にして沙門瞿曇を見んとて行かば、尊者究羅檀頭の名聲は衰滅して、沙門瞿曇の名聲は増大すべし。尊者究羅檀頭の名聲は衰滅して、沙門瞿曇の名聲は増大するが故に、この點に於ても、尊者究羅檀頭は沙門瞿曇を見んとて行かんことは相應しからず。沙門瞿曇こそは尊者究羅檀頭を見んとて來ること相應しかるべし。尊者究羅檀頭は、母系父系共に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父まで遡るも〔是より〕外れたることなく、血脈に關して他より侮蔑せられたることなし。この故に、この點に於ても、尊者究羅檀頭は沙門瞿曇を見んとて行かんことは相應しからず。沙門瞿曇こそは尊者究羅檀頭を見んとて來ること相應しかるべし。尊者究羅檀頭は長者にして大富、豪奢を極む…乃至…尊者究羅檀頭は聖典を諷誦して呪を執持し、三吠陀・吠陀名義集・楷書(知明)・語原論・第五に古傳説に通曉し、語法論を

解し、順世論・大人相に關しては之を究明して遺漏あるなし。尊者究羅檀頭は美貌端正にして最上の秀麗備はり、所謂梵色・梵威あり、外見偉大なり。尊者究羅檀頭は戒徳あり、增上の戒徳を備へたり。尊者究羅檀頭はその聲美しくして蜜の如く、溫雅の聲を備へて音吐朗々、意義明瞭たり。尊者究羅檀頭は導師として三百の青年婆羅門に祕典を口授し、諸方諸國より、青年婆羅門の、尊者究羅檀頭の許にて祕典を學習せんと願望して詣づる者多し。尊者究羅檀頭は長老者宿なるも、沙門瞿曇は弱少の普行者に過ぎず。尊者究羅檀頭は摩揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅（セーニヤビンビサーラ）王より尊重供養せらる。尊者究羅檀頭は又沸伽羅娑羅（ポッカラサーディ）婆羅門より尊重供養せられたり。尊者究羅檀頭は佉㝹婆提に止住す。この城は人畜繁榮し、草木・池水・穀類豐富なる王領にて、摩揭陀國王斯尼喩頻婆娑羅王より授けられし淨施の拜領地なりき。この故に、この點に於ても、尊者究羅檀頭が沙門瞿曇を見んとて行かんことは相應しからず。沙門瞿曇こそは尊者究羅檀頭を見んとて來ること相應しきなり」。

七　かく言はれて究羅檀頭婆羅門は彼等婆羅門に告げて言へり。

「さらば我が言を聽くべし。我等こそ尊者瞿曇を見んとて行くべく、彼尊者瞿
曇は我等を見んとて來ることは相應しからざるなり。沙門瞿曇は母系父系共
に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父まで遡るも〔是より〕外れたることなく、
血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなし。この故にこの點に於ても、尊者瞿
曇が我等を見んとて來ることは相應しからずして、我等こそ尊者瞿曇を見んと
て行かんこと相應しけれ。沙門瞿曇は、多くの親族の群を捨てゝ出家し、豐富な
る金銀財寶の、地中に蓄へられたる、若しくは上層に積まれたるを捨てゝ出家し
たり。沙門瞿曇は、その幼少の時、髮は純黑にして氣高く、若々しき若年期に家よ
り出でて家なき身とはなりぬ。沙門瞿曇は、その出家を好まざる父母の、顏に涙
をうかべて號泣せる中より、髮鬚を剃除し袈裟を著して出家したり。沙門瞿曇
は、美貌端正にして最上の秀麗備はり、所謂梵色・梵威あり、外見偉大なり。沙門瞿
132 曇は戒德あり、聖戒・善戒の德を具備したり。沙門瞿曇は、その聲美しくして蜜の
如く、溫雅の聲を備へて音吐朗々、意義明瞭たり。沙門瞿曇は、多くの人天の導師
たり。沙門瞿曇は、貪慾を滅盡し衣食住に對する執著なきなり。沙門瞿曇は業

論者、實行論者にして、惡不善を避けて婆羅門衆の間に在りて尊重せらる。沙門瞿曇は、高貴の家なる刹帝利族を捨て、豐富なる金銀財寶を有する豪族を捨て、出家せり。遠隔の國土より、人々は沙門瞿曇に尋問せんとて寄せ來るなり。幾千の神々は一生涯沙門瞿曇に歸依す。沙門瞿曇には、『かく、かの世尊は、應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊なり』との善き名稱揚れり。沙門瞿曇は三十二大人相備はれり。沙門瞿曇は、『善來善來』を口にし、親愛と歡喜と柔和とを以て人に接し、話しかけ易からしめんとて、先づ口を開くなり。沙門瞿曇は四衆の尊敬供養するところなり。多くの天〔神〕と人とは、沙門瞿曇を信ずること篤し。沙門瞿曇の止住する村落、或は都市に於ては、非人〔惡鬼〕は人間を惱ますことなし。沙門瞿曇は多くの弟子を有し、其等の師となりて、多くの敎派主中の第一人者と認めらる。普通の沙門婆羅門に對してかれこれと名稱の揚るが如くならずして、沙門瞿曇に對しては、無上の明行具足といふ名稱揚れるなり。摩掲陀國の斯尼喩頻婆娑羅王は王族眷屬と倶に、沙門瞿曇に一生涯を誓つて歸依し、拘薩羅國波斯匿王は王族眷屬と倶に、沙門瞿曇に一生涯を誓つて歸依

133 し、沸迦羅娑羅婆羅門は家族眷屬と倶に、沙門瞿曇に一生涯を誓つて歸依したり。沙門瞿曇は、摩揭陀國の斯尼喩頻婆娑羅王、拘薩羅國の波斯匿王、沸迦羅娑羅婆羅門の尊敬供養を受く。沙門瞿曇は、佉毱婆提に到著してアンバラッティカー園に止住す。如何なる沙門婆羅門と雖も、我等が村の地所に來る者は、我等の賓客なり。賓客は我等之を尊敬供養せざるべからず。今や沙門瞿曇は佉毱婆提に到著して、アンバラッティカー園に止住す。沙門瞿曇は我等の賓客なり。賓客は我等之を尊敬供養せざるべからず。この點に於ても、沙門瞿曇は我等を見んとて來ることは相應しからず、我等こそ彼を見んとて詣づべけれ。われ尊者瞿曇の是の如く稱讃すべきをよく知れり。然れども、われ尊者瞿曇を如何程に稱讃すとも、そは當らず、尊者瞿曇は稱讃し盡し難し」と。

八　かく告げられて、かの婆羅門等は究羅檀頭婆羅門に言へり。「若し尊者究羅檀頭の、沙門瞿曇を稱讃するが如くんば、假令尊者瞿曇が此處より一百由旬を隔つる所に止住すとも、信心ある善男子は糧食を携帶してなりとも拜見に詣づべきなり。いざ我等一同は沙門瞿曇を拜見に詣でん」と。

時に究羅檀頭婆羅門は、婆羅門大衆と倶にアンバラッティカーなる佛の所に近づき、而して後、佛と挨拶の辭を交して一方に座を占めぬ。佉竃婆提の婆羅門及び在家の人々は、佛に敬禮をなして一方に坐する者もあり、佛と挨拶の辭を交して一方に坐する者もあり、佛に對して合掌を捧げて一方に坐する者もあり、默然として一方に坐する者もありき。

九　一方に座を占めたる究羅檀頭婆羅門は佛に言へり。

「瞿曇よ、我之を聞けり。『沙門瞿曇は三種の犧牲祭式と十六祭法とに就きて知れり』と。我は三種の犧牲祭式と十六祭法とを知らずして、而も盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。善き哉、尊者瞿曇は我に三種の犧牲祭式と十六祭法とに就きて説くべし」。

「さらば婆羅門よ、聞け、善く思ひを致せよ、我語るべし」。

「然あるべし」と究羅檀頭婆羅門は答へぬ。佛は次の如く曰へり。

一〇　「婆羅門よ、昔マハーギヂタといへる王ありき。大富にして金銀財寶藏に滿てり。婆羅門よ、時に、この王獨り靜處にありて、是の如きの念生ぜり。『我、人間

として有すべき豊富なる財寶は得られ、廣大なる地圓を征服して住す。いでや我、盛大なる犧牲祭を行ひ、以て我に長夜の利益と安樂とあらしめん』と。婆羅門よ、時に、マハーヸヂタ王は顧問の婆羅門を呼ばしめて語れり。『さて婆羅門よ、我獨り靜處に入りて是の如き念生ぜり。「我、人間として有すべき豊富なる財寶は得られ、廣大なる地圓を征服して住す。いでや我、盛大なる犧牲祭を行ひ、以て我に長夜の利益と安樂とあらしめん」と。婆羅門よ、我、盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。尊者よ、我に敎を垂れ、以て我に長夜の利益と安樂とあらしむべし』と。

一一　婆羅門よ、かく告げられて、顧問の婆羅門はマハーヸヂタ王に告げぬ。『尊き王の國土は災厄多し、村に於ける殺傷、町に於ける殺傷、道路に於ける掠奪は見らるゝなり。王はかゝる災厄多き國土に於て稅を取り上げんか、王はその不法行爲者たるを免れざるべし。王には是の如きの念起ることあるべし。「我、死刑・捕縛・沒收・呵嘖・追放によりて、この掠奪の苦難を取除かん」と。されどこは、かゝる掠奪の苦難を排除する正しき方法に非ざるなり。死刑を免がれし者あらば、後日王の國土を惱ますことあるべし。次の如き指圖に從はば、この掠奪の苦

難は正しく排除せらるべし。即ち、王は王の國土に於て農業牧畜に勵む者には種子や食物を給し、商業に勵む者には資金を給し、官職に勵む者には食事と俸給とを準備すべし。此等の已が職業に沒頭する人々は、王の國土を惱ますことなかるべし。王には大なる財寶の蓄積あるべし。安住せる國土には災厄なく、人々歡喜して胸に子供を踊らせつゝ、家の戶を閉ざすことなく住すべし』と。

婆羅門よ、マハーギヂタ王は、『その如くすべし』と顧問の婆羅門に答へて、王の國土に於て農業牧畜に勵む者には種子や食物を給し、商業に勵む者には資金を給し、官職に勵む者には食事と俸給とを準備せり。此等の已が職業に沒頭する人々は、王の國土を惱ますことなかりき。王には大なる財寶の蓄積生ぜり。安住せる國土には災厄なく、人々歡喜して胸に子供を踊らせつゝ、家の戶を閉ざすことなく住せり。

一二　婆羅門よ、時に、マハーギヂタ王は顧問の婆羅門を呼ばしめて斯く語りぬ。『われ掠奪の苦難を除けり。尊者の指圖に從ひて、我、大なる財寶の蓄積をなし、安住せる國土には災厄なく、人々歡喜して胸に子供を踊らせつゝ、家の戶を閉ざす

ことなく住せり。婆羅門よ、我、盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。尊者よ、我に教を垂れ、以て我に長夜の利益と安樂とあらしむべし』。

『さらば王は、王の國土に於ける刹帝利族の人々の、都にある者、鄙にある者、總てに告ぐべし。「われ盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。諸尊者は我に長夜の利益と安樂とあらしめんが爲に、これを聽せよ」と。〔又王は〕王の國土に於ける大臣眷屬の、都にある者、鄙にある者…乃至…婆羅門大家の、都にある者、鄙にある者…乃至…居士富豪の、都にある者、鄙にある者、總てに告ぐべし。「われ盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。諸尊者は我に長夜の利益と安樂とあらしめん爲に、これを聽せよ」と』。

マハーギヂタ王は、『その如くすべし』と顧問の婆羅門に答へて、王の國土に於
ける刹帝利族の人々の、都にある者、鄙にある者、總てに王は告げて言へり。『われ
137 盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。諸尊者は我に長夜の利益と安樂とあらしめ
んが爲に、之を聽せよ』と。〔人々は言へり〕。『王よ、犧牲祭を行ひ給へ。大王よ、正に
その好機なり』と。王の國土に於ける大臣眷屬の、都にある者、鄙にある者…乃至

…婆羅門大家の、都にある者、鄙にある者…乃至…居士富豪の、都にある者、鄙にある者、總てに王は告げて言へり。『われ盛大なる犧牲祭を行はんと欲す。諸尊者は我に長夜の利益と安樂とあらしめんが爲に、これを聽せよ』と。〔人々は言へり〕。『王よ、犧牲祭を行ひ給へ。大王よ、正にその好機なり』と。

かくて此等四種の承認の群は、この犧牲祭の要件たり。

一三 マハーギヂタ王は次の八法を成就す。〔一〕母系父系共に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父まで遡るも、〔是より〕外れたることなく、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなし。〔二〕美貌端正にして最上の秀麗備はり、所謂梵色・梵威あり、外見偉大なり。〔三〕大富豪にして金銀財寶その倉庫に充滿せり。〔四〕武力ありて訓練せられたる四軍備はり、恐らくその名稱によりて敵軍を威服せしめん。〔五〕信心ありて施與の心深く、門戶を開放して、沙門・婆羅門・貧窮乞人に對しては泉の如く慈善を行ふ。〔六〕何事にも博識なり。〔七〕これはこの語の意義なり、これはこの語の意義なりとて、一一の語の意義を知るなり。〔八〕博學賢明にして、過去未來現在の事を思考する能力あり。マハーギヂタ王は此等の八法を成就す。

かくて此等の八法はこの犧牲祭の要件たり。

138
一四　顧問の婆羅門は次の四法を成就す。〔一〕母系父系共に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父にまで遡るも〔是より〕外れたることなく、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなし。〔二〕聖典を讀誦し、呪を執持し、三吠陀・吠陀名義集・楷書(知明)・語源論・第五に古傳説に通曉し、語法論を解し、順世論・大人相に關しては之を究明して遺漏あるなし。〔三〕戒德あり、增上の戒德を備へたり。〔四〕博學賢明にして、祭具杓子を執る人々の第一位或は第二位たり。顧問の婆羅門は此等の四法を成就す。

かくて此等の四法はこの犧牲祭の要件たり。

一五　婆羅門よ、時に顧問の婆羅門はマハーヰヂタ王の犧牲祭に先(さきだ)ちて、三種の法を説示せり。『若し王が盛大なる犧牲祭を行はんと欲する際にげに我が多量の財は消盡すべしとて、何か悔恨の情起ることあらむ。されどかゝる悔恨の情を起すべきにあらず。若し王が盛大なる犧牲祭を行ひつゝある際に、げに我が多量の財は消盡すとて、何か悔恨の情起ることあらむ。されどかゝる悔恨の情

を起すべきにあらず。若し王が盛大なる犧牲祭を行ひ竟れる際に、げに我が多量の財は消盡せりとて、何か悔恨の情起ることあらむ。されどかゝる悔恨の情を起すべきにあらず』と。

婆羅門よ、顧問の婆羅門はマハーギヂタ王に對し、犧牲祭に先ちて此等の三種の法を説示せり。

一六 婆羅門よ、時に、顧問の婆羅門は犧牲祭に先ち、十種の方法に依りて、之を行ふ時生ずる王の悔恨の情を排除する爲に〔告げて言く〕、『犧牲祭には、殺生者も不殺生者も來るべし。殺生者たる人々はそのあるが儘にし、不殺生者たる人々の爲に、尊者よ、犧牲を行ひ、歡喜して内に信念を起すべし。犧牲祭には、偸盜者も不偸盜者も來るべし……乃至……邪淫者も不邪淫者も、妄語者も不妄語者も、兩舌者も

139 不兩舌者も、麤語者も不麤語者も、綺語者も不綺語者も、貪慾者も不貪慾者も、嫉妬者も不嫉妬者も、邪見者も正見者も來るべし。邪見者はそのあるが儘にし、正見者たる人々の爲に、尊者よ、犧牲を行ひ、歡喜して内に信念を起すべし』と。

婆羅門よ、顧問の婆羅門はマハーギヂタ王の犧牲祭に先ち、十種の方法に依り

て、之を行はんとする時生ずる王の悔恨の情を排除せり。

一七　時に、婆羅門よ、顧問の婆羅門はマハーギヂタ王の大犧牲祭の行はれんとする時、〔次の如き〕十六種の方法に依りて、王の心を敎導し奬勵し歡喜せしめたり。

『王の大犧牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん、「マハーギヂタ王は大犧牲祭を行ふに當り、刹帝利族の、都に住む者も鄙に住む者も、之を招きて從事せしめずして、かくの如きの大犧牲祭を行ふ」と。かくの如く王を許するは不可なり。刹帝利族の、都に住む者も鄙に住む者も、總て招かれて之に從事す。これに依りて王はかく知らるべし。「尊者よ、犧牲を行ひ、歡喜して內に信念を起すべし」と。

王の大犧牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん、「マハーギヂタ王は大犧牲祭を行ふに當り、大臣眷屬の、都に住む者も鄙に住む者も…乃至…婆羅門大家の、都に住む者も…乃至…居士富豪の、都に住む者も鄙に住む者も、之を招きて從事せしめずして、かくの如きの大犧牲祭を行ふ」と。かくの如く王を許するは不可なり。居士富豪の、都に住む者も鄙に住む者も總て招かれて之に從事す。

これに依りて王は斯く知るべし。「尊者よ、犠牲を行ひ、歓喜して内に信念を起すべし」と。

王の大犠牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん、「マハーギヂタ王は大犠牲祭を行ふも、母系父系共に生れ正しく、血統清浄にして、七世の祖父に遡るも〔是より〕外れたることとなく、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなき者たらずして、而も是の如き大犠牲祭を行ふ」と。是の如く王を評するは不可なり。王は母系父系共に生れ正しく、血統清浄にして、七世の祖父にまで遡るも〔是より〕外れたることとなく、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなし。これによりて王は斯く知るべし。「尊者よ、犠牲を行ひ、歓喜して内に信念を起すべし」と。

王の大犠牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん、「マハーギヂタ王は大犠牲祭を行ふも、美貌端正にして最上の秀麗備はり、所謂梵色・梵威あり、外見偉大なる者たらずして……乃至……大富にして金銀財寶その倉庫に滿てる者たらずして……乃至……武力ありて訓練せられたる四軍備はり、恐らくその名稱によりて敵軍を威服せしむる者たらずして……乃至……信心ありて施與の心深く、門戸を開放して、沙門・婆

羅門・貧窮乞人に對しては泉の如く慈善を行ふ者たらずして…乃至…何事にも博識たらずして…乃至…これはこの語の意義なり、これはこの語の意義なりとて、一々の語の意義を知る者たらずして…乃至…博學賢明にして過去未來現在の事を思考する能力ある者たらずして、而も是の如き大犧牲祭を行ふ」と。是の如く王を評するは不可なり。王は博學賢明にして過去未來現在の事を思考する能力ある者たり。これによりて王は斯く知るべし。「尊者よ、犧牲を行ひ、歡喜して內に信念を起すべし」と。

　王の大犧牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん。「マハーギヂタ王は大犧牲祭を行ふも、王の顧問の婆羅門は、母系父系共に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父にまで遡るも〔是より〕外れたることなく、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなき者たらずして、而も王は是の如き大犧牲祭を行ふ」と。是の如く王を評する
141 は不可なり。王の顧問の婆羅門は母系父系共に生れ正しく、血統清淨にして、七世の祖父にまで遡るも、血脈に關して他より侮蔑せらるゝことなし。これによりて王は斯く知るべし。「尊者よ、犧牲を行ひ、歡喜して內に信念を起すべし」と。

王の大犠牲祭を行ふ時、何人か斯く語らん。「マハーギデタ王は大犠牲祭を行ふも、王の顧問の婆羅門は、聖典を讀誦し呪を執持し、三吠陀・吠陀名義集・楷書(知明)・語源論・第五に古傳說に通曉し、語法論を解し、順世論・大人相に關しては之を究明して遺漏あることなき者たらずして……乃至……王の顧問の婆羅門は戒德あり、增上の戒德を具足せる者たらずして……乃至……王の顧問の婆羅門は博學賢明にして祭具杓子を執る人々の第一位或は第二位たらずして、而も王は是の如き大犠牲祭を行ふ』と。是の如く王を評するは不可なり。王の顧問の婆羅門は博學賢明にして、祭具杓子を執る人々の第一位或は第二位たり。これによりて王は斯く知るべし。「尊者よ、犠牲を行ひ、歡喜して內に信念を起すべし」と』。

婆羅門よ、顧問の婆羅門はマハーギデタ王の大犠牲祭の行はれんとする時、十六種の方法に依りて、王の心を敎導し奬勵し歡喜せしめたり。

一八 婆羅門よ、この犠牲祭に於ては、牛は殺されず、羊は殺されず、鷄豚は殺されず、種々の生物も殺傷せられず、樹木は祭壇の柱として切られず、吉祥草は祭式用の草として刈られず、家僕といひ、雇人といひ、此處にて使はるゝ者は、鞭にて嚇さ

るゝこともなく、嚇し文句にて嚇さるゝこともなく、顔に涙を流して泣きつゝ準備に從事することもなし。酥・油・生酥・凝乳・蜜・砂糖のみにて、此の犧牲祭は完結を告げぬ。

142 一九　婆羅門よ、時に、刹帝利族の人々、大臣眷屬、婆羅門大家、居士富豪の、都に住む者も鄙に住む者も、多くの財寶を携へて、マハーギヂタ王の許に詣でゝ斯く言へり。

『王よ、王の爲にこの多くの財寶を携へ來りぬ。王はこれを納受あるべし』。

『我には正當に蓄積せられたる多くの財寶ありて不自由なし。そは汝等のものたるべく、尚その上に取り行くべし』。

彼等は王より拒絶せられて、一方に退き、かく協議せり。『我等は此等の財寶を再び己が家に持ち歸ることは、我等として適當の所爲に非ず。マハーギヂタ王は大犧牲祭を行はんとす。いざ、我等はその後祭を行ふ者たらしめよ』と。

二〇　婆羅門よ、時に、東方の祭壇の凹所には、都鄙の刹帝利族の人々、施物を備へ、かくて南方には都鄙の大臣眷屬、西方には都鄙の婆羅門大家、北方には都鄙の居

士富豪、施物を備へたりき。

婆羅門よ、此等の犧牲祭に於ては、牛は殺されず、羊は殺されず、鷄豚は殺されず、種々の生物も殺傷せられず、樹木は祭壇の柱として切られず、吉祥草は祭式用の草として刈られず、家僕といひ、雇人といひ、此處に使はるゝ者は、鞭もて嚇さるゝこともなく、嚇し文句にて嚇さるゝこともなく、顏に涙を流して泣きつゝ準備に從事することもなし。彼等は欲することをなし、欲せざることは爲さず。彼等は何事にても欲することを爲し、欲せざることは爲さざるなり。酥・油・生酥・凝乳・蜜・砂糖のみにて、此等の犧牲祭は完結を告げぬ。

かく四種の承認の群あり、マハーギヂタ王は八法を成就し、顧問の婆羅門は四法を成就す。これ三種の法なり。婆羅門よ、これを犧牲祭を執行する上の十六祭法と稱す」と。

二一 かく言はれて、彼等婆羅門は大叫喚を發せり。「嗚呼、犧牲祭なるかな、嗚呼犧牲祭の執行なるかな」と。究羅檀頭婆羅門は默然として坐せり。時に彼等婆羅門は究羅檀頭婆羅門に告げて言へり。

「尊者究羅檀頭は、何故に沙門瞿曇の善説を、善説として賞讃せざるや」。

「われ、沙門瞿曇の善説を、善説として賞讃せざることとなし。若し沙門瞿曇の善説を、善説として賞讃せざる者あらば、彼の頭は裂かれん。されど我は斯く考ふ。『沙門瞿曇は、「是の如く我聞けり」、「是の如く在るべきなり」とは言はずして、沙門瞿曇は、「爾の時かく在りし」、「爾の時かく在りし」とのみ語れり』と。我は斯く考ふ。『明かに沙門瞿曇は、爾の時の犧牲祭の施主たるマハーギヂタ王なりしか、又はその犧牲祭の祭主たる顧問の婆羅門たりしなり』と。尊者瞿曇は承認するや、斯かる犧牲祭を行ひ又は行はしめて、身壞れ死して後、善趣の天界に生れたる者なることを」。

「婆羅門よ、我はかゝる犧牲祭を行ひ又は行はしめて、身壞れ死して後、善趣の天界に生れたる者なることを承認す。我は爾の時、その犧牲祭の祭主、顧問の婆羅門たりしなり」。

二二　「瞿曇よ、此等の三種の犧牲祭式と十六祭法よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭他にありや否や」。

「婆羅門よ、此等の三種の…〔乃至〕…功德多き犧牲祭他にあり」。

「そは如何なる犧牲祭なりや」。

「婆羅門よ、常時の施與卽ち祖先供養の、戒德ある出家の爲に與へらるゝこと、之なり」。

二三 「瞿曇よ、如何なる因と緣とによりて、この常時の施與卽ち祖先供養は、此等の三種の犧牲祭式と十六祭法よりも、煩雜なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭なりや」。

「婆羅門よ、是の如きの犧牲祭には、阿羅漢若しくは阿羅漢道に入れる人々は近づかざるなり。何故なりや。婆羅門よ、此處には鞭打つことも、喉を捕ふることも見らるゝなり。其の故に、是の如き犧牲祭には、阿羅漢若しくは阿羅漢道に入れる人々は近づかざるなり。かく常時の施與卽ち祖先供養の、戒德ある出家の爲に與へらるゝ時、是の如きの供養には、阿羅漢も阿羅漢道に入れる人々も近づくなり。何故なりや。此處にては鞭打つことも、喉を捕ふることも見られざるなり。其の故に、是の如きの供養には、阿羅漢も阿羅漢道に入れる人々も近づく

なり。婆羅門よ、これ常時の施與卽ち祖先供養の、かの三種の犧牲祭式・十六祭法よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き因緣なり」。

145

二四「瞿曇よ、此等の三種の犧牲祭式・十六祭法と、此等の常時の施與卽ち祖先供養とよりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭他にありや否や」。

「婆羅門よ、此等の三種の…〔乃至〕…功德多き犧牲祭他にあり」。

「そは如何なる犧牲祭なりや」。

「婆羅門よ、人ありて四方僧伽の爲に精舍を建立すること、之なり」。

二五「瞿曇よ、此等の三種の犧牲祭式・十六祭法と、此等の常時の施與卽ち祖先供養と、此等の精舍の寄進とよりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭他にありや否や」。

「婆羅門よ、此等の三種の…〔乃至〕…功德多き犧牲祭他にあり」。

「そは如何なる犧牲祭なりや」。

146

「婆羅門よ、人ありて信心深く佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すること、之なり」。

二六　「瞿曇よ、此等の三種の犧牲祭式・十六祭法と、此等の常時の施與卽ち祖先の供養と、此等の精舍の寄進と、此等の〔三寶〕歸依とよりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭他にありや」。

「婆婆羅門よ、此等の三種の…〔乃至〕…功德多き犧牲祭他にあり」。

「そは如何なる犧牲祭なりや」。

「婆羅門よ、人ありて信心深く戒を受持すること、不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒、之なり」。

二七　「瞿曇よ、此等の三種の犧牲祭式・十六祭法と、此等の常時の施與卽ち祖先の供養と、此等の精舍の寄進と、此等の〔三寶〕歸依と、此等の戒とよりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭他にありや」。

「婆羅門よ此等の三種の…〔乃至〕…功德多き犧牲祭他にあり」。

「そは如何なる犧牲祭なりや」。

「婆羅門よ、いま世に如來出現し…乃至…比丘は戒を具足せるなり。〔沙門果經四〇―六三參照〕。婆羅門よ、これ又上の犧牲祭よりも、煩雜少なく傷害少なくして、し

かも果報多く功德多き犧牲祭なり。

…乃至…初禪に達して住す。〔同經七五參照〕。婆羅門よ、これ又上の犧牲祭よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭なり。

…乃至…第二禪…乃至…第三禪…乃至…第四禪に達して住す。〔同經七七―八一參照〕。婆羅門よ、これ又上の犧牲祭よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭なり。

…乃至…心を知見に傾け注ぐ。〔同經八三參照〕。婆羅門よ、これ又上の犧牲祭よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭なり。

…乃至…更に此の生に來ることなしと證知す。〔同經九七參照〕。婆羅門よ、これ又上の犧牲祭よりも、煩雜少なく傷害少なくして、しかも果報多く功德多き犧牲祭なり」。

二八　かく言はれて、究羅檀頭婆羅門は佛に白して言く、「善き哉、瞿曇よ、善き哉、瞿曇よ、恰も覆へされたるを引き起し、蔽はれたるを開き、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るならんとて、暗黑中に燈明を持ち來るが如く、その如くに、瞿曇は

種々の方便によりて、法を説き明し給ひぬ。瞿曇よ、この我は瞿曇と、法と比丘衆とに歸依すべし。尊者瞿曇は、今日より命終るまで歸依せる優婆塞として我を148 攝受し給へかし。瞿曇よ、この我は、七百の牛、七百の若き牡牛と、七百の牝牛と、七百の牝羊、七百の牡羊を放ちて命を助けん。彼等は綠草を食へよ、冷水を飲めよ、涼風は彼等の爲に吹けよ」と。

二九 爾の時、佛は究羅檀頭婆羅門の爲に、順序ある説話をなし給へり。即ち施與の説話、正義の説話、天上の説話、諸慾の災厄と邪惡と汚穢と、而して出離の利益とを説き明し給へり。佛は究羅檀頭婆羅門の心の準備せられ、柔軟になり、障りの除かれ、揚として信念の起れるを知り給ひし時、諸佛の證得せる法義、即ち苦と、苦の原因と、その滅盡と、その道とを説き明し給へり。恰も汚れなき純白の布の正しき染色を取るが如く、その如くに、その座に於て、究羅檀頭婆羅門に「如何なるものと雖も、集起せるものは總てこれ滅盡すべき本質のものなり」てふ遠塵離垢の法眼は生ぜり。

三〇 爾の時、究羅檀頭婆羅門は法を見、法に達し、法を悟り、法に沒入し、疑を度(わた)り、

惑を去り、確信を得、師〔佛〕の教にのみ依りて他に依らず、佛に白して言く、「尊者瞿曇は、明日比丘衆と倶に食事をなし給ふことを、我に許されよ」と。佛は默然として之を許し給へり。

時に究羅檀頭婆羅門は佛の認容を知りて座を立ち、挨拶をなし、最敬禮をなして立ち去りぬ。究羅檀頭婆羅門はその夜過ぎて、己が祭壇の凹所に於て、美味なる嚼食と噉食とを準備して、佛に時刻を告げしめたり。「瞿曇よ、時刻なり、食事の準備成れり」と。

佛は朝時、下衣を著し上衣と鉢とを取りて、比丘衆と倶に究羅檀頭婆羅門の祭壇の凹所に近づき、而して設けの座に著き給ひぬ。時に究羅檀頭婆羅門は、佛を
149 上首とせる比丘衆に、美味なる嚼食と噉食とを以て、手づから滿足せしめ、辭儀あるまで勸めけり。

時に究羅檀頭婆羅門は、佛の食事竟りて鉢と手とを洗ひ給へるを見て、他の低き座席を取りて一方に坐しぬ。佛は彼に法話を說示し激勵し歡喜せしめて、然る後、座より立ちて去り給ひぬ。

摩訶梨経 (Mahāli-sutta)

赤沼智善 訳

六 摩訶梨經 (マハーリ・スッタ)

150 一 是の如く我聞く。或る時、世尊、毘舍離の〔城外〕大林の重閣講堂に住し給ひき。その時、拘薩羅國と摩揭陀國より、多數の婆羅門、或る用件にて派遣せられ、毘舍離に住せしが彼等は〔斯くの如き噂を〕聞けり。「釋迦族の人にて、出家せる沙門瞿曇は、今〔現に〕毘舍離に住し給ふ。尊者瞿曇には是の如き美しき譽れあり。『かの世尊は應供者、正覺者、明行足者、善逝(幸福者)、世間解者、無上者、人々の調御者、人天の師にして覺者、世尊に在す』と。世尊は、天界と魔界と梵天界を含むこの世界、沙門婆羅門を含み人天を包む人々のことを、自ら知り證りて示し給ふ。世尊は初めも美しく、中も美しく、終りも美しく、文義具足したる法を説き、完全圓滿にして淸淨なる梵行を敎へ給ふ。是の如き應供者を見奉るは善きことなり。

二 拘薩羅國と摩揭陀國との婆羅門達は、大林の重閣講堂へ赴けり。その時、尊者那者多、世尊の侍者たりしが、彼等、尊者那者多に近づきて云へり。「尊者那者多

151

よ、今世尊瞿曇は何處に在すや。我等、世尊を見奉らんと欲ふ」。

「友よ、今は世尊を見奉るべき時に非ず、世尊は今自身の室に退き給へり」。

　彼等婆羅門等世尊瞿曇を見奉りて歸らんとて、傍に〔退きて〕坐せり。

三　〔その時〕又、離車人のオッタッダ(兎唇)も、多くの離車人を伴ひ、大林の重閣講堂に、尊者那者多の傍に來り、禮拜をなして、立ちながら云へり。

「尊者那者多よ、應供者正覺者に在す世尊は、今何處に在すや。我等、世尊を見奉らんが爲に來れり」。

「[1]摩訶梨よ、今は世尊を見奉るべき時に非ず。世尊は自身の室に退き給へり」。

　離車人の兎唇も、かくて世尊を見奉りて歸らんと、傍に〔退きて〕坐せり。

四　その時、沙彌のシーハ(師子)は尊者那者多に近づき、禮拜をなし立ちながら云へり。

「尊者[2]迦葉よ、拘薩羅國と摩掲陀國の多數の婆羅門達、世尊を見奉らんとて來れり。離車人の兎唇も、多くの離車人を伴ひて、世尊を見奉らんがために來れり。尊者迦葉、これらの人々の世尊を見奉り得るやう、〔取り計らひ給はゞ〕善からん」。

「さらば師子よ、汝自身、世尊に告げ參らせよ」。
「尊者よ、承はれり」と、沙彌の師子は尊者那者多に答へて、世尊の許に參り、世尊を拜して、傍に立ち白し上げぬ。
「世尊、拘薩羅國と摩揭陀國の多數の婆羅門達、〔今〕世尊を見奉らんとて來れり。
152 離車人の兎唇も、多くの離車人を伴ひて、世尊を見奉らんとて來れり。これらの人々に面接を許し給はゞ可なり」。
「さらば師子よ、香室の前の隱れたる處に座を設けよ」。
「世尊、承はれり」と、沙彌の師子は世尊に御答へ申し上げ、香室の前の隱れたる處に御座を設けぬ。世尊は室を出で、その部屋の前の隱れたる處に設けられたる座に著き給ひぬ。

五　その時、拘薩羅國と摩揭陀國の婆羅門達は世尊の傍に行き、挨拶を交して傍に坐り、離車人の兎唇も、多くの離車人を伴ひ、世尊に近づき、挨拶を交して傍に坐せり。
離車人の兎唇、世尊に白し上げぬ。

153

「世尊、二三日前、離車人のスナッカッタ(善宿)、我がところに來りて、かくの如くムへり。『摩訶梨よ、われ世尊の御許に住してより、猶、三年を經るに過ぎざれども、我は樂しくして嬉しく、興奮を引き起す天の色形を見ることを得たり。然れども未だ、樂しくして嬉しく、興奮を引き起す天の音聲を聞くを得ず』と。世尊、この善宿の聞くことを得ずと云ふ斯くの如き樂しき天の音聲ありや否や」。

「摩訶梨よ、善宿の聞くを得ずと云ふ斯くの如き天の音聲あり、無きに非ず」。

六　「世尊、然らば何故に、無きに非ずして有るところのものなる天の音聲を、善宿は聞く能はざるか」。

「摩訶梨よ、茲に比丘ありて、東方に於て、樂しくして嬉しく、興奮を引き起す天の色形を見るために、天の音聲を聞くために非ずして、一向に定を修むとせよ。「その比丘は東方に於て、一向に定を修めて、東方に於て天の色形を見、天の音聲を聞かず、何となれば、摩訶梨よ、その比丘は、東方に於て、天の色形を見るために、天の音聲を聞くために非ずして、一向に定を修めたればなり。

七　又、摩訶梨よ比丘が、南方に於て……乃至……西方に於て……乃至……北方に於て……

乃至…上下四維に於て天の色形を見るために天の音聲を聞くために非ずして、定を一向に修むとせよ。〔その比丘は〕、上下四維に於て定を一向に修めて上下四維に於て天の色形を見天の音聲を聞かず。何となれば、摩訶梨よ、その比丘は上下四維に於て天の色形を見るために天の音聲を聞くために非ずして、定を一向に修めたればなり。

八　摩訶梨よ、玆に比丘が東方に於て樂しくして嬉しく、興奮を引き起す天の音聲を聞くために天の色形を見るために非ずして、定を一向に修むとせよ。〔その比丘は東方に於て、一向に定を修めて、東方に於て天の音聲を聞いて天の色形を見ず。何となれば、摩訶梨よ、その比丘は、東方に於て天の音聲を聞くために天の色形を見るために非ずして、定を一向に修めたればなり。

九　又、摩訶梨よ、比丘が南方に於て…乃至…西方に於て…乃至…北方に於て…乃至…上下四維に於て天の音聲を聞くために天の色形を見るために非ずして、定を一向に修むとせよ。〔その比丘は〕、上下四維に於て天の音聲を聞いて天の色形を見ず。何となれば、摩訶梨よ、その比丘は上下四維に於て天の音聲を聞く

155

ために、天の色形を見るために非ずして、定を一向に修めたればなり。

一〇　摩訶梨よ、玆に比丘が、東方に於て、樂しくして嬉しく、興奮を引き起す天の色形を見るために、又天の音聲を聞くために、兩方にかけて定を修むとせよ。〔その比丘は東方に於て、兩方にかけて定を修めて、東方に於て、天の色形を見、天の音聲を聞く。何となれば、摩訶梨よ、その比丘は、東方に於て、天の色形を見るために、天の音聲を聞くために兩方にかけて、定を修めたればなり。

一一　又、摩訶梨よ、比丘が南方に於て……乃至……西方に於て……乃至……北方に於て……乃至……上下四維に於て、天の色形を見るために、天の音聲を聞くために、兩方にかけて定を修むとせよ。〔その比丘は〕上下四維に於て、兩方にかけて定を修めて、上下四維に於て、天の色形を見、天の音聲を聞く。何となれば、摩訶梨よ、その比丘は、上下四維に於て、天の色形を見るために、天の音聲を聞くために、兩方にかけて定を修めたればなり。

摩訶梨よ、これが無きに非ず有るところのものなる天の音聲を、善宿が聞くことを得ざりし理由なり」。

一二 「世尊、比丘等が、世尊の許（みもと）にて、梵行を修むるは、これらの定の修習と發得のためなりや」。

「摩訶梨よ、比丘等が、我が許にて梵行を修むるは、これらの定の修習と發得のために非ず。摩訶梨よ、それよりも勝れたる法ありて、その實現のために、比丘等は我が許に梵行を修むるなり」。

一三 「世尊、それは如何なる法なりや」。

「摩訶梨よ、玆に比丘は三結を斷滅して、預流果に入り、不墮惡趣者となり、必定、證悟に赴くものとなる。比丘等がその實現のために、我が許にて梵行を修むる殊勝の法とはこれなり。

摩訶梨よ、又比丘は、三結を斷滅し、貪欲と瞋恚と愚痴を稀薄にして、一來果に入り、一度のみ、この世界に還り來つて、苦惱の終邊をなす。比丘等がその實現のために、我が許にて、梵行を修むる殊勝の法とはこれなり。

摩訶梨よ、又比丘は五下分結を斷滅して、化生者となり、其の處に入涅槃して、この世界に還來せざるものとなる。比丘等がその實現のために、我が許にて梵行

を修むる殊勝の法とはこれなり。

摩訶梨よ、又比丘は、諸漏を盡して、無漏の心解脱、慧解脱を、現身に實證し實現し入りて住す。比丘等がその實現のために、我が許にて梵行を修むる殊勝の法とはこれなり。

摩訶梨よ、これらの諸法が殊勝の法にして比丘等はこれらの諸法の實現のために我が許にて梵行を修むるなり」。

一四 「世尊、これらの諸法を實現するための道跡ありや」。

「摩訶梨よ、その道跡あり」。

「世尊、それは如何なる道跡なりや」。

「この八支聖道、卽ち正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定これがその諸法の實現のための道跡なり」。

一五 「摩訶梨よ、我は嘗て、憍賞彌（コーサンビー）の瞿師羅園（ゴーシターラーマ）に住せしが、その時、滿提左（マンディッサ）遊行者と、木鉢を持つもの丶弟子なる闍利（ヂャーリヤ）と、この二人の出家、我に近づき、挨拶をなし、傍に立ちて、かくの如く云へり。

『友なる尊き瞿曇よ、命と身とは一なりや異なりや』
〔我答へて曰く〕『さらば友よ、聞きて善く考へよ、我語らん』。
『友よ承れり』とて、彼等二人の出家は、我に答へぬ。我〔次の如く〕語れり。

一六 『友よ、今世に如來出現し〔如來は〕應供者・正覺者…乃至…かくして、友よ、比丘は戒を具足せるなり。〔沙門果經四〇―六三參照〕。…乃至…初禪に達して住す。〔同經七五參照〕。友よ、かくの如く知り、かくの如く見る比丘に、「命と身とは一なりや異なりや」と云ふ語は、相應しかるべきか』。
『友よ、この語は[3]相應し〔からず〕』。
『友よ、我も斯く知り、斯く見て、「命と身とは一なりや異なりや」とは云はず』。

一七 『…乃至…第二禪…乃至…第三禪…乃至…第四禪に達して住す。〔沙門果經七
158 七―八一參照〕。友よ、かくの如く知り、かくの如く見る比丘に、「命と身とは一なりや異なりや」と云ふ語は、相應しかるべきか』。
『友よ、この語は相應し〔からず〕』。
『友よ、我も斯く知り斯く見て、「命と身とは一なりや異なりや」とは云はず』。

一八　『…乃至…心を智見に傾け注ぐ。〔沙門果經八三參照〕。かくの如く知り、かくの如く見る比丘に、「命と身とは一なりや異なりや」と云ふ語はふさはしかるべきか』。

『友よ、この語は相應し〔からず〕』。

『友よ我も、斯く知り斯く見て、「命と身とは一なりや異なりや」とは云はず』。

一九　『…乃至…更に此の生に來ることなしと證知す。〔沙門果經九七參照〕。かくの如く知り、かくの如く見る比丘に、「命と身とは一なりや異なりや」と云ふ語は相應しかるべきか』。

『友よ、かく知り斯く見る比丘には、その語は❹相應しからず』。

『友よ、我も亦斯く知り斯く見て、「命と身とは一なりや異なりや」と云はず』と。

世尊は斯く曰へり。離車人の兎唇は、世尊の所説を歡喜せり。

註　❶オッタッダ(兎唇)は又摩訶梨とも呼ばる。摩訶梨は姓にて兎唇はその通稱ならん。
❷迦葉といふは那者多の姓を以て呼べるなり。

❸底本文面は「この語は相應しなり。佛音の註にkallaṁをyuttaṁと解し、相應しいかと聞いて、相應しくないといふ答を促しながら、彼等が相應しいと答へたので、次に我はかく知りかく見て、同異を云はずと云ひて、更に高い境地を示して相應しくないことを知らしむとせり(Sumaṅgalavilāsinī p.216錫蘭版)。右の如き關係故に、この問答のところ、少しく耳障りに感ぜらるべし。而して暹羅版には此處にnaを入れて讀めり。その方が意味通じて善かるべしと思はる。故に今は暹羅版の意に從ひて譯すことゝせり。

❹底本は玆に來りて初めてnaを挿入せり。

闍利経(Jāliya-sutta)（じゃりぎょう）

本村 訳

七 闍利經（チャーリヤ・スッタ）

159 一 是(かく)の如く我(われ)聞く。一時、佛、憍賞彌(コーサンビー)の瞿師羅園(ゴーシターラーマー)(美音精舍)に住(いま)しき。その時、滿(マン)提左(ディッサ)遊行者と、木鉢を持つものゝ弟子たる闍利(ザャーリヤ)との二人の出家、佛に近づき、挨拶をなし、傍に立ちて、かくの如く言へり。

「友なる尊き瞿曇よ、命と身とは一なりや、異なりや」。

「さらば友よ、聞きて善く考へよ、我語らん」。

「友よ、承れり」とて、二人の出家は佛に答へぬ。世尊は次の如く曰(のたま)へり。

二――五 「友よ、今、世に如來出現し〔如來は〕應供・等正覺…乃至…友よ、我も亦、斯く
160 知り、斯く見て『命と身とは一なりや異なりや』とは云はず」と。〔摩訶梨經一六―一九と全同なる故に之を略せり〕。

佛はかく曰(のたま)へり。彼等二人の出家等は、佛の所説を聞きて、歓喜せり。

大師子吼経 (Mahāsīhanāda-sutta)

[Syn.: 迦葉師子吼経 (Kassapa-sīhanāda-sutta).]　　　　金倉圓照 訳

八　迦葉師子吼經　(カッサパシーハナーダ・スッタ)

161

一　是の如く我聞く。一時、世尊は委若國にあるカンナカッタラ(金槃)鹿野林に在せり。爾の時、裸形梵志迦葉は世尊の所に詣でぬ。詣でて世尊と敬禮を交せり。會釋を述べ安否を問訊して一方に立てり。一方に立てる裸形迦葉は、世尊に言へり。

二　「瞿曇よ、我聞く、『沙門瞿曇は一切の苦行を呵責す。一切の弊穢生活の苦行者を絕對に非難し罵詈す』と。瞿曇よ、『沙門瞿曇は一切の苦行を呵責す、一切の弊穢生活の苦行者を絕對に非難し罵詈す』と斯く唱ふる人々は、果して貴下瞿曇の所說を〔忠實に〕祖述する者なりや。又世尊瞿曇を誤りて誹謗せざるや。又❶法を如法に宣述するや。又かゝる人々と主張を同じくする大小の言論は、非難せらるゝに至ることなきや。〔かく問ふ〕所以は、吾等は尊者瞿曇を〔誤り〕誹謗せざらむと願へばなり」。

三 「迦葉よ、『沙門瞿曇は一切の苦行を呵責す、一切の弊穢生活の苦行者を絶對に非難し罵詈す』と斯く唱ふる人々は、我が所說を〔忠實に〕祖述する者に非ず。又、彼等は虛假の僞言にて我を誹謗する者なり。迦葉よ、こゝに我、淸淨にして超人
162 的なる天眼を以て：乃至：或る弊穢生活の苦行者が、身壞命終の後、惡生・惡趣・惡處・地獄に生ぜるを見る。迦葉よ、更にこゝに我、淸淨にして超人的なる天眼を以て：乃至：或る弊穢生活の苦行者が、身壞命終の後、善趣・天界に生ぜるを見る。迦葉よ、こゝに我、淸淨にして超人的なる天眼を以て：乃至：或る少き（すくな）苦に住する苦行者が、身壞命終の後、惡生・惡趣・惡處・地獄に生ぜるを見る。迦葉よ、更にこゝに我、淸淨にして超人的なる天眼を以て：乃至：或る少き苦に住する苦行者が、身壞命終の後、善趣・天界に生ぜるを見る。迦葉よ、是の如く、これらの苦行者が、來り又去り、沒し又生ずるを、如實に識る我は、寧ぞ一切の苦行を呵責せん、一切の弊穢生活の苦行者を絶對に非難し罵詈せんや。

四 迦葉よ、賢く敏く論爭に巧にして、その細心なること〔弓術家〕の毛髮を射るが如く、智慧に據て空論を、謂はゞ、摧破しつゝ行く或る沙門婆羅門あり。彼等と我

との間に於て、或る點に關しては一致し、或る點に關しては一致せず。彼等が『是』と稱する或ることは、我亦之を『是』と稱し、彼等が『非』と稱する或ることは、我之を『非』と稱す。彼等が『是』と稱する或ることは、我之を『非』と稱し、彼等が『非』と稱する或ることは、我之を『是』と稱す。我の『是』と稱する或ることは、他の者も亦之を『是』と稱し、
163 我の『非』と稱する或ることは、他の者も亦之を『非』と稱す。我の『是』と稱する或ることを、他の者は之を『非』と稱し、我の『非』と稱する或ることを、他の者は之を『是』と稱す。

五　我は彼等に往きて斯く言ふ。『友よ、吾等が一致せざる點に於ては、之を捨て措かむ。一致する點に於ては、智者は、師によりて師を、若しくは教團によりて教團を、〔といふ方法にて〕問ひ尋ね談論をなすべし。これ等の不善なること・不善なりと言はるゝこと、非難すべきこと・非難すべしと言はるゝこと、從事すべからざること・從事すべからずと言はるゝこと、賢聖に不相應なること・賢聖に不相應なりと言はるゝこと、汚濁なること・汚濁なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔惡しき〕法を、此の〔二〕師の中にて、誰が完全に捨離してありや。沙門瞿曇なりや、將た他の尊き衆團の師なりや』と。

六　迦葉よ、又かゝることもあり得む。即ち、智者は問ひ尋ね談論して、次の如く言はむ。『これ等の不善なること・不善なりと言はるゝこと…〔乃至〕…汚濁なることと・汚濁なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔惡しき〕法を、此の〔二〕師の中にて、沙門瞿曇は、他の尊き衆團の師よりも完全に捨離してあり』と。迦葉よ、智者は實に斯く問ひ尋ね談論して、此の中特に我を稱讚せむ。

七　迦葉よ、また智者は、師によりて師を、若しくは敎團によりて敎團を〔といふ方法にて〕問ひ尋ね談論をなすべし。『此等の善なること・善なりと言はるゝこと、非難なきこと・非難なしと言はるゝこと、從事すべきこと・從事すべしと言はるゝこと、賢聖に相應なること・賢聖に相應なりと言はるゝこと、清淨なること・清淨なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔善き〕法を、此の〔二〕師の中にて、誰が完全に獲得してありや。沙門瞿曇なりや、將た他の尊き衆團の師なりや』と。

八　迦葉よ、又かゝることもあり得む。即ち、智者は問ひ尋ね談論して、次の如く
164 言はむ。『此等の善なること・善なりと言はるゝこと…〔乃至〕…清淨なること・清淨なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔善き〕法を、此の〔二〕師の中にて、沙門瞿曇は、他

の尊き衆團の師よりも完全に獲得してあり』と。迦葉よ、智者は實に斯く問ひ尋ね談論して、此の中特に我を稱讃せむ。

九　迦葉よ、また智者は、師によりて師を、若しくは敎團によりて敎團を〔といふ方法にて〕問ひ尋ね談論をなすべし。『此等の不善なること・不善なりと言はるゝこと…〔乃至〕…汚濁なること・汚濁なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔惡しき〕法を、此の〔二〕師の中にて、誰が完全に捨離してありや。瞿曇の弟子の衆團なりや、將た他の尊き衆團の師の弟子の敎團なりや』と。

一〇　迦葉よ、又かゝることもあり得む。卽ち智者は問ひ尋ね談論して次の如く言はむ。『此等の不善なること・不善なりと言はるゝこと…〔乃至〕…汚濁なること・汚濁なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔惡しき〕法を、此の〔二〕師の中にて、沙門瞿曇の弟子の敎團は、他の尊き衆團の師の弟子の敎團よりも完全に捨離してあり』と。迦葉よ、智者は實に斯く問ひ尋ね談論して、此の中特に我を稱讃せむ。

165 一一　迦葉よ、また智者は、師によりて師を、若しくは敎團によりて敎團を〔といふ方法にて〕問ひ尋ね談論をなすべし。『此等の善なること・善なりと言はるゝこと

…〔乃至〕…清淨なること・清淨なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔善き〕法を、此の〔二〕師の中にて、誰が完全に獲得してありや。沙門瞿曇の弟子の敎團なりや、將た他の貴き衆團の師の弟子の敎團なりや』と。

一二　迦葉よ、又かゝることもあり得む。卽ち智者は問ひ尋ね談論して、次の如く言はむ。『此等の善なること・善なりと言はるゝこと…〔乃至〕…淸淨なること・淸淨なりと言はるゝこと、かゝる諸の〔善き〕法を、此の〔二〕師の中にて、沙門瞿曇の弟子の敎團は、他の貴き衆團の師の弟子の敎團よりも完全に獲得してあり』と。迦葉よ、智者は實に斯く問ひ尋ね談論して、此の中特に我を稱讃せむ。

一三　迦葉よ、道有り、迹有り。之に登れる者は、正に〔次の如く〕自ら知り自ら見る。『沙門瞿曇は、時に適へる語を説き、眞實を説き、義ある語を説き、法に合する語を説き、律に適ふ語を説く』と。また迦葉よ、それに登れる者は、『沙門瞿曇は、時に適へる語を説き、眞實を説き、義ある語を説き、法に合する語を説き、律に適ふ語を説く』と、自ら知り自ら見るとは、何れの道ぞや、何れの迹ぞや。そは八聖道なり。卽ち正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定なり。迦葉よ、これ實に道なり、迹なり。

之に登れる者は正に〔次の如く〕自ら知り自ら見る。『沙門瞿曇は、時に適へる語を說き、眞實を說き、義ある語を說き、法に合する語を說き、律に適ふ語を說く』と」。

一四　斯く說かれし時、裸形迦葉は世尊に言へり。

「友瞿曇よ、下の如き種々の苦行は、或る沙門婆羅門にありて、沙門位なりとせられ、又婆羅門位なりとせらる。　卽ち、離服裸形し、儀禮を無視し、食後手を舐め、〔施主が食を與へん爲に〕近寄れと懇請し、又待てと懇請するも之を受けず、齎らされし食を受けず、特に用意せられし食を拒み、招待を受けず、瓶或は皿より直接食を取らず、閾の內に置かれしを取らず、杖間にあるを取らず、杵間にあるを取らず、二人食する時〔その一人のみより與へらる〵を〕受けず、懷姙せる女より受けず、授乳期の女より受けず、男の許にある女より受けず、〔饑饉時の〕❷食時を受けず、狗近くに在れば受けず、蠅群がれば受けず、魚を食はず、肉を食はず、穀酒を飲まず、果酒を飲まず、麩酒を飲まず、〔行乞しては〕唯一軒の家より受くるか唯一喫の食を受く、唯二軒より受くるか唯二喫の食を受く、唯七軒より受くるか唯七喫の食を受く、唯一の施物によりて生活す、二の施物によりて生活す、七の施物によりて生活す、或

は一日一食、或は二日一食、〔乃至〕七日一食す、かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて食を攝るの修行に服事す。

友瞿曇よ、實に下の如き種々なる苦行は、或る沙門婆羅門にありて、沙門位なりと稱せられ、又婆羅門位なりと稱せらる。卽ち、或は莠を食とし、或は稷を食とし、或は糲を食とし、或は革を食とし、或は水草を食とし、或は糠を食とし、或は飯汁を食とし、或は胡麻粉を食とし、或は草を食とし、或は牛糞を食とし、或は森の樹根花實を食とし、或は自落果を食として生活す。

友瞿曇よ、實に下の如き種々なる苦行は、或る沙門婆羅門にありて、沙門位なりと稱せられ、又婆羅門位なりと稱せらる。卽ち、或は莎衣を著るあり、或は半莎衣を著るあり、或は塚間衣を著るあり、或は糞掃衣を著るあり、或はティリータ樹皮
167 衣を著るあり、或は黒羚羊皮を著るあり、或は黒羚羊皮細條にて編める衣を著るあり、或は吉祥草衣を著るあり、或は樹皮を著るあり、或は木片衣を著るあり、或は人髪編衣を著るあり、或は馬毛編衣を著るあり、或は梟羽編衣を著るあり、或は拔髭髪者卽ち髪及び髭を拔き取るの行に服する者あり、或は常立者卽ち床席を

拒否する者あり、或は常蹲者卽ち蹲踞の行に服事する者あり、或は臥荆棘者卽ち荆棘の床に臥する者あり、或は板床に臥するあり、或は露地に臥するあり、或は常に一側にのみ臥するあり、或は〔附著するがまゝに〕塵埃を衣とするあり、或は露天に住して如何なる床席にも甘んずるあり、或は食汚物者卽ち汚物を食ふの行に服するあり、或は不飲者卽ち〔冷水を〕飲まざるの行に服するあり、或は一夜三浴の行に服して住するあり」。

一五 「迦葉よ、人ありて、若し離服裸形し、儀禮を無視し、食後手を舐め、…乃至…かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて食を攝るの修行に服事せむ。然も彼にして戒具足・心具足・慧具足に勤め修得せざらむには、彼は實に沙門位より隔ること遠く、婆羅門位より隔ること遠し。迦葉よ、比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脫・慧解脫を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし。

迦葉よ、また人ありて或は莠を食とし、迦葉よ、又或は稷を食し、或は糲(れい)を食とし…乃至…或は森の樹根花實を食とし、或は自落果を食として生活せむ。然も彼

にして戒具足・心具足・慧具足に勤め修得せざらむには、彼は實に沙門位より隔ること遠く、婆羅門位より隔ること遠し。迦葉よ、比丘にして恚心なく害心なき慈
168 悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脱・慧解脱を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらる可し。

迦葉よ、また人ありて、或は莎衣を著し、或は半莎衣を著し……乃至……或は一夜三浴の行に服して住せむ。然も彼にして、戒具足・心具足・慧具足に勤め修得せざらむには、彼は實に沙門位より隔ること遠く、婆羅門位より隔ること遠し。迦葉よ、比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脱・慧解脱を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし」。

一六　斯く說かれし時、裸形迦葉は世尊に言へり。

「瞿曇よ、沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し」。

「迦葉よ、げに『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』とは、世間一般に言ふところなり。されど迦葉よ、唯だ單に、離服裸形し、儀禮を無視し、食後手を舐め…

乃至…かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて、食を攝るの修行に服事するが如き、かゝる〔些細の〕ことの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難しとせば、此の『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當ならず。或は戸主、或は戸主の子、或は水汲の婢女によりてすらも、〔次の如く決心〕するを得む。『いざ我、離服裸形すべし、儀禮を無視せむ、食後手を舐めむ…乃至…かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて食を攝るの修行に服事せむ』と。迦葉よ、實にかゝる事以外の〔重要なる〕事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難きが故に、かるが故に、此の『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當なりとせらるゝなり。迦葉よ、實に比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脫・慧解脫を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし。

169 迦葉よ、又唯だ單に、或は莠を食とし、或は稷を食とし…乃至…或は森の樹根花

實を食とし、或は自落果を食として生活するが如き、かゝることの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難しとせば、此の『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當ならず。或は戶主、或は戶主の子、或は水汲の婢女によりてすらも、〔次の如く決心〕するを得む。『いざ我、莠を食とせむ、稷を食とせむ…乃至…森の樹根花實を食とせむ、自落果を食として生活せむ』と。　迦葉よ、實にかゝる事以外の〔重要なる〕事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難きが故に、かゝるが故に、此の『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當なりとせらるゝなり。　迦葉よ、實に比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脫・慧解脫を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし。

迦葉よ、又唯だ單に、或は莎衣を著し、或は半莎衣を著し…乃至…或は一夜三浴の行に服して住するが如き、かゝることの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難しとせば、此の『沙門位を得

るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當ならず。或は戸主の子、或は水汲の婢女によりてすらも〔次の如く決心〕するを得む。『いざ我、莎衣を著む、牛莎衣を著む…乃至…一夜三浴の行に服して住せむ』と。迦葉よ、實にかゝる事以外の〔重要なる事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門位若しくは婆羅門位を得るは難く甚だ難きが故に、かるが故に、此の『沙門位を得るは難く、婆羅門位を得るは難し』との言は適當なりとせらるゝなり。迦葉よ實に比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脫・慧解脫を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし」。

170 一七　斯く說かれし時、裸形迦葉は世尊に言へり。

「瞿曇よ、沙門は識り難く、婆羅門は識り難し」。

「迦葉よ、げに『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』とは、世間一般に言ふところなり。されど迦葉よ、唯だ單に、離服裸形し、儀禮を無視し、食後手を舐め…乃至…かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて食を攝るの修行に服事するが如き

かゝることの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ識り難しとせば、此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當ならず。或は戸主、或は戸主の子、或は水汲の婢女によりてすらも、〔次の如く〕知るを得む。『此の者は離服裸形す、儀禮を無視す、食後手を舐む…乃至…かくして半月一食に至るまで、一定の間隔を置きて食を攝るの修行に服事す』と。迦葉よ、實にかゝる事以外の〔重要なる事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ識り難きが故に、かるが故に、此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當なりとせらるゝなり。迦葉よ、實に比丘にして、恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脱・慧解脱を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし。

迦葉よ、又唯だ單に、或は莠を食とし、稷を食とし…乃至…或は森の樹根花實を食とし、或は自落果を食として生活するが如きかゝることの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ識り難しとせば、

此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當ならず。或は戸主の子、或は水汲の婢女によりてすらも、〔次の如く〕知るを得む。『此の者は莠を食とす、稷を食とす…乃至…森の樹根花實を食とす、自落果を食として生活す』と。迦葉よ、實にかゝる事以外の〔重要なる〕事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ知り難きが故に、かるが故に、此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當なりとせらるゝなり。迦葉よ、實に比丘にして、恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脱・慧解脱を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし。

迦葉よ、又唯だ單に、或は莎衣を著し、或は牛莎衣を著し…乃至…或は一夜三浴の行に服して住するが如き、かゝることの爲にのみ、又かゝる種々の苦行の故に、迦葉よ、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ識り難しとせば、此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當ならず。或は戸主、或は戸主の子、或は水汲の婢女によりてすらも、〔次の如く〕知るを得む。『此の者は莎衣を著たり、牛莎衣を

著たり…乃至…一夜三浴の行に服して住す』と。迦葉よ、實にかゝる事以外の「重要なる事の爲に、かゝる種々の苦行以外のことの故に、沙門若しくは婆羅門は識り難く甚だ識り難きが故に、かるが故に、此の『沙門は識り難く、婆羅門は識り難し』との言は適當なりとせらるゝなり。迦葉よ、實に比丘にして恚心なく害心なき慈悲心を修し、又漏盡によりて無漏の心解脫·慧解脫を現在にありて自ら識り證し達して住する時、迦葉よ、彼は實に沙門なり婆羅門なりと稱せらるべし」。

一八　斯く說かれし時、裸形迦葉は世尊に言へり。

「瞿曇よ、然らば其の戒具足は何ぞ、心具足は何ぞ、慧具足は何ぞや」。

「迦葉よ、今(いま)世に如來出現し…乃至…怖畏を見、學處を受けて學修す。淸淨なる身業語業を具足して、淸淨なる生活を營み、戒を具足して、諸根の門を守護し、正念正智を具足して滿足す。〔沙門果經四〇－四二參照〕。

迦葉よ、如何にして比丘は戒を具足するや。迦葉よ、玆に比丘あり、殺生を捨て殺生を離れ、杖と刀とを用ひず、羞恥の念ありて、慈悲心に充ち、一切の生物有類を

172

利益し憐愍に住す。これ又比丘の戒の一部分なり…乃至…或る尊敬すべき沙

門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、願をかけること・願を解くこと…乃至…樹根と藥とを與ふること・藥を取去ることの如き無益徒勞の明によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。〔同經四三—六二參照〕。

迦葉よ、この比丘にして是の如く戒を具足せば、戒によりて制御せるが故に、何處に於ても怖畏を感ぜざるなり。迦葉よ、恰も灌頂卽位してその敵を降伏せる刹帝利が、敵の爲に何處に於ても怖畏を感ぜざる如く、是の如く、迦葉よ、比丘にして戒を具足せるものは、戒によりて制御せるが故に、何處に於ても怖畏を感ぜざるなり。この聖なる戒蘊を具足して、彼はその內心に無垢純淨なる安樂を感受す。かくして、迦葉よ、比丘は戒を具足せるなり。迦葉よ、これその戒具足なり。〔同經六三參照〕。

一九　迦葉よ、また比丘は如何にして諸根の門を保護するや。迦葉よ、玆に比丘ありて、眼〔根〕を以て〔色〕境を見る時、〔總〕相をも執らず、また別相をも執らざるなり…乃至…彼若し抑制することなく作用せば貪愛・憂悲・過惡・不淨法を伴ふべき意

根を制御して、以て意根を護り、意根を制御に歸せしむ。この聖なる諸根の制御を具足して、彼は內心に無垢純淨なる安樂を感受す。かくして、迦葉よ、比丘は諸根の門を保護するなり…乃至…かの五蓋を捨て去りたる自己を觀るものには歡喜生じ、歡喜せるものには喜生じ、喜を懷くものには身安穩となり、身安穩となれば樂を覺え、樂となれば心三昧に入る。彼は諸欲を去り不善法を離れて、有尋有伺にして、離より生ずる喜と樂とのある初禪に達して住す。彼は離より生ずる喜と樂とを以て、身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。迦葉よ、譬へば熟練せる湯屋の浴僕若しくはその徒弟が、金盥に洗粉を撒き、これに水を滴々注ぎて混ぜむに、洗粉は潤ひ、潤ひによりて碎け、その內外共に潤ひを以て周遍して、漏るゝことなきが如し。是の如く、迦葉よ、離より生ずる喜と樂とを以て、その身を潤漬し周遍し盈滿し充滿し、その全身何れとして、離より生ずる喜と樂とを以て洽普らせれざるはなし。これ比丘の心具足の一部分なり。〔同經六四―七六參照〕。

迦葉よ、さらに無尋無伺にして、定より生ずる喜と樂とのある第二禪…乃至…

第三禪…乃至…第四禪に達して住す。…乃至…これ比丘の心具足の一部分なり。迦葉よ、これその心具足なり。〔同經七七―八二參照〕。

二〇　是の如く心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、而も安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を智見に傾け注ぐ。而して彼は次の如く知る。『我がこの身は色(しき)より成り、四大種より成り、父母の生むところ、飯と粥との長養せしものにして、無常・破壞・粉粹・斷絕・壞滅の法なり。また我が識は之に依存し、之に關聯せるものなり』と。〔同經八三參照〕。

譬へば、迦葉よ、琉璃寶珠ありて、美麗にして玉質優秀、八面體をなし、よく磨かれて耀きわたり、清澄無濁にして一切の〔美〕相を具足し、之に濃青色、若しくは濃黃色、若しくは赤色、若しくは純白色、若しくは淡黃色の絲これに通されたらむが如し。
174 是の如く、迦葉よ、心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、而も安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を智見に傾け注ぐ。而して彼は次の如く知る、『我がこの身は色より成り、四大種より成り、父母の生むところ、飯と粥との長養せしものにして、無常・破壞・粉粹・斷絕・壞滅の法なり。また我

が識は之に依存し、之に關聯せるものなり』と。これ比丘の慧具足の一部分なり…乃至…更に此の生に來ることなしと證知す。これ比丘の慧具足の一部分なり。迦葉よ、これかの慧具足なり。〔同經八四―九八參照〕。

迦葉よ、而してこの戒具足・心具足・慧具足よりも他に、更に高き、若しくは妙なる戒具足・心具足・慧具足あることなし。

二一　迦葉よ、戒を說く或る沙門婆羅門あり。彼等は幾多の方法にて戒の讃嘆を唱ふ。されど、迦葉よ、聖なる最高の戒に關する限り、こゝに我は全く我に等しき者を見ず。況や我よりも優れたる者をや。故に我は實に此の點卽ち增上戒にありて優れたり。

迦葉よ、厭惡修行を說く或る沙門婆羅門あり。彼等は幾多の方法にて此の厭惡修行の讃嘆を唱ふ。されど、迦葉よ、聖なる最高の此の厭惡修行に關する限り、こゝに我は我に全く等しき者を見ず。況や我よりも優れたる者をや。故に我は實に此の點卽ち增上遁世にありて優れたり。

迦葉よ、慧を說く或る沙門婆羅門あり。彼等は幾多の方法にて慧の讃嘆を唱

ふ。されど迦葉よ、聖なる最高の慧に關する限り、こゝに我は全く我に等しき者を見ず。況や我よりも優れたる者をや。故に我は實に此の點卽ち增上慧にありて優れたり。

迦葉よ、解脫を說く或る沙門婆羅門あり。彼等は幾多の方法にて解脫の讃嘆を唱ふ。されど迦葉よ、聖なる最高の解脫に關する限り、こゝに我は全く我に等しき者を見ず。況や我よりも優れたる者をや。故に我は實に此の點卽ち增上解脫にありて優れたり。

175

二二 迦葉よ、他派の行脚僧が斯く言ふことも有り得む。『實に沙門瞿曇は師子吼をなす。されど之を空處に於てなし、大衆中に於てなさず』と。彼等に向ひて斯く答ふべし、『かく言ふこと勿れ。沙門瞿曇は師子吼す、大衆中に於ても亦然り』と。迦葉よ、是の如く彼等に答ふべし。

迦葉よ、又他派の行脚僧が斯く言ふこともあり得む。『沙門瞿曇は師子吼をなす、大衆中に於ても然り。されど無所畏にしては爲さず』と……乃至……『……無所畏にして爲す』。

…乃至…『…されど誰人も彼に問を發せず』と…乃至…『…彼等は彼に問を發す』。

…乃至…『…されど問を發せらるゝも答へず』と…乃至…『…彼等に問を發せられて答ふ』。

…乃至…『…されど問の說明によりて〔問者の〕心を滿足せしめず』と…乃至…『…問の說明によりて〔問者の〕心を滿足せしむ』。

…乃至…『…されど彼等はそを當に傾聽すべきものと思はず』と…乃至…『…そを當に傾聽すべきものと思ふ』。

…乃至…『…されど聽くとも信ぜず』と…乃至…『…そを聽いて信ず』。

…乃至…『…信ずるも之を表はさず』と…乃至…『…信じて之を表はす』。

…乃至…『…されど如實に行ぜず』と…乃至…『…如實に行ず』。

…乃至…『…行ずるも成就せず』と…乃至…『…行じて成就す』

〔概括するに彼等に次の如く答ふべし。『沙門瞿曇は師子吼す、大衆中に於ても然り、無所畏にして之を爲す、人彼に問を發す、發せられし問に答ふ、問の說明により て心を滿足せしむ、人々之を傾聽すべしと思ふ、聽きて信ず、信じてその意を表は

す、如實に行ず、行じて成就す」と。迦葉よ、當に是の如く答ふべし。

176
二三 迦葉よ、我、一時、王舍城靈鷲山にあり。其處に於て、或る苦行梵志尼倶陀(ニグローダ)、遁世に關して我に問を發せり。我は遁世に關して問を發せられて、之に答へたり。而して我が答へし時、彼は甚だ歡喜せり」。

「師よ、世尊の法を聽きて、誰か甚だ歡喜せざらむ。師よ、我も亦世尊の法を聽きて甚だ歡喜せり。最勝なり、師よ、最勝なり、師よ。譬へば顚倒せる物を起し、覆はれたる物を顯し、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るべしとて、黑暗に燈火を持ち來るが如く、正に是の如く、世尊によりて、種々なる方便を以て法は宣說せられたり。師よ、此の我は世尊に歸依し、法と僧伽とに歸依し奉る。師よ、願はくは世尊の許(みもと)にて出家を得、進具を受けむことを」。

二四 「迦葉よ、前に他の宗派に屬したる者、此の法と律とに於て出家を願ひ、進具を願ふ時は、四箇月間別住すべし。四箇月經過の後、比丘衆の同意あらば、彼等は此の者を比丘たらしむる爲に出家せしむ。されどその際、個性の差別〔の顧慮せらるべき〕は、我之を認む」。

「師よ、若し前に他の宗派に屬したる者、此の法と律に於て出家を願ひ、進具を願ふ時は、四箇月間別住すべく、四箇月經過の後、比丘衆は、同意によりて、彼に出家を行ひ進具を行ひて比丘たらしむとならば、我は四箇年別住せむ。四箇年經過の後、比丘衆の心に叶はば、彼等は、比丘となる爲に、我に出家を行ひ進具を行ふべし」。

實に裸形迦葉は、世尊の許にて出家を受け進具を受けたり。又、進具を受けて
177
間もなき長老迦葉は、一人離れて住し、不放逸となり、熱心に精懃して止住し、未だ久しからずして、これを〔獲む〕が爲に良家の子弟が、家より家なき生活へと出家する、かの無上梵行の完成を、現在に於て自ら識り證し達して住し、「生は盡き、梵行は修了せり、所作は已に辨じたり、更に此の生に來ることなし」と自ら識りぬ。かくして長老迦葉は阿羅漢の一人と成りぬ。

註❶「法を如法」には原語 dhammassa anudhammaṁ を譯せり　漢譯には法法成就とす。

註❷原語 saṁkitti は、漢譯には之に相當すべきものを見出し得ず。又 Neumann, Konow, Rhys Davids, O. Franke 等各異見あり。今は「饑饉時の食時」と譯せり。

本村 訳

九　布吒婆樓經（ポッタパーダ・スッタ）

178 ❶一　是（かく）の如く我（われ）聞く。一時、世尊は舍衛城の祇樹給孤獨園に在（ましま）しき。爾（そ）の時、布（ポッ）吒（タ）婆樓（パーダ）普行外道は、三百人の普行外道衆と共に、末梨園（マッリカー）にあるティンドゥカ樹に圍まれたる一大講堂なる教義論究所に住せり。

二　時に世尊は、早朝、下衣を整へ、上衣と鉢とを持して、乞食せんとて舍衛城に入り給へり。されどその時世尊謂へらく、「舍衛城に乞食の爲に遊行せんには、時尚早し。如かじ、布吒婆樓の住する末梨園中にあるティンドゥカ樹に圍まれたる一大講堂なる教義論究所を訪れんには」と。

三　時に、布吒婆樓普行外道は、多くの侍衆と共に坐し、大聲にて喧騷に罵り合ひつゝ、種々の無駄議論に耽りつゝありき。卽ち王論・盜論・大臣論・軍隊論・怖畏論・戰論・食論・飲論・衣服論・寢床論・鬘論・香論・親論・乘論・部落論・村里論・都市論・田舍論・婦人論・
179 勇士論・市街論・井戸端論・亡靈論・其の他の雜論・水陸起源論、及び斯く有る無しの論

等なりき。

四　爾の時、布吒婆樓普行外道は、世尊の遙か彼方より來ますを認め、これを認むるや、その大衆を靜まらしめたり。「諸士よ、靜かにして聲を發する勿れ。彼の沙門瞿曇は來れり。彼は沈默を愛するものにして、かの長老は亦沈默の讚嘆者なり。蓋し、吾等を沈默の會衆と知りて訪問に慣すと考へたるならん」と。かく言はれて、彼等普行外道は沈默せり。

五　かくて世尊がかの布吒婆樓の所に近づき給ふや、布吒婆樓は世尊にかく言へり。「善來世尊、我等は世尊を歡迎す。世尊、世尊は久しぶりにて吾等の所を來訪せられたり。坐し給へ、世尊、この座は世尊の爲に設けられたるものなり」と。世尊は設けの座に坐し給へり。布吒婆樓は、他の低き座をとりて、一方に坐せり。一方に坐せる布吒婆樓に對して、世尊はかく曰へり。「布吒婆樓よ、何の爲に、又如何なる論議の爲に、今汝等はこゝに集會し、而して汝等の論議は、何によりて中止されしや」と。

六　かく言はれて、布吒婆樓は世尊に向ひてかく答へり。

「世尊、吾等がそを論ぜんが爲に、此處に集まれる論議のことは、〔暫らく〕措かん。世尊、此等の議論は、世尊が後に容易に聞き得べければなり。世尊、過日、〔當〕論議場に、種々の外道の沙門婆羅門の集會しける時、增上想の消滅に關する議論起りぬ。『如何にして增上想の消滅は起るや』と。

時に一類ありてかく言ひぬ。『人々の想は、無因無緣にして生じ又滅す。生ずる時は卽ち有想にして、滅する時は無想となる』と。かく一類は增上想の消滅を說明したり。

彼に對して他はかく言へり。『そは然るべからず。友よ、げに想は人我なり。さて人我は又は來り又は去る。來る時卽ち有想となり、去る時卽ち無想となる』と。かく一類は增上想の消滅を說明したり。

彼に對して更に他はかく言へり。『そは然るべからず。實に大神通あり大威力ある沙門婆羅門ありて、彼等は人々の想を移入し、又は抽出す。移入したる時は有想となり、抽出したる時は無想となる』と。かく一類は增上想の消滅を說明したり。

181

彼に對して更に他はかく言へり。『そは實に然るべからず。寧ろ大神力あり大威力ある天神ありて、人々に想を移入し、又は抽出す。移入したる時は有想となり、抽出したる時は無想となる』と。かく一類は增上想の消滅を説明したり。世尊、爾の時、吾に世尊に關する念起りぬ。『嗚呼、か丶る時この法に精通せる世尊在さば、か丶る時善逝在まさば』と。實に世尊は增上想の消滅に關する熟知者なり。世尊、增上想の消滅とは如何」。

七「布吒婆樓よ、彼の沙門婆羅門にして『人の想は無因無緣にして生じ又は滅す』と言へるは、最初より誤れり。所以は如何となれば、布吒婆樓よ、人の想の生じ又は滅するは、有因有緣なればなり。學習に依りて一類の想は生じ、學習に依りて一類の想は滅す」。

「學習とは如何」と世尊は日へり。「布吒婆樓よ、今如來世に出現し、〔如來は〕應供・等正覺…乃至…清淨なる身業語業を具足して、清淨なる生活を營み、戒を具足し、諸根の門を守護し、正念正智を具足して滿足す。〔沙門果經四〇―四二參照〕。

布吒婆樓よ、如何にして比丘は戒を具足するや。布吒婆樓よ、茲に比丘あり、殺

生を捨て丶殺生を離れ、杖と刀とを用ゐず、羞恥の念ありて慈悲心に充ち、一切の生物・有情を利益し憐愍に住す。これ又比丘の戒の一部分なり。…乃至…又或る尊敬すべき沙門婆羅門にして、信施の食によりて生活して、而も例へば、顚をかけること・顚を解くこと…乃至…樹根と藥とを與ふること・藥を取去ることの如き無益徒勞の明(みやう)によりて邪命に生活するものあるに、是の如き等の何れの無益徒勞の明をも離る。これ又比丘の戒の一部分なり。〔同經四三—六二參照〕。

八 布吒婆樓よ、比丘にしてかくの如く戒を具足せば、戒によりて制御せるが故に、何處に於ても怖畏を感ぜざるなり。…〔乃至〕…この聖なる戒蘊を具足して、彼はその內心に無垢純淨なる安樂を感受す。かくして、布吒婆樓よ、比丘は戒を具足せるなり。〔同經六三參照〕。

九 布吒婆樓よ、如何にして比丘は諸根の門を保護するや。布吒婆樓よ、こゝに
182
比丘ありて、眼〔根〕を以て色〔境〕を見る時…〔乃至〕…彼はこの聖なる根の制御を具足して、內心に無垢純淨なる安樂を感受す。布吒婆樓よ、かくして、比丘は諸根の門を保護するなり…乃至…〔同經六四—七四參照〕。

一〇　かくて是等の五蓋を捨て去りたる自己を觀るものには歡喜生じ、歡喜せるものには喜生じ、喜を懷くものには身安穩となり、身安穩となれば樂を覺え、樂となれば心三昧に入る。彼は、諸欲を去り、不善法を離れ、有尋有伺にして、離より生ずる喜と樂とのある初禪に達して住す。これが爲、最初の欲想を滅し、その時、かの離より生ずる喜と樂との、ある微妙にして眞實なる想生ず。これに由りてその時彼は離より生ずると喜と樂とのある微妙なる眞實の想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と、世尊は曰ひぬ。

183
一一　「布吒婆樓よ、更に又比丘ありて尋伺を滅し、內心靜安となり、心の一境相を得て、無尋無伺にして、定より生ずる喜と樂とのある第二禪に達して住す。その時、かの以前の離より生ずる喜と樂とのある微細にして眞實なる想滅し、同時に定より生ずる喜と樂とのある微細にして眞實なる想生ず。これに由りてその時、彼は定より生ずる喜と樂とのある微細にして眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ

學習に依るなり」と、世尊は曰ひぬ。

一二 「復更に、布吒婆樓よ、比丘ありて、喜を離れて捨となりて住し、正念正智にして、身を以て樂を感受し、諸聖者が『捨にして念ある樂住なり』と云へる第三禪に達して住す。その時、以前の定より生ずる喜と樂とのある微細にして眞實なる想滅し、同時に捨と樂とのある微細にして眞實なる想生ず。これに由りてその時、彼は捨と樂とのある微細にして眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と世尊は曰ひぬ。

一三 「復更に、布吒婆樓よ、比丘ありて、樂を捨離し、苦を捨離し、以前に感じたる悅と憂とを斷滅して、不苦不樂にして、捨念淸淨となれる第四禪に達して住す。その時、先の捨と樂とのある微細にして眞實なる想滅し、同時に、不苦不樂にして微細眞實なる想生ず。これに由りて、彼はその時、不苦不樂にして微細眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と世尊は曰ひぬ。

一四 「復更に、布吒婆樓よ、比丘ありて、凡ての方面に於て色想を超え、障礙想を滅して、異想を憶念せざるが故に、『虚空は無邊なり』との空無邊處に達して住す。その爲、以前の色想滅し、同時に空無邊處の樂にして微妙眞實なる想生ず。これに由りて彼はその時、たゞ空無邊處の微細にして眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と世尊は日ひぬ。

一五 「復更に、布吒婆樓よ、比丘ありて、凡ての方面に於て空無邊處を超えて、『識は無邊なり』との識無邊處に達して住す。その爲、以前の空無邊處の微妙にして眞實なる想滅し、その時、識無邊處の微妙にして眞實なる想生ず。これに由りて彼はその時、識無邊處の微妙にして眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と世尊は日ひぬ。

一六 「復更に、布吒婆樓よ、比丘ありて、凡ての方面に於て識無邊處を超えて、『何ものも有ること無し』との無所有處に達して住す。その爲、以前の識無邊處の微妙

にして眞實なる想滅し、その時、無所有處の微妙にして眞實なる想生ず。これに由りて彼はその時、無所有處の微妙にして眞實なる想を有するものとなる。かくの如くして、學習に依りて一の想生じ、學習に依りて他の想滅す。これ學習に依る」と世尊は曰ひぬ。

一七　「實に、布吒婆樓よ、比丘が獨特の想を有するに至りてより、彼は順次に、前段より後段へと次第して想の頂點に達す。彼はその想の頂點に立てる時謂へらく、『思慮するは吾にとりて惡しきことにして、思慮せざるは吾にとりて善きことなり。若し吾にして思慮し意欲せんには、此のわが想は消滅し得るとするも、更に他の麁なる想再び生ずること有らん。如かじ、吾をして思慮せず意欲せしめざらんには』と。かくして、彼は思慮もせず又意欲もせず。かく思慮もせず、意欲もせざるによりて、その想正に滅し、又他の想生ぜずして、彼は［想の］滅に達す。是の如くにして、布吒婆樓よ、次第に增上想滅智定に達す。

一八　布吒婆樓よ、汝は如何に考ふるや。汝は以前に、是の如き漸次增上想滅智定に就きて曾て聞きしことありや」。

185

「否、世尊、吾は唯かく世尊に依りて語られたるのみを知る。卽ち『實に、布吒婆樓よ、比丘が獨特の想を有するに至りてより、彼は順次に、前段より後段へと次第して想の頂點に達す。彼はその想の頂點に立てる時、謂へらく、「思慮するは吾にとりて惡しきことにして、思慮せざるは吾にとりて善きことなり。若し吾にして思慮し意欲せんには、此のわが想は消滅し得るとするも、更に他の麁なる想再び生ずること有らん。如かじ、吾をして思慮せず意欲せしめざらんには」と。かくして彼は思慮もせず又意欲もせず。かく思慮もせず意欲もせざるによりて、その想正に滅し、又他の想生ぜずして、彼は〔想の〕滅に達す。是の如くにして、布吒婆樓よ、次第に增上想滅智定に達す』と」。

「實に是の如し、布吒婆樓よ」。

一九　「世尊、世尊は想の頂點を一なりと敎へ給ふや、將た想の頂點を多なりと敎へ給ふや」。

「布吒婆樓よ、われは想の頂點を一なりとも敎へ、又多なりとも敎ふるなり」。

「是の如くんば、世尊、世尊は如何にして想の頂點は一なりとも敎へ、又多なりと

も教へ給ふや」。

「布吒婆樓よ、實に、如々に〔想の〕滅に達するに從ひて、如是々々に想の頂點を示すが故に、布吒婆樓よ、われは想の頂點を一なりとも、又想の頂點を多なりとも說示するなり」。

二〇　「世尊、最初に想生じ、後に智生ずるや。最初に智生じ、後に想生ずるや。將た智と想とは非前非後に生ずとせんや」。

「布吒婆樓よ、最初に想生じ、後に智生ずるものにして、想の生起によりて、實に智の生起あるなり。かくして人々は自ら知る。『げに、此の緣によりて吾に智慧生ぜり』と。布吒婆樓よ、この理由によりて、初に想生じ、後に智生じ、想の生起によりて智の生起ありと知るべきなり」。

二一　「世尊、想は人の我なりや。將た想と我とは異なりとせんや」。

「布吒婆樓よ、汝は我を如何に考ふるや」。

「世尊、麁なる我を、有形にして、四大より成り、段食によりて養はるゝものなりと吾は思惟す」。

186

「布吒婆樓よ、若し汝の麁なる我は有形にして、四大より成り、段食によりて養はる丶ものなりとするを眞なりとせば、布吒婆樓よ、汝の想と我とは實に別物たるべし。布吒婆樓よ、この差別(智)によりて知らるべきが如く、想と我とは別物たるなり。布吒婆樓よ、「暫く」かく麁なる我は有形にして、四大より成り段食によりて養はる丶ものなりとして、然も尚、此の人に一想起り、他想滅するあり。この差別によりて知らるべきが如く、布吒婆樓よ、實に想と我とは別物たるべし」。

二二 「世尊、われは我をば意所成にして、大小の支節を具足し、諸根圓滿せるものなりと認む」。

「布吒婆樓よ、若し汝の我は意所成にして、大小の支節を具足し、諸根圓滿せるものなりとするを眞なりとせば、布吒婆樓よ、汝の想と我とは實に別物たるべし。布吒婆樓よ、この差別によりて知らるべきが如く、想と我とは別物なり。布吒婆樓よ、「暫く」かく我は意所成にして、大小の支節を具足し、諸根圓滿せるものなりとして、然も尚、此の人に一想生じ他想滅するあり。この差別によりて知らるべきが如く、布吒婆樓よ、實に想と我とは別物たるべし」。

二三「世尊、吾は我を無形にして想所成のものと認む」。

「布吒婆樓よ、若し汝の我は無形にして想所成のものなりとするを眞なりとせば、布吒婆樓よ、汝の想と我とは實に別物たるべし。布吒婆樓よ、この差別によりて知らるべきが如く、想と我とは別物なり。布吒婆樓よ、〔暫く〕かく我は無形にして想所成のものなりとして、然も尚、この人に一想生じ他想滅するあり。この差別によりて知らるべきが如く、布吒婆樓よ、實に我と想とは別物たるべし」。

二四[2]「又、世尊、『人の我は想なりとせんや、將た想と我とは異なりとせんや』といふ義は、吾に知られ得べきものなりや」。

「布吒婆樓よ、汝は卽ち他〔宗〕の見に依り、他〔宗〕の信忍を有し、他〔宗〕の目的を持し、他〔宗〕の研究に向ひ、他〔宗〕の行持を旨とするを以て、汝によりて、人の我が想と一なりや、將た想と我とは異なるやを知ること困難なり」。

二五「世尊、若し吾〔の如き〕他〔宗〕の見に依り、他〔宗〕の信忍を有し、他〔宗〕の目的を持し、他〔宗〕の研究に向ひ、他〔宗〕の行持を旨とするものによりては、此の想は人の我なりや、將た我と想とは異なるやを知ること難しとせば、世尊、更に〔請ひ問はん〕。世界

は常住なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりや」。
「布吒婆樓よ、この世界は常住なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりやは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「然らば、世尊、世界は無常なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりや」。
「布吒婆樓よ、世界は無常なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりやは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「更に然らば、世尊、世界は有限なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「然らば、世尊、世界は無限なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりや」。
188 「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
二六　「更に世尊、この命（みやう）と身とは一なりや、而してこれのみが眞實にして他は虛なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。

「更に然らば、世尊、かの命と身とは異なりや、而してこれのみが眞實にして他は虚なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
二七[3] 「然らば、世尊、[4]如來は死後に於て存在するや、而してこれのみが眞實にして他は虚なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「然らば、世尊、如來は死後に於て存在せざるや、而してこれのみが眞實にして他は虚なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「然らば、世尊、如來は死後に於て、又は存在し、又は存在せざるや、而してこれのみが眞實にして他は虚なりや」。
「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。
「然らば、世尊、如來は死後に於て、又は存在するにも非ず、又は存在せざるにも非ざるや、而してこれのみが眞實にして他は虚なりや」。

「布吒婆樓よ、こは、われによりて無記なりと判ぜらる」。

二八 「世尊、此等は何故に、世尊によりて無記と判ぜらるゝや」。

「布吒婆樓よ、こは義に適合することなく、法に適合することなし。而してそは根本梵行ならず、又そは出離にも、離欲にも、止滅にも、寂靜にも、證悟にも、正覺にも、涅槃にも導かざるなり。それ故に、そはわれによりて無記と判ぜらるゝなり」。

189

二九 「然らば、世尊、世尊によりて記せらるゝものは何ぞや」。

「布吒婆樓よ、『此は苦なり』とはげにわれによりて記せらるゝものなり。布吒婆樓よ、『此は苦の集なり』とはげにわれによりて記せらるゝものなり。布吒婆樓よ、『此は苦の滅なり』とはげにわれによりて記せらるゝものなり。布吒婆樓よ、『此は苦の滅に導く道なり』とはげにわれによりて記せらるゝものなり」。

三〇 「されど、世尊、こは何故に世尊によりて記せらるゝや」。

「布吒婆樓よ、こは實に義に適ひ、法に適ふ。こは根本梵行にして、又こは出離と、離欲と、止滅と、寂靜と、證悟と、正覺と、涅槃とに導くなり。この故に、こはわれによりて記せらるゝなり」

「實に然り、世尊、實に然り、善逝。而して今や正に、世尊の御意のまゝになさるべき時なり」。

茲に於て、世尊は座より立ちて去り給へり。

三一　さて世尊が去り給ひて間もなく、普行外道等は四方より、かの布吒婆樓普行外道に向ひ、嘲笑を交へ皮肉の言を浴せて言へり。

「布吒婆樓は、沙門瞿曇の說く所に就きて、是の如き讚意を表せり、『實に然り、世尊、實に然り、善逝』と。されど吾等は、沙門瞿曇が、『世界は常住なりや』。『世界は無常なりや』。『世界は有限なりや』。『世界は無限なりや』。『命と身とは一なりや』。『命と身とは異なりや』。『如來は死後に存在するや』。『如來は死後に存在せざるや』。『如來は死後に、又は存在し、又は存在せざるや』。『如來は死後に、又は存在するにも非ず、又は存在せざるにも非ざるや』に就きて、一法たりとも確定的に說示せしを認めざりき」と。

かく言はれて、布吒婆樓は彼等普行外道に向ひて言へり。

「諸士よ、吾とても、沙門瞿曇が、『世界は常住なりや……乃至……如來は死後、又は存在

するにも非ず、又は存在せざるにも非ざるや』に就きて、一法たりとも確定的に説示せりとは、ゆめ認めざるなり。されど沙門瞿曇は如實・眞正・眞如にして、法に立脚し、法に適へる道を説けり。而もかく沙門瞿曇が如實・眞正・眞如にして、法に立脚し、法に適へる道を善說する時、その善說法を、吾の如く理知的なるものは、如何にして肯定せざるべけんや」。

三二　爾の後二三日を經て、チッタハッティサーリプッタ（象首舍利弗）と布吒婆樓は、世尊の所に到りぬ。到りて象首舍利弗は、世尊に敬禮し、一方に坐せり。布吒婆樓も亦、世尊と親しく挨拶を交し、慇懃に問訊して後、一方に座を占めぬ。一方に坐し終りて、布吒婆樓は世尊にかく言へり。

「世尊、世尊が去り給ひて間もなく、普行外道等は四方より吾に向ひ、嘲笑を交へ皮肉の言を浴せて言へり。『この布吒婆樓は、沙門瞿曇の說く所に就きて、是の如き讃意を表せり。「實に然り、世尊、實に然り、善逝」と。されど吾等は、沙門瞿曇が「世界は常住なりや……（乃至）……如來は死後、存在するにも非ず、又は存在せざるにも非ざるや」に就きて、一法たりとも確定的に說示せしを認めざりき』と。かく言は

れて、世尊、吾は彼等普行外道にかく答へぬ。『諸士よ、吾とても、沙門瞿曇が、「世界は常住なりや…乃至…如來は死後、又は存在するにも非ず、又は存在せざるにも非ざるや」に關して、一法たりとも確定的に說示し給へりとは認めざるなり。されど沙門瞿曇は、如實・眞正・眞如にして、法に立脚し、法に適へる道を說き給ふ。而もかく沙門瞿曇が如實・眞正・眞如にして、法に立脚し、法に適へる道を善說し給へる時、その善說法を、我の如く理知的なるものは、如何にして肯定せざるべけんや』と」。

三三 「布吒婆樓よ、彼等一切の普行外道は、皆盲目にして無眼子なるに、其中に在りて、汝は是唯一人の具眼の士なり。布吒婆樓よ、こゝに、我によりて決定記の法として說かるゝものと、又我によりて不決定記の法として說かるゝものとあり。布吒婆樓よ、我によりて不決定記の法として說かるゝものとは何ぞや。謂く、『世界は常住なりや』と云ふが如きこれなり。布吒婆樓よ、こは我によりて不決定記の法と說かる。又、布吒婆樓よ、『世界は無常なりや』と云ふが如きこれなり。こは我によりて不決定記の法なりと說かる。布吒婆樓よ、『世界は有限なりや…乃至

…如來は死後、又存するにも非ず、存在せざるにも非ざるや』と云ふが如きこれなり。これ亦我によりて不決定記の法なりと說かるゝなり。

布吒婆樓よ、何故に此等は、我によりて不決定記の法なりと說かるゝやと言はば、布吒婆樓よ、此等は義にも適はず、法にも適はず、根本梵行ならず、又此等は、出離にも…〔乃至〕…涅槃にも導かざればなり。それ故に、此等は、我によりて不決定記の法なりと說かる。

布吒婆樓よ、さらば如何なるものを、我が決定記の法なりと說くやと言はば、布吒婆樓よ、『此は苦なり』とは、これ我が決定記の法と說くものなり。布吒婆樓よ、192『此は苦の集なり』とは、これ實に我が決定記の法と說くものなり。布吒婆樓よ、『此は苦の滅なり』とは、これ實に我が決定記の法と說くものなり。布吒婆樓よ、『此は苦の滅に導く道なり』とは、これ實に我が決定記の法と說くものなり。

布吒婆樓よ、復何が故に此等を我が決定記の法なりと說くやと言はば、布吒婆樓よ、此等は義に適ひ、法に適ふ。又此等は根本梵行にして、又出離にも…〔乃至〕…涅槃にも導けばなり。この故に、此等を決定記の法なりと我は說くなり。

三四　布吒婆樓よ、一類の沙門婆羅門にして『我は死後に於て一向に安樂を有し、且無病なり』と、是の如き主張をなし、是の如き見を有するものあり。われは彼等を訪ひて、『諸友よ、諸士は我は死後一向に安樂を有し、且無病なりと、是の如き主張をなし、是の如き見を有すと云ふは、眞實なりとせんや否や』とかく問ふ。われにかく言はれて、彼等は然りと承認す。われは更に彼等に問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、一向に安樂なる世界を事實知り且見るや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。われ又、彼等にかく問ふ、『諸友よ、更に諸士は、一夜又は一日、半夜又は半日にても、一向に安樂を有する我を認知せしや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。われ又彼等にかく問ふ、『諸友よ、さらば又諸士は、これぞ一向に安樂なる世界實現への道なり、これその通路なりと了知せるや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。われは更に彼等にかく問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、天神にして一向に安樂なる世界に生じたるもの丶說示する音聲――「尊主よ、一向に安樂なる世界を實現せんが爲には善業を行ぜよ、尊主よ、正道を歩むべし、所以は如何とならば、尊主よ、吾等は正にか丶る所行によりて、一向に安樂なる世界に生じたればなり」――

193 を聞きしや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては『彼等沙門婆羅門の所說は、正理に應ぜざるにあらずや。

三五[5]　恰もこは、人のかく言はんが如し、謂く、『吾は此の國に於ける國中第一の美人を求め且愛す』と。若し人々彼に向ひて言はん、『さて友よ、汝此の國に於て、國中第一の美人を求め且愛すとせば汝の所謂國中第一の美人は、刹帝利族なりや、婆羅門族なりや、吠舍族なりや、將た首陀羅なりやを知るべけん』と。かく言はれて、彼は否なりと答ふ。又人々彼にかく言はん、『さて友よ、汝若し國中第一の美人を求め且愛すとせば、その國中第一の美人の名は如何、姓は如何、又彼の女は高きや、低きや、中背なりや。皮膚は青黑きや、眞黑きや、黃金色なりや。その住所は村里なりや、町家なりや、將た城市なりやを知るならん』と。かく問はれて、彼は否と答ふ。更に又人々は彼に問ひて言はん、『友よ、汝が求め且愛するその人を、汝は知りもせず、且見もせざるや』と。かく問はれて、彼は然りと答ふとせよ。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、此の人の所說は正理に應ぜざるにあらずや」。

「世尊、かくては實に此の人の所說は正理に應ぜざるなり」。

三六　「布吒婆樓よ、沙門婆羅門にして、『我は死後に於て、一向に幸福にして且無病なり』と、是の如き説をなし、是の如き見を有するものも亦是の如し。われ彼等を訪ひて、『諸友よ、諸士が、我は死後、一向に幸福にして且無病なりと、是の如き説をなし、是の如き見を有すと云ふは、眞實なりや否や』と問ふ。われにかく言はれて、彼等は然りと承認す。われは更に彼等に問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、一向に幸福なる世界を覺知し現見して、これに止住せるや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。われ又彼等にかく問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、一夜又は一日、半夜又は半日たりとも、一向に幸福なる我を認知せしや』と。かく言はれて彼等は否と答ふ。われは又彼等にかく問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、これぞ一向に幸福なる世界實現への道なり、これその通路なりと了知せるや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。われは更に彼等にかく問ふ、『諸友よ、さらば諸士は、天神にして一向に幸福なる世界に達したるものゝ説示する音聲――尊主よ、一向に幸福なる世界を實現せん爲には、善業を行ぜよ、尊主よ、正道を歩むべし、所以は如何とならば、尊主よ、吾等は正にかゝる所行によりて一向に幸福なる世界に生じたればなり――

―を聞きしや』と。かく問はれて、彼等は否と答ふ。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、彼等沙門婆羅門の所説は正理に應ぜざるにあらずや」。

「世尊、かくては、げにかの沙門婆羅門の所説は、正理に應ぜざるなり」。

三七　「布吒婆樓よ、こは例せば、人の〔四方に向ふ〕四大道の〔四つの入口の〕下に於て、一殿堂に登らんが爲に、唯一の楷梯を建立せんとするものあり。〔人〕彼に問ひて言く、『いでや友よ、君が一殿堂に登らんが爲に楷梯を建立せんとするその殿堂は、東方にありや、西方にありや、北方にありや、はた南方にありや。又そは高きや、低きや、中位なりや。君、これを確知するや』と。かく問はんに、彼は否と答ふ。又〔人〕彼に、『いでや友よ、君が殿堂に登らんが爲に楷梯を造らんとするその殿堂を、君は知りもせず見もせざるにあらずや』と、かく問はんに、彼は然りと答ふるが如し。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、この人の所説は正理に應ぜざるにあらずや」。

「世尊、かくては、彼の人の所説は、げに正理に應ぜざるなり」。

三八　「是の如く、布吒婆樓よ、沙門婆羅門にして『我は死後に於て、一向に幸福にし

195

て且無病なり』と、是の如き說をなし、是の如き見を有するものも、亦是の如し……〔乃至〕……布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、彼等沙門婆羅門の所說は、正理に應ぜざるにあらずや」。

「世尊、かくては、沙門婆羅門の所說は正理に應ぜざるなり」。

三九　「布吒婆樓よ、實に三種の我得あり。そは麁なる我得と、意所成の我得と、無形の我得となり。布吒婆樓よ、何物かこれ麁なる我得なりや。謂はく、有形にして、四大より成り、段食に由りて養はるゝもの、これ麁なる我得なり。何物かこれ意所成の我得なりや。謂はく、有形にして、大小の支節を具足し、諸根圓滿なるもの、これ意所成の我得なり。何物かこれ無形の我得なりや。謂はく、無形の想所成のもの、これ無形の我得なり。

四〇　布吒婆樓よ、われは實に麁なる我得を永斷せんが爲に法を說く。これに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨なる諸法は增長し、現法に於て、智慧の充滿とその廣大とを、自ら實證し通達し、これに住するに至る。されど、布吒婆樓よ、此に對して、汝はかく考ふるやも知れず、『雜染の諸法は斷離し、淸淨の諸法

は增長し、現法に於て智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し住するに至るとせんも、而も尙『〔有情は〕苦の中に住すべし』と。布吒婆樓よ、是の如き念を作すこと勿れ。所以は如何。雜染の諸法は斷離し、清淨なる諸法は增長し、現法に於て、智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し住すれば、則ち愉快となり、又歡喜を得、輕安となり、又正念正智を得て、安樂に住することを得ればなり。

四一　實に布吒婆樓よ、われは意所成の我得を永斷せんが爲に法を說く。これに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、清淨なる諸法は增長し、現法に於て、智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し、これに住するに至る。されど、布吒婆樓よ、これに對して汝はかく考ふるやも知れず、『雜染の諸法は斷離し、清淨なる諸法は增長し、現法に於て智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し住するに至るとせんも、而も尙、『〔有情は〕苦の中に住すべし』と。布吒婆樓よ、是の如き念を作すこと勿れ。所以は如何。雜染の諸法は斷離し、清淨なる諸法は增長し、現法に於て智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し住すれば、則ち愉快となり、又歡喜を得、輕安となり、又正念正智を得て、安樂に住することを得ればなり。

四二　實に布吒婆樓よ、われは無形の我得を永斷せんが爲に法を説く。これに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨なる諸法は增長し…〔乃至〕…安樂に住することを得ればなり。

四三　復若し、布吒婆樓よ、われにかく問ふものありとせよ、『尊者よ、如何なる麁なる我得を永離せんが爲に、卿は法を說き、それに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨の諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るに至るや』と。かゝる問に對して、われはかく答へんとす、『友よ、かくの如くにして麁なる我得を永斷せん爲に、われは法を說く。それに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨なる諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るに至るなり』と。

四四　復若し、布吒婆樓よ、われにかく問ふるものありとせよ、『尊者よ、如何なる意所成の我得を永斷せんが爲に、卿は法を說き、それに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨の諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るや』と。かゝる問に對して、われはかく答へんとす、『友よ、是の如くにして意所成の我得を永斷せんが爲に、われは法を說く。これに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨

なる諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るに至るなり』と。

四五　復次に、布吒婆樓よ、われにかく問ふものありとせよ、『尊者よ、如何なる無形の我得を永斷せんが爲に、卿は法を說き、それに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨なる諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るに至るや』と。かゝる問に對して、われはかく答へんとす、『友よ、是の如くにして無形の我得を永斷せんが爲に、われは法を說く…〔乃至〕…住することを得るに至るなり』と。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、わが所說は正理に應ぜざるや」。

「世尊、かくては〔その〕所說はげに正理に應ずるなり」。

四六　「布吒婆樓よ、恰も、一殿堂に登らんが爲に、一楷梯を殿堂の直下に建立せんとするに、〔人〕彼にかく問はん、『いでや友よ、君が殿堂に登る爲に楷梯を造らんとするその殿堂は、東方にありや、西方にありや、南方にありや、將た北方にありや、そは高きや、低きや、中位なるや。君、これを知るや』と。之に對して、彼答へて、『友よ、是の如くにして殿堂に登らんが爲に、その殿堂の直下に、予は楷梯を建立するなり』と言はんが如し。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。此の人の所說は、かくては

正理に應ぜざるや」。
「世尊、かくては、彼の所説はげに正理に應ずるなり」。

199 **四七**　「布吒婆樓よ、此も亦是の如し。若し人ありて、われにかく問はん『尊者よ、如何なる麁の我得を永斷せんが爲に、卿は法を説き…乃至…復、如何なる意所成の我得を永斷せんが爲に、卿は法を説き…乃至…復、如何なる無形の我得を永斷せんが爲に、卿は法を説き、それに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨なる諸法は增長し、現法に於て、智慧の圓滿とその廣大とを、自ら實證し通達し住するに至るや』と。かゝる問に對して、われはかく答へんとす、『友よ、是の如くにして無形の我得を永斷せんが爲に、われは法を説く。これに隨入するによりて、雜染の諸法は斷離し、淸淨の諸法は增長し…〔乃至〕…住することを得るに至るなり』と。布吒婆樓よ、汝の意に於て如何。かくては、わが所説は、げに正理に應ぜざるや」。
「世尊、かくては、世尊の所説は、げに正理に應ぜり」。

四八　〔時に〕象首舍利弗は、世尊に白して言へり、「世尊、麁なる我得の存在する限り、意所成の我得の存在は虛なり、又無形の我得の存在も虛にして、正にその時、麁

なる我得の存在のみ實なりや。世尊若し意所成の我得の存在する限り、麁なる我得の存在も虚なり、又無形の我得の存在も虚にして、正にその時、意所成の我得の存在のみ實なりや。世尊、無形の我得の存在する限り、麁なる我得の存在も虚なり、又意所成の我得の存在も虚にして、正にその時、無形の我得の存在のみ實なりや」。

四九　「象首よ、麁なる我得の存する時は、決してそを意所成の我得なりとも稱せず、又無形の我得なりとも稱せずして、唯麁なる我得とのみ稱す。象首よ、意所成の我得の存する時は、決してそを麁なる我得とも稱せず、又無形の我得とも稱せずして、唯意所成の我得とのみ稱す。象首よ、無形の我得の存する時は、決してそを麁なる我得とも稱せず、又意所成の我得なりとも稱せずして、唯無形の我得とのみ稱するなり。

象首よ、若し人ありて、汝に問ふて言はん、『汝過去世に存在せしに、汝曾て存せざりしことなく、汝未來世に存在すべきに、汝當に存せざらんことなく、汝現在に存在するに、汝正に存せざることなきや』と。かく問はれんに、象首よ、汝は如何に

答へんとするや」。

「世尊、若し人ありて、われにかく問はん、『汝已に過去世に存在せしに、汝曾て存せざりしことなく、汝未來世に存在すべきに、汝當に存せざらんことなく、汝現在に存在するに、汝正に存せざることなきや』と。世尊、われかく問はれんに、われ次の如く答へんとす、『われ過去世に存在して、われ曾て存せざりしことなく、われ未來世に存在せんに、われ當に存せざらんことなく、われ現在に存在するに、われ正に存せざることなし』と。世尊、かゝる問に對して、われはかく答へんとす」。

五〇 「象首よ、汝若し又かく問はれん、『汝の過去の我得曾て存せしとき、その汝の我得のみ實にして、未來の〔我得〕も虚なり、現在の〔我得〕も虚なりや。又、汝の未來の我得當に存せんに、その汝の我得のみ實にして、過去のも虚なり、亦現在のも虚なりや。又汝の現在の我得正に存するとき、その汝の我得のみ實にして、過去のも虚なり、亦未來のも虚なりや』と。象首よ、汝かく問はれんに、如何に答へんとするや」。

201 「世尊、若しわれかく問はれん、『汝の過去の我得曾て存せしとき…〔乃至〕…汝の現

在の我得正に存するとき、かの汝の我得のみ實にして、過去のも虚なり、亦未來のも虚なりや』と。世尊、かゝる問に對して、われはかく答へんとす、『わが過去の我得曾て存せしとき、かのわが我得のみ實にして、未來のも虚なり、又現在のも虚なり。又われ未來の我得當に存すべきときかのわが我得のみ實にして、過去のも虚なり、亦現在のも虚なり。又わが現在の我得正に存するとき、かのわが我得のみ實にして、過去のも虚なり、未來のも亦虚なり』と。かゝる問に對して、われは是の如く答へんとす」。

五一　「これも亦是の如し。象首よ、麁なる我得の存する時は、決して意所成の我得と稱することなく、又無形の我得と稱することもなし。唯麁なる我得とのみ稱するなり。象首よ、意所成の我得の存する時は…乃至…象首よ、無形の我得の存する時は、決して麁なる我得と稱することなく、又意所成の我得と稱することもなし。唯無形の我得とのみ稱するなり。

五二　象首よ、こは恰も、牛より乳、乳より酪、酪より生酥、生酥より熟酥、熟酥より醍醐味を成ずるが如し。若し乳にてある時は、決して酪とは稱せず、生酥とも稱せ

ず、熟酥とも稱せず、又醍醐味とも稱せずして、其の時は唯乳とのみ稱するなり。若し酪にてある時は…乃至…若し生酥にてある時は…乃至…若し醍醐味にてある時は、決して乳とは稱せず酪とも稱せず、生酥とも稱せず、又熟酥とも稱せずして、其の時は唯醍醐味とのみ稱するなり。

五三　象首よ、これも亦是の如し。麁なる我得の存する時には…乃至…象首よ、意所成の我得の存する時は…乃至…象首よ、無形の我得の存する時は、決して麁なる我得とも稱せず、又意所成の我得とも稱せずして、唯無形の我得とのみ稱するなり。

象首よ、これ等は、世間の共相として、世間的言葉として、世間的名稱として、世間の記述法として、如來が正當にこれを用ひたるものなり」。

五四　世尊のかく曰ひし時、布吒婆樓普行外道は言へり。「偉なる哉、世尊、大なるかな、世尊。恰も倒れたるものを起し、覆はれたるものを現はし、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るべしとて闇中に燈明を持ち來るが如く、世尊は種々の方便を以て、教法を說示し給へり。世尊、われ今、佛陀世尊と教法と比丘僧伽とに歸

依し奉る。今日より後わが生を終ふるまで歸依せる優婆塞として、世尊のわれを攝受し給はんことを」と。

五五　更に象首舍利弗は世尊に白して言へり。「偉なるかな、世尊、大なるかな、世尊。恰も倒れたるものを起し、覆はれたるものを現はし、迷へる者に道を示し、具眼者は物を見るべしとて闇中に燈明を持ち來るが如く、種々の方便を以て、世尊は敎法を說示し給へり。世尊、われ今佛陀世尊と敎法と比丘僧伽とに歸依し奉る。願くば、世尊、世尊の御前に於て出家を得、進具を得しめ給はんことを」と。

五六　かくて象首舍利弗は、世尊の御前に於て出家し、進具を受けたり。又進具を受けて後、尊者象首舍利弗は、直ちに獨處に止住し、不放逸となり、熱心に精懃して止住し、間もなく、これが爲に良家の子弟が家を捨てゝ出家する最上梵行の究
203
竟を、現在に於て自ら實證し通達し住して、「生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、後有を受けざるに至れり」と自ら識れり。實に尊者象首舍利弗は、阿羅漢の一人と成れり。

註❶本經一―五は、長部經典第二五經一・二・三・四・七參照。本經一―六は、中部經典第七六經、雜阿含卷三十五の第九七三經、中部經典第七七經參照。
❷本經二四―二七は、增一部經典第一〇の九五經、雜阿含卷第三十四の第九四二經、中部經典第六三經、中阿含箭喩經、同第七十二經、雜阿含卷第三十四の九六二經參照。
❸本經二七―三〇は、長部經典第二九經三〇―三三參照。
❹この場合如來は有情の義なり。
❺本經三五―三七は、本卷三明經一九―二一參照。

すば ぎょう
須婆経 (Subha-sutta)

おぎわら うんらい
荻原雲来 訳

一〇 須婆經（スバ・スッタ）

第一誦品

204 一 是の如く我聞く。一時、長老阿難は、世尊が般涅槃し給ひてより未だ久しからざる時、舍衞城の祇樹給孤獨園に住せり。又その時に、堵提氏の子なる須婆儒童が、或る用事にて舍衞城に棲ひき。

二 或る時、堵提氏の子なる須婆儒童は或る儒童に告げて言く、「汝、儒童よ、沙門阿難の許に詣れ。詣り已りて、『堵提氏の子なる須婆儒童が、尊者阿難の少病、少惱、起居輕利、氣力、安穩住を尋ぬ』と言ひて、沙門阿難に吾が言を傳へ、少病、少惱、起居輕利、氣力、安穩住を尋ねよ。尚次の如く言へ。『尊者阿難が哀愍して、堵提氏の子なる須婆儒童の住處に來り給はゞ幸甚なり』と」

三 彼の儒童は「承知せり」と、堵提の子須婆儒童に答へて、長老阿難の許に詣れり。詣り已りて、長老阿難に挨拶して親善の詞を交はして、一邊に坐せり。彼の儒童

は一邊に坐して、長老阿難に次の如く言へり。

「堵提氏の子なる須婆儒童は、尊者阿難に、少病、少惱、起居輕利、氣力、安穩住を尋ね、

205 而して次の如くに言ふ。『尊者阿難が哀愍して堵提氏の子なる須婆儒童の住處に來り給はゞ幸甚なり』と」。

四　かく語りし時に、長老阿難は彼の儒童に次の如く言へり。

「儒童よ、我は今藥を服せしばかりにて、都合宜しからず。されど、明日にも適宜の機會を見て至らんとす」。

その時、彼の儒童は座より起ち堵提氏の子なる須婆儒童の許に至れり。至り已りて、堵提氏の子なる須婆儒童に次の如く言へり。

「我等は卿の語を尊者阿難に傳へて言へり。『堵提氏の子なる須婆儒童が尊者阿難に、少病、少惱、起居輕利、氣力、安穩住を尋ねて、尚、次の如く言へり。「尊者阿難が哀愍して、堵提氏の子なる須婆儒童の住處に來り給はゞ幸甚なり」と』。是の如く語りし時に、沙門阿難は吾に次の如く言へり。『儒童よ、我は今藥を服せしばかりにて、都合宜しからず。されど、明日にも適宜の機會を見て至らんとす』と。是の

如く、彼の尊者阿難が明日にも、機會を見て來るまでに取り運べり」。

五　時に長老阿難は、其の夜が過ぎて、午前に衣服を整理して、制多迦(チェータカ)比丘を隨行の沙門として、堵提氏の子なる須婆儒童の住處に至り、至り已りて、設けの座に著けり。時に堵提氏の子なる須婆儒童は、長老阿難の近くに詣り、詣り已りて、長老阿難に挨拶して親善の詞を交はして、一邊に坐せり。堵提子の子なる須婆儒童は一邊に坐して、長老阿難に次の如く言へり。

「尊者阿難は、彼の尊者瞿曇に永く承侍し、近住し、給事せり。尊者阿難は、彼の尊者瞿曇が稱讃し、此の人々を勸導して入らしめ住せしめ給ふ所の諸法を知らるゝならん。阿難よ、彼の尊者瞿曇が稱讃し給ふ所の諸法は何か。又此の人々を何處に勸導し入らしめ住せしめ給ふや」。

六　「儒童よ、彼の世尊は三蘊を稱讃し給へり。又此の人々を此處に勸導し入らしめ住せしめ給へり。三とは何なりや。聖なる戒蘊と、聖なる定蘊と、聖なる慧蘊となり。儒童よ、此等の三蘊を、彼の世尊は稱讃し、又其處に此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ひき」。

「復阿難よ、彼の尊者瞿曇が稱讚し、又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の戒蘊とは何か」。

七―二九　「儒童よ、今世に如來出現し…乃至…儒童よ、比丘は是の如く戒を具足せるなり。〔沙門果經四〇―六三參照〕。

三〇　儒童よ、此が所謂、彼の世尊が稱讚し、又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の聖なる戒蘊なり。更に又此の中に於て成辨を要するものあり」。「阿難よ、希奇なり、阿難よ、未曾有なり。阿難よ、所謂此の聖なる戒蘊は圓滿せり、不圓滿に非ず。阿難よ、我は是の如く圓滿せる聖なる戒蘊を、佛敎以外の沙門婆羅門の中に見ず。阿難よ、若し佛敎以外の沙門婆羅門が、自己の中に是の如く圓滿せる聖なる戒蘊を見るならば、彼等は唯此のみにて滿足し、『此のみにて充分なり、此のみにて沙門の目的は達せられたり此以上我等の成辨を要するもの無し』とするならん。然るに尊者阿難は『更に又此の中に於て成辨を要するものあり』と云ふ」。

第二誦品

一—一二　「復阿難よ、彼の尊者瞿曇が稱讃し又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の聖なる定蘊とは何か」。

「儒童よ、又如何にして比丘は諸根の門を保護するや、…乃至…その全身何れとして離より生ぜる喜樂に由りて洽普せられざるなし。〔同經六四—七六參照〕

一三　儒童よ、比丘は諸欲を遠離れ、不善法を離れ已りて、離より生じて、尚尋あり、伺あり、喜樂ある初禪を具足して住す。その初禪は卽ち離より生ぜる喜樂に由りて此の身を潤ほし、遍ねく潤ほし、充滿し、普遍し、彼の全身は、離より生ぜる喜樂に由りて洽普せられざるなし。此も亦彼の定の中に有り。

一四—一五　儒童よ、更に又比丘ありて尋伺を滅して…乃至…〔その全身何れと
208 して〕洽普せられざるなし。〔同經七七—七八參照〕。…乃至…此も亦彼の定の中に有り。

一六—一八　儒童よ、更に又比丘ありて喜を離れて捨となりて住し…乃至…〔その全身いづれとして〕洽普せられざるなし〔同經七九—八二參照〕。…乃至…此も亦彼

の定の中にあり。

一九　儒童よ、此が所謂、彼の世尊が稱讃し、又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の聖なる定蘊なり、更に又此の中に於て成辨を要するものあり」。「阿難よ、希奇なり、阿難よ、未曾有なり。阿難よ所謂此の聖なる定蘊は圓滿せり、不圓滿に非ず。阿難よ、我は是の如く圓滿せる聖なる定蘊を、佛敎以外の沙門婆羅門の中に見ず。阿難よ、若し佛敎以外の沙門婆羅門が、自己の中に是の如く圓滿せる聖なる定蘊を見るならば、彼等は唯此のみにて滿足し、『此のみにて充分なり、此のみにて沙門の目的は達せられたり、此以上我等の成辨を要するもの無し』とするならん。然るに尊者阿難は『更に又此の中に於て成辨を要するものあり』と云ふ。

二〇―二一　復阿難よ、彼の尊者瞿曇が稱讃し、又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の聖なる慧蘊とは何か」。

「是の如く心寂靜純淨に…乃至…〔我が識はこれに依存し〕これに關聯せるものなり。〔同經八三・八四參照〕。

二二　儒童よ、比丘は是の如くに心寂靜純淨に、純潔に、無穢に、隨煩惱無く、柔軟に、堪忍に、堅住し、不動を得たる時、知見のために、凡ての心を引發し引導して、彼は是の如くに知る。『此の身は色なり、四大所造なり、母と父とより生じ、飯と粥との積集なり、無常と消耗と磨滅と破壞と壞滅とを本性とす、而して我が識は、これに依存し、これに關聯せるものなり』と。此も亦彼の慧の中に有り。

209

二三―二四　彼は、是の如く心寂靜…乃至…『一切の大肢と小肢と、異常なる根『とを有する他の身を化作す』。〔同經八五・八六參照〕。此も亦彼の慧の中に有り。

二五―三五　彼は、是の如く、心寂靜…乃至…『更に此の生に來ることなし』と證知す。〔同經八七・九八參照〕

三六　儒童よ、比丘は是の如くに心寂靜純淨に、純潔に、無穢に、隨煩惱無く、柔軟に、堪忍に、堅住し、不動を得たる時、❶漏盡智のために、凡ての心を引發し引導して、彼は、『此は苦なり』と如實に知る。『此は苦の集なり』と如實に知る。『此は苦の滅なり』と如實に知る。『此は苦の滅に至る道なり』と如實に知る。『此は漏なり』と如實に知る。『此は漏の集なり』と如實に知る。『此は漏の滅なり』と如實に知る。『此は漏の

滅に至る道なり』と如實に知る。是の如くに知り、是の如くに見る時は、彼の心は欲漏を解脱し、〔彼の〕心は又有漏を解脱し、〔彼の〕心は又無明漏を解脱す。解脱せる時に解脱せりとの智生ず。『生は盡きたり、梵行は濟まされたり、成辦すべきことは已に成辦せられたり、更に此の生に來ることなし』と證知す。此も亦彼の慧の中に有り。

三七　儒童よ、此が所謂、彼の世尊が稱讃し、又此の人々を勸導し入らしめ住せしめ給ふ所の聖なる慧蘊なり。更に又此の中に於て成辦を要するもの無し」。

「阿難よ、希奇なり、阿難よ、未曾有なり。又阿難よ所謂此の聖なる慧蘊は圓滿せり、不圓滿に非ず。又阿難よ、我は是の如く圓滿せる聖なる慧蘊を、佛教以外の沙門婆羅門の中に見ず。而して此の中に於て更に成辦を要するもの無しと云ふ。阿難よ、最勝なり、阿難よ、最勝なり。譬へば倒れたるものを起すが如く、隱れたるものを顯はすが如く、迷へるものに道を敎ゆるが如く、具眼者は物を見るために闇中に燈光を持ち來るが如く、正に是の如く、尊者阿難は種々の方法を以て法を開示したり。阿難よ、此我は世尊瞿曇に歸依す、又法に歸依す、又比丘僧に歸依す。

尊者阿難よ、願くは我を優婆塞と知れ、今日より始めて、生ある間の歸依を爲し已る」、と。[2]

註 ❶底本には āsavānaṁ khaya ñāṇāya（漏の盡のゆへに智の爲に）とあれども、是にては意義妥當ならざれば、今は沙門果經の類文 āsavānaṁ khaya-ñāṇāya による。
❷此の「と」は經の最初の「是の如く我聞く」と云へる語を結ぶ。

堅固経（けんごぎょう） (Kevaṭṭa-sutta)

坂本幸男（さかもとゆきお）訳

一一　堅固經（ケーヴッダ・スッタ）

一　是（かく）の如く我（われ）聞く。一時、世尊は那爛陀（ナーランダ）城の婆婆利菴羅（パーヴーリカ）園に在しき。爾（そ）の時、居士堅固（ケーヴッダ）は世尊の御許に來詣し、詣り了りて、世尊に敬禮し、一方に坐せり。一方に坐したる居士堅固は、爾の時世尊に言へり。

「世尊、この殷盛豐樂にして人民熾盛なる那爛陀城の市民は、世尊を信敬し奉れり。善き哉、世尊、世尊は一比丘に、❶上人法によりて神通神變を現すべしと示教し給へ。然らば、この那爛陀市民は、益々世尊を信敬し奉るならん」と。

斯く言へる時、世尊は居士堅固に告げ給へり。

「堅固よ、實に我は比丘等に、『汝比丘等よ、白衣の在俗者等の爲に、上人法によりて神通神變を現すべし』と、是の如き法を示教せず」と。

二　再び居士堅固は世尊にかく言へり。

「世尊、我は世尊を惱し奉らんとするには非ず。而も尚、重ねて此のことを白（まを）さ

ん。世尊、この殷盛豐樂にして人民熾盛なる那爛陀の市民は、世尊を信敬し奉れり。善き哉、世尊、世尊は一比丘に、上人法によりて神通神變を現すべしと示敎し
212 給へ。然らば、この那爛陀市民は、益々世尊を信敬し奉るならん」と。

世尊は再び、居士堅固に告げ給へり。

「堅固よ、實に我は比丘等に、『汝比丘等よ、白衣の在俗者等のために、上人法によりて神通神變を現すべし』と、是の如き法を示敎せず」と。

三　三度、居士堅固は世尊にかく言へり。

「世尊、我は世尊を惱し奉らんとするには非ず。而も尚、重ねて此のことを白さん。世尊、この殷盛豐樂にして人民熾盛なる那爛陀の市民は、世尊を信敬し奉れり。善き哉、世尊、世尊は一比丘に、上人法によりて神通神變を現すべしと示敎し給へ。然らば、この那爛陀市民は、益々世尊を信敬し奉つるならん」。

「堅固よ、この三種の神變は、我自らこれを認知し體現して敎說せるものなり。三種とは何ぞや。謂く、神通神變と觀察他心神變と敎誡神變となり。

四　堅固よ、また神通神變とは何ぞや。堅固よ、茲に一比丘の能く無量種の神通

213

を現ずるものあり。一身をもつて能く多身を現じ、多身をもつて能く一身と作し、或は顯れ或は隱れ、墻·壁·山嶽を通過して無礙なること、恰も虚空に於けるが如く、大地に出沒すること、水中に於けるが如く、水上を渉りて沒せざること、地上に於けるが如く、虚空の中に於て結跏趺坐して駛行すること、恰も翼ある鳥の如く、かの如々(しかじか)の大神力と大威德とを有する日月を捫摸し、現身をもつて能く梵天の世界にまで達す。或る得信の歸依者にして、一比丘のよく無量種の神通を現じて、一身をもつて能く多身を現じ、多身をもつて能く一身と作し、或は顯れ或は隱れ、墻·壁·山嶽を通過して無礙なること、恰も虚空に於けるが如く、或は大地に出沒すること、水中に於けるが如く、水上を渉りて沒せざること、地上に於けるが如く、虚空の中に於て結跏趺坐して駛行すること、恰も翼ある鳥の如く、かの如々(しかじか)の大神力と大威德とを有する日月を捫摸し、現身をもつて能く梵天の世界にまで達するを見るものあり。

五　彼の得信の歸依者、此を或る未信未歸依の者に語りて言く、『友よ、奇なる哉、友よ、希なる哉、沙門の大神通大威德たるや。我は一比丘の能く無量種の神通を

現じて、一身をもつて能く多身を現じ…乃至…現身をもつて能く梵天の世界にまで達するを見たり』と。かの未信未歸依の者は、かの得信の歸依者に是の如くに答ふるならん。『實に友よ、建駄梨と名くる明呪あり。かの比丘は、かの明呪によりて、無量種の神通を現すなり。卽ち、一身をもつて能く多身を現じ…乃至…現身をもつて能く梵天の世界にまで達するなり』と。堅固よ、汝は如何に考ふるや。かの未信未歸依の者は、かの得信の歸依者に、是の如く言はざらんや」。

「世尊、是の如く言ふならん」。

「されば堅固よ、我は神通神變に於て過患を觀るを以て、神通神變を厭患し、慚愧し、避遣するなり。

六　また堅固よ、觀察他心神變とは何ぞや。堅固よ、玆に一比丘の能く諸の他の有情及び他人の心を觀察し、心所を觀察し、尋を觀察し、伺を觀察して、『汝の意は是の如く、汝の意は斯くの如く、汝の心は是の如し』といふものあり。或る得信の歸依者にして、かの一比丘の能く諸の他の有情及び他人の心を觀察し、心所を觀察し、尋を觀察し、伺を觀察して、『汝の意は是の如く、汝の意は是の如く、汝の心は

是の如し』と言ふを見るものあり。

七　かの得信の歸依者は、此を或る未信未歸依の者に語りて言く、『友よ、奇なる哉、友よ、希なる哉、沙門の大神通大威德たるや。我は一比丘の能く諸の他の有情及び他人の心を觀察し、心所を觀察し、尋を觀察し、伺を觀察して、「汝の意は是の如く、汝の意は是の如く、汝の心は是の如し」といふを見たり』と。これを聞きしかの未信未歸依の者は、かの得信の歸依者に是の如く答ふるならん。『友よ、摩尼柯(マーニカ)と名くる明呪あり。かの比丘は、かの明呪によりて、諸の他の有情及び他人の心を觀察し、心所を觀察し…乃至…「汝の意は是の如く、汝の意は是の如く、汝の心は是の如し」と言ふならん』と。堅固よ、汝は如何に考ふるや。彼の未信未歸依の者は、かの得信の歸依者に是の如く言はざらんや」。

「世尊、是の如く言ふならん」

「されば、堅固よ、我は觀察他心神變に於て過患を觀るを以て、觀察他心神變を厭患し、慚愧し、避遣するなり。

八　復次に敎誡神變とは何ぞや。堅固よ、玆に一比丘の是の如く敎誡するもの

あり。『汝等は是の如く尋思すべく、是の如く尋思すること勿れ。是の如く作意すべく、是の如く作意すること勿れ。此を捨離し、彼に到達して住すべし』と。これは實に、堅固よ、敎誡神變と稱せらるゝなり。

九—四三　更にまた、堅固よ、いま世に如來出現し、〔如來は〕應供・等正覺…乃至…

〔沙門果經四〇—七四參照〕。

四四　かの五蓋を捨て去りたる自己を觀るものには歡喜生じ、歡喜せるものには喜生じ、喜を懷くものには身安穩となり、身安穩なれば樂を覺え、樂となれば心三昧に入る。彼は諸欲を去り、不善法を離れて、有尋有伺にして、離より生ずる喜と樂とのある初禪に達して住す。彼は離より生ずる喜と樂とを以て、其の身を

215

潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして、離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるは無し。〔同經七五參照〕

四五　譬へば、堅固よ、熟練せる湯屋の浴僕若しくはその徒弟が、金盥に洗粉を撒き、水を滴々注ぎて混ぜむに、かの洗粉は潤ひ、潤ひによりて碎け、內外共に潤ひを以て周遍して漏るゝことなきが如し。是の如く、堅固よ、離より生ずる喜と樂と

を以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして、離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるは無し。是は實に堅固よ、敎誡神變と稱せらるゝものなり。〔同經七六參照〕。

四六―四九〔同經七七―八〇參照〕。

五〇―五一　…第四禪に達して住す…乃至…是は實に、堅固よ、敎誡神變と稱せらるゝものなり。〔同經八一―八二參照〕。

五二　かくて心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、而も安住して不動の狀態にある時、比丘は心を智見に傾け注ぐ…乃至…是は堅固よ、敎誡神變と稱せらるゝものなり。〔同經八三參照〕

五三―六六　…『更に此の生に來ることなし』と證知す。是は堅固よ、敎誡神變と稱せらるゝものなり。〔同經八四―九八參照〕。

六七　堅固よ、この三種の神變は、我自らこれを認知し體現して敎說せるものなり。堅固よ、昔嘗て此の比丘の敎團中に於て、一人の比丘の心に、是の如き思念起れり、『何處に此等四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝや』と。爾の時、

堅固よ、彼の比丘は心が統一して、天に趣く道の現るゝが如き定に入れり。

六八　爾の時、堅固よ、かの比丘はかの四大王衆天の所に往き、到り了りて四大王衆天に、是の如く問へり。『卿等よ、何處に此等の四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝや』と。

斯く問はれし時、堅固よ、四大王衆天はかの比丘に答へて言へり。『比丘よ、吾等は實に、何處に此等四大種、卽ち地界・水界・火界・風界が盡く滅せらるゝやを知らず。比丘よ、吾等より遙かに優り勝れたる四大王あり。彼等は、何處に此等の四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝやを知るならん』と。

六九　爾の時、堅固よ、彼の比丘は彼の四大王の所に往き、到り了りて四大王に問へり。『卿等よ、何處に此等の四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝや』と。

斯く問はれし時、堅固よ、四大王は彼の比丘に答へて言へり。「比丘よ、吾等は實に、何處に此等四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝやを知らず。比丘よ、吾等より優り勝れたる三十三天と名くる天あり。彼等は、何處に此等四大

種、卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝやを知るならん』と。

七〇 爾の時、堅固よ、彼の比丘は三十三天の所に往き、到り了りて三十三天に問へり。『卿等よ、何處に此等の四大種、卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝや』と。

斯く問はれし時、堅固よ、三十三天は彼の比丘に答へて言へり。『比丘よ、我等は實に、何處に此等の四大種、卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝやを知らず。比丘よ、我等より優り勝れたるサッカと名くる天主帝釋あり。彼は何處に此等の四大種、卽ち地界…乃至…風界が盡く滅せらるゝやを知るならん』と。

217 **七一** 爾の時、堅固よ、かの比丘は帝釋天の所に往き…(乃至)…『…比丘よ我より優り勝れたる夜摩(ヤーマ)と名くる天あり…(乃至)…知るならん』と。

七二 爾の時、堅固よ、かの比丘は夜摩天の所に往き…(乃至)…『…比丘よ我等より優り勝れたる須夜摩(スヤーマ)と名くる天子あり…(乃至)…知るならん』と。

218 **七三** 爾の時、堅固よ、かの比丘は須摩天子の所に往き…(乃至)…『…比丘よ、我より優り勝れたる覩史多(トゥシタ)と名くる天あり…(乃至)…知るならん』と。

七四　爾の時、堅固よ、かの比丘は覩史多天の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我等より優り勝れたる覩史多天子と名くる天子あり…〔乃至〕…知るならん』と。

七五　爾の時、堅固よ、かの比丘は覩史多天子の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我より優り勝れたる樂變化天と名くる天あり…〔乃至〕…知るならん』と。

七六　爾の時、堅固よ、かの比丘は樂變化天の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我等より優り勝れたる妙化天子と名くる天子あり…〔乃至〕…知るならん』と。[219]

七七　爾の時、堅固よ、かの比丘は妙化天子の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我より優り勝れたる他化自在天と名くる天あり…〔乃至〕…知るならん』と。

七八　爾の時、堅固よ、かの比丘は他化自在天の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我等より優り勝れたる自在天子と名くる天子あり…〔乃至〕…知るならん』と。

七九　爾の時、堅固よ、かの比丘は自在天子の所に往き…〔乃至〕…『…比丘よ、我より[220]優り勝れたる梵衆天と名くる天あり…〔乃至〕…知るならん』と。

八〇　爾の時、堅固よ彼の比丘は心が統一して、天に趣く道の現はるゝが如き定に入れり。爾の時、堅固よ彼の比丘は梵衆天の所に往き到り了りて、梵衆天に問

へり。『卿等よ、何處に此等四大種卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝや』と。斯く問はれし時、堅固よ、梵衆天はかの比丘に答へて言へり。『比丘よ、實に我等は何處に此等四大種卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝやを知らざるなり。比丘よ、梵天、大梵天、勝者、無能勝者、一切見者、支配者、自在者、作者、化作者、優越者、創造者、主宰者にして已生未生のものゝ父なるものあり。彼は我等より優り勝る。彼は何處に此等四大種卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝやを知るならん』。

『卿等よ、然らばかの大梵天は今何處に在りや』。

『比丘よ、我等は實に梵天は何處に何によりて何れの方に〔住するやを〕知らざるなり。されど比丘よ、光相現じて光明生じ光耀顯はれなば梵天は出現すべし。光明生じ光耀顯はるゝは、これ梵天出現の前兆なり』

八一　爾の時、堅固よ、かの大梵天は久しからずして出現せり。時に、堅固よ、かの
221 比丘はかの大梵天の所に往き、到り了りて梵天に問へり。『卿よ、何處に此等四大種、卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝや』と。

斯く問はれし時、堅固よ、かの大梵天はかの比丘に答へて言へり。『比丘よ、我は梵天なり、大梵天なり、勝者なり、無能勝者なり、一切見者なり、支配者なり、自在者なり、作者なり、化作者なり、優越者なり、創造者なり、主宰者なり、已生未生のものゝ父なり』と。

八二　堅固よ、彼の比丘は再びかの梵天に問へり。『卿よ、我は卿に、「卿は梵天、大梵天、勝者、無能勝者、一切見者、支配者、自在者、作者、化作者、優越者、創造者、主宰者、已生未生のものゝ父なりや」と問ふに非ず。卿よ、我は卿に、「何處に此等四大種、卽ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝや」と問ふなり』と。

堅固よ、かの大梵天は再びかの比丘に答へて言へり。『比丘よ、我は梵天なり、大梵天なり、勝者なり、無能勝者なり、一切見者なり、支配者なり、自在者なり、作者なり、化作者なり、優越者なり、創造者なり、主宰者なり、已生未生のものゝ父なり』と。

八三　堅固よ、かの比丘は三度かの大梵天に是の如く問へり。『卿よ、我は卿に、「卿は梵天、大梵天、勝者、無能勝者、一切見者、支配者、自在者、作者、化作者、優越者、創造者、主宰者、已生未生の父なりや」と問ふに非ず。卿よ、實に我は卿に、「何處に此等四大

種、即ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝや』と問ふなり』と。

その時、堅固よ、かの大梵天はかの比丘の腕を捉へて一隅に退き、かの比丘に語りて言へり。『比丘よ、この世界に於ては、梵衆天は、「如何なるものと雖も、梵天の見ざるもの無く、如何なるものと雖も、梵天の知らざるもの無く、如何なるものと雖も、梵天の經驗せざるものは無し」と想へり。かるが故に、我は彼等の面前にて説明せざりしなり。されど比丘よ、我は實に、何處に此等四大種、即ち地界…乃至…風界は盡く滅せらるゝやを知らざるなり。されば、比丘よ、この世界においては、かの世尊を措きて、此の質疑の解答を他に索めんと試むるが如きは、これ汝の苦患にして、又汝の過失なり。汝比丘よ、往け、而してかの世尊の所に往詣して、此の疑問を質し、世尊が汝に説明さるゝ如くに受持せよ』と。

八四　その時、堅固よ、かの比丘は、恰も力ある人が、曲れる臂を伸ばし、伸したる臂を曲ぐるが如く、速かに梵天の世界より姿を消して、我が前に現れたり。爾の時、堅固よ、比丘は我を敬禮して一方に坐せり。堅固よ、一方に坐してかの比丘は我に是の如く言へり。『世尊、何處に此等四大種、即ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せ

比丘よ、是の如く問ひたるを以て、堅固よ、我はかの比丘に答へて言へり。『比丘よ、昔航海業者が、陸地を捜むる一羽の鳥を携へて、船に乘りて海洋を航行し、陸地が視界より沒せし時、彼等は陸地を捜むる鳥を船より放てるに、かの鳥は東方に飛び、南方に行き、西方に往き、北方に馳り、上方に翔り、四維に翱べり。而して若し彼が何處にか陸地を發見せんには飛び去らんこと確實なるも、これに反して彼若し何處にも陸地を見出すこと能はざらんには彼の船に還り來るなり。比丘よ、汝も亦是の如し、この質疑の解説を尋めて、梵天の世界にまで往きけるに得ること能はずして我が前に還り來れるなり。さて比丘よ、汝は「世尊、何處に此等四大種、卽ち地界・水界・火界・風界は盡く滅せらるゝや」の如き質問をなすべからず、比丘よ是の如く質問すべきなり。

何の處に、水と地・火・風は確立せざるや。

何の處に長と短、細と麁、淨と不淨も「確立せざる」や。

何の處に、名と色とは殘りなく永滅さるゝや。

玆にその解答あり。
識は不可見無量にして、一切處に❷遍通せり。
玆には水と地・火・風は確立すること無し。
玆には長と短細と麁淨と不淨も亦然り。
玆には名と色とは殘りなく永滅さる。
識の滅するによりて、玆に〔この一切〕は永滅さるゝなり』と」。
佛陀は是の如く告げ給へり。〔爾の時〕歡びに充てる居士堅固は、〔佛の〕所説に歡喜せり。

註❶上人法とは uttari-manussa-dhamma を譯せり。超人間的の能力を云ふなり。

❷原語 pahaṁ の語義明かならず。佛音は tittha (道)の義に解し、オットー・フランケは之に從へり。此の語義に就いてノイマン、リス・デギッツの意見もあれど、今は暫く佛音の註に從ひて「遍通」と譯したり。

露遮経 (Lohicca-sutta)

花山信勝 訳

224

一三 露遮經（ローヒッチャ・スッタ）

一 是の如く我聞く。一時、世尊、大比丘衆五百人と倶に拘薩羅國を遊行し、娑羅婆提村に入り給へり。時に露遮婆羅門ありて沙羅婆提村を領せり。〔その村は〕人民熾盛にして、草木〔繁茂し〕、水〔利便にして、五〕穀豐饒なる王領地にて、拘薩羅國王波斯匿によつて與へられたる淨施の拜領地なりき。

二 爾の時露遮婆羅門は是の如き惡見を生じ居たりき。「沙門或は婆羅門が善法を知るとも、その證知せる善法を他人の爲に説くべからず。その故は、他人が他人の爲に何をかなし得んや。そは恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如し。かゝることを貪慾の惡法なりと我は説く。その故は他人が他人の爲に何をかなし得んや」と。

三 時に露遮婆羅門は〔次の如き噂を聞けり。〕「釋迦族より出家したる釋子沙門瞿曇は、拘薩羅國を遊行し、大比丘衆五百人と倶に娑羅婆提村に到來せり。彼世

尊瞿曇の名聲は斯く天下に聞えたり。『かくて世尊は應供なり、等正覺なり、明行具足なり、善逝なり、世間解なり、無上士なり、調御丈夫なり、天人師なり、佛陀なり、世尊なり』と。彼は此の天界・魔界・梵天界を含むこの世界、沙門・婆羅門・天・人衆のこと225を、自覺自證して〔他人のために〕說く、彼は初も善く、中も善く、終も善く、文義共に備はれる法を說き、完全にして清淨なる梵行を說示す。宜しく〔往いて〕是の如き應供を見るべきなり』と。

四　爾の時、露遮婆羅門は剃頭師ベーシカに告げて言へり。「さて、ベーシカよ、沙門瞿曇の許に詣り、『瞿曇よ、露遮婆羅門は世尊の無病・息災・氣力安住を伺ひまつる』とのわが語によつて、沙門瞿曇の無病・息災・氣力・安住を伺ひまつれ、而してかく言へ、『尊者瞿曇は、露遮婆羅門の明日の饗を、比丘衆と倶に受け給はんことを』と」。

五　「宜なり、尊者よ」と、剃頭師ベーシカは露遮婆羅門〔の言〕に應じて、世尊の許に到り、世尊を禮して一方に坐せり。一方に坐して、剃頭師ベーシカは世尊にかく言へり。

「世尊、露遮婆羅門は、世尊の無病・息災・氣力・安住を伺ひ、而してかく言へり、『世尊

は露遮婆羅門の明日の饗を、比丘衆と倶に受け給はんことを』と」。

〔爾の時〕世尊は、默然として請を受け給へり。

六 時に剃頭師ベーシカは、世尊の承諾を知りて座より起ち、世尊を禮し右繞の禮をなし露遮婆羅門の所に到りて告げて言く「さて尊者よ、我等は卿の言を世尊に告げぬ、『世尊、露遮羅門は世尊の無病・息災・氣力・安住を伺へり、而してかく言へり、「世尊は露遮婆羅門の明日の饗を、比丘衆と倶に受け給はんことを」と』」。

七 かくて露遮婆羅門は、翌日自宅に美味なる嚼食・噉食を調へ、剃頭師ベーシカに告げて言へり。「さて、ベーシカよ沙門瞿曇の許に詣りて、『瞿曇よ、時なり、食膳齊へり』と、時を告げよ」と。

「宜なり、尊者よ」と、剃頭師ベーシカは、露遮婆羅門〔の言〕に應じて世尊の許に詣り、世尊を禮して一方に立てり。一方に立ちて剃頭師ベーシカは、「世尊、時なり、食膳齊へり」と、世尊に時を告げぬ。 時に世尊は早朝下衣を整へ、上衣と鉢とを執りて、比丘衆と倶に娑羅婆提村に赴き給へり。

八 爾の時、剃頭師ベーシカは世尊に隨へり。 而して世尊にかく言へり。

「露遮羅門は是の如き惡見を生ぜり、『沙門或は婆羅門が善法を知るとも、その證知せる善法を、他人の爲に說くべからず。その故は、他人が他人の爲に何をかなし得んや。そは恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如し。かゝることを貪慾の惡法なりと我は說く。その故は他人が他人の爲に何をか爲し得んや』と。世尊願くは露遮婆羅門の此の惡見を除かしめ給へ」。

「ベーシカよ、爾かあらむ、ベーシカよ、爾かあらむ」。

九　爾の時、世尊は露遮婆羅門の宅に到り、設けられたる座に著き給へり。かく
227 て露遮婆羅門は美味なる嚼食・噉食を以て、佛陀並びに比丘衆を手ら供養せり。世尊の食事了り鉢を去り、澡水を行じ終り給へる時、露遮婆羅門は一の小床を取りて一方に坐せり。かく坐せる露遮婆羅門に、世尊は曰へり、

「露遮よ實に汝は『沙門或は婆羅門が善法を知るとも、その證知せる善法を他人の爲に說くべからず。その故は、他人が他人の爲に何をかなし得んや。そは恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如し。かゝることを貪慾の惡法なりと我は說く。その故は他人が他人の爲に何をか爲し得んや』と、かゝる惡見を生じ

たりや」。

「瞿曇よ、爾り」。

一〇 「露遮よ、汝は如何に思惟するや。汝は娑羅婆提村を領せるや」。

「瞿曇よ、爾り」。

「さらば露遮よ、若し人ありて、『露遮婆羅門は娑羅婆提村を領す、娑羅婆提村の生産は獨り露遮婆羅門のみが享有すべく他人に與ふべからず』と云ふ者ありとせむに、汝に依つて生活せる人々にとりて彼は障害者なりや否や」。

「瞿曇よ、障害者なり」。

「露遮よ、障害者たる者は彼等に利益恩惠を持つ者なりや、將た持たざる者なりや」。

「瞿曇よ、彼は利益恩惠を持たざる者なり」。

「利益恩惠を持たざる者に彼等に對する慈心の起るものなりや、將た害心の起るものなりや」

「瞿曇よ、害心の起るものなり」。

「害心の起るは邪見なりや、將た正見なりや」。

「瞿曇よ、それは邪見なり」。

「露遮よ、邪見〔の人〕には、地獄又は畜生の二道中何れかの道あるべきのみと、我は說く。

一一　露遮よ、汝は如何に思惟するや。拘薩羅國王波斯匿は、迦尸(カーシ)と拘薩羅とを領せるや」。

「瞿曇よ、爾り」。

「さらば露遮よ、若し人ありて、『拘薩羅國王波斯匿は、迦尸と拘薩羅とを領す、迦尸と拘薩羅との生產は、獨り拘薩羅國王波斯匿のみが享有すべく他人に與ふべからず』と云ふ者ありとせむに、拘薩羅國王波斯匿に依つて生活せる汝自身及び他の人々にとりて、彼は障害者なりや否や」。

「瞿曇よ、障害者なり」。

「障害者たる者は彼等に利益恩惠を持つ者なりや、將た持たざる者なりや」。

「瞿曇よ、利益恩惠を持たざる者なり」。

「利益恩惠を持たざる者に、彼等に對する慈心の起るものなりや、將た害心の起るものなりや」。

「瞿曇よ、害心の起るものなり」。

「害心の起るは邪見なりや、將た正見なりや」。

「瞿曇よ、そは邪見なり」。

「露遮よ、邪見の人には、地獄又は畜生の二道中何れかの道あるのみなりと、我は說く。

一二　かく、露遮よ、若し人ありて、『露遮婆羅門は娑羅婆提村を領す、娑羅婆提村の生產は獨り露遮婆羅門のみが享有すべく、他人に與ふべからず』と云ふ者ありとせば、彼は汝に依つて生活せる人々にとりて障害者なり、障害者たる者は利益恩惠を持たざる者なり、利益恩惠を持たざる者には害心の起るものなり、害心の起るは邪見なり。

一三　是の如く、露遮よ、『沙門或は婆羅門が善法を知るとも、その證知せる善法を他人の爲に說くべからず、その故は、他人が他人の爲に何をかなし得んや、そは

229
恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如し、そを貪慾の惡法なりと我は說く、その故は他人が他人の爲に何をかなし得んや』と云ふ者あらんに、彼は、如來の敎へたる法と律とに從ひ、預流果を證し、一來果を證し、不還果を證し、阿羅漢〔果〕を證せるが如き、勝れたる地位に到達せる良家の人々にとり、〔又生天の行を積みて天界に生ぜんとする人々にとりて障害者なり、障害者たる者は利益恩惠を持たざる者なり、利益恩惠を持たざる者には害心の起るものなり、害心の起るは邪見なり。露遮よ、邪見〔の人〕には、地獄又は畜生の二道中、何れかの道あるのみなりと我は說く。

一四　かく露遮よ、若し人ありて、『拘薩羅國王波斯匿は迦尸と拘薩羅とを領す、迦尸と拘薩羅との生產は獨り拘薩羅國王波斯匿のみが享有すべく他人に與ふべからず』と云ふ者ありとせむに、拘薩羅國王波斯匿に依つて生活せる汝自身及び他の人々にとりて、彼は障害者なり、障害者たる者は利益恩惠を持たざる者なり、利益恩惠を持たざる者には害心の起るものなり、害心の起るは邪見なり。

一五　是の如く、露遮よ、『沙門或は婆羅門が善法を知るとも、その證知せる善法

を他人の爲に說くべからず、その故は他人が他人の爲に何をかなし得んや、そは恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如しと我は說く、その故は、他人が他人の爲に何をかなし得んや』と云ふ者あらば彼は、如來の敎へたる法と律とに從つて預果流を證し、一來果を證し、不還果を證し、阿羅漢〔果〕を證せるが如き、勝れたる地位に到達せる良家の人々にとり、〔又〕生天の行を積みて天界に生ぜんとする人々にとりて障害者なり、障害者たる者は利益恩惠を持たざる者なり、利益恩惠を持たざる者には害心の起るものなり、害心の起るは邪見なり。露遮よ、邪見〔の人〕には、地獄又は畜生の二道中、何れかの道あるのみなりと、我は說く。

一六 露遮よ、世には難ぜらるべき三師あり、而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適ひて罪なし。三〔師〕とは何ぞや。

露遮よ、こゝに一師あり彼は出家し修道しながら、その目的たる沙門果を未だ得ずして弟子等に法を說きて言く、『こは汝等の利益になるもの、こは汝等の幸福になるものなり』と。弟子等は彼〔の言〕を聞かず、耳を傾けず、[1]菩提心を育まずし

て、師敎を離れて〔自らの道に〕進む。彼は次の如く難ぜらるべし。『尊者は出家し修道しながら、そが目的たる沙門果を未だ得ずして、弟子等に法を說きて、「こは汝等の利益になるもの」と言ふも、かの弟子等はそ〔の言〕を聞かず、耳を傾けず、菩提心を育まずして、師敎を離れて〔自らの道に〕進む。そは恰も逃げんとする女に熱中し、又は顏を背くる女を抱かんとするが如し。そは貪慾の惡法なりと我は說く。その故は他人が他人の爲に何をかなし得んや』と。

露遮よ、こは世に難ぜらるべき第一の師なり、而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適ひて罪なし。

一七　露遮よ、更に又こゝに一師あり彼は出家し修道しながら、そが目的たる沙門果を未だ得ずして、弟子等に法を說きて言く、『こは汝等の利益になるもの、こは汝等の幸福になるものなり』と。弟子等は彼〔の言〕を聞き、耳を傾け、菩提心を育み、而も師敎を離れて〔自らの道に〕進むことなし。彼は次の如く難ぜらるべし。『尊者は出家し修道しながら、そが目的たる沙門果を未だ得ずして、弟子等に法を說きて、「こは汝等の利益になるもの、こは汝等の幸福になるもの」と言ふ。かの弟子

等はその言を聞き、耳を傾け、菩提心を育み、而して師教を離れて自らの道に進むことなし。そは恰も自己の畑を打棄てゝ他人の畑の草取りをせんと思ふが如し。そは貪慾の悪法なりと我は說く、その故は他人が他人の爲に何をかなし得んや』と。

露遮よ、こは世に難ぜらるべき第二の師なり、而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適ひて罪なし。

一八　露遮よ、更に又こゝに一師あり、彼は出家し修道して、その目的たる沙門果を得、弟子等に法を說きて言く、『こは汝等の利益になるもの、こは汝等の幸福になるものなり』と。弟子等は彼の言を聞かず、耳を傾けず、菩提心を育まずして、師敎を離れて自らの道に進む。[2] 彼はかくの如く難ぜらるべし、『尊者は出家し修道して、その目的たる沙門果を得、弟子等に法を說きて、「こは汝等の利益になるもの、こは汝等の幸福になるもの」と言ふも、かの弟子等はその言を聞かず、耳を傾けず、菩提心を育まずして、師敎を離れて自らの道に進む。そは恰も故縛を壞して更に他の新縛を造るが如し。そを貪慾の悪法なりと我は說く。その故は他

人が他人の爲に何をかなし得んや』と。

露遮よ、こは世に難ぜらるべき第三の師なり、而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適ひて罪なし。

露遮よ彼等は世に難ぜらるべき三師なり、而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適ひて罪なし」と。

232

一九―五三　斯く言はれて露遮婆羅門は世尊に白して言へり。

「然らば瞿曇よ、世には難ぜらるべからざる師ありや」。

「露遮よ世に難ぜらるべからざる師あり」。

「爾らば瞿曇よ、世に難ぜらるべからざる師とは如何〔なる師〕なりや」。

「露遮よ、いま世に如來出現し、〔如來は〕應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊なり……乃至……〔沙門果經四〇―七四參照〕。

五四　かの五蓋を捨て去りたる自己を觀るものには歡喜生じ、歡喜せるものには喜生じ、喜を懷くものには身安穩となり、身安穩となれば樂を覺え、樂となれば心三昧に入る。彼は諸欲を去り不善法を離れて有尋有伺にして、離より生ずる

喜と樂とのある初禪に達して住す。彼は離より生ずる喜と樂とを以て、その身を潤漬し周遍し盈溢し充滿し、その全身何れとして離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし。〔同經七五參照〕。

233 **五五**　譬へば、露遮よ熟練せる湯屋の浴僕若しくはその徒弟が…〔乃至〕…その全身何れとして離より生ずる喜と樂とを以て洽普せられざるはなし〔同經七六參照〕。

露遮よ、いかなる師なりとも、弟子がその下にありて是の如き勝れたる地位に到達すとせば、その師は世に難ぜらるべからざる師なり。而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適はずして罪あり。

五六―六一　露遮よ、更に又比丘ありて尋伺を滅して、內心靜安となり、心專一となり、無尋無伺にして、定より生ずる喜と樂とのある第二禪…乃至…第三禪…乃至…第四禪に達して住す。〔同經七七―八二參照〕。

露遮よ、いかなる師なりとも、弟子がその下にありて是の如き勝れたる地位に到達すとせば、その師は世に難ぜらるべからざる師なり。而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適はずして罪あり。

六二　是の如く心寂靜純淨にして、煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、而も安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を智見に傾け注ぐ。

露遮よ、いかなる師なりとも、弟子がその下にありて是の如き勝れたる地位に到達すとせば、その師は世に難ぜらるべからざる師なり。而もかゝる師を難ずる者は、その非難は眞實に適はずして罪あり。

六三―七五　…乃至…〔同經八四―九六參照〕。

七六―七七　是の如く心寂靜純淨にして煩惱なく隨煩惱を遠離して柔軟、恒に活動せむとして、而も安住して不動の狀態に在る時、比丘は心を漏盡智に傾け注ぐ。彼は『こは苦なり』と如實に證知し…乃至…『更に此の生に來ることなし』と證知す。〔同經九七・九八參照〕。

露遮よ、いかなる師なりとも、弟子がその下にありて是の如き勝れたる地位に
234 到達すとせば、その師は世に難ぜらるべからざる師なり、而もかゝる師を難ずる者はその非難や眞實に適はずして罪あり』と。

七八　斯く說かれし時露遮婆羅門は世尊に白して言へり、「瞿曇よ恰も人ありて、

地獄に墮せんとする人を頭髮を摑み、救ひあげて地上に安立せしむるが如く、是の如く、世尊瞿曇によりて、地獄に墮せんとするものは救はれて地上に安立せり。微妙なる哉、瞿曇よ、微妙なる哉、瞿曇よ。恰も倒れたるものを起し、隱れたるものを現はし、迷へるものに道を示し、具眼者は物を見るべしとて、暗夜に油燈を持ち來るが如く、世尊瞿曇は種々の方便によつて、法を說き給へり。〔今〕我世尊瞿曇と法と比丘僧とに歸依し奉る。世尊瞿曇よ、願はくば我を、自今以後命終るまで〔世尊に〕歸依しまつる優婆塞として攝受し給へ」と。

註❶原語 aññā cittaṁ は、「羅漢果を得むとする意思」の義なれども、今は「菩提心」と譯せり。

註❷原典は na ca vokkamma satthu sāsanā vattanti（而して師教を離れて〔自〕らの道〔に〕進むことなし）とあれども、次下の非難文に vokkamma ca satthu sāsanā vattanti とあるによりて、今は文を修正して「進む」と譯したり。

三明経(さんみょうぎょう) (Tevijja-sutta)

山本通昭(やまもと つうしょう) 訳

一三 三明經（テーギッチャ・スッタ）

一 是(かく)の如く我(われ)聞く。一時、世尊、拘薩羅(コーサラ)國の人々に遊化をなさんとし、大比丘衆五百人と倶に拘薩羅國の婆羅門村なるマナサーカタに至り、その村の北方を流るゝ阿致羅筏底(アチラヴァティー)河の邊に於ける菴羅林に住し給ひき。

二 此の時マナサーカタ村には、甚だ高名にして富裕なる諸婆羅門ありて住せり。例へば商伽(チャンキー)婆羅門・多梨車(タールッカ)婆羅門・沸伽羅娑羅(ポッカラサーティ)婆羅門・生漏婆羅門・忉提耶(トーデーヤ)婆羅門等を始めとして、其の他の婆羅門等いづれもその名甚だ高く富裕なる人々なりき。

三 時に婆悉吒(ヴァーセッタ)と跋羅陀皤闍(バーラドヴァージャ)との二人ありて、休養の爲諸方を遊歩しつゝある間に、正道と邪道とに關して議論をなせり。

四 青年婆悉吒は云へり。「これ正道なり、この道眞正なり。解脱を欲する者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ、沸伽羅娑羅婆羅門の說く所

なり」。

五　青年跋羅陀皤闍は云へり。「これ正道なり、この道眞正なり。解脱を欲する者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ多梨車婆羅門の説く所

236 なり」。

六　青年婆悉吒は青年跋羅陀皤闍を説服し得ず、又青年婆羅陀皤闍も青年婆悉吒を説服し得ざりき。

七　此の時、青年婆悉吒は青年跋羅陀皤闍に云へり。

「跋羅陀皤闍よ、かの釋迦族より出家せる釋子沙門瞿曇は、マナサーカタ村の北方阿致羅筏底河邊なる菴羅林に住し給ふ。世尊瞿曇にはかゝる善き名稱[1]遍く世に流布せり。『かく、かの世尊は應供なり、等正覺なり、明行足なり、善逝なり、世間解なり、無上士なり、調御丈夫なり、天人の師なり、佛陀なり、世尊なり』と。跋羅陀皤闍よ、我等は沙門瞿曇の許に行き、而してこの義を沙門瞿曇に問はん。沙門瞿曇の我等に說き給ふ如く、その如く我等はこれを奉持せん」。

「然り」と青年跋羅陀皤闍は青年婆悉吒に答へぬ。

八　茲に於て、青年婆悉咤と跋羅陀皤闍とは世尊の許に行けり。世尊の許に近づきて禮し、挨拶の辭を述べて一方に坐せり。斯く一方に坐したる時、青年婆悉咤は世尊に問へり。

「瞿曇よ、今我等の諸方を遊歩しつゝある時、正道と邪道とに關する議論起れり。我謂へらく、『これ正道なり、この道眞正なり。これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ沸伽羅娑羅婆羅門の説く所なり』と。又跋羅陀皤闍は謂へらく、『これ正道なり、この道眞正なり。解脱を欲する者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ多梨車婆羅門の説く所なり』と。瞿曇よ、こゝに於てか互に論爭あり、異議あり、その所説様々なり」。

九　「婆悉咤よ、爾（なんぢ）は今斯く云へり、『これ正道なり、この道眞正なり。解脱を欲する者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ沸伽羅娑羅婆羅門の説く所なり』と。又青年跋羅陀皤闍は斯く云へり。『これ正道なり、この道眞正なり。解脱を欲する者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし。これ多梨車婆羅門の説く所なり』と。然らば婆悉咤よ、何に就きて汝等の論爭異議異說あ

りや」。

一〇　「瞿曇よ、實に正道と邪道とに關してなり。瞿曇よ、假令諸の婆羅門、〔例へば〕アッダリヤ婆羅門・ティッティリヤ婆羅門・チャンドーカ婆羅門・❷チャンダーヴ婆羅門・ブラフマチャリヤ婆羅門〔の如き〕ありて種々の道を説かんに、此等總ての解脱を求むる婆羅門等は、各々その道を行じ梵天と共住に入るを得るや否や。

瞿曇よ例へば村或は町の近くに多くの異種の道路あるも、總て此等は村に集まるが如く、その如く、瞿曇よ實に婆羅門等、〔例へば〕アッダリヤ婆羅門・ティッティリヤ婆羅門・チャンドーカ婆羅門・チャンダーヴ婆羅門・ブラフマチャリヤ婆羅門〔の如き〕は種々の道を説くも、總て此等の解脱を欲する者は、各自の道を行じて梵天との共住に入るを得るや否や」。

一一　「婆悉咤よ『彼等はよく梵天界に達す』と爾は云ふや」。

「瞿曇よ『彼等はよく梵天界に達す』と吾は云ふ」。

「婆悉咤よ『彼等はよく梵天界に達す』と爾は云ふや」。

「瞿曇よ、『彼等はよく梵天界に達す』と吾は云ふ」。

「婆悉咤よ『彼等はよく梵天界に達す』と僴は云ふや」。
「瞿曇よ、『彼等はよく梵天界に達す』と吾は云ふ」。

238

一二 「然らば、婆悉咤よ何人か三明に通ずる諸婆羅門中、一婆羅門にても、梵天を見證したるものありや否や」。
「否、瞿曇よ、その人あることなし」。
「然らば、婆悉咤よ、何人か三明に通ずる諸婆羅門中、一人の師にても、梵天を見證したるものありや否や」。
「否、瞿曇よ、その人あることなし」。
「然らば、婆悉咤よ、何人か三明に通ずる諸婆羅門中、師を敎へたる一人の師にても、梵天を見證したるものありや否や」。
「否、瞿曇よ、その人あることなし」。
「然らば、婆悉咤よ、何人か三明に通ずる諸婆羅門中、七代前の師にても、梵天を見證したるものありや否や」。
「否、瞿曇よ、その人あることなし」。

一三　「然らば、婆悉咤よ、三明に通ずる諸婆羅門中に於て、聖歌を創作し、これを傳へたる古仙あり。今の三明婆羅門等は、此等古仙の遺したる讃歌・歌詠・詩書を〔古仙の教に隨ひて〕諷詠し、これを誦出し、古仙の誦を繰り返して、古仙の語を繰り返すに過ぎず。是の如き古仙、例へば阿咤摩・婆摩・婆摩提婆・毘婆審吒・耶婆提伽・鴦耆羅・跋羅陀皤闍・婆悉咤・迦葉・婆咎の如き古仙は、次の如く云ひしや、『梵天は何處に在りや、如何なる道を辿りて梵天に近づき得るや、何處に向ひて梵天には達し得るや、是の如き問題に關しては、我等これを知り、これを見證したり』と」。

「否、かく云ひたることなし、瞿曇よ」。

一四　「婆悉咤よ、是の如く三明婆羅門の中一婆羅門にても梵天を見證したるものなし。三明婆羅門の中、一師にても梵天を見證したるものなし。三明婆羅門の中、師を敎へたる一師にても梵天を見證したるものなし。三明婆羅門の中、七
239 代前の師にても梵天を見證したるものなし。

實に、三明婆羅門の中に於て、聖歌を創作し、これを傳へたる古仙あり。今の三明婆羅門等は此等古仙の遺したる讃歌・歌詠・詩書を、〔古仙の教に追隨して〕諷詠

し、これを誦出し、古仙の誦を繰り返して、古仙の語を繰り返すに過ぎず。是の如き古仙例へば阿咤摩・婆摩・婆摩提婆・毘婆審咤・耶婆提伽・鴦耆羅・跋羅・陀皤闍・婆悉咤・迦葉・婆咎の如き古仙は、次の如く云はざりき。『梵天は何處に在りや、如何なる道を辿りて梵天に近づき得るや、何處に向ひて梵天には達し得るやの如き問題に關しては、我等これを知り、これを見證したり』と。

然れども、彼等三明婆羅門等は次の如く云ひたり。『これ實に正道なり、この道眞正なり、解脱を求むる者これを行じなば梵天との共住に入るを得べしと云へる如きは、我等未だこれを知らず、未だこれを見證せざりし教によりて、「梵天と共住し得べき道を説きたるのみ』と。

婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。實に是の如きが三明婆羅門等の説なりとせば、そは無意義なるものにあらずや」。

「瞿曇よ、實に然り。是の如きが三明婆羅門等の説なりとせば、そは無意義なるものなり」。

一五 「婆悉咤よ彼等三明婆羅門等は、自ら知らず自ら見證せざりし教を以て、「梵

天と共住し得べき道なりとして語りて云へり、『これ實に正道なり、この道眞正なり。解脫を求むる者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし』と。是の如き理由あることとなし。

婆悉咤よ、恰も盲人が一縱列の順次に相接して並びて、初の者も見る能はず、中の者も見る能はず、終の者も見る能はざるが如し。婆悉咤よ、是の如く三明婆羅門等の、盲人の列にも譬ふべき語は、その初にあるものも見ず、中のものも見ず、終のものをも見ず。實にこれら三明婆羅門等の語は、笑ふべく、名のみにして、空虛なるものなり、虛妄なるものなり。

一六　婆悉咤よ、これを如何に思ふや。三明婆羅門等は日月を見、他の多くの人々も亦然り。而して日月の昇りまた入る時合掌し敬禮し祈願し讚嘆して、その方に振り向くや否や」。

「然り、瞿曇よ、三明婆羅門等は日月を見、他の多くの人々も亦然り。而して日月の昇り又入る時、合掌し敬禮し祈願し讚嘆して、その方に振り向くなり」。

一七　「婆悉咤よ、これを如何に思ふや。三明婆羅門等は、かの日月を見、他の多く

の人々も亦然り。而して日月の昇り又入る時、合掌し敬禮し祈願し讃嘆して、その方に振り向くなり。されど、次の如く云ひて日月と共住し得べき道を敎へ得るや否や。『これ正道なり、この道は眞正なり。解脱を求むる者これを行じなば、日月との共住に入るを得べし』と」。

「否、瞿曇よ斯く云ふを得ず」。

一八　「婆悉咤よ、三明婆羅門等はかの日月を見、他の多くの人々も亦然り。而して日月の昇りまた入る時、合掌し敬禮し祈願し讃嘆して、その方に振り向くなり。されど、彼等は次の如く云ひて日月と共住し得べき道を説く能はず。『これ實に正道なり、この道眞正なり。解脱を求むる者これを行じなば、日月との共住に入るを得べし』と。また如何ぞ三明婆羅門等に依りて梵天の見證せられたることあらんや。また三明婆羅門等の師に依りて梵天の見證せられたることなし。
241 また三明婆羅門等の師を敎へたる師に依りて梵天の見證せられたることなし。また三明婆羅門等の七代前の師に依りても梵天の見證せられることなし。而してまた三明婆羅門等の中に於て、聖歌を創作し、これを傳へたる古仙あり。今

の三明婆羅門等は此等古仙の遺したる讚歌・歌詠・詩書を、「古仙の教に追隨して」諷詠し、これを誦出し、古仙の誦を繰り返して、古仙の語を繰り返すに過ぎず。是の如き古仙例へば――阿吒摩・婆摩・婆摩提婆・毘婆審吒・耶摩提伽・鴦耆羅・跋羅陀皤闍・婆悉咤迦葉・婆咎――の如き古仙は、次の如く云はざりき。『梵天は何處に在りや、如何なる道を辿りて梵天に近づき得るや何處に向ひて梵天には達し得るやの如き問題に關しては我等これを知り、これを見證したり』と。然れども、彼等三明羅門等は次の如く云ひたり。『これ實に正道なり、この道は眞正なり、解脱を求むる者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べしと云へる如きは、我等未だこれを知らず未だこれを見證せざりし敎によりて、梵天と共住し得べき道を說きたるのみ』と。

婆悉咤よ、儞これを如何に思ふや。實に是の如きが三明婆羅門等の說なりとせば、そは無意義なるものに非ずや」。

「瞿曇よ、實に然り。是の如きが三明婆羅門等の說なりとせば、そは無意義なり」。

「然り婆悉咤よ、彼等三明婆羅門等は自ら知らず自ら見證せざりし敎をもつて、

〔梵天と共住し得べき道なりとして語りて云へり。『これ實に正道なり、この道眞正なり。解脱を求むる者これを行じなば、梵天との共住に入るを得べし』と。是の如き理由あることとなし。

一九　婆悉咤よ、若し人ありて、『我、此の地方に於ける代表的美女を欲し、これを望む』と云はんに、その時人々は彼に問ふべし。『噫、君よ、爾はこの土地の代表的美女を欲し望めたり。爾はそが刹帝利・婆羅門・吠舍・首陀羅中、いづれの種姓に屬する女なるかを知るや』と。

彼は斯く問はれて『我これを知らず』と答へたりとせん。人々は又彼に問ふべし。『噫、君よ、爾はこの地方の代表的美女を欲し望めたり。爾はその美女の名及びその種姓、その丈の高きや低きや、その色の黒きや暗黑色なるや、又は青白き顏色をなせるや、又その如何なる村・町・市に住居せるやを知るや』と。

その時、斯く彼は問はれて『我これを知らず』と答へたりとせん。人々は更に彼に問ふべし。『噫、君よ、爾は爾の欲し望めるものを知らず、またこれを見ざるや』と。斯く彼は問はれたる時、然りと答へたりとせん。

婆悉吒よ、爾はこれを如何に思ふや。是の如きが彼の男の語なりとせば、そは實に無意義に非ずや」。

「然り、瞿曇よ、是の如きが彼の男の云へる語なりとせば、そは實に無意義なり」。

二〇　「婆悉吒よ、是の如く、實に三明婆羅門等に依りて梵天の見證せられたることなし。また三明婆羅門等の師に依りて梵天の見證せられたることなし。また三明婆羅門等の師を敎へたる師に依りて梵天の見證せられたることなし。また三明婆羅門等の七代前の師に依りても梵天の見證せられたることなし。而してまた三明婆羅門等の中に於て、聖歌を創作し、これを傳へたる古仙あり。今の三明婆羅門等は、此等古仙の遺したる讃歌・歌詠・詩書を〔古仙の敎に隨ひて〕諷詠し、これを誦出し、古仙の誦を繰り返し、古仙の語を繰り返すに過ぎず。是の如き古仙例へば――阿吒摩・婆摩・婆摩提婆・毘婆審吒・耶摩提伽・鴦耆羅・跋羅陀皤闍・婆悉吒・迦葉・婆咎――の如き古仙は、次の如く云はざりき。『梵天は何處に在りや、如何なる道を辿りて梵天に近づき得るや、何處に向ひて梵天には達し得るやの如き問題に關しては、我等これを知り、これを見證したり』と。然れども彼等三明婆羅

243

門等は次の如く云ひたり。『これ實に正道なりこの道は眞正なり。解脱を求むる者これを行じなば梵天との共住に入るを得べしと云へる如きは我等未だこれを知らず、我等未だこれを見證せざりし敎に依りて、梵天と共住し得べき道を說きたるのみ』と。婆悉吒よ、爾これを如何に思ふや。實に是の如きが三明婆羅門等の說なりとせば、そは無意義なるものに非ずや」。

「瞿曇よ、實に然り。是の如きが三明婆羅門等の說とせば、そは無意義なり」。

「然り婆悉吒よ、彼等三明婆羅門等は自ら知らず自ら見證せざりし敎を以て、『梵天と』共住し得べき道なりとして語りて云へり。『これ正道なり、この道眞正なり。解脱を求むる者これを行じなば梵天との共住に入るを得べし』と。是の如き理由あることなし。

二一　婆悉吒よ、こゝに一人の男ありて、四通の公道に於ける高樓に登らんが爲に梯を作らん。人々は彼に問ふべし。『噫、君よ、爾高樓に登らんが爲に梯を作る。その堂は東南西北いづれの方向にありや。そは高きや低きや或は中間なるやを知るや』と。

斯く問はれたる時、彼は『否、我これを知らず』と答へたりとせん。人々は更に彼に問ふなるべし。『噫、君よ、儞は自ら高樓に登らんが爲に梯を造れども、そ〔の高樓〕を見ず、またこれを知らざるや』と。

彼は斯く問はれたる時、『然り、これを見ず、また知らず』と答へたりとせん。婆悉咤よ、儞これを如何に思ふや。是の如きがこの男の語なりとせば、そは實に無意義に非ずや。

「然り、瞿曇よ、是の如きがその男の語なりとせば、そは實に無意義なり」。

二二　「婆悉咤よ、是の如く、實に三明婆羅門等に依りて梵天の見證せられたることなし。また三明婆羅門等の師に依りて梵天の見證せられたることなし。…
244 〔乃至〕…實に是の如きが三明婆羅門等の說なりとせば、そは實に無意義に非ずや」。

「瞿曇よ、實に然り。是の如きが三明婆羅門等の說なりとせば、そは無意義なり」。

二三　「然り、婆悉咤よ彼等三明婆羅門等は自ら知らず見證せざりし敎を以て〔梵天と共住を得べき道なりとして語りて云へり。…〔乃至〕…是の如き理由あることなし」。

245

二四　「婆悉咤よ、譬へば此の阿致羅筏底河の水量增し、その水は岸に達し、烏來りて飲むべし。此の時一人の男ありて、彼の岸に於て用事を有し、彼の岸に於て望を有し、彼方に行かんとし彼方に渡らんと欲す。彼の男此の岸に立ちて彼の岸に向ひて喚びて云はん、『彼處なる岸よ、此方に越へ來れ。彼處なる岸よ、此方に越へ來れ』と。

婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。假令かの男、喚び望み願ひ祈らんとも、それに由りて彼處なる岸は此方の岸に越へ來るや否や」。

「否、瞿曇よ、來ることなし」

二五　「是の如く婆悉咤よ、三明婆羅門等は、これを行じて婆羅門と稱し得らるべき法を捨て、これを行じなば非婆羅門なるべき法を執りつゝ、次の如く語れり。『我等は因陀羅（インダ）を喚ぶ。我等は蘇摩（ソーマ）を喚ぶ。我等は婆留那（ヴルナ）を喚ぶ。我等は伊沙那（イサーナ）を喚ぶ。我等は生主を喚ぶ。我等は梵天を喚ぶ。我等は摩醯提（マヒッディ）を喚ぶ。我等は夜摩（ヤマ）を喚ぶ』と。

婆悉咤よ、實に彼等三明婆羅門等は、これを行じて婆羅門と稱し得らるべき法

を捨て、これを行じなば非婆羅門となるべき法を執りつゝ、喚び願ひ望み歡ぶの故を以て、身滅び死して後、梵天と共住すと、〔いふ〕是の如き理由あることなし。

二六　婆悉咤よ、譬へば、此の阿致羅筏底河の水量增し、その水は岸に達し、烏來りて飮むべし。此の時一人の男ありて、彼の岸に於て用事を有し、彼方に行かんとし、彼岸に渡らんと欲す。然るにその男、此方の岸に於て强き鎖もてその腕を後に固く縛せられぬ。

婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。その男は猶よく阿致羅筏底河の此方の岸より彼方の岸に達し得るや否や」。

「否、瞿曇よ、然ることなし」。

二七　「又、婆悉咤よ、是の如く此等の五欲は、聖戒に於て拘鎖なりと名けられ、又繫縛なりとも稱せらる。その五とは如何。そは眼に依りて感覺せらるゝ色にして、人々の望み、欲し、愛し、著し、愛著を感じ、愛樂するものなり。そは耳に依りて感覺せらるゝ聲にして…乃至…そは鼻に依りて感覺せらるゝ香にして…乃至…そは舌に依りて感覺せらるゝ味にして…乃至…そは身に依りて感覺せらるゝ

觸にして、人々の望み、欲し、愛し、著し愛著を感じ愛樂するものなり。實に婆悉咤よ、此等の五欲は、聖戒に於て拘鎖なりと名けられ、又繫縛なりとも稱せらる。

婆悉咤よ、實に三明婆羅門等は此等の五欲に執著し、これに惑はされ囚はれて、その危險を見ず、それに對する自在の智なくして滿足せり。

二八　婆悉咤よ實に彼等三明婆羅門等は、これを行じて婆羅門と稱し得らるべき法を捨て、これを行じなば非婆羅門となるべき法を執りつゝ、五欲に執著し、これに惑はされ囚はれてその危險を見ず、それに對する自在の智なくして滿足し、愛欲の繫縛に縛せらる。彼等身滅び死して後、梵天と共住し得べしと〔いふ〕、是の如き理由あることなし。

二九　婆悉咤よ、譬へば此の阿致羅筏底河の水量增し、その水は岸に達し、烏來りて飲むべし。此の時一人の男ありて彼の岸に於て用事を有し、彼の岸に於て望を有し彼方に行かんとし彼岸に渡らんことを望む。その男此方の岸に在りて、その頭に至るまで蓋ひて橫臥すとせん。

婆悉咤よ、倆これを如何に思ふや。その男は果して阿致羅筏底河の此方の岸

より彼方の岸に達し得べきや否や」。

「否、瞿曇よ、然らず」。

三〇　「婆悉咤よ、是の如く此等の五蓋は、聖戒に於て障と名けられ、蓋と名けられ、妨と名けられ、礙と名けらる。その五とは如何。貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑これなり。

婆悉咤よ、實に此等の五蓋は、聖戒に於て障と名けられ、蓋と名けられ、妨と名けられ、礙と名けらる。

婆悉咤よ、實に三明婆羅門等は、これを行じて婆羅門と稱し得らるべき法を捨て、これを行じなば非婆羅門となるべき法を執りつゝ、五蓋によりて障へられ、蓋はれ、妨げられ、障礙せらる。彼等身滅び死して後、梵天と共住し得べしと〔いふ〕、

247 是の如き理由あることとなし。

三一　婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。爾は尊敬すべき年長の師たる諸婆羅門等の語り傳へられたるを如何に聞けるや。梵天は愛著ありや、或は愛著なきや」。

「瞿曇よ、愛著なし」。

「忍心ありや、或は忍心なきや」。
「瞿曇よ、忍心なし」。
「瞋心ありや、或は瞋心なきや」。
「瞿曇よ、瞋心なし」。
「恨心ありや、或は恨心なきや」。
「瞿曇よ、恨心なし」。
「自在なりや、或は非自在なりや」。
「瞿曇よ、自在なり」。

三二　「婆悉吒よ、儞これを如何に思ふや。諸婆羅門は愛著ありや、或は愛著なきや」。

「瞿曇よ、愛著あり」。
「忍心ありや、或は忍心なきや」
「瞿曇よ、忍心あり」。
「瞋心ありや、或は瞋心なきや」。

「瞿曇よ、瞋心あり」。

「恨心ありや、或は恨心なきや」。

「瞿曇よ恨心あり」。

「自在なりや、或は非自在なりや」。

「瞿曇よ自在に非ず」。

三三 「是の如く、婆悉咤よ、三明婆羅門等は愛著あり、梵天は愛著なし。 三明婆羅門等は愛著あるも、尚愛著なき梵天と共に行きて住し得るや否や」。

「否、瞿曇よ、そのことなし」。

三四 「善き哉、婆悉咤よ、彼等愛著ある三明婆羅門等が、身滅び死して後、執著なき
248
梵天と共住し得んと〔いふ〕、是の如き理由あることなし。

三五 是の如く實に、婆悉咤よ、三明婆羅門等は怨心あり、梵天は怨心なし……乃至……三明婆羅門等は瞋心あり梵天は瞋心なし……乃至……三明婆羅門等は自在ならず、梵天は自在なり。 三明婆羅門等は非自在なるも、尚自在なる梵天と共に行きて住し得るや否や」。

「否、瞿曇よ、そのことなし」

三六　「善き哉、婆悉咤よ、彼等自在を有せざる三明婆羅門等は、その身滅び死して後、自在なる梵天と共住せんと〔いふ〕、是の如き理由あることなし。

婆悉咤よ、茲に於て謂ふに、三明婆羅門等は邪道を正道として近づきては身を沈め、身を沈めては遂に身を滅ぼし、乾燥の地を、河を度るが如くにして度る。この故に、三明婆羅門等の有する三明は沙漠に等しく、叢林の如く、不幸〔を齎らすもの〕なり」。

三七　婆悉咤はかく云はれて、世尊に白しぬ。

「瞿曇よ、我これを聞けり、『沙門瞿曇は梵天と共住し得べき道を知り給へり』と」。

「婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。マナサーカタ村は、これより近きに在りて遠からざるや」。

「然り瞿曇よ、マナサーカタ村は、これより近くして遠からず」。

「婆悉咤よ、爾これを如何に思ふや。こゝに人あり、マナサーカタに生れて其處に生長し、暫時マナサーカタの地を離れて住し、人ありて彼にマナサーカタに行

249 く道を問ひたりとせん。婆悉吒よ、彼はマナサーカタに生れ其處に生長しつゝ、今マナサーカタに行く道を問はれて、躊躇し或は當惑するや」。

「否、瞿曇よ然らず。その理由如何となれば瞿曇よ、このマナサーカタに生れ其處に生長したる者は、そのマナサーカタに達する總ての道を善く知るが故なり」。

三八　「婆悉吒よ、假令マナサーカタに生れ其處に生長したる人、マナサーカタに達する道を問れたる時、躊躇し或は當惑せんも、如來は梵天界に關して、又は梵天界に達する道に關して問はるゝも、躊躇し或は當惑することなかるべし。婆悉吒よ、我は梵天を知り梵天界を知り、又これに達する道を知れり。我は梵天界に達し、彼處に生れたる者の如くこれを知るなり」。

三九　かく云はれて、青年婆悉吒は世尊に白しぬ。

「瞿曇よ、我これを聞く、『沙門瞿曇は梵天と共住し得べき道を知り給へり』と。善き哉、世尊瞿曇は我等の爲に梵天と共住し得べき道を教へ、而して婆羅門族を拔濟し給ふべし」。

「婆悉吒よ、さらば聞け。よく憶念すべし。我語らん」。

婆悉咤青年は「然り」と世尊に同意せり。世尊は曰へり。

四〇 「婆悉咤よ、今（いま）世に如來出現し、〔如來は〕應供・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士
250 調御丈夫・天人師・佛陀・世尊なり。如來は天界・魔界・梵天界を含む此の世界、沙門・婆羅門・天・人衆のことを、獨自に證悟して説示せり。如來は初も善く中も善く終も善き、文義共に具足したる教法を宣べ、比なき完全清淨なる梵行を教ふ。〔沙門果經四〇參照〕

四一 家長若しは家長の子若しは他の〔劣れる〕階級に生れたる者、如來の教法を聽き、聽き竟りて、如來に對する信仰を獲得し、如來に對する信仰を獲得して彼はかく熟考せり。『障礙なるかな、塵道なる家居。自由なるかな、出家の生活。完全清淨にして螺鈿の如く耀く梵行を、一向に修することは、家に住する者にとりては容易にあらず。いでや我は鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、家なきものとなりて出家せむ』と。〔同經四一參照〕。

四二 かくして出家せるものは、波羅提木叉の制禁によりて、持戒に住し、正行を精勤して、小罪にも怖畏を見、學處を受けて學修す。清淨なる身業語業を具足し

て、淸淨なる生活を營み戒を具足して諸根の門を守護し、正念正智を具足して滿足す。〔同經四二參照〕。

四三―七五　婆悉咤よ、如何にして比丘は戒を具足するや。婆悉咤よ、玆に比丘あり、殺生を捨て殺生を離れ…乃至…樂となれば心三昧に入る。…乃至…洽普せられざるなし。〔同經四三―七五參照〕。

七六　彼は慈心によりて一方に遍滿して住す。同じく第二、第三、第四〔の方處に〕向ひて遍滿して住す。是の如く上・下・横・一切方處に在り、一切を具有する世界に向つて、廣大無邊なる無怨無瞋なる慈心を以て遍滿して住す。

七七　又婆悉咤よ、力強き法螺の名手ありて、易々としてその響を四方に聞かしむる如く、是の如く實に、婆悉咤よ、成滿せる慈行により心解脫によりて、欲界の所業の殘す所もなく餘す所もなきなり。婆悉咤よ、これ實に梵天と共住し得べき道なり。

七八　婆悉咤よ、比丘は悲心に住して…乃至…喜心に住して…乃至…捨心に住して一方に遍滿して住す。同じく第二、第三、第四〔の方處に向ひて遍滿して住す〕。

是の如く上・下・横・一切方處に在り、一切を具有する世界に向つて、廣大無邊にして無怨無瞋なる捨心を以て遍滿して住す。

七九 婆悉咤よ、例へば力强き法螺の名手ありて、易々としてその響を四方に聞かしむる如く、是の如く實に、婆悉咤よ、成滿せる捨心により心解脱によりて、欲界の所業の殘す所もなく餘す所もなきなり。これ實に梵天と共住し得べき道なり。

八〇 婆悉咤よ、儞これを如何に思ふや。是の如くにして住する比丘は、愛著ありや愛著なきや」。

「瞿曇よ、愛著なし」。

「怨心ありや怨心なきや」。

「瞿曇よ、怨心なし」。

「瞋心ありや瞋心なきや」。

「瞿曇よ、瞋心なし」。

「恨心ありや恨心なきや」。

「瞿曇よ、恨心なし」。
「自在なりや、非自在なりや」。
「瞿曇よ、自在なり」。

252 八一 「是の如く、婆悉咤よ、比丘は愛著なく梵天は愛著なし。而して愛著なき比丘は、愛著なき梵天と共に、行きて住するや」。
「然り瞿曇よ、〔梵天と共に行きて住し得べし〕」。
「善き哉、婆悉咤よ、然らば愛著なき比丘は、その身滅び死して後、愛著なき梵天と共住し得べしと〔いふ〕、是の如きはその理由あるなり。
是の如く、婆悉咤よ、比丘は怨心なく、梵天も怨心なし……乃至……比丘は瞋心なく、梵天も瞋心なし……乃至……比丘は恨心なく、梵天も恨心なし。比丘は自在にして、梵天も亦自在なり、而して自在なる比丘は、自在なる梵天と共に行きて住し得べきや」。
「然り瞿曇よ、〔梵天と共に行きて住し得べし〕」。
「善き哉、婆悉咤よ、然らば自在なる比丘は、身滅び死して後、自在なる梵天と共住

し得べしと［いふ］、是の如きはその理由あるなり」。

八二　青年婆悉咤と跋羅陀皤闍とは、これを聞き竟りて世尊に白しぬ。「嗚呼、瞿曇よ、そは勝れたる敎なり。嗚呼、瞿曇よ、そは勝れたる敎なり。瞿曇よ、恰もそは顚倒せるを起し覆はれたるを顯はし迷へる者に道を示すが如く、具眼者は物を見んとて暗黑に油燈を持ち來るが如く、尊敬すべき瞿曇は種々の方便を以て法を說き給へり。我等は今や尊者瞿曇に歸命し、法に歸命し比丘僧に歸命せん。願くば今日以後命のあらん限り、世尊に歸命する優婆塞として、世尊瞿曇は我等を攝受し給はんことを」と。

註❶原語 kiti saddo とあれど、底本 P. 146 の如く kitti saddo なるべし。
❷Chandāvā brāhmaṇā は、他の寫本にはこれを缺けり。恐らく誤りて挿入せしものならん。
❸原語 andha-veṇi は一本には paveṇi とあり、veṇi は辮髮の義あれど、今は列の義をとる。

大篇 (Mahā-vagga)

大本経 (Mahāpadāna-sutta)

平等通昭 訳

一四　大本經（マハーパダーナ・スッタンタ）

第一誦品

II,1 一　是の如く我聞く。一時、世尊は舍衛國祇樹給孤獨園の花林窟に住し給へり。こゝに托鉢より歸りて、食後に花林圓堂に共に坐し、集り來れる多くの比丘等の間に、「前生はかくかくにて、前生はかくかくなりき」と、前生に關する法話起りぬ。

二　世尊は清淨にして超人間的なる天耳通によりかの比丘等のこの論義を聞き給ひぬ。こゝに世尊は座より起ち、花林圓堂に近づき給ひぬ。近づきて設けの座に坐し給ひぬ。坐して、世尊は比丘等に曰へり、「比丘等よ、如何なる談話の爲に、今坐りてあるや。而してまた如何なる相互の談話終らずしてあるや」と。

是の如く言はれて、比丘等は世尊に白し上げぬ、「世尊、今托鉢より歸りて、食後
2 に花林圓堂に共に坐し、集り來りし我等の間に、『前生はかくかくにて、前生はかくかくなりき』と、前生に關する法話起りぬ。世尊、この相互の談話終り、その時世

尊は來給へり』と。

三　「汝、比丘等よ、前生に關する法話を聞かんと欲するや」。

「世尊、世尊が前生に關する法話をなし給ふ〔によき〕時なり。善逝、〔よき〕時なり。世尊〔の言〕を聞いて、比丘等は〔心に〕保つべし」。

「比丘等よ、さらば聞け。善く記憶せよ。我、語るべし」。

「畏りぬ、世尊」と、こゝに比丘等は世尊に同意しぬ。世尊はかく曰へり。

四　「比丘等よ、今より九十一劫以前に、毘婆尸（ヸパッシー）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に、出現し給へり。比丘等よ、今より三十一劫以前に、尸棄（シキー）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に出現し給へり。比丘等よ、かの三十一劫中に、毘舍婆（ヹッサブー）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に出現し給へり。比丘等よ、この賢劫に、拘樓孫（カクサンダ）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に出現し給へり。比丘等よ、この賢劫に、拘那含（コーナーガマナ）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に出現し給へり。比丘等よ、この賢劫に、迦葉（カッサパ）世尊・阿羅漢・等正覺者、世に出現し給へり。比丘等よ、この賢劫に、今我（われ）阿羅漢・等正覺者は世に現れたり。

五　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、種姓は刹帝利なりき、刹帝利族に出

現し給へり。比丘等よ、尸棄世尊阿羅漢·等正覺者は、種姓は刹帝利なりき、刹帝[3]利族に出現し給へり。比丘等よ、毘舍婆世尊阿羅漢等正覺者は、種姓は刹帝利なりき、刹帝利族に出現し給へり。比丘等よ、拘樓孫世尊·阿羅漢·等正覺者は、種姓は婆羅門なりき、婆羅門族に出現し給へり。比丘等よ、拘那含世尊·阿羅漢·等正覺者は、種姓は婆羅門なりき、婆羅門族に出現し給へり。比丘等よ、迦葉世尊·阿羅漢·等正覺者は、種姓は婆羅門なりき、婆羅門族に出現し給へり。比丘等よ、今、我阿羅漢·等正覺者は、種姓は刹帝利なり、刹帝利族に出現したり。

六　比丘等よ、毘婆尸世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は拘利若(コーンダンニャ)なりき。比丘等よ、尸棄世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は拘利若なりき。比丘等よ、毘舍婆世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は拘利若なりき。比丘等よ、拘樓孫世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は迦葉(カッサパ)なりき。比丘等よ、拘那含世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は迦葉なりき。比丘等よ、迦葉世尊·阿羅漢·等正覺者は、姓は迦葉なりき。比丘等よ、今我阿羅漢·等正覺者は、姓は瞿曇なり。

七　比丘等よ、毘婆尸世尊·阿羅漢·等正覺者の年壽は八萬歲なりき。比丘等よ、尸

棄世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は七萬歳なりき。比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は六萬歳なりき。比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は四萬歳なりき。拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は三萬歳なりき。比丘等よ、4 迦葉世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は二萬歳なりき。比丘等よ、今我年壽は少く短く微かにして、長くとも百年、或はそれより少し多く生くるに過ぎず。

八　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、波波羅(パータリー)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、尸棄世尊・阿羅漢・等正覺者は、分陀利(プンダリーカ)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者は、娑羅(サーラ)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者は、尸利沙(シリーサ)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者は、烏暫婆羅(ウドゥンバラ)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、迦葉世尊・阿羅漢・等正覺者は、尼拘律陀(ニグローダ)樹下にて成覺し給へり。比丘等よ、今我阿羅漢・等正覺者は、鉢多(アッサッタ)樹下にて成覺しぬ。

九　比丘等よ。毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、騫荼(カンダ)、提舍(ティッサ)と名くる二弟子、第一の二賢者としてありき。比丘等よ、尸棄世尊・阿羅漢・等正覺者には、阿毘浮(アビブー)・三婆婆(サンバヴァ)

と名くる二弟子、第一の賢者としてありき。　比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者には、扶遊・鬱多摩と名くる二弟子、第一の賢者としてありき。　比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者には、毘樓・薩尼と名くる二弟子、第一の賢者としてありき。　比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者には、舒槃那・鬱多樓と名くる二弟子、第一の賢者としてありき。　比丘等よ、迦葉世尊阿羅漢等正覺者には、提舍・婆羅婆と名くる二弟子、第一の賢者としてありき。　比丘等よ、今我には舍利弗・目犍連と名くる二弟子、第一の二賢者としてありき。

一〇　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、三僧會ありき。　一の僧會は比丘六百八十萬人、一の僧會は比丘十萬人、一の僧會は比丘八萬人なりき。　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡[比丘]なるこの三僧會ありき。

比丘等よ、尸棄世尊・阿羅漢・等正覺者には、三僧會ありき。　一の僧會は比丘十萬人、一の僧會は比丘八萬人、一の僧會は比丘七萬人なりき。　比丘等よ、尸棄世尊阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡[比丘]なるこの三僧會ありき。

比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者には、三僧會ありき。　一の僧會は八萬人、

6

一の僧會は七萬人、一の僧會は六萬人なりき。比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢等正覺者には、凡て漏盡〔比丘〕なるこの三僧會ありき。

比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者には、一僧會ありて、比丘四萬人なりき。比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡〔比丘〕なるこの一僧會ありき。比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者には、一僧會ありて、比丘三萬人なりき。比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡〔比丘〕なるこの一僧會ありき。

比丘等よ、迦葉世尊・阿羅漢・等正覺者には、一僧會ありて、比丘二萬人なりき。比丘等よ、迦葉世尊阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡〔比丘〕なるこの一僧會ありき。

比丘等よ、今我には一僧會ありて、比丘一千二百五十人なり。比丘等よ、我には凡て漏盡〔比丘〕なるこの一僧會あり。

一一　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、無憂と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、尸棄世尊阿羅漢・等正覺者には、忍行と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者には、寂滅と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘

等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者には、善覺と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者には、安和と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、迦葉世尊・阿羅漢・等正覺者には、善友と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、今我には、阿難比丘常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なり。

一二　比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、槃頭(バンドゥマー)と名くる王なりき。槃(バン)頭婆提(ドゥマティー)[7]と名くる王妃が母にて生母なりき。槃頭王の都城は、槃頭婆提と名くる城市なりき。

比丘等よ、尸棄世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、明相と名くる王なりき。光耀と名くる王妃が母にて生母なりき。明相王の都城は、明相城と名くる城市なりき。

比丘等よ、毘舍婆世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、善燈と名くる王なりき。稱戒と名くる王妃が母にて生母なりき。善燈王の都城は、無喩と名くる城市なりき。

比丘等よ、拘樓孫世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、祀得と名くる婆羅門なりき。善枝と名くる婆羅門女が母にて生母なりき。比丘等よ、その時また安和と名くる

王在りき。安和王の都城は、安和と名くる城市なりき。

比丘等よ、拘那含世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、大德と名くる婆羅門なりき。善勝と名くる婆羅門女が母にて生母なりき。比丘等よ、その時また清淨と名くる王在りき。清淨王の都城は、清淨と名くる城市なりき。

比丘等よ、迦葉世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、梵施と名くる婆羅門なりき。財主と名くる婆羅門女が母にて生母なりき。比丘等よ、その時また汲毘（キキー）と名くる王在りき。汲毘王の都城は、波羅捺と名くる城市なりき。

比丘等よ、今我父は淨飯と名くる王なり。大清淨妙妃が母にて生母なり。迦毘羅城が王城なり」と。

かく世尊は日ひぬ。かく日ひて、善逝は座より起ち、精舍に入り給ひぬ。

8 **一三**　さてこゝに世尊去り給ふや間もなく、かの比丘等の間にこの相互の談話起りぬ。

「友よ、如來の大神力は不可思議なり、友よ、大威力は未曾有なり。まことに如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪[廻]を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛

を、かくかくの種姓と記憶し、かくかくの名と記憶し、かくかくの姓と記憶し、かくかくの年壽と記憶し、かくかくの二人の弟子ありと記憶し、かくかくの僧會なりと記憶し給ひて、『かの世尊等は、かくかくの生れなりき、かの世尊等は、かくかくの名、かくかくの姓、かくかくの戒、かくかくの法、かくかくの慧、かくかくの修行、かくかくの解脱なりき』と曰ふとは。

友よ、如何に思ふや。如來によりて法界がよく知達され、法界がよく知達されたるによりて、如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪[廻]を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓と記憶し、かくかくの名と記憶し、かくかくの姓と記憶し、かくかくの年壽と記憶し、かくかくの二人の弟子ありと記憶し、かくかくの僧會なりと記憶し給ひて、『彼の世尊等はかくかくの生れなりき、かの世尊等はかくかくの名、かくかくの姓、かくかくの戒、かくかくの法、かくかくの慧、かくかくの修行、かくかくの解脱なりき』と曰ふや。

或は神々によりて、如來にこの意が告げられ、其の故に、如來は、般涅槃し、障害を9斷ち、道を斷ち、輪[廻]を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓

と記憶し、かくかくの名と記憶し、かくかくの姓と記憶し、かくかくの年壽と記憶し、かくかくの二人の弟子ありと記憶し、かくかくの僧會なりと記憶し給ひて、『かの世尊等は、かくかくの生れなりき、かの世尊等は、かくかくの名、かくかくの姓、かくかくの戒、かくかくの法、かくかくの慧、かくかくの修行、かくかくの解脱なりき』と曰ふや」と。

而してかくこの相互談話が彼の比丘等の間に終らずにありき。

一四　こゝに世尊は夜、靜處より起ちて、花林圓堂に近づき、近づきて設けの席に坐し、坐して、こゝに世尊は比丘等に曰ひぬ。

「比丘等よ、今如何なる談話の爲に坐りてあるや。また如何なる相互の談話終らずしてあるや」と。

かく言はれて、かの比丘等は世尊にかく白し上げぬ。

「世尊、世尊が去り給ふや間も無く、我等の間に相互の談話起りぬ。『友よ、如來の大神力は不可思議なり、大威力は未曾有なり。まことに如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪[廻]を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓

と記憶し…〔乃至〕…かくかくの解脱なりきと曰ふとは。友よ、如何に思ふや。如來によりて法界がよく知達されたるによりて、如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪〔廻〕を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種と記憶し…〔乃至〕…かくかくの解脱なりきと曰ふや。或は神々によりて、如來にこの意が告げられ、其の故に、如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪〔廻〕を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓と記憶し…〔乃至〕…かくかくの解脱なりきと曰ふや』と。而して、世尊、この相互の談話は終らずにありて、その時世尊は來給へるなり」。

一五 「比丘等よ、如來によりて法界がよく知達されたるによりて、如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪〔廻〕を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓と記憶し、かくかくの名と記憶し、かくかくの姓と記憶し、かくかくの年壽と記憶し、かくかくの二人の弟子ありと記憶し、かくかくの僧會なりと記憶して、『かの世尊等はかくかくの生れなりき。かの世尊等はかくかくの名、かくかくの姓、かくかくの戒、かくかくの法、かくかくの慧、かくかく

の修行、かくかくの解脱なりき』と曰ひ、又神々によりても、如來に此の意が告げられ、其の故に、如來は、般涅槃し、障害を斷ち、道を斷ち、輪〔廻〕を終へ、總ての苦を通り過ぎ給へる過去佛を、かくかくの種姓と記憶し、かくかくの名と記憶し、かくかくの姓と記憶し、かくかくの年壽と記憶し、かくかくの二人の弟子ありと記憶し、かくかくの僧會なりと記憶して、『かの世尊等は、かくかくの生れなりき。かの世尊等は、かくかくの名、かくかくの姓、かくかくの戒、かくかくの法、かくかくの慧、かくかくの修行、かくかくの解脱なりき』と曰ふなり。

汝比丘等よ、更に前生に關する法話を聞かんと欲するや」。

11 「世尊、今その時なり。善逝、今その時なり。世尊が更に前生に就きての法話をなし給はんには、比丘等は世尊〔の言〕を聞き、〔心に〕保つ可し」。

「然らば比丘等よ、聞け。善く心に記憶せよ。我語るべし」。

「畏りぬ、世尊」と、彼の比丘等は世尊に同意しぬ。世尊はかく曰へり。

一六　「比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、今より九十一劫以前に、世に出現し給へり。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は刹帝利種なりき。刹帝利族

に出現し給へり。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、姓は拘利若(コーンダンニャ)なりき。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の壽量は八萬歲なりき。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は波波羅(パータリー)樹下に成覺し給へり。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、騫茶(カンダ)・提舍(ティッサ)と名くる二弟子、第一の二賢者としてありき。比丘等、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には三僧會ありき。一の僧會は比丘六百八十萬人、一の僧會は比丘十萬人、一の僧會は比丘八萬人なりき。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、凡て漏盡[比丘]なるこの三僧會ありき。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、無憂と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、槃頭(バンドゥマー)と名くる王なりき。槃頭婆提(バンドゥマティー)[12]と名くる王妃が母にて生母なりき。槃頭王の都城は槃頭婆提と名くる城市なりき。

一七　こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は兜率(トウシタ)天より降り、正念にて自覺して母胎に入りぬ。これかゝる折の常法なり。

比丘等よ、こは常法なり。菩薩の兜率天より降り、母胎に入れる時、天界・魔界・梵

天界・沙門・婆羅門・天・人の間には、諸天の威神力に勝れる無限の大なる光明現れぬ。世間の間の空間にて、下より支へられざる、かくも大威神力あり、かくも大威力ある日月の光明も至らざる、暗く幽闇なる所に、諸天の威神力に勝れる無限の大なる光明現れぬ。而して其處に生れし衆生は、その光明にて互に識別すらく、『げに他の衆生はこゝに住してありしか』と。而して一萬の世界は震ひ、搖れ、震動したり。而して無限の大なる光明は諸天の威神力に勝りて世に現れぬ。これかゝる折の常法なり。

一七[1]　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎に入りてある時、四天子は彼を守護せんが爲に、四方に近づき行きぬ。『かの菩薩或は菩薩の母を、如何なる人或は非人をしても傷けしむる勿れ』と。これかゝる折の常法なり。

一八　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎に入りてある時、菩薩の母は、もとより戒を持ち、殺生より離れ、偸盗より離れ、愛欲より離れ、虚言より離れ、飲酒より離る。[13] これかゝる折の常法なり。

一九　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎に入りてある時、菩薩の母は男子と

愛慾に耽る心を生ぜず。また菩薩の母は、如何なる男によりても汚れたる心にて壓倒されず。これかゝる折の常法なり。

二〇 比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎に入りてある時、菩薩の母は五欲の樂を受け、五欲の樂を與へられ、持して自ら娯しむ。これかゝる折の常法なり。

二一 比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎に入りてある時、菩薩の母は如何なる病も生ぜず、菩薩の母は安樂にて身體に疲勞なく、また菩薩の母は、胎に在る菩薩の一切大小の肢具足して、一の根をも缺かざるを見る。

譬へば、清淨にして優れたる、八面にして細工よく、透明にして輝ける、凡ての相を備へたる毘琉璃（ヹールリヤ）寶珠の如し。これに青、或は黃、或は赤、或は白、或は薄黃色の糸を通さんに、具眼の士それを手にしてよく觀察することあるべし、『こは淸淨にして優れたる、八面にして細工よく、透明にして輝ける、凡ての相を備へたる毘琉璃寶珠なり。之に靑、或は黃、或は赤、或は白、或は薄黃色の糸を通せり』と。是の如く、比丘等よ、菩薩の母胎に入りてある時、菩薩の母は如何なる病も生ぜず、菩薩の母は安樂にして身體は疲勞なし。而して菩薩の母は、胎に在る菩薩の一切大小の肢

14 具足して、一の根をも缺かざるを見る。これかゝる折の常法なり。

二二　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の誕生後、七日にして菩薩の母死し、兜率天(トウシタ)に生ず。これかゝる折の常法なり。

二三　比丘等よ、こは常法なり。他の女が九月或は十月の間、胎兒を胎内に保ちて産むが如く、是の如く菩薩の母は菩薩を産まず。菩薩の母は十月の間、菩薩を胎内に保ちて産む。これかゝる折の常法なり。

二四　比丘等よ、こは常法なり。他の女が坐り或は横はりて産むが如く、是の如く菩薩の母は菩薩を産まず。菩薩の母は菩薩を立ちて生む。こはかゝる折の常法なり。

二五　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎より出づる時、先づ神々彼を受け、而して後に人人彼を受く。これかゝる折の常法なり。

二六　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎より出づる時、菩薩は地に落ちず。四天子彼を受けて、母の前に立たしめて言へり。『王妃よ、喜び給へ。御身の産み給ひし子は偉人なり』と。これかゝる折の常法なり。

二七　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎より出づる時、淨潔にして出で來り、水にて汚されず、粘液にて汚されず、血にて汚されず、如何なる不淨なるものにても汚されず、淨潔にして清し。

譬へば、比丘等よ、迦尸（カーシ）絹布の上に摩尼寶珠を置くが如し。摩尼寶珠は迦尸（カーシ）絹布を汚さず、また迦尸絹布は摩尼寶珠を汚さず。そは何の故ぞ。二つながら清淨なればなり。是の如く、比丘等よ、菩薩の母胎より出づる時、淨潔にして出で來
15 り、水にて汚されず、粘液にて汚されず、血にて汚されず、如何なる不淨なるものにても汚されず、淨潔にして清し。これかゝる折の常法なり。

二八　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎より出でし時、二つの水流虚空より現れ、一は冷く、一は熱く、菩薩及び母を洗へり。これかゝる折の常法なり。

二九　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の生るゝや、平安なる足にて立ち、北に向ひて七歩大股に行き、白傘を翳されて一切の方角を眺め、大聲にて言ひぬ。『我は世界の第一人者なり。我は世界の最も老いたる者なり。我は世界の最も優れたる者なり。こは最後の生なり。最早再生はなし』と。これかゝる折の常法なり。

三〇　比丘等よ、こは常法なり。菩薩の母胎より出づる時、天界・魔界・梵天界・沙門・婆羅門衆・天人の間に諸天の威神力にも勝れる、無限の大なる光明現れぬ。世間の間の空間にて、下より支へられざる、是の如く大威神力あり、是の如く大威力あるこの日月の光明も至らざる、暗き幽闇なる所に、諸天の威神力に勝れる無限の大なる光明は現れぬ。而して彼處に生れたる衆生は、この光明にて互に識別すらく、『げに他の衆生はこゝに住してありしか』と。而して一萬の世界は震ひ、搖れ、震動しぬ。而して諸天の威神力にも勝れる無限の大なる光明世に現れぬ。これかゝる折の常法なり。

16

三一　比丘等よ、毘婆尸王子の生れし時、槃頭王に人々は告げぬ。『王よ、御身に子は生れたり。王よ、彼を見給へ』と。比丘等よ、槃頭王は毘婆尸王子を見ぬ。見て、占相婆羅門を招きて、かく言ひぬ。『尊者よ、占相婆羅門に王子を見せしめよ』と。比丘等よ、占相婆羅門は毘婆尸王子を見ぬ。見て槃頭王にかく言ひぬ。『王よ、喜び給へ。王よ、御身に偉大なる御子生れ給へり。大王よ、御身は幸なるかな、大王よ、御身は幸運なるかなかゝる御子、御身の族に生れ給へるとは。王よ、此王子は

三十二の大人相を具せり。之を具する大人には二の道ありて、他はなし。若し家に在らば、王となりて、法を奉ずる轉輪聖王となり、四邊を平定して國土を安全にし、七寶を具備す。彼にはこの七寶あり。卽ち、輪寶・象寶・馬寶・摩尼寶・女寶・居士寶・及び第七寶に將軍寶なり。また彼に、剛勇にして、優れたる手足ある、敵を征服する、千人以上の子息あり。彼はこの地を海の邊に至るまで、刑鞭を用ひず、刀劍によらず、正法によりて征服して住す。また若しこの王子、家より出でて家に住せずば、この世に於て、覆を取り去りたる阿羅漢等正覺者たるべし。

三二 王よ、この王子の具備せる――そを具備ずる大人には二の道あり、之のみにて他なき――三十二の大人相とは何ぞや。若し家に在らば王となり、法を奉ずる轉輪聖王となり、四邊を平定して國土を安全にし、七寶を具備す。彼には此
17 七寶あり、卽ち、車寶・象寶・馬寶・摩尼寶女寶・居士寶及び第七寶に將軍寶なり。また彼に、剛勇にして、優れたる手足ある、敵を征服する、千人以上の子息あり。彼はこの地を海の邊に至るまで、刑鞭を用ひず、刀劍によらず、正法によつて征服して住せん。また若しこの王子、家より出でて家に住せずば、この世に於て、覆を取り去

れる阿羅漢・等正覺者たるべし。

王よ、この王子は安平足なり。王よ、この王子の安平足なるは、こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子の足の裏には千輻あり、輪あり、轂あり、凡ての相を具足せる車輪現はる。この王子の足の裏に千輻あり、輪あり、轂あり、凡ての相を具足せる車輪現れしは、こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は足跟廣長なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は手足の指長し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は手足柔く若々し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は手足指間に縵網あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は足踝高まれり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は鹿の如き腨あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は立ちたるまゝにて、踞まずして双方の手掌にて膝に觸れ撫するを得…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は陰馬藏なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は黄金色の金の如き皮膚あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は柔軟なる皮膚にて、柔軟なる皮膚なるが爲、塵埃は身體に附か
18 ず。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は一一毛にて、一一毛は毛孔に生ず。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は何れの身毛も逆立ち、點眼藥の色の如く紺青にて、耳輪の如く右に繞りて生ず。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は手足は梵天の如く眞直なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は七處平滿なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は胸部は師子の如し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は肩の窪味は充滿す。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は尼拘律陀樹の如く丸く、その身體は手の長さに等しく一尋にて、手の長さは身體の長さに等し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は上半身が圓し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は味覺極めて敏感なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は師子の頰あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は四十の齒あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は等正の齒あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は齒列に隙間なし。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は犬齒白淨なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は舌廣長なり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は梵音にして迦陵頻伽（カラヴィーカ）の聲の如し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は眼青し。…乃至…こはかの大人の大人相なり。
王よ、この王子は牛の眉毛あり。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

19

王よ、この王子の眉間には、白く柔き木棉に似たる白毫生ず。…乃至…こはかの大人の大人相なり。

王よ、この王子は頂上に肉髻あり。王よ、この王子に肉髻あるは、こはかの大人の大人相なり。

三三 王よ、この王子はかゝる三十二の大人相を具備す。そを具備する者には二の道ありて、他なし。若し家に在らば王となり、法を奉ずる轉輪聖王となり…〔乃至〕…等正覺者たるべし』と。

こゝに、比丘等よ、槃頭王は占相婆羅門に新しき衣を著せて、凡ての慾望を滿足せしめぬ。

三四 こゝに、比丘等よ、槃頭王は毘婆尸太子の爲に、乳母を仕へしめぬ。實に、或る女は乳を飲ましめ、或る女は沐浴せしめ、或る女は侍き、或る女は膝に抱きぬ。比丘等よ、生れし毘婆尸太子に、日夜常に白傘をかざしぬ。『寒暑にも或は毒草にも、或は塵にも、或は露にも害せしむる勿れ』とて。比丘等よ、生れし毘婆尸太子は、多くの人々に愛され喜ばれぬ。譬へば、比丘等よ、青蓮、或は紅蓮、或は白蓮の、多く

20 の人に愛され喜ばるゝが如し。是の如く、比丘等よ、毘婆尸太子は多くの人々に愛され喜ばれぬ。まことに彼は膝より膝へと持ち廻られぬ。

三五　比丘等よ、生れし毘婆尸太子は、よき聲・靡はしき聲・蜜の如き聲・愛すべき聲なりき。譬へば、比丘等よ、雪山にゐる迦陵頻伽(カラヸーカ)と名くる鳥の、よき聲・靡はしき聲・蜜の如き聲・愛すべき聲なるが如し。是の如く、比丘等よ、毘婆尸太子は、よき聲・靡はしき聲・蜜の如き聲愛す可き聲なりき。

三六　こゝに、比丘等よ、生れし毘婆尸太子に、業の異熟果によりて天眼現れぬ。それによりて、よく日夜に周圍一由旬を見ることを得たり。

三七　比丘等よ、生れし毘婆尸太子は瞬きせずして見たり。恰も三十三天の如し。『太子は瞬きせずして見る』とて、比丘等よ、げに毘婆尸太子には『毘婆尸(ヸパッシー)(觀察者)毘婆尸』てふ稱號生じぬ。こゝに、比丘等よ、槃頭王は裁判(の廷)に坐り、毘婆尸太子
21 を膝に坐らしめて、意味を教へぬ。その時、比丘等よ、毘婆尸太子は父の膝に坐りて識別し、識別して意味を正理にて導きぬ。比丘等よ、『太子は識別し、識別して意味を正理にて導きぬ』と更に思ひて、毘婆尸太子に『毘婆尸、毘婆尸』てふ稱號生じぬ。

三八　こゝに、比丘等よ、槃頭王は毘婆尸太子の爲に三宮殿を、一は雨期、一は冬期、一は夏期の爲に造り、五欲の歡樂を備へぬ。こゝに實に、比丘等よ、毘婆尸太子は、雨期には雨期の宮殿に、四箇月間女の樂師によりて樂しましめられ、宮殿より下に降り立たざりき」。

第二誦品

一　「こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は多年、數百年、數千年の後、御者に告げぬ。『やよ、御者、いとも吉祥なる車に馬を駕せよ。地を見ん爲に、遊園の地に行かん』。『畏りぬ、太子よ』と、比丘等よ、御者は毘婆尸太子に同意して、いとも吉祥なる車に馬を駕して、毘婆尸太子に告げぬ。『太子よ、御身の吉祥なる乘物に馬をば駕しまつりぬ。裝備成れり。御心のまゝに乘り給はんことを』と。比丘等よ、毘婆尸太子は吉祥なる車に乘り、いとも吉祥なる車にて遊園の地に行きぬ。

二　比丘等よ、毘婆尸太子は遊園の地に行きて、年老いたる椽(たるき)の如く曲り、腰は曲

22 り、杖にもたれ、慄へて歩み、苦みて、靑春の去りたる人を見ぬ。見て、御者に言ひぬ。

『やよ、御者、この人は何を爲せるや。彼の毛髮は他の人の如くならず。彼の身體は他の人の如くならず』。

『太子よ、彼は老人と稱せらるゝものなり』。

『やよ、御者、彼は何故に老人とは稱せらるゝや』。

『太子よ、彼は老人と稱せらる。最早、彼は長く生きるを得ざるべし』。

『やよ、御者、予も亦老の法に從ひ、老を脫れざるや』。

『太子よ、御身も我も、我等凡て老の法に從ひ、老を脫れず』。

『やよ、御者、今日は遊園の地はこれにて足れり。これより內宮に還すべし』。

『畏りぬ、太子よ』と言ひて、比丘等よ、御者は毘婆尸太子に同意して、それより內宮に還りぬ。

その時、比丘等よ、毘婆尸太子は內宮に行きて、苦み、心樂まず、落膽しぬ。『生てふものに恥あれ。生れたる者には老こそ知らるべけれ』と。

三　こゝに、比丘等よ、槃頭王は御者を招きてかく言ひぬ。

『やよ、御者、太子は遊園の地にて樂めるや。やよ、御者、太子は遊園の地に心喜びてありしや』。

『王よ、太子は遊園の地にて樂み給はざりき。王よ、太子は遊園の地にて心喜び**給はざりき』**。

『やよ、御者、太子は遊園の地に行きて、何を見たるや』。

『王よ、太子は遊園の地に行きて、年老いたる、椽の如く曲り、腰は曲り、杖にもたれ、慄へて歩き、苦みて、青春の去りたる人を見給へり。見て我に問ひ給ひぬ。「やよ、御者、この人は何を爲せるや。彼の毛髮は他の人の如くならず。彼の身體は他の人の如くならず」。「太子よ、彼は老人と稱せらるゝものなり」。「やよ御者、彼は何故老人と言はるゝや」。「太子よ、彼は老人と言はる。最早、彼は長く生くることを得ざるべし」。「やよ、御者、予も亦老の法に從ひ、老を脫れざるや」。「太子よ御身も我も、我等凡て老の法に從ひ、老を脫るを得ず」。「やよ、御者、今日は遊園地は之にて足れり、これより內宮に還せ」。「畏りぬ、太子よ」と言ひて、王よ、我は毘婆尸太子に同意して、それより內宮に還りぬ。その時、王よ、毘婆尸太子は內宮に行きて、苦み、心

樂まず、落膽し給ひぬ。「生てふものに恥あれ。生れし者には老こそ知らるべけれ」と』。

四 こゝに、比丘等よ、槃頭王はかく思ひぬ。『毘婆尸太子をして王位を捨てしむる勿れ。毘婆尸太子をして家より出でて家無き生活に入らしむる勿れ。占相婆羅門のかの言をして眞實ならしむる勿れ』と。

こゝに、比丘等よ、槃頭王は、毘婆尸太子の王位を捨てざるやう、毘婆尸太子をして家より出で家無き生活に入らしめざるやう、占相婆羅門のかの言をして虚言ならしむるやう、毘婆尸太子に、より以上の五の愛慾の群を設(しつら)へぬ。こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は五の愛慾の群を具し備へ圍まれてありぬ。

五 こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は多年、數百年、數千年の後に御者に告げぬ。……乃至……いとも吉祥なる車にて遊園地に行きぬ。

24 **六** 比丘等よ、毘婆尸太子は遊園地に行き、苦み・劇しく病み・自らの大小便の上にうち倒れ・他人によりて立ち・他人に導かるゝ病人を見たり。見て、御者に言ひぬ。『やよ、御者、この人は何を爲せるや。彼の眼は、他の人の〔眼の〕如くならず。彼の

聲は他の人の〔聲の〕如くならず』。

『太子よ彼は病人と稱せらるゝものなり』。

『やよ御者病人と名くるものは何ぞや』。

『太子よ彼は病人と名くるものなり。その病より癒ゆる望少なし』。

『やよ御者予も病の法に從ひ病を脫れざるや』。

『太子よ御身も我も我等凡ては病の法に從ひ病を脫れず』。

『やよ御者然らば今日は遊園地は之にて足れり。これより內宮に還すべし』。

『太子よ畏りぬ』と比丘等よ御者は毘婆尸太子に同意してそれより內宮に還りぬ。

こゝに比丘等よ毘婆尸太子は內宮に行きて苦み心樂まず落膽しぬ。『生てふものに恥あれ。生れたる者には老こそ知らるべけれ。病こそ知らるべけれ』と。

七 こゝに比丘等よ槃頭王は御者を招きてかく言ひぬ。

『やよ御者太子は遊園の地にて樂みたるや。やよ御者太子は遊園の地にて心喜びてありしや』。

『王よ、太子は遊園の地にて樂み給はざりき。太子は遊園の地にて心喜び給はずしてありき』。
『やよ、御者、太子は遊園地に行きて、何を見たるや』。
『王よ、太子は遊園地に行き、苦しみ・劇しく病み・自らの大小便の上にうち倒れ・他
25 人によりて立ち他人に導かれたる病人を見給へり。見て我にかく問ひ給ひぬ。「やよ、御者、この人は何を爲せるや。彼の眼は他の人の(眼)の如くならず。彼の聲は他の人の(聲の)如くならず」。……(乃至)……「太子よ、畏りぬ」と、王よ、我は毘婆尸太子に同意して、それより內宮に還りぬ。その時、主よ、毘婆尸太子は內宮に行きて、苦み、心樂まず、落膽し給ひぬ。「生てふものに恥あれ。生れたる者には、老こそ知らるべけれ、病こそ知らるべけれ」と』。

八 こゝに、比丘等よ、槃頭王はかく思ひぬ。『毘婆尸太子をして王位を捨てしむる勿れ。毘婆尸太子をして家より出でて家無き生活に入らしむる勿れ。占相婆羅門のかの言をして眞實ならしむる勿れ』と。

こゝに、比丘等よ、槃頭王は、毘婆尸太子の王位を捨てざるやう、毘婆尸太子をし

て家より出で家無き生活に入らしめざるやう、占相婆羅門のかの言をして虚言ならしむるやう、毘婆尸太子によ̇り以上の五の愛慾の群を設へぬ。こゝに比丘等よ、毘婆尸太子は五の愛慾の群を具し備へて圍まれてありぬ。

九 こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は多年、數百年、數千年の後、御者に告げぬ…乃至…いとも吉祥なる車にて遊園の地に行きぬ。

一〇 比丘等よ、毘婆尸太子は遊園の地に行きて、雜色の衣を著、集ひたる多くの人々の、❷輦を作りつゝあるを見ぬ。見て、御者に言ひぬ。

『やよ、御者、雜色の衣を著、集ひたる多くの人々の輦を作りつゝあるは何ぞや』。

『太子よ、彼は死者てふものなり』。

『やよ、御者、然らば死人に車を近づけよ』。

『畏りぬ、太子』と、比丘等よ、御者は毘婆尸太子に同意して、死者に車を近づけぬ。

比丘等よ、毘婆尸太子は、死せる亡者を見ぬ。見て、御者に言ひぬ。

『やよ、御者、この死者てふ者は何ぞや』。

『彼は死者と名くるものなり。最早や彼を、母も父も他人も親戚血族も見ず。

彼も亦、母をも父をも他人をも親戚血族をも見ざるべし』。
『やよ、御者、予も亦死の法に從ひ、死より脫れざるや。王も王妃も他人も親戚血族も、予を見ず、予も亦、王をも王妃をも他人をも親戚血族をも見ざるべきや』。
『太子よ、御身も我も、我等總ては死の法に從ひ、死を脫るゝを得ず。王も王妃も他人も親戚血族も、御身を見ず、御身も亦、王をも王妃をも他人をも親戚血族をも見給はざるべし』。
『やよ、御者、然らば今日は遊園地は之にて足れり。これより內宮に還すべし』。
『畏りぬ、太子よ』と、比丘等よ、御者は毘婆尸太子に同意して、これより內宮に還りぬ。
こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は內宮に行きて苦み、心樂まず、落膽しぬ。『あゝ、生と名くるものに恥あれ。生れたる者には老こそ知らるべけれ。病こそ知らるべけれ。死こそ知らるべけれ』と。

一一　こゝに、比丘等よ、槃頭王は御者を招きて、かく言ひぬ。
『やよ、御者、太子は遊園の地にて樂めるや…（乃至）…太子は遊園の地に行きて、何

27 を見たるや』。

『王よ、太子は遊園の地に行きて、雜色の衣を著、集ひたる多くの人々の、輩を作りつゝあるを見給へり。見て、我にかく問ひ給ひぬ。

「やよ、御者、雜色の衣を著、集ひたる多くの人々の、輩を作りつゝあるは何ぞや」…〔乃至〕…「畏りぬ太子よ」と、王よ、我は毘婆尸太子に同意して、それより內宮に還りぬ。こゝに、王よ、太子は內宮に行きて、苦み、心樂まず、落膽し給ひぬ。「生てふものに恥あれ、生れたる者には老こそ知らるべけれ、病こそ知らるべけれ、死こそ知らるべけれ」と』。

一二　こゝに、比丘等よ、槃頭王は斯く思ひぬ。『毘婆尸太子をして王位を捨てし
28 むる勿れ…〔乃至〕…比丘等よ、毘婆尸太子は、より以上の五の愛慾の群を具し、備へて、圍まれてありぬ。

一三　こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は多年、數百年、數千年の後に、御者に告げぬ。…〔乃至〕…いとも吉祥なる車にて遊園の地に行きぬ。

一四　比丘等よ、毘婆尸太子は遊園地に行きて頭髮を剃り・出家し・袈裟衣を著し

29

たる人を見ぬ。見て、御者に言ひぬ。

『やよ、御者、この人は何を爲せるや。彼の頭は他の人の〔頭の〕如くならず。彼の衣は他の人の〔衣の〕如くならず』。

『太子よ、彼は出家と稱せらるゝものなり』。

『やよ御者、出家と稱せらるゝものは何ぞや』。

『太子よ、彼は出家と名くるものなり。法を行ふによく、正業を行ふによく、善業によく、福業によく、不殺生によく、衆生に慈悲を行ふによし』。

『やよ、御者、出家は善い哉。やよ御者、法を行ふは善い哉、正業を行ふは善い哉、善業は善い哉、福業は善い哉、不殺生は善い哉、衆生に慈悲を行ふは善い哉。やよ、御者、かの出家に車を近づけよ』。

『畏りぬ、太子よ』と、比丘等よ、御者は毘婆尸太子に同意して、かの出家に車を近づけぬ。こゝに比丘等よ、毘婆尸太子はかの出家にかく言ひぬ。

『やよ、汝は何を爲すや。汝の頭は他の人の〔頭の〕如くならず、汝の衣は他人の〔衣の〕如くならず』。

『太子よ、我は出家なり』。
『やよ、汝、出家とは何の謂ぞや』。
『太子よ、我は出家なり。法を行ふによく、正業を行ふによく、善業を行ふによく、福業を行ふによく、不殺生を行ふによく、衆生に慈悲を行ふによし』。
『やよ、汝、出家の身は善い哉、法を行ふは善い哉、正業を行ふは善い哉、善業を行ふは善い哉、福業を行ふは善い哉、不殺生を行ふは善い哉、衆生に慈悲を行ふは善い哉』。

一五　こゝに、比丘等よ、毘婆尸太子は御者に言ひぬ。
『やよ、御者、汝は車を取りて、これより内宮に還れ。予はこゝに今頭髪と鬚とを剃りて、袈裟衣を著、家より出でて、家なき生活に入るべし』。
『畏りぬ、太子よ』と、御者は毘婆尸太子に同意して、車を取り、それより内宮に還りぬ。毘婆尸太子はこゝに頭髪と鬚とを剃りて、袈裟衣を著け、家より出でて、家なき生活に入りぬ。

一六　比丘等よ、王都槃頭婆提にて八萬四千の大衆は聞きぬ。『毘婆尸太子は頭

髪と鬚とを剃り、袈裟衣を著し、家より出でて家なき生活に入り給へり』と。そを聞きて、かく思ひぬ。『毘婆尸太子の頭髪と鬚とを剃り、袈裟衣を著し、家より出でて家なき生活に入り給ひしは、劣れる法律ならず、劣れる出家ならず。
30 毘婆尸太子すら頭髪と鬚を剃り、袈裟衣を著て、家より出でて家なき生活に入り給へり。いかで我等〔出家〕せざらんや』と。

こゝに、比丘等よ、八萬四千の大衆は、頭髪と鬚とを剃り、袈裟衣を著、毘婆尸菩薩の、家より出でて家無き生活に入りしに倣ひて出家しぬ。かの大衆に圍遶せられて、比丘等よ、毘婆尸菩薩は村・町・首都を遊行しぬ。

一七　こゝに、比丘等よ、寂静處に祕かに居たる時、毘婆尸菩薩の心にかゝる思念起りぬ。

『我〔大衆に〕圍遶せられて住するは、我には相應しからず。いでや我は群衆より離れて、一人にて住せん』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は、その後、群衆より離れて、一人にて住しぬ。かの八萬四千の出家は別に行き、毘婆尸菩薩は別に〔行きぬ〕。

一八　こゝに、比丘等よ、寂靜處に居たる時、毘婆尸菩薩の心にかゝる思念起りぬ。『嗚呼、この世界は苦惱に陥れり。人は生れ老い死し沒し、而して他に生ず。而31してこゝに人はこの苦と老死との出離を知らず。この苦と老死との出離は、如何にして知らるべきや』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に老死あるや。何の縁によりて老死あるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『生あるが故に老死あり。老死は生の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に生あるや。何の縁によりて生あるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『有あるが故に生あり。生は有の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に有あるや。有は何の縁によりてあるや』。こゝに比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『取あるが故に有あり。有は取の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に取あるや。取は何

32

の縁によりてあるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『愛あるが故に取あり。取は愛の縁によりてあり』と。

こゝに比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に愛あるや。愛は何の縁によりてあるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『受あるが故に愛あり。愛は受の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に受あるや。受は何の縁によりてあるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『觸あるが故に受あり。受は觸の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に觸あるや。觸は何の縁によりてあるや』。こゝに比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『六處あるが故に觸あり。觸は六處の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に六處あるや。六處は何の縁によりてあるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『名色あるが故に六處あり。六處は名色の縁によりて

あり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に名色あるや。名色は何の縁によりてあるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『識あるが故に名色あり。名色は識の縁によりてあり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何あるが故に識あるや。識は何の縁によりてあるや』。こゝに比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『名色あるが故に識あり。識は名色の縁によりてあり』と。

一九　こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『この識は名色より還る。最早これ以上進まず。其處にて生れ、或は老い、或は死し、或は沒し、或は他に生ずべし。卽ち識は名色の縁により、名色は識の縁により、六處は名色の縁により、觸は六處の縁により、受は觸の縁により、愛は受の縁により、取は愛の縁により、有は取[33]の縁により、生は有の縁により老死憂悲苦惱は生の縁によりて、生じ來る。かくしてこの總ての苦蘊の集あり』と。

『集なり、集なり』と、比丘等よ、毘婆尸菩薩には、未だ嘗て聞かれざる法に於て、眼生

じ、智生じ、慧生じ、識生じ、覺生じぬ。

二〇　こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、老死なきや。何の滅は老死の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『生なき時、老死なし。生の滅は老死の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、生なきや。何の滅は生の滅なりや』。こゝに比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧によりて覺悟すらく、『有なき時、生なし。有の滅は生の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、有なきや。何の滅は有の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『取なき時、有なし。取の滅は有の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、取なきや。何の滅は取の滅なるや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は、方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『愛無き時、取なし。愛の滅は取の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時愛なきや。何の滅は愛

の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟す
34 らく、『受なき時、愛なし。受の滅は愛の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時受なきや。何の滅は受の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『觸なき時、受なし。觸の滅は受の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時觸なきや。何の滅は觸の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『六處なき時觸なし。六處の滅は觸の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時六處なきや。何の滅は六處の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『名色なき時、六處なし。名色の滅は六處の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、名色なきや。何の滅は名色の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『識なき時、名色なし。識の滅は名色の滅なり』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『何なき時、識なきや。何の滅は識の滅なりや』。こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩は方便によりて思惟し、慧にて覺悟すらく、『名色なき時、識なし。名色の滅は識の滅なり』と。

35

二一　こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はかく思ひぬ。『この觀の道は、我によりて覺悟にまで達せられぬ。即ち名色の滅は識の滅なり、識の滅は名色の滅なり、名色の滅は六處の滅なり、六處の滅は觸の滅なり、觸の滅は受の滅なり、受の滅は愛の滅なり、愛の滅は取の滅なり、取の滅は有の滅なり、有の滅は生の滅なり、生の滅にて老死憂悲苦惱は滅す。かくしてこの總ての苦蘊に滅あり』と。

『滅なり、滅なり』と、比丘等よ、毘婆尸菩薩には未だ嘗て聞かれたことなき法に於て、眼生じ、智生じ、慧生じ、識生じ、覺生じぬ。

二二　こゝに、比丘等よ、毘婆尸菩薩はその後、五取蘊に於て生滅の觀察に住したり。『色はかくかくなり、色の集はかくかくなり、色の消滅はかくかくなり。受はかくかくなり、受の集はかくかくなり、受の消滅はかくかくなり。想はかくかくなり、想の集はかくかくなり、想の消滅はかくかくなり。行はかくかくなり、行の

集はかくかくなり、行の消滅はかくかくなり。識はかくかくなり、識の集はかくかくなり、識の消滅はかくかくなり』と。

彼は五取蘊に於て生滅を觀察して住し、久しからずして煩惱の執著を離れて、心解脫しぬ」。

第三誦品

一 「こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者はかく思ひ給へり。『いでや、我、法を說かん』と。こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者はかく思ひ給へり。
36 『我が達せるこの法は、甚深にて見難く覺り難く、寂靜にして高く、超理論にして微妙、賢者によりて知らるべきなり。この民衆は愛欲を樂しみ、愛欲に染り、愛欲を喜べり。愛欲を樂しみ、愛欲に染り、愛欲を喜べる民衆には、このこと、卽ちこれを緣とする緣起法は見難し。このこと、卽ち一切行の寂靜・一切生の棄捨・愛の斷盡・離欲・滅・涅槃は見難し。而して假令我、法を說くとも、他人は我[が說く所]を認めざるべし。されば、それは、我には疲勞なり。そは我には苦惱なり』と。

二　やよ、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の心に、未だ嘗て聞かれたること
なき不可思議なる偈浮びぬ。

　勞苦して我に達せられたるものを、
　我は説くの要なし。
　貪瞋に滿されたる人々には、
　この法は覺り易からず。
　〔世の常の〕流に逆ふ・微妙なる・
　甚深にして・見難く・微細なる法は、
　貪愛に染み、〔無明の〕暗黒にて
　覆はれたる者には見えざるべし。

かく、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は熟慮し給ひて、恬淡となれるにより、説法せざることに心傾きぬ。

こゝに、比丘等よ、大梵天の一人は、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の心の所念を知
37 りて、かく思ひぬ。『嗚呼、この世は亡ぶ。嗚呼、この世は滅す。今毘婆尸世尊・阿羅

漢・等正覺者の心、恬淡にして說法せざるに傾く』と。

三 こゝに、比丘等よ、大梵天は、譬へば屈强の力士の、屈したる腕を伸ばし、或は伸ばしたる腕を屈せん如き間に、かく梵天界より姿を消して、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の面前に現れぬ。こゝに、比丘等よ、大梵天は一方の肩に上衣を掛け、右膝を地に立て、合掌を毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に差し延べて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者にかく言ひぬ。

『世尊、世尊の法を說き給はむことを。善逝の法を說き給はむことを。衆生には汚れ少き者もあり、法を聽かざるが故に亡ぶ。（聽けば）法を了解する者となるべし』と。

四 かく言へる時、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は大梵天にかく曰ひぬ。

『梵天よ、我もかく考へぬ。「我、今、法を說くべし」と。梵天よ、その時、我にかゝる思念生じぬ。「我によりて、この甚深にして見難く覺り難く、寂靜にして高く、超理論的にて微妙、賢者によりて知らるべき法は達せられぬ。この民衆は愛慾を樂しみ、愛慾に染り、愛慾を喜べり。愛慾を樂しみ、愛慾に染り、愛慾を喜べる民衆には、こ

のこと、則ちこれを縁とする縁起法は見難し。このこと、卽ち一切行の寂靜・一切生の棄捨・愛の斷盡・離欲・滅・涅槃は見難し。而して假令我、法を說くとも、他人は我〔が說く所〕を認めざるべし。然らば、そは我には疲勞なり。そは我には苦惱なり」

38 と。梵天よ、この未だ嘗て聞かれたることなき不可思議なる偈、我が心に浮びぬ。

勞苦して我に達せられたるものを、
我は說くの要なし。
貪瞋に滿されたる人々には、
この法は覺り易からず。
〔世の常の〕流に逆ふ・微妙なる・
甚深にして・見難く・微細なる法は、
貪愛に染り、〔無明の〕暗黑にて
覆はれたる者には見えざるべし。

かくして、梵天よ、我熟慮して恬淡となれるにより、我が心說法せざるに傾きぬ』
と。

五 再度、比丘等よ、大梵天は毘婆尸世尊・阿羅漢等正覺者にかく言ひぬ。『世、尊よ…乃至…法を了解する者となるべし』と。

六 三度、比丘等よ、大梵天は毘婆尸世尊・阿羅漢等正覺者にかく言ひぬ。『世尊よ、世尊の法を説き給はんことを。善逝の法を説き給はんことを。衆生には汚れ少き者もあり。法を聽かざるが故に亡ぶ。〔聽けば〕法を了解する者となるべし』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は梵天の勸請を知りて、衆生に對する慈悲の故に、佛眼もて世界を見渡し給へり。比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢等正覺者は、佛眼もて世界を見渡し、衆生等の中には汚れ少きも汚れ多きも、利根なるも鈍根なるも、信心深きも信心淺きも、覺り得るも覺り難きもあり、或は先の世の罪の恐れを見る者も住するを見給へり。譬へば、青蓮華の池林、若しくは紅蓮華の池林、若しくは白蓮華の池林に於て、或は青蓮華、或は紅蓮華、或は白蓮華の、水に生じ、水に生長し、水より出で來りて、〔水〕中に沈みて育てるもあり、或は青蓮華、或は紅蓮華、或は白蓮華の、水に生じ、水に成長し、〔水と〕水平にして立つもあり、或

39

は青蓮華、或は紅蓮華、或は白蓮華の、水に生じ、水に成長し、水より拔き出でて立ち、水に汚されざるもあるが如し。是の如く、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、佛眼もて世界を見渡し、衆生の中には汚れ少きも汚れ多きも、利根なるも鈍根なるも、信心深きも信心淺きも、覺り得るも覺り難きも、或は先の世の罪の恐れを見る者も住するを見給へり。

七　こゝに、比丘等よ、大梵天は毘婆尸世尊阿羅漢・等正覺者の心に起れる思念を知り、偈を以て毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に白して言へり。

山頂に立てる人、巖の上にありて、
周圍の人々を見るが如く、
その如く、賢明なる人よ、
法所成の樓閣に登り給へ、普眼の人よ、
悲を離れたる人は、悲に溺れ
生老に打勝たれたる人を見そなはせ、
大雄よ、立ちたまへ、戰に勝てる者よ、

隊商の長(おさ)、無借の人よ、世に濶歩し給へ。
世尊よ、法を說き給へ。
〔聽かば〕覺る者等もあるべし。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、偈を以てかの大梵天に曰へり。

甘露の門は彼等に開かれぬ。
聞き得ん人は已が邪信を棄てよ。
梵天よ、勝れたる高き法を、
害あらんと知りて、人間には說かざりき。

こゝに、比丘等よ、大梵天は『我、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者により說法の許容を
40 得たり』とて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に敬禮し、右繞してそこより姿を隱しぬ。

八　こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者はかく思ひ給ひぬ。『我、何人に先づ法を說く可きや。何人がこの法を速かに了解すべきや』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者はかく思ひ給ひぬ。『王子騫荼(カンダ)と王師の子提舍(ティッサ)とは、王都槃頭(バンツ)婆提(マティー)に住し、教養あり、賢く、知あり、長き間汚れること

少き生れの者なり。今我、王子騫茶と王師の子提舍とに先づ法を説くべし。彼等はこの法を速かに了解すべし』と。

こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、譬へば屈強の力士の、屈したる腕を伸ばし、伸ばせる腕を屈せん如き間に、菩提樹下より消えて、王都槃頭婆提の鹿野苑に現はれ給ひぬ。

九　こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は苑の番人に曰ひぬ。

『いざ、やよ、苑の番人よ、王都槃頭婆提に入りて、王子騫茶と王師の子提舍とに、かく告げよ。「尊者よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は首都槃頭婆提に來りて、安樂鹿野苑に住す。彼は御身等に相見(まみ)えんと欲す」と』。

『畏りぬ、世尊』と、比丘等よ、苑の番人は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に同意して、首都槃頭婆提に入り、王子騫茶と王師の子提舍とに、かく言ひぬ。

『尊者よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は首都槃頭婆提に來り、安樂鹿野苑に住し給ふ。彼は御身等に相見えんと欲し給ふ』と。

一〇　こゝに比丘等よ、王子騫茶と王師の子提舍とは、いとも吉祥なる車を用意

41

して、吉祥なる車に乗り、いとも吉祥なる車にて王都槃頭婆提より出で行き、安樂鹿野苑に行き著きぬ。車の行く限りの地は車にて行き、車を降りて、徒歩にて毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に近づきぬ。近づきて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に敬禮して、一方に坐しぬ。

一一　毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、彼等に順次說法をなし給ひぬ。即ち布施の說・戒の說・天の說・諸愛慾の厄難・卑しき煩惱・出離の功德を說き給ひぬ。世尊は彼等の心健かに〔準備され〕、心和ぎ、心に偏見なく、心高められ、心悅べるを知りて、こゝに諸佛の讚嘆し給ふ法話、苦集滅道を說き給へり。譬へば、汚れを取去りて清淨なる布は、染色を正しく受くるが如く、是の如く、王子騫荼と王師の子提舍はその座に於て、『何ものにても集の法なるものは、凡て滅すべき法なり』てふ、塵なく垢を去れる法眼生じぬ。

一二　彼等は師の教誡に依り、法を見、法を知り、法を了解し、法に到徹し、懷疑〔の水〕を渡り、諸說を去り、確信を得、他人を賴らざるに至りて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者にかく白しぬ。

『奇なる哉、世尊、奇なる哉、世尊。譬へば、世尊、倒れたるを起し、隱されたるを顯は
し、迷へる者に道を示し、具眼の人は物を見るならんとて、闇に於て燈明を持ち來
る如く、是の如く、世尊は種々の方便を以て法を說き給へり。世尊、我等は世尊に
42 歸依し、また法に〔歸依し奉る〕。世尊、我等をして世尊の許にて出家を得しめ、進具
を得しめ給はんことを』と。

一三　比丘等よ、王子騫荼と王師の子提舍は、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の許にて出家し、進具を受けたり。毘婆尸世尊阿羅漢・等正覺者は、法話を以て彼等を教へ、勵まし、激勵し、喜ばしめ、諸行の厄難、卑しき煩惱、涅槃の功德を說き給ひぬ。彼等は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の法話によりて教へられ、勵まされ、激勵され、喜ばされて、久しからずして彼等の心は煩惱より離れて解脫しぬ。

一四　比丘等よ、首都槃頭婆提に於て八萬四千の大衆はかく聞きぬ。『毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は首都槃頭婆提に來り、安樂鹿野苑に住し給ふ。王子騫荼と王師の子提舍とは、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の許にて、頭髮と鬚とを剃り捨て、袈裟衣を纒ひて、家を出でて家なき生活に入りぬ』と。〔之を〕聞きて、彼等はかく思

ひぬ。『王子騫荼と王師の子提舍とが、頭髮と鬚とを剃り捨て、袈裟衣を纏ひて、家より出でて家なき生活に入れる時、まことそは劣れる法・律ならず。そは劣れる出家ならず。まことに王子騫荼と王師の子提舍にして、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の許にて、頭髮と鬚とを剃り捨て、袈裟衣を纏ひて、家より出でて家なき生活に入りたらんには、いかで我等も出家せざるべき』と。

こゝに、比丘等よ、八萬四千の大衆は首都槃頭婆提より出で來り、安樂鹿野苑なる毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に近づきぬ。近づきて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に敬禮して、一方に坐しぬ。

一五　毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、彼等に順次法話を爲し給ひぬ。即ち、布施の說・戒の說・天の說・諸愛慾の厄難・卑しき煩惱・出離の功德を說き給ひぬ。世尊は彼等が、心健かに（準備され）、心和ぎ、心に偏見なく、心高められ、心悅べるを知りて、こゝに諸佛の讚嘆し給ふ法話、苦集滅道を說き給ひぬ。譬へば、汚れを取去りて清淨なる布は、染色を正しく受けるが如し。かくの如く八萬四千の大衆はその座に於て、『何ものにても集の法なるものは、凡て滅すべき法なり』てふ、塵なく垢

を去れる法眼生じぬ。

一六　彼等は師の教誡にて、法を見、法を知り、法を了解し、法に到徹し、懐疑(の水)を渡り、諸説を去り、確信を得、他人に賴らざるに至つて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者にかく白しぬ。

『世尊、奇なる哉、世尊、奇なる哉。譬へば、世尊、倒れたるを起し、或は隱されたるを顯はし、迷へる者に道を示し、具眼の人は物を見得んとて、闇に於て燈明を持ち來るが如く、その如く、世尊は種々の方便を以て法を說き給へり。世尊、我等は世尊に歸依し、また法に(歸依し奉らん)。世尊、我等をして世尊の許にて出家を得しめ、進具を得しめ給はんことを』と。

一七　比丘等よ、彼等八萬四千の人々は、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の許にて出家をなし、進具を受けたり。毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、法話を以て彼等を教へ、勵まし、激勵し、喜ばしめて、諸行の厄難・卑しき煩惱・涅槃の功德を說き給ひぬ。44
彼等は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の法話によつて教へられ、勵まされ、激勵され、喜ばさられて、久しからずして彼等の心は煩惱より離れて解脫しぬ。

一八　比丘等よ、かの以前の八萬四千の出家は聞きぬ。『毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は首都槃頭婆提に來り、安樂鹿野苑に住して法を說き給ふ』と。こゝに比丘等よ、かの八萬四千の出家は、首都槃頭婆提より出で來り、安樂鹿野苑なる毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に近づきぬ。近づきて毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に敬禮して一方に坐しぬ。

一九　毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、彼等に順次說法をなし給ひぬ。卽ち布施の說・戒の說・天の說・諸愛慾の厄難・卑しき煩惱・出離の功德を說き給ひぬ…(乃至)…塵なく垢を去れる法眼生じぬ。

二〇　彼等は師の教誡に依り、法を見、法を知り、法に到徹し、懷疑(の水)を渡り、諸說を去り、確信を得、他人に賴らざるに至りて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者にかく白しぬ。

45
『世尊、奇なる哉、世尊、奇なる哉…(乃至)…進具を得しめ給はんことを』と。

二一　比丘等よ、かの八萬四千の出家は、毘婆尸世尊阿羅漢・等正覺者の許にて出家し、進具を受けたり。…(乃至)…久しからずして彼等の心は煩惱より離れて解

脱しぬ。

二二　その時、比丘等よ、首都槃頭婆提には六百八十萬の大比丘衆住し居たり。こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は寂靜處に獨居し給へる時、かゝる思念生じぬ。

『首都槃頭婆提に六百八十萬の大比丘衆住す。我今比丘に宣示すべし。「比丘等よ、遍歷し遊行せよ。大衆の利益の爲に、大衆の安樂の爲に、世人への愛憐の爲に、天人の利の爲に、益の爲に、安樂の爲に。一道を二人にて進む勿れ。比丘等よ、初も善く、中も善く、終も善く、文義具足せる法を示せ。全く充實したる清淨なる梵行を說き示せ。汚れ少き生れの衆生あり、法を聞かざるが故に墮落す。(聽けば)法を了解する者もあるべし。而して各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來る可し」と』。

二三　ここに、比丘等よ、或る大梵天は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の心の所念を知りて、譬へば屈強なる力士の、屈したる腕を伸ばし、伸ばしたる腕を屈する如き、是の如き間に、梵天界より姿を隱し、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の前に現れぬ。

こゝに比丘等よ、大梵天は一方の肩に上衣を掛けて、毘婆尸世尊・阿羅漢等正覺者に合掌を捧げ、毘婆尸世尊阿羅漢・等正覺者にかく言ひぬ。

『まことに然り、世尊。まことに然り、善逝。世尊、こゝに首都槃頭婆提に六百八十萬の大比丘衆住す。世尊、世尊は比丘等に宣示し給へ。「比丘等よ、遍歷し、遊行せよ。大衆の利益の爲に、大衆の安樂の爲に、世人への愛憐の爲に、天人の利の爲に、益の爲に、安樂の爲に。一道を二人して進む勿れ。比丘等よ、初も善く、中も善く、終も善く、文義具足せる法を示せ。全く充實したる清淨なる梵行を說き示せ。汚れ少き生れの衆生あり、法を聞かざるが故に墮落す。(聽けば)法を了解する者もあるべし。而して各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來る可し」と。而して世尊、我等も比丘等の如く、各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべし』と。

比丘等よ、かく大梵天は言へり。かく言ひて、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者に敬
47 禮し、右繞してそこより姿を隱しぬ。

二四 こゝに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、午後、獨居より起ちて、比丘

等に告げ給へり。

『こゝに、比丘等よ、寂靜處に獨居せる我に、かゝる思念生じぬ。「こゝに六百八十萬の大比丘衆、首都槃頭婆提に住す。今我、比丘等に宣示すべし。比丘等よ、遍歷し、遊行せよ。大衆の利益の爲に、大衆の安樂の爲に、世人への愛憐の爲に、天人の利の爲に、益の爲に、安樂の爲に。一道を二人にて進む勿れ。比丘等よ、初も善く、中も善く、終も善く、文義具足せる法を示せ。全く充實したる淸淨なる梵行を說き示せ。汚れ少なき生れの衆生あり、法を聞かざるが故に墮落す。(聽けば)法を了解する者もあるべし。而して各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來る可しと」。

二五 こゝに、比丘等よ、或る大梵天、我が心の所念を知り、譬へば、屈強なる力士の、屈したる腕を伸ばし、伸ばしたる腕を屈する如き、是の如き間に、梵界より姿を隱し、我が前に現はれぬ。こゝに、比丘等よ、大梵天は、一方の肩に上衣を掛けて、我に合掌を捧げ、我にかく言ひぬ。

「まことに然り、世尊、まことに然り、善逝。こゝに首都槃頭婆提に六百八十萬の

大比丘衆住す。世尊、世尊は比丘等に宣示し給へ。比丘等よ、遍歴し、遊行せよ、大衆の利益の爲、大衆の安樂の爲、世人への愛憐の爲、天人の利の爲、益の爲、安樂の爲に…〔乃至〕…法を了解する者もあるべし。而して各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべしと。而して世尊、我等も亦、比丘等の如く、各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべし」と。

比丘等よ、かく大梵天は言へり。かく言ひて、我に敬禮し、右繞してそこより姿を隱しぬ。

二六 比丘等よ、我は許す。大衆の利益の爲、大衆の安樂の爲、世人への愛憐の爲、天人の利の爲、益の爲、安樂の爲、遍歴して遊行せよ。一道を二人して進む勿れ。比丘等よ、初も善く、中も善く、終も善く、文義具足せる法を示せ。全く充實したる清淨なる梵行を説き示せ。汚れ少なき生れの衆生もあり、法を聞かざるが故に墮落す。〔聽けば〕法を了解する者もあるべし。而して各六年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來る可し」と。

こゝに、比丘等よ、かの比丘等は大部分、一人一人にて、人間の住む所に遍歴に出

で行きぬ。

二七　その時、比丘等よ、閻浮洲には八萬四千の住居ありき。一年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、一年は過ぎ去りぬ。尚、五年殘れり。五年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべきなり』と。

〔次いで〕二年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、二年は過ぎ去りぬ。尚、四年殘れり。四年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべきなり』と。

三年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、三年は過ぎ去りぬ。尚、三年殘れ
49 り。三年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべきなり』と。

四年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、四年は過ぎ去りぬ。尚、二年殘れり。二年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべきなり』と。

五年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、五年は過ぎ去りぬ。尚、一年殘れり。一年の後、波羅提木叉を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づき來るべきなり』と。

六年の過ぎたる時、神々は聲を擧げぬ。『友よ、六年は過ぎ去りぬ。波羅提木叉

を誦せんが爲、首都槃頭婆提に近づくべき時なり』と。
こゝに、比丘等よ、かの比丘等は、或は自らの神通力により、或は神々の神通力によりて、波羅提木叉を誦せんが爲、一日にて首都槃頭婆提に近づき來りぬ。
二八 その時まことに、比丘等よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、比丘僧伽にて是の如く波羅提木叉を誦し給ひぬ。

忍辱・苦行・隱忍は第一、
涅槃は第一なりと諸佛は說き給ふ。
他人を害ふは出家ならず、
他人を傷くるは沙門ならず。
一切の罪惡の因たらずして、
善業を受くるもの、
心を淸淨ならしむるものたれ。
こは諸佛の教誡なり。
爭はず、害せず、

50

而して波羅提木叉に於て攝制す。
食事に量を知り、
坐臥に(人より)離れ、
而して高潔なることに心を專にす。
こは諸佛の教誡なり。

二九 比丘等よ、或る時、我、郁伽羅(ウッカッタ)にてスバガ林の沙羅樹王の下に住したり。寂靜處に獨居したる時、その我が心に是の如き思念生じぬ。『この長き間、我、以前に住みたることなく、而も易く形の得らるゝ衆生の住居は、淨居天の外に無し。いでや、我、淨居天に往かん』と。

こゝに我は、比丘等よ、譬へば屈強なる力士の屈したる腕を伸ばし、伸ばしたる腕を屈せん如き間に、郁伽羅なるスバガ林の沙羅樹王の下より姿を隠し、無造天に現はれぬ。比丘等よ、かの諸の天衆の中の數千の天は我に近づきぬ。近づくや、我に敬禮して、一方に立ちぬ。一方に立ちて、比丘等よ、かの諸天は我にかく言ひぬ。

『友よ、今より九十一劫前、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は、刹帝利族に出現し給ひぬ。 毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は姓は拘利若なりき。 友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の年壽は八萬歳なりき。 友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は波波羅樹下にて成道し給ひぬ。 毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の第一の二賢者は、騫茶提舍と名くる二弟子なりき。 友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には三僧會ありき。一僧會は比丘六百八十萬、一僧會は比丘十萬、一僧會は比丘八萬人なりき。 友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者のこの三僧會は凡て漏盡(比丘)なりき。 毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には、無憂と名くる比丘、常隨の弟子にて、第一の常隨弟子なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の父は、槃頭と名くる王なりき。 槃頭婆提と名くる王妃が母にて生母なりき。 槃頭王の首都は槃頭婆提王城なりき。 友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の踰城はかくかくなりき。 出家はかくかくかく、精勤はかくかく、正覺はかくかくかく、轉法輪はかくかくなりき。 友よ、我等は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の許にて梵行を行じ、愛慾への愛樂を淨めて、こゝに生れたり』と。

三〇 比丘等、かの天衆の中の數千の天は我に近づきぬ。 近づくや、我に敬禮し

て、一方に立ちぬ。一方に立ちて、比丘等よ、かの諸天は我にかく言ひぬ。

『友よ、この賢劫に、この世に世尊・阿羅漢・等正覺は出現し給ひぬ。友よ、世尊は刹帝利姓にて、刹帝利族に出現し給へり。友よ、世尊は姓は瞿曇なり。友よ、世尊の
52 壽命は短く僅少にて、速やかに去り給ふ。長く生きたりとも、百歳前後なり。友よ、世尊は鉢多樹(アッサッタ)の下に成覺し給へり。友よ、世尊には舍利弗・目連の二弟子、第一の二賢者としてありき。友よ、世尊には一僧會ありて千二百五十人の比丘ありき。友よ、世尊にはこの一僧會ありて、凡て漏盡(比丘)なりき。友よ、世尊には阿難と名くる常隨の弟子あり、第一の常隨弟子なりき。友よ、世尊の父は淨飯王なり。母なる生母は大淸淨妙王妃なり。首都は迦毘羅城なり。友よ、世尊の踰城はかくかく、出家はかくかく、精勤はかくかく、正覺はかくかく、轉法輪はかくかくなり。友よ、我等はこの世尊の所に梵行を行じ、愛慾への愛樂を淨め、こゝに生じぬ』と。

三一　こゝに、比丘等よ、我、無造天等と共に、無熱天に近づき行きぬ。こゝに我は、比丘等よ、無造天・無熱天と共に善見天に近づき行きぬ。こゝに比丘等よ、我は無造天・無熱天・善見天と共に大妙見天に行きぬ。こゝに、比丘等よ、我は、無造天・無熱

天・善見天・大妙見天と共に阿迦膩陀（アカニッタ）天に近づき行きぬ。比丘等よ、此等の天衆の中、數千の諸天は我に近づき來りぬ。近づき來るや、我に敬禮して一方に立ちぬ。53 一方に立ちて、比丘等よ、かの諸天は我にかく言へり。

『友よ、これより九十一劫前に、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は世に出現し給ひぬ。〔友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は刹帝利族にして、刹帝利族に出現し給ひぬ。毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は姓は拘利若なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の命壽は八萬歳なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者は波波羅樹下にて成道し給ひぬ。毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の第一の二賢者は、騫荼・提舍と名くる二弟子なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には三僧會ありき。一僧會は比丘六百八十萬、一僧會は比丘十萬、一僧會は比丘八萬人なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者のこの三僧會は凡て漏盡〔比丘〕なりき。毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者には無憂と名くる比丘が常隨弟子にて、第一の常隨弟子なりき。友よ、毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の父は槃頭と名くる王なりき。槃頭婆提と名くる王妃が母にて生母なりき。槃頭王の首都は槃頭婆提王城なりき。友よ、毘婆

尸世尊・阿羅漢等正覺者の踰城はかくかくなりき。出家はかくかく、精勤はかくかく、正覺はかくかく、轉法輪はかくかくなりき。友よ、我等は毘婆尸世尊・阿羅漢・等正覺者の下にて梵行を行じ、愛欲への愛樂を淨めて、こゝに生れたり』と。〕

三二　比丘等よ、かの天衆の中の數千の天は我に近づきぬ。近づくや、我に敬禮して一方に立ちぬ。一方に立ちて、比丘等よ、かの諸天は我にかく言ひぬ。

『友よ、この賢劫に、この世に世尊・阿羅漢・等正覺者は出現し給ひぬ。〔友よ、世尊は刹帝利姓にて、刹帝利族に出現し給ひぬ。友よ、世尊は姓は瞿曇なり。友よ、世尊は壽命は短く僅少にて、速かに去り給ふ。長く生きたりとも、百歳前後なり。友よ、世尊は鉢多樹の根下に成覺し給へり。友よ、世尊には舍利弗目連の二弟子、第一の二賢者としてありき。友よ、世尊には一僧會ありて、千二百五十人の比丘ありき。友よ、世尊には一僧會ありて、凡て漏盡(比丘)なりき。友よ、世尊には阿難と名くる常隨弟子あり、第一の常隨弟子なりき。友よ、世尊の父は淨飯王なり。母、生母は大清淨妙妃王なり。首都は迦毘羅城なり。友よ、世尊の踰城はかくかく、出家はかくかく、精勤はかくかく、正覺はかくかく轉法輪はかくかくなり。友よ、

我等はこの世尊の許にて梵行を行じ、愛慾への愛樂を淨めて、こゝに生じぬ』と。」

三三　かく、比丘等よ、如來は法界によく知達し、法界によく知達するが故に、如來は、般涅槃に入り、障害を斷ち、道を斷ち、輪廻を盡し、一切の苦を通り過ぎ給へる過去佛につき、生を記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、年壽を記憶し、二弟子を記憶し、僧54會を記憶して、『かの諸世尊は種姓はかくかくなりき、かの諸世尊は名はかくかく、姓はかくかく、戒はかくかく、法はかくかく、慧はかくかく、住はかくかく、解脱はかくかくなりき』と曰ふ」。

世尊はかく曰ひぬ。かの比丘等は世尊の所説に心喜びて歡喜しぬ。

註❶底本に斯く一七とあり、既に前節が一七なる故、底本の誤ならんも、今底本通りにせり。

❷韲、底本に milāta とあるも、異本には vilāta とありて、今之に從へり。

Indices 索隱

索

隱

発音索隠

發　音　索　隱

ア

イ

ウ

オ

カ、ガ

キ、ギ

ク

ケ

3

ニ

ハ、バ、パ

ビ

ブ、プ

ベ

ポ

マ

モ

ヤ

ラ

リ

ロ

ヷ

ヰ

漢字索隠

漢　字　索　隠

ア

イ、ヰ

ウ

エ、ヱ

オ、ヲ

カ、ガ

シ、ジ、ヂ

ス、ズ

セ、ゼ

ソ、ゾ

タ、ダ

チ、ヂ

テ

ト、ド

ナ

ニ

ハ、バ

ヒ、ビ

フ、ブ

ヘ、ベ

ホ、ボ

マ

南傳大藏經

高楠博士功績記念會纂譯

代表者
文學博士 宇井伯壽
文學博士 長井眞琴
文學士 福島直四郎

監修
マスター・オブ・アーツ
ドクター・オブ・リテラチュア
ドクトル・フィロゾフィー
文學博士 高楠順次郎

譯

文學士 阿部文雄
文學士 和泉得成
文學博士 宇井伯壽
文學博士 荻原雲來
文學博士 故木村泰賢
文學士 佐藤密雄
文學士 田中於菟彌
ドクター・オブ・フィロソフィー 立花俊道
文學士 中野義照
文學士 西義雄
林五邦
文學士 平等通昭
文學博士 逸見梅榮
文學士 宮田菱道
文學士 山本快龍
文學士 渡邊照宏

文學士 青原慶哉
文學士 石川海淨
文學士 上田天瑞
文學博士 金倉圓照
文學士 久野芳隆
文學士 佐藤良智
文學博士 高楠順次郎
文學士 寺崎修一
文學博士 長井眞琴
文學博士 羽溪了諦
文學士 干潟龍祥
文學士 福島直四郎
文學士 增永靈鳳
文學士 山崎良順
文學士 山本智敎

赤沼智善
文學士 石黑彌致
文學士 小野島行忍
文學士 神林隆淨
文學士 栗原廣廓
文學士 坂本幸男
文學士 高田修
寺本婉雅
文學士 成田昌信
文學士 花山信勝
文學士 平松友嗣
文學士 藤田眞道
文學士 水野弘元
文學士 山田龍城
文學士 渡邊楳雄

編輯

文學博士 小野玄妙
文學士 山本快龍
文學士 高崎森暢
文學士 蓮澤成淳
文學士 金森西俊
莅戸三一
文學士 和泉得成
文學士 山本智敎
關根正行

昭和十年六月五日印刷
昭和十年六月八日發行

第六卷

東京市本鄉區本鄉三丁目二
大藏出版株式會社
編輯兼發行者 木村省吾

東京市芝區金杉新濱町十二
印刷者 和田助一

東京市芝區金杉新濱町十二
印刷所 單式印刷株式會社

東京市荒川區日暮里町八ノ五六五
製本所 村田文泉閣

會員番號

【非賣品】

發行所 東京市本鄉區本鄉三丁目二
大藏出版株式會社
電話小石川六三一〇番
振替東京五一六八四番



Figure 2: Plate XXIX from Stûpa of Bharhut, 1879.



Figure 3: Plate XXX from Stûpa of Bharhut, 1879.

Concordance コンコルダンス

Adi Meyerhofer (2020)

The Japanese texts in this volume are translations based on the *Digha Nikaya* edition of the PTS, 1890–1911 ☞ p. v.
The present volume contains the *Sīlakkhanda Vagga* and the first Sutta of the Mahā-vagga.

Below: ❶ Links from this `pdf` directly to the respective Sutta at *SuttaCentral* (SC), where further paralells are listed;
❷ Captions from Karl-Eugen Neumanns German translation,[4] page numbers (S.) are from the 1996 edition (☞ p. v) followed by direct links to `PK`: Digha Nikāya - Die Längere Sammlung `palikanon.de`:
❸ Paralells in the *Dīrgha-āgama* (長阿含經[5][6]) ❹ Titles in Bloch, Jules; *Canon bouddhique pāli (Tipiṭaka); texte et traduction Suttapiṭaka Dīghanikāya;* Paris 1949.

Silakkhandha-vagga:

[4] Errata list to his terminology: `http://www.palikanon.com/diverses/ken_error.html`

[5] T 1. W.-G.: *Ch'ang a han ching. Tripitaka Koreana,* K 647 (장아함경). "Dīrghâgama ; *'dus pa chen po'i mdo.* 22 fasc., trans. Buddhayaśas 佛陀耶舍 and Zhu Fonian 竺佛念 in 412–13. It is one of the four āgamas in Chinese, written in four vargas 品, and one of the five canonical collections of discourses (sūtra) of the Buddha as contained in the Dharma Collection 法藏 by the Theravādins 上座部. It deals with the life of the Buddha in its first varga, teaching and practice in the second, refutation of other teachings in the third, and Buddhist cosmology in the fourth. It is roughly equivalent to the Pāli Dīgha-nikāya. Partial variant translations can be seen in the Middle Length Āgama 中阿含經 (T. 26) and the Longer By One Āgama 增一阿含經 (T. 125). It is believed that this version was handed down in the Dharmagupta school 法藏部." (`http://www.buddhism-dict.net/cgi-bin/xpr-ddb.pl?q=長阿含經`)

[6] Detailled: *Āgama/Nikāya;* in *Brill's Encyclopedia of Buddhism;* Leiden 2015, Vol. I, p. 50–9. Translated into modern Japanese: 1) 国訳一切経; 佛説長阿含経解題 [*Bussetsu jō agon-gyō kaidai*]; Tokyo 1933 (Daitō Shuppansha); 2) 丘山新 [Okayama Hajime; et. al.]; 現代語訳「阿含経典」長阿含経 [*Gendaigoyaku "Agon kyōten:" Jōagonkyō*]; Tokyo 1995–2005 (Hirakawa), 6 Vol.

Bibliography

This bibliography does not include translations in compilations of the full canon nor commentaries of single suttas The DN has its analogues in 30 Sutras of the Chinese canon, the Dīrgha-āgama (長阿含經), not covered here but listed in the concordance as ❸ from p. i. Full texts that are available online at *SuttaCentral* (as of July 2020) are indicated there by "❶ SC."

'Ādiccavaṃsa, Bhaddanta; *First book in the Suttanta-Pitaka Digha-Nikaya. ... with the Sinhalese translation;* Colombo 1976, 3 Vol.; *Buddhajayantītripiṭakagranthamālā,* 7–9; archive.org Pt. III

Supplementary: 1) Dhammadinnā; *Research on the Dīrgha-āgama;* Taipeh 2014 (Dharma Drum), ISBN 978-957-598-657-5; 2) Tamai, Tatsushi; *Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian manuscripts in the Hirayama Collection: Tipiṭaka. Suttapiṭaka. Dīghanikāya. Sanskrit;* Tokyo 2016 (International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University); ISBN 9784904234129 ["Partial contents Sanskrit Dīrghāgama." Text in Sanskrit, Gāndhārī and Bactrian; pref. in English.]; 3) Couvreur, Walter; *Sanskrit-Tochaarse en Sanskrit-Koetsjische trefwoordenlijsten van de Dīrghāgama (Dīghanikāya);* Leiden 1969 (Brill), reprint from: ORIENTALIA GANDENSIA, Vol. 4 (1967).

Annapareḍḍi Veṅkaṭēśvara; *Buddhuni dīrgha sambhāṣaṇalu;* Haidarābād [Iṇḍiyā] 2002 (Misimi Pracuraṇalu); [Telugu. "Dīgha Nikāyāniki Telugu anuvādaṃ Annapareḍḍi Veṅkaṭēśvarareḍḍi."]

Barua, Alka; *Dīgha-Nikāya: romanize[d] Pāli text with English translation;* Delhi 2008 (New Bharatiya Book Corp.), 3 vol.; ISBN 9788183150965; archive.org Vol. I, Vol. II

Bennett, A. A. G.; *Long discourses of the Buddha;* Bombay 1964 (Chetana); *Buddhist library,* 3; archive.org DN 1–16

Bhagwat, N. K.; *Digha Nikaya;* Bombay 1936–42 (University of Bombay), Poona 1942 (Aryabhushana and Dnyanaprakasha)

Bloch, Jules; Filliozat, Jean; Renou, Louis; *Canon bouddhique pāli (Tipiṭaka); texte et traduction Suttapiṭaka Dīghanikāya;* Paris 1949 (Adrien-Maisonneuve); [Contains DN 1–3 Cambodian-pāli/French on facing pages; only pt. 1, 1 published.]

Buddhaghosa; *Dīgha nikāya: [commentary];* Rangoon 1962–3; I: *Sīlakkhandhavaggatthakathā,* II: *Mahāvaggaṭṭhakathā,* III: *Paṭihikavaggaṭṭhakathā; Buddhist pāḷi tripitaka,* 40–2

Buddhagosa; Rhys Davids, T. W.; Carpenter, J. Estlin; *Sumaṅgala-Vilāsinī, Buddhaghosa's Commentary of the Dīgha Nikāya;* London 1886 (H. Frowde), London 1949, 1968–71 (Publ. for the Pali Text Society by Luzac), 3. vol.; reprints 1976 [ISBN 0-7100-8544-3], 2011 (Frowde); Yamazaki, Moriichi [comp.]; *Index to the Dīgha-nikāya;* Oxford 2003 (PTS); ISBN 0860133559; archive.org Vol. I (1886)

전재성 [Chŏn Chae-sŏng]; 디가니까야 = *Dīgha-Nikāya:* 신들과인간의스승전집 [*Tiga nikkaya = Dīgha-Nikāya: sindŭl kwa in'gan ŭi sŭsŭng chŏnjip*]; 한국 [Sŏul] 2011 (빠알리성전협회); ISBN 9788989966685

de Breet, Jan; *Dīgha-Nikāya: de verzameling van lange leerredes;* Rotterdam 2001 (Asoka, cop.); ISBN 9789056700614;*Asoka klassieke tekstbibliotheek,* 3; [„Integrale vertaling van de lange leerredes die aan Boeddha worden toegeschreven. Vert. uit het Pali, ingel. en van aant. voorz. door Jan de Breet & Rob Janssen."]

Cunningham, Alexander [1814–93]; *Stûpa of Bharhut: a Buddhist monument ornamented with numerous sculptures illustrative of Buddhist legend and history in the third century B. C.;* London 1879 (Wm. H. Allen); [Plates from this title reproduced from p. 13. Scans: archive.org, BSB.]

Dahlke, Paul [1865–1928]; *Digha-Nikaya die lange Sammlung der Lehrreden; aus dem Pali übersetzt und mit Anmerkungen und Erläuterungen versehen;* Zehlendorf-West bei Berlin 1920 (Neu-Buddhistischer Verl.); Sert.: *Suttapitaka: Buch der buddhistischen Urschriften,* 1919–23

Dewi Kayana Abadi, CV; *Sutta pitaka. Digha nikaya;* [Jakarta] 2002–

De Zoysa; A. P.; *Dīgha nikāya;* Koḷamba 1956–9 (Dharmasamaya Yantrālaya); *Tripiṭaka pot peḷa,* 1–3; ["Dharmavinaya ugat paṇḍita mahāsthavirayan vahansēlāgē ādhāra ătuva. Da Soyisā mahatā visin Siṃhalaṭa parivartanaya karana ladī."]

Dhammakāya Foundation; *Sīlakkhandhavagga;* Pathum Thani 2013 (Dhammachai Institute, Dhammakāya Foundation); ISBN 9786167200330; *Dhammachai Tipiṭaka Series,* 9

Dīgha Nikāya. Suttas 1-13, Sīlakkhanda Vagga; [Burma] 1882; [Mss. in British Library, 221 lv., Asia, Pacific & Africa Or. 11716. "Pali with Burmese nissaya."]

Dragonetti, Carmen [tr.]; *Siete sutras del Digha Nikaya: diálogos mayores de Buda;* Caracas 1977 (Monte Avila), México 1984 (El Colegio de México), Buenos Aires 2005 (Fundación Instituto de Estudios Budistas FIEB, Argentina); Madrid 2010, eBook 2012 (Trotta) [+ Tola, Fernando], ISBN [2012] 9788498793253; [Span. transl. based on the PTS text. `archive.org` pdf]

Dwārikādās Shāstri; *Dīgha-Nikāya;* Varanasi 1995, 3 Vol.; Scans on `archive.org`: Vol. I, Vol. II, Vol. III

Franke, Otto R.; *Dīghanikāya. Das Buch der langen Texte des buddhistischen Kanons;* Göttingen 1913 [„In Auswahl übersetzt"], in: *Königliche Gesellschaft der Wissenschaften, Religionsgeschichtliche Kommission Quellen der Religions-Geschichte,* Gruppe 8: Buddhatum; **SC**

Frola, Eugenio; *Canone buddhista. Discorsi lunghi …;* Bari 1960, 2 Vol.

활안한정섭 [抄譯; Han Chŏng-sŏp]; 장아함경 중아함경 [*Chang Ahamgyŏng Chung Ahamgyŏng = Digha-Nikaya Majjhima-Nikaya*]; Kyŏnggi-do Kap'yŏng-gun 2015 (Han'guk Pulgyo Chŏngsin Munhwawŏn); ISBN 9788964381410; *Puch'ŏnim ŭi yuksŏng pŏmmun,* 1

이중표 [I Jungpyo]; 정선디가니까야 [*Jeongseon Diga Nikkaya*]; Seoul 2019 (Bulgwang Chulpansa); ISBN 9788974796693

Ichimura, Shōhei; *Canonical book of the Buddha's lengthy discourses: (Taishō volume 1, number 1) Volume 3;* Moraga 2008 (CA BDK America); ISBN 9781886439689; `archive.org`: Vol. I, Vol. II, Vol. III

Jagadīśa Kāśyapa [Bhikkhu; 1908–76]; दीघनिकायपालि [*Dīgha nikāya*]; नालन्दा [Nālandā, Bihar] 1958 (Pāli Publication Board), 3 Vol., reprint 1980–2005, Delhi ²2010 [+ Rāhula Sāṅkr̥tyāyana; Pāli in Devanagari, engl. intro. "anuvādaka, Bhikshu Rāhula Sāṅkr̥tyāyana evaṃ Bhikshu Jagadīśa Kāśyapa"]; नालन्दा-देवनागरी-पालि-गन्थमाला [*Nālandā-Devanāgarī-Pāli series*]; ISBN [2010] 9789380292113

Jinarakkhita [Ashin]; Dhammaviriya; *Dīgha Nikāya, Vagga III …;* Bogor 1966 (Dhammadiepa)

각묵스님 [Kangmuk Sŭnim]; 디가니까야: 길게설하신경 [長部. *Tiganikkaya: kilge sŏl hasin kyŏng*]; Ulsan-si 2006 (Ch'ogi Pulchŏn Yŏn'guwŏn); 3 Vol. 1) *Kyeonp'um,* 2) *Taep'um,* 3) *Ppattikka p'um*

Ko Lay [U]; *Translation of Pathika Vagga Pali;* Yangon, Myanmar 2005 (Department for the Promotion and Propagation of the Sasana); [Taipei] 2011 [Corporate Body of the Buddha Educational Foundation]; `archive.org` Silakkhandavagga, Mahavagga, Pathika vagga

Grimblot, Amelia; Grimblot, Paul [et. al.]; *Sept Suttas Pâlis tirés du Dîgha-Nikâya: Traductions diverses anglaises et françaises*; Paris 1876 (Imprimé par autorisation de M. le garde des sceaux à l'Imprimerie nationale); `wikisource`: Table des matières

Lie, Kåre A.; *Buddhas samtaler de lange tekstene;* Bd. I: *Bind 1 Moralavsnittsbindet = Silakkhandhavagga;* [Oslo] 1992 (Solum), Bd. II: *Det store bindet = Mahavagga;* [Oslo] 2005 (Solum); ISBN [I] 8256008407, II: 8256014881; [Bokmal tr. from Pāli of *Chattha Sangayana CD,* version 3.0, 1999.]; `archive.org` Dighanikaya - De lange tekstene; **SC**

Minh Châu, [Thích]; *Trường bộ kinh = Digha-Nikaya: Pali-Việt đối chiếu;* Hoa Thịnh Đốn 1989 (Chùa Kỳ Viên); Originally published: [Saigon] 1967 (Ban Tu Thư, Viện Đại học Vạn Hạnh); **SC**

Môhan Wijayaratna; *Dīgha-nikāya: recueil des 34 longs suttas: le premier livre du Sutta-piṭaka;* Paris 2007–8, ^{2}2014 (Éd. Lis); ISBN [Vol. 2] 9782912117052; [Trans. from Pāli.]

Ñāṇābhivaṃsa Dhammasenāpati [Sayadaw]; *Dīghanikāye Sādhuvilāsinī nāma Sīlakkhandhavagga-Abhinavaṭīkā;* Igatapurī 1993 (Vipaśyanā Viśodhana Vinyāsa); ["Commentary on Dīghanikāya" in Pali; introd. in English and Hindi.]

Nānavara Sāsanasobhana [ed.]; *Suttantapitaka. Dighanikāya;* London 1927; [Pāli.]

Neumann, Karl-Eugen; *Die Reden des Buddha: Längere Sammlung;* München 1907–12 (Pieper & Co.) [= *Die Reden Gotamo Buddho's aus der längeren Sammlung Dīghanikāyo des Pāli-Kanons*] 2 Bde., ^{2}1927–8; Zürich 1957 (Patmos); Stammbach ^{4}1996, 2004 (Beyerlein-Steinschulte); ISBN [1996] 3931095150; [This translation is ased on the Royal Thai edition, donated to the Göttingen University Library (e. g. พระ สุต์ตัน์ตปิฎก ทีฆนิกาย ปาฏิกวัค์ค; รัตนโกสินทรศก ๑๑๒ [1893]). Much maligned by his contemporaries, specially Paul Dahlke who published his own translation[7] remains this the most rhythmically correct and poetic translation into German to date. Biogr. Neumann's: Hecker, Hellmuth; *Karl Eugen Neumann: Erstübersetzer der Reden des Buddha, Anreger zu abendländischer Spiritualität;* Wien 1986 (Octopus).]

Palma, Daniel de [tr.]; *El camino de la iluminación: Nueve suttas del Dîgha Nikâya;* Madrid 2000 (Miraguano); ISBN 84-7813-200-7

Rhys Davids, T. W.; Carpenter, J. Estlin; *Digha Nikaya;* 1890–1911; London 1960–67 (Publ. for the Pali Text Society by Luzac), 3. vol.; eBook 2013 (Taylor & Francis); `archive.org`: Vol. I, Vol. I, Vol. II

Rhys Davids, T. W.; Rhys Davids, Caroline; *Dialogues of the Buddha;* Oxford 1899 (Oxford Univ Pr.); `archive.org`: Vol. II, Vol. III

Royal Asiatic Society; *Dīghanikāyaṭṭhakathā-Sumaṅgalavilāsinī-Sīlakkhandavagga;* 1807 [Burmese palm-leaf Ms., 306 lv, 495 × 60 mm. Descr. in: Filliozat, Jacqueline; *Survey of the Pāli Manuscript Collection in the Royal Asiatic Society;* Journal of the Royal Asiatic Society, Vol. 9 (1999), Pt. 1, S. 35-76. `archive.org` Scan]

Samarasekera, W. A. [tr.]; *Dīgha nikāya;* London 1908 (W. Stephen de Silva), 2 Vol.; [Pāli text with a transl. into Singhala.]

Schmidt, Kurt; gibt es beim Octopus-Verlag

[7] Errors therein: *paticca-samuppāda* (bedingte Entstehung) as ‚abhängig-gleichzeitiges Entstehen;' *jhāna* (geistige Vertiefung) as ‚Gedankenstufe;' *salāyatana* as ‚Sechssinn;' *sankhāra* (Karmaformationen) as ‚Veranlagungen' or even ‚Begriffe;' *nāma-rūpa* as ‚Geistform;' *sammāsati* (rechte Achtsamkeit) as ‚rechte Verinnerung' etc.

שוורץ, שי [Schwartz, Shay]; קובץ ראשון של הסוטות הארוכות מתוך הכתבים הבודהיסטים; Bat Yam 2010–14 (דהמדאנה); **SC**

Shilbhadra [Bhikshu]; *Dīgha nikāya;* 1947, reprint 1997; [Bengali]; ISBN 81-87032-12-X; `archive.org` 1997; **SC**

Siṃhala Dīgha nikāya; Dehivala 1996 (Bauddha Saṃskr̥tika Madhyasthānaya); ISBN 955-921924-3; *Siṃhala Sūtra piṭaka grantha mālā,* 1

Somathilaka, Lalitha [tr.]; Maddumāgē, Milṭan; *Digha Nikaya in simple English;* Colombo 2014 (S. Godage & Brothers); ISBN 9789553053213

Sōmālōkatissa [Thero]; Sārālankāratissa [Māhāthero]; *Dīgha-nikāyo, the first book of the Suttanta-pitaka;* Colombo 1954 (S. Manatunga, Associated newspapers of Ceylon)

Sujato [Bhikkhu]; *Long Discourses: A Translation of Dīgha Nikāya;* 2018 (Sutta Central)

Suttapitahakā Digha-nikāya; Benares 1936 (Mahabodhi Sabha); *Mahābodhi-granthamālā,* 4

Ten Suttas from Digha Nikaya [three fundamental concepts and comments on salient points in each sutta]; Rangoon, 1984 (Burma Pitaka Association); Sarnath, Varanasi 1987 (Central Inst. of Higher Tibetan Studies [Kendrīya-Tibbatī-Ucca-Śikṣā-Saṃsthānam]), *Bhoṭa-Bhāratīya granthamālā,* 12; Tōkyō 1987 (Bukkyō Dendō Kyōkai); Delhi 1999 (Sri Satguru Publications); [DN: 1, 2, 9, 15, 16, 22, 26, 28–9, 31]

Ṭhānissaro [Bhikkhu]; *Anthology from the Dīgha and Majjhima Nikāyas;* in Vol. 1: *Handful of leaves;* [Valley Center, Calif.] 2003 (Sati Center for Buddhist Studies & Metta Forest Monastery)

Union of Burma Buddha Sasana Council; *Dīgha Nikāya. Sīlakkhandha;* [Rangoon] 195?; I: *Brahma-jāla sutta (Discourse on the Supreme Net),* II: *Samāññaphala sutta (Discourse on the advantages of a samana's life);* III: *Ambaṭṭha sutta.* ["Translated by the English Editorial Dept., Union Buddha Sāsana Council."]

Walshe, Maurice [*1911]; *Long discourses of the Buddha: a translation of the Dīgha Nikāya;* London 1987, Boston 1995, Somerville 2005 [+ Sumedho, Bhikkhu], Boston 2012 (Wisdom); ISBN [1995] 0415075858, [2012] 9780861711031; `archive.org`

이중표 [Yi Chung-p'yo]; 精選디가니까야 = *Dīgha Nikāya;* Kwangju Kwangyŏksi 2014 (Chŏnnam Taehakkyo Ch'ulp'anbu); ISBN 9788968490729

Yoxon, G. H.; *Prezento de darona skribajo de Budhismo en Esperanto. Digha Nikajo;* Heswall

https://web.archive.org/web/20150117050645/http://daizoshuppan.bunkensystem.co.jp/usr/info/WEB南伝大蔵経目録.pdf

◎律　蔵（Vinaya-piṭaka）

【第1巻　律蔵一】

A　経分別［Sutta-vibhaṅga］

大分別〔比丘戒〕

(1)波羅夷　(2)僧残法　(3)不定法　(4)捨堕法

【第2巻　律蔵二】

A　経分別

大分別〔比丘戒〕

(5)波逸提法　(6)提舎尼法　(7)衆学法　(8)滅諍法

比丘尼分別〔比丘尼戒〕

(1)波羅夷法　(2)僧残法　(3)捨堕法　(4)波逸提法
(5)提舎尼法　(6)衆学法　(7)滅諍法

【第3巻　律蔵三】

B　犍　度［Khandhaka］

大　品

(1)大犍度　(2)薩犍度　(3)入雨安居犍度　(4)自恣犍度
(5)皮革犍度　(6)薬犍度　(7)迦絺那衣犍度　(8)衣犍度
(9)瞻波犍度　(10)拘睒弥犍度

【第4巻　律蔵四】

B　犍　度

小　品

(1)羯磨犍度　(2)別住犍度　(3)集犍度　(4)滅諍犍度
(5)小事犍度　(6)臥坐具犍度　(7)破僧犍度　(8)儀法犍度
(9)遮説戒犍度　(10)比丘尼犍度　(11)五百〔結集〕犍度
(12)七百〔結集〕犍度

【第5巻　律蔵五】

C　附　随［Parivāra］

(1)大分別　(2)比丘尼分別　(3)等起の摂頌
(4)無間省略, 滅諍分解　(5)問犍度章　(6)増一法
(7)布薩初〔中後〕解答章, 〔制戒の〕義利論　(8)伽陀集
(9)諍事分解　(10)別の伽陀集　(11)呵責品
(12)小諍　(13)大諍　(14)迦絺那衣分解
(15)優波離〔問〕五法　(16)等起　(17)第二伽陀集
(18)発汗偈　(19)五品

D　**波羅提木叉**［**Pātimokkha**］

◎経　蔵（Suttanta-piṭaka）

【第6巻　長部経典一】Dīgha-nikāya

A　**戒蘊篇**［**Sīlakkhandha-vagga**］

(1)梵網経　(2)沙門果経　(3)阿摩昼経　(4)種徳経
(5)究羅檀頭経　(6)摩訶梨経　(7)闍利経　(8)迦葉師子吼経
(9)布吒婆楼経　(10)須婆経　(11)堅固経　(12)露遮経
(13)三明経

B　**大　篇**［**Mahā-vagga**］

(14)大本経

【第7巻　長部経典二】

B　**大　篇**

(15)大縁経　(16)大般涅槃経　(17)大善見王経　(18)闍尼沙経
(19)大典尊経　(20)大会経　(21)帝釈所問経　(22)大念処経
(23)弊宿経

【第8巻　長部経典三】

C　**波梨篇**［**Pāṭika-vagga**］

(24)波梨経　(25)優曇婆邏師子吼経　(26)転輪聖王師子吼経
(27)起世因本経　(28)自歓喜経　(29)清浄経　(30)三十二相経
(31)教授尸伽羅越経　(32)阿吒曩胝経　(33)等誦経　(34)十上経

【第9巻　中部経典一】Majjhima-nikāya

Ａ　根本五十経篇［Mūlapaṇṇāsa］

〈根本法門品〉　(1)根本法門経　(2)一切漏経　(3)法嗣経
(4)怖駭経　(5)無穢経　(6)願経　(7)布喩経　(8)削減経
(9)正見経　(10)念処経

〈師子吼品〉　(11)師子吼小経　(12)師子吼大経　(13)苦蘊大経
(14)苦蘊小経　(15)思量経　(16)心荒野経　(17)林藪経
(18)蜜丸経　(19)双考経　(20)考想息止経

〈譬喩法品〉　(21)鋸喩経　(22)蛇喩経　(23)蟻垤経
(24)伝車経　(25)撒餌経　(26)聖求経　(27)象跡喩小経
(28)象跡喩大経　(29)心材喩大経　(30)心材喩小経

〈双大品〉　(31)牛角林小経　(32)牛角林大経　(33)牧牛者大経
(34)牧牛者小経　(35)薩遮迦小経　(36)薩遮迦大経　(37)愛尽小経
(38)愛尽大経　(39)馬邑大経　(40)馬邑小経

【第10巻　中部経典二】

Ａ　根本五十経篇

〈双小品〉　(41)薩羅村婆羅門経　(42)鞞蘭若村婆羅門経
(43)有明大経　(44)有明小経　(45)得法小経　(46)得法大経
(47)思察経　(48)憍賞弥経　(49)梵天請経　(50)魔訶責経

Ｂ　中分五十経篇［Majjhimapaṇṇāsa］

〈居士品〉　(51)カンダラカ経　(52)アッタカ城人経
(53)有学経　(54)哺多利経　(55)ヂーヴカ経　(56)優波離経
(57)狗行者経　(58)無畏王子経　(59)多受経　(60)無戯論経

〈比丘品〉　(61)教誡羅睺羅菴婆蘗林経　(62)教誡羅睺羅大経
(63)摩羅迦小経　(64)摩羅迦大経　(65)跋陀利経　(66)鶉喩経
(67)車頭聚落経　(68)那羅伽波寧村経　(69)瞿尼師経
(70)枳吒山邑経

〈普行者品〉　(71)婆蹉衢多三明経　(72)婆蹉衢多火〔喩〕経
(73)婆蹉衢多大経　(74)長爪経　(75)摩犍提経　(76)サンダカ経

【第11巻上　中部経典三】

Ｂ　中分五十経篇

〈普行者品〉　(77)善生優陀夷大経　(78)沙門文祁子経
(79)善生優陀夷小経　(80)鞞摩那修経
〈王品〉　(81)陶師経　(82)頼吒恕羅経　(83)大天㮈林経
(84)摩偸羅経　(85)菩提王子経　(86)鴦掘摩経　(87)愛生経
(88)鞞訶提経　(89)法荘厳経　(90)普棘刺林経
〈婆羅門品〉　(91)梵摩経　(92)施羅経　(93)阿摂恕経
(94)瞿哆牟伽経　(95)商伽経　(96)鬱痩歌邏経　(97)陀然経
(98)婆私吒経　(99)須婆経　(100)傷歌邏経

C　後分五十経篇［Uparipaṇṇāsa］

〈天臂品〉　(101)天臂経　(102)五三経　(103)如何経
(104)舎弥村経　(105)善星経　(106)不動利益経
(107)算数家目犍連経　(108)瞿黙目犍連経　(109)満月大経
(110)満月小経

【第11巻下　中部経典四】

C　後分五十経篇

〈不断品〉　(111)不断経　(112)六浄経　(113)善士経
(114)応習不応習経　(115)多界経　(116)仙呑経　(117)大四十経
(118)入出息念経　(119)身行念経　(120)行生経
〈空品〉　(121)空小経　(122)空大経　(123)希有未曾有法経
(124)薄拘羅経　(125)調御地経　(126)浮弥経　(127)阿那律経
(128)随煩悩経　(129)賢愚経　(130)天使経
〈分別品〉　(131)一夜賢者経　(132)阿難一夜賢者経
(133)大迦旃延一夜賢者経　(134)盧夷強耆一夜賢者経
(135)小業分別経　(136)大業分別経　(137)六処分別経
(138)総説分別経　(139)無諍分別経　(140)界分別経
(141)諦分別経　(142)施分別経
〈六処品〉　(143)教給孤独経　(144)教闡陀経　(145)教富楼那経
(146)教難陀迦経　(147)教羅睺羅小経　(148)六六経
(149)大六処経　(150)頻頭城経　(151)乞食清浄経　(152)根修習経

【第12巻　相応部経典一】Saṁyutta-nikāya

A　有偈篇［Sagātha-vagga］

(1)諸天相応　(2)天子相応　(3)拘薩羅相応　(4)悪魔相応
(5)比丘尼相応　(6)梵天相応　(7)婆羅門相応　(8)婆耆沙長老相応
(9)森相応　(10)夜叉相応　(11)帝釈相応

【第13巻　相応部経典二】

B　因縁篇［Nidāna-vagga］

(12)因縁相応　(13)現観相応　(14)界相応　(15)無始相応
(16)迦葉相応　(17)利得と供養相応　(18)羅睺羅相応
(19)勒叉那相応　(20)譬喩相応　(21)比丘相応

【第14巻　相応部経典三】

C　犍度篇［Khandha-vagga］

(22)蘊相応　(23)羅陀相応　(24)見相応　(25)入相応　(26)生相応
(27)煩悩相応　(28)舎利弗相応　(29)龍相応　(30)金翅鳥相応
(31)乾達婆相応　(32)雲相応　(33)婆蹉種相応　(34)禅定相応

【第15巻　相応部経典四】

D　六処篇［Saḷāyatana-vagga］

(35)六処相応　(36)受相応　(37)女人相応　(38)閻浮車相応
(39)沙門出家相応　(40)目犍連相応　(41)質多相応

【第16巻上　相応部経典五】

D　六処篇

(42)聚落主相応　(43)無為相応　(44)無記説相応

E　大　篇［Mahā-vagga］

(45)道相応　(46)覚支相応　(47)念処相応

【第16巻下　相応部経典六】

E　大　篇

(48)根相応　(49)正勤相応　(50)力相応　(51)神足相応
(52)阿那律相応　(53)静慮相応　(54)入出息相応　(55)預流相応
(56)諦相応

【第17巻　増支部経典一】Aṅguttara-nikāya

Ａ　一　集［Eka-nipāta］

(1) 色等品　(2) 断蓋品　(3) 無堪忍品　(4) 無調品
(5) 向と隠覆との品　(6) 弾指品　(7) 発精進等品　(8) 善友等品
(9) 放逸等品　(10) 非法等品　(11) 非法等品　(12) 無犯等品
(13) 一人品　(14) 是第一品　(15) 無処品　(16) 一法品
(17) 種子品　(18) 末伽梨品　(19) 不放逸品　(20) 静慮品
(21) 静慮品

Ｂ　二　集［Duka-nipāta］

〈初の五十〉　(1) 科刑罰品　(2) 諍論品　(3) 愚人品　(4) 等心品
(5) 衆会品
〈第二の五十〉　(6) 人品　(7) 楽品　(8) 有品　(9) 法品
(10) 愚者品
〈第三の五十〉　(11) 希望品　(12) 希求品　(13) 施品　(14) 覆護品
(15) 入定品
〈五十所不摂の品〉　(16) 忿品　(17) 第十七品

Ｃ　三　集［Tika-nipāta］

〈初の五十〉　(1) 愚人品　(2) 車匠品　(3) 人品　(4) 天使品
(5) 小品
〈第二の大五十〉　(1) 婆羅門品　(2) 大品　(3) 阿難品　(4) 沙門品
(5) 一掬塩品
〈第三の小五十〉　(1) 等覚品　(2) 悪趣品　(3) 拘尸那掲羅品
(4) 戦士品　(5) 吉祥品
〈五十所不摂の品〉　裸形品

【第18巻　増支部経典二】

Ｄ　四　集［Catukka-nipāta］

〈初の五十〉　(1) バンダガーマ品　(2) 行品　(3) 優楼比螺品
(4) 輪品　(5) 赤馬品
〈第二の五十〉　(1) 福生品　(2) 適切業品　(3) 無戯論品　(4) 不動品
(5) 阿修羅品
〈第三の五十〉　(1) 雲品　(2) 只尸品　(3) 怖畏品　(4) 補特伽羅品
(5) 光品

〈第四の大五十〉　(1)根品　(2)行品　(3)故思品　(4)戦士品
(5)大品
〈第五の五十〉　(1)善士品　(2)荘飾品　(3)妙行品　(4)業品
(5)犯畏品　(6)通慧品　(7)業道品　畢品

【第19巻　増支部経典三】

E　五　集［Pañcaka-nipāta］
〈初の五十〉　(1)学力品　(2)力品　(3)五支品　(4)須摩那品
(5)文荼王品
〈第二の五十〉　(6)蓋品　(7)想品　(8)戦士品　(9)長老品
(10)カクダ品
〈第三の五十〉　(11)安穏住品　(12)アンダカンギンダ品　(13)病品
(14)王品　(15)ティカンダキ品
〈第四の五十〉　(16)妙法品　(17)嫌根品　(18)優婆塞品
(19)阿蘭若品　(20)婆羅門品
〈第五の五十〉　(21)金毗羅品　(22)罵詈品　(23)長遊行品
(24)旧住品　(25)悪行品
〈第六の五十〉　(26)近円品

【第20巻　増支部経典四】

F　六　集［Chakka-nipāta］
〈第一の五十〉　(1)応請品　(2)可念品　(3)無上品　(4)天品
(5)曇弥品
〈第二の五十〉　(6)大品　(7)天神品　(8)阿羅漢果品　(9)清涼品
(10)勝利品
〈五十所不摂品〉　(11)三法品　(12)品所不摂(経)品
G　七　集［Sattaka-nipāta］
〈第一の五十〉　(1)財品　(2)随眠品　(3)跋耆品　(4)天品
(5)大供犠品
〈五十所不摂品〉　(6)無記品　(7)大品　(8)律品　(9)品所不摂(品)

【第21巻　増支部経典五】

H　八　集［Aṭṭhaka-nipāta］

〈五十経〉　(1)慈品 (2)大品 (3)居士品 (4)布施品 (5)布薩品
〈五十経余品〉 (6)瞿曇弥品 (7)地震品 (8)双品 (9)念品 (10)貪品

【第22巻上　増支部経典六】

Ｉ　九　集［Navaka-nipāta］
〈初の五十経〉 (1)等覚品 (2)師子吼品 (3)有情居品 (4)大品
(5)般闍羅健品
〈五十経余品〉 (6)安穏品 (7)念処品 (8)正勤品 (9)神足品
(10)貪品

Ｊ　十　集［Dasaka-nipāta］
〈初の五十経〉 (1)功徳品 (2)救護品 (3)大品 (4)優波離品
(5)罵詈品
〈第二の五十経〉 (6)己心品

【第22巻下　増支部経典七】

Ｊ　十　集
〈第二の五十経〉 (7)双品 (8)願品 (9)長老品 (10)優婆塞品
〈第三の五十経〉 (11)沙門想品 (12)捨法品 (13)清浄品
(14)善良品 (15)聖道品
〈第四の五十経〉 (16)人品 (17)生聞品 (18)善良品
(19)聖道品 (20)人品
〈余経〉 (21)業所生身品
〈広説〉
〈貪品〉

Ｋ　十一集［Ekādasaka-nipāta］
(1)依止品 (2)憶念品

【第23巻　小部経典一】Khuddaka-nikāya

Ａ　小誦経［Khuddaka-pāṭha］
Ｂ　法句経［Dhamma-pada］
Ｃ　自説経［Udāna］
Ｄ　如是語経［Itivuttaka］

【第24巻　小部経典二】

Ｅ　経　集［Sutta-nipāta］

Ｆ　天宮事経［Vimāna-vatthu］

【第25巻　小部経典三】

Ｇ　餓鬼事経［Peta-vatthu］

Ｈ　長老偈経［Thera-gāthā］

Ｉ　長老尼偈経［Therī-gāthā］

【第26巻　小部経典四】

Ｊ　譬喩経［Apadāna］

(1)仏陀品　(2)シーハーサナ品　(3)須菩提品　(4)軍頭波漢品
(5)優波離品　(6)ギーヂャニー品　(7)サカチッタニヤ品
(8)ナーガサマーラ品　(9)ティミラプッピヤ品　(10)スーダ品
(11)ビッカダーヰー品　(12)マハーパリヷーラ品
(13)セーレッヤカ品　(14)輪毘多品　(15)チャッタ品
(16)バンドゥヂーヷカ品　(17)スパーリチャリヤ品　(18)拘物頭品
(19)クタヂャプッピヤ品　(20)タマーラプッピヤ品
(21)カニカーラプッピヤ品　(22)ハッティ品
(23)アーランバナダーヤカ品　(24)ウダカーサナダーヤカ品
(25)トゥヷラダーヤカ品　(26)トーマダーヤカ品
(27)パドゥムッケーパ品　(28)スヷンナビンボーハナ品
(29)パンナダーヤカ品　(30)チタカプーヂャカ品
(31)パドゥマケーサリヤ品　(32)アーラッカダーヤ品
(33)ウンマープッピヤ品　(34)ガンドーダカ品
(35)エーカパドゥミヤ品　(36)サッダサンニャカ品
(37)マンダーラプッピヤ品　(38)ボーディヷンダカ品
(39)アヷンタパラ品

【第27巻　小部経典五】

Ｊ　譬喩経

(40)畢隣陀品　(41)帝須弥勒品　(42)跋陀利品
(43)サキンサマッヂャカ品　(44)エーカヸハーリ品

(45)ギビータキ品　(46)ヂャガティダーヤカ品
(47)サーラプッピヤ品　(48)ナラマーリー品
(49)パンスクーラ品　(50)キンカニプッピヤ品
(51)カニカーラ品　(52)クレーンヂャパラダーヤカ品
(53)ティナダーヤカ品　(54)迦旃延品　(55)抜提品
〈四　長老尼の譬喩〉　(1)善慧品　(2)エークーポーサティカ
(3)君荼羅繋頭品　(4)刹帝利童女品

【第28巻　小部経典六】

K　本生経［Jātaka］

因縁物語

第一篇

〈無戯論品〉　(1)無戯論本生物語　(2)砂道本生物語
(3)貪慾商人本生物語　(4)周羅財官本生物語　(5)稲稈本生物語
(6)天法本生物語　(7)採薪女本生物語　(8)首領王本生物語
(9)摩迦王本生物語　(10)楽住本生物語
〈戒行品〉　(11)瑞相鹿本生物語　(12)榕樹鹿本生物語
(13)結節本生物語　(14)風鹿本生物語
(15)カラーディヤ鹿本生物語　(16)三臥鹿本生物語
(17)風本生物語　(18)死者供物本生物語　(19)祈願供養本生物語
(20)蘆飲本生物語
〈羚羊品〉　(21)羚羊本生物語　(22)犬本生物語
(23)駿馬本生物語　(24)良馬本生物語　(25)沐浴場本生物語
(26)女顔象本生物語　(27)常習本生物語　(28)歓喜満牛本生物語
(29)黒牛本生物語　(30)ムニカ豚本生物語
〈雛鳥品〉　(31)雛鳥本生物語　(32)舞踊本生物語
(33)和合本生物語　(34)魚本生物語　(35)鶉本生物語
(36)鳥本生物語　(37)鷓鴣本生物語　(38)青鷺本生物語
(39)難陀本生物語　(40)カディラ樹炭火本生物語
〈利愛品〉　(41)ローサカ長老本生物語　(42)鳩本生物語
(43)竹蛇本生物語　(44)蚊本生物語　(45)赤牛女本生物語
(46)毀園本生物語　(47)酒本生物語　(48)ヱーダッバ呪文本生物語
(49)星宿本生物語　(50)無智本生物語

【第29巻　小部経典七】

Ｋ　本生経

第一編

〈願望品〉　(51)大具戒王本生物語　(52)小チャナカ王本生物語
(53)満瓶本生物語　(54)果実本生物語　(55)五武器太子本生物語
(56)金塊本生物語　(57)猿王本生物語　(58)三法本生物語
(59)打鼓本生物語　(60)吹螺本生物語

〈婦女品〉　(61)嫌悪聖典本生物語　(62)生卵本生物語
(63)棗椰子本生物語　(64)難知本生物語　(65)懊悩本生物語
(66)優相本生物語　(67)膝本生物語　(68)娑祇多城本生物語
(69)吐毒本生物語　(70)鋤賢人本生物語

〈婆那樹品〉　(71)婆那樹本生物語　(72)有徳象王本生物語
(73)真実語本生物語　(74)樹法本生物語　(75)魚族本生物語
(76)無憂本生物語　(77)大夢本生物語　(78)イッリーサ長者本生物語
(79)騒音本生物語　(80)ビーマセーナ職人本生物語

〈飲酒品〉　(81)飲酒本生物語　(82)知友本生物語
(83)不運者本生物語　(84)利益門本生物語　(85)有毒果本生物語
(86)験徳本生物語　(87)吉凶本生物語　(88)サーランバ牛本生物語
(89)詐欺本生物語　(90)忘恩本生物語

〈塗毒品〉　(91)塗毒本生物語　(92)大精本生物語
(93)信食本生物語　(94)怖畏本生物語　(95)大善見王本生物語
(96)油鉢本生物語　(97)依名得運本生物語　(98)邪商本生物語
(99)超千本生物語　(100)嫌悪色本生物語

〈超百品〉　(101)超百本生物語　(102)八百屋本生物語
(103)仇敵本生物語　(104)知友比丘本生物語　(105)弱木本生物語
(106)釣瓶女本生物語　(107)投擲術本生物語　(108)田舎女本生物語
(109)粉菓子本生物語　(110)全総括問

〈設問品〉　(111)驢馬問　(112)不死皇后問　(113)豺本生物語
(114)中思魚本生物語　(115)警告者本生物語　(116)背教者本生物語
(117)鷓鴣本生物語　(118)鶉本生物語　(119)非時叫喚者本生物語
(120)解縛本生物語

〈吉祥草品〉　(121)吉祥草本生物語　(122)愚者本生物語

(123)鍬柄本生物語　(124)菴羅果本生物語
(125)カターハカ奴隷本生物語　(126)剣相師本生物語
(127)カランドゥカ奴隷本生物語　(128)猫本生物語
(129)火種本生物語　(130)コーシャ女本生物語

〈不与品〉　(131)不与本生物語　(132)五師本生物語
(133)火焔本生物語　(134)禅定清浄本生物語　(135)月光本生物語
(136)金色鵝鳥本生物語　(137)猫本生物語　(138)蜥蜴本生物語
(139)二重失敗本生物語　(140)烏本生物語

〈カメレオン品〉　(141)蜥蜴本生物語　(142)豺本生物語
(143)威光本生物語　(144)象尾本生物語　(145)ラーダ鸚鵡本生物語
(146)烏本生物語　(147)花祭本生物語　(148)豺本生物語
(149)一葉本生物語　(150)等活本生物語

【第30巻　小部経典八】

K　本生経

第二篇

〈剛強品〉　(151)王訓本生物語　(152)豺本生物語
(153)野猪本生物語　(154)龍本生物語　(155)ガッガ婆羅門本生物語
(156)無私心本生物語　(157)有徳本生物語　(158)善頬本生物語
(159)孔雀本生物語　(160)紺青鴉本生物語

〈親交品〉　(161)因陀羅同姓本生物語　(162)親交本生物語
(163)スシーマ王本生物語　(164)鷲本生物語
(165)鼬本生物語　(166)ウパサールハ婆羅門本生物語
(167)完美本生物語　(168)鷹本生物語　(169)アラカ仙本生物語
(170)カメレオン本生物語

〈善法品〉　(171)善法本生物語　(172)ダッダラ山本生物語
(173)猿猴本生物語　(174)叛逆猿猴本生物語
(175)日輪供養本生物語　(176)一握豌豆本生物語
(177)鎮頭迦樹本生物語　(178)亀本生物語
(179)正法婆羅門本生物語　(180)難施本生物語

〈無双品〉　(181)無双王子本生物語　(182)戦場住居本生物語
(183)濾水本生物語　(184)山牙本生物語　(185)不喜本生物語
(186)凝乳運搬王本生物語　(187)四美本生物語　(188)獅子豺本生物語

(189)獅子皮本生物語　　(190)戒徳利益本生物語
〈ルハカ品〉　　(191)ルハカ婆羅門本生物語　(192)吉祥黒耳本生物語
(193)小蓮華王本生物語　　(194)宝珠窃盗本生物語
(195)山麓本生物語　(196)雲馬本生物語　(197)怨親本生物語
(198)ラーダ鸚鵡本生物語　(199)家長本生物語　(200)善戒本生物語
〈ナタムダルハ品〉　(201)獄舎本生物語　　(202)耽戯本生物語
(203)犍度本生物語　　(204)ギーラカ鳥本生物語
(205)恒伽魚本生物語　　(206)羚羊本生物語
(207)アッサカ王本生物語　　(208)鰐本生物語
(209)鶶鴟本生物語　　(210)カンダガラカ啄木鳥本生物語
〈香草叢品〉　　(211)ソーマダッタ婆羅門子本生物語
(212)残食本生物語　(213)バル王本生物語　(214)河水満本生物語
(215)亀本生物語　(216)魚本生物語　(217)セッグ女本生物語
(218)騙詐商人本生物語　(219)誹謗本生物語　(220)法幢本生物語
〈袈裟品〉　　(221)袈裟本生物語　(222)小ナンディヤ猿本生物語
(223)嚢食本生物語　(224)鱷本生物語　(225)堪忍礼讃者本生物語
(226)梟本生物語　(227)糞喰虫本生物語
(228)カーマニータ婆羅門本生物語　(229)逃亡本生物語
(230)第二逃亡本生物語
〈革履品〉　　(231)革履本生物語　　(232)琵琶竿本生物語
(233)鑁箭本生物語　　(234)アシターブー妃本生物語
(235)ヴァッチャナカ遊行者本生物語　(236)青鷺本生物語
(237)娑祇多婆羅門本生物語　(238)一句本生物語
(239)緑母本生物語　　(240)大黄王本生物語
〈豺品〉　　(241)一切牙豺本生物語　(242)犬本生物語
(243)グッティラ音楽師本生物語　　(244)離欲本生物語
(245)根本方便本生物語　　(246)油教訓本生物語
(247)パーダンチャリ王子本生物語　　(248)緊祝迦喩本生物語
(249)サーラカ猿本生物語　　(250)猿本生物語

【第31巻　小部経典九】

K　本生経

第三篇

(319)鶡鴣本生物語　(320)喜捨本生物語

〈毀屋品〉　(321)毀屋本生物語　(322)堕々音本生物語

(323)梵与王本生物語　(324)皮衣普行者本生物語

(325)蜥蜴本生物語　(326)カッカール華本生物語

(327)カーカーティ妃本生物語　(328)不可悲本生物語

(329)黒腕猿本生物語　(330)験徳本生物語

〈時鳥品〉　(331)拘迦利比丘本生物語　(332)車鞭本生物語

(333)蜥蜴本生物語　(334)王訓本生物語　(335)豺本生物語

(336)大傘蓋王子本生物語　(337)座席本生物語　(338)稃本生物語

(339)バーヹール国本生物語　(340)ヸサヰハ長者本生物語

〈小郭公品〉　(341)カンダリ王本生物語　(342)猿本生物語

(343)穀禄鳥本生物語　(344)菴羅果盗本生物語

(345)亀本生物語　(346)ケーサヴ行者本生物語

(347)鉄槌本生物語　(348)森林本生物語

(349)破和睦本生物語　(350)天神所問本生物語

【第32巻　小部経典十】

K　**本生経**

第五篇

〈摩尼耳環品〉　(351)摩尼耳環本生物語　(352)善生居士子本生物語

(353)張枝本生物語　(354)蛇本生物語　(355)蘇油王子本生物語

(356)カーランディヤ青年本生物語　(357)鶉本生物語

(358)小護法王子本生物語　(359)金鹿本生物語

(360)スッソンディー妃本生物語

〈色高品〉　(361)色高本生物語　(362)験徳本生物語

(363)慚本生物語　(364)蛍本生物語　(365)蛇使本生物語

(366)グンビヤ夜叉本生物語　(367)九官鳥本生物語

(368)竹梏本生物語　(369)知友本生物語　(370)蘇芳樹本生物語

〈半品〉　(371)長災拘薩羅王本生物語　(372)鹿児本生物語

(373)鼠本生物語　(374)小弓術師本生物語　(375)鳩本生物語

第六篇

〈アヷーリヤ品〉　(376)アヷーリヤ渡守本生物語

(377)白旗婆羅門本生物語　(378)ダリームカ辟支仏本生物語

(379)ネール黄金山本生物語　(380)疑姫本生物語
(381)ミガーローパ兀鷹本生物語　(382)吉祥黒耳本生物語
(383)鶏本生物語　(384)法幢本生物語　(385)難提鹿王本生物語
〈セーナカ品〉　(386)驢馬子本生物語　(387)縫針本生物語
(388)鼻豚本生物語　(389)金色蟹本生物語　(390)我有鳥本生物語
(391)害魔法本生物語　(392)蓮花本生物語　(393)残滓本生物語
(394)鶉本生物語　(395)烏本生物語

第七篇

〈クック品〉　(396)クック本生物語　(397)意生獅子本生物語
(398)スタナ青年本生物語　(399)兀鷹本生物語
(400)ダッバ草花本生物語　(401)ダサンナ国製剣本生物語
(402)菓子袋本生物語　(403)アッティセーナ婆羅門本生物語
(404)猿本生物語　(405)婆迦梵天本生物語
〈健陀羅品〉　(406)健陀羅王本生物語　(407)大猿本生物語
(408)陶師本生物語　(409)堅法本生物語　(410)蘇摩達多象本生物語
(411)スシーマ王本生物語　(412)綿樹頂本生物語
(413)ドゥーマカーリ牧羊者本生物語　(414)不寝番本生物語
(415)酢味粥食本生物語　(416)パランタパ従僕本生物語

【第33巻　小部経典十一】

K　本生経

第八篇

〈迦旃延品〉　(417)迦旃延本生物語　(418)八声本生物語
(419)美女スラサー本生物語　(420)善吉祥本生物語
(421)理髪師ガンガマーラ本生物語　(422)支提本生物語
(423)根本生物語　(424)燃焼本生物語　(425)非処本生物語
(426)豹本生物語

第九篇

(427)鷹本生物語　(428)憍賞弥本生物語　(429)大鸚鵡本生物語
(430)小鸚鵡本生物語　(431)ハーリタ仙本生物語
(432)足跡善知童子本生物語　(433)多毛迦葉本生物語
(434)鴛鴦本生物語　(435)散乱本生物語　(436)箱本生物語
(437)腐肉豺本生物語　(438)鷓鴣本生物語

第十篇

(439)四門本生物語　(440)カンハ賢者本生物語
(441)四布薩誓願本生物語　(442)サンカ婆羅門本生物語
(443)小菩提童子本生物語　(444)カンハディーパーヤナ道士本生物語
(445)尼拘律童子本生物語　(446)球茎本生物語
(447)大護法本生物語　(448)雄鶏本生物語　(449)煌輝耳環本生物語
(450)布施比丘本生物語　(451)鴛鴦本生物語
(452)ブーリパンハ本生物語(*ブーリパンハー本生物語)
(453)大吉兆本生物語　(454)ガタ賢者本生物語

第十一篇

(455)養母象本生物語　(456)月光王本生物語
(457)法天子本生物語　(458)優陀耶王子本生物語
(459)水本生物語　(460)ユヴンヂャヤ王子本生物語
(461)十車王本生物語　(462)防護童子本生物語
(463)スッパーラカ賢者本生物語

【第34巻　小部経典十二】

K　本生経

第十二篇

(464)小郭公本生物語　(465)跋陀娑羅樹神本生物語
(466)海商本生物語　(467)欲愛本生物語
(468)闍那散陀王本生物語　(469)大黒犬本生物語
(470)拘私夜長者本生物語　(471)牡羊本生物語
(472)大蓮華王子本生物語　(473)真友非友本生物語

第十三篇

(474)菴羅果本生物語　(475)パンダナ樹本生物語
(476)敏捷鷲本生物語　(477)小那羅陀苦行者本生物語
(478)使者本生物語　(479)迦陵誐王菩提樹供養本生物語
(480)アキッティ婆羅門本生物語　(481)タッカーリヤ青年本生物語
(482)ルル鹿本生物語　(483)舎羅婆鹿本生物語

第十四篇

(484)稲田本生物語　(485)月緊那羅本生物語
(486)大鶚本生物語　(487)鬱陀羅迦苦行者本生物語

(488)蓮根本生物語　(489)善喜王本生物語
(490)五者布薩会本生物語　(491)大孔雀王本生物語
(492)大工養猪本生物語　(493)大商人本生物語
(494)サーディーナ王本生物語　(495)十婆羅門本生物語
(496)次第供養本生物語

【第35巻　小部経典十三】

K　本生経

第十五篇

(497)摩登伽本生物語　(498)質多・三浮陀本生物語
(499)尸毘王本生物語　(500)栄者の愚本生物語
(501)ローハンタ鹿本生物語　(502)白鳥本生物語
(503)サッティグンバ鸚鵡本生物語　(504)バッラーティヤ本生物語
(505)ソーマナッサ王子本生物語　(506)チャンペッヤ本生物語
(507)大誘惑本生物語　(508)五賢人本生物語
(509)護象本生物語　(510)鉄屋本生物語

第十六篇

(511)何欲本生物語　(512)瓶本生物語
(513)伏敵本生物語　(514)六色牙象本生物語
(515)三婆婆本生物語　(516)大猿本生物語
(517)水羅刹本生物語　(518)パンダラ龍王本生物語
(519)サンブラー妃本生物語　(520)結節鎮頭迦樹神本生物語

【第36巻　小部経典十四】

K　本生経

第十七篇

(521)三鳥本生物語　(522)サラバンガ仙本生物語
(523)アランブサー天女本生物語　(524)サンカパーラ龍王本生物語
(525)小スタソーマ王本生物語

第十八篇

(526)ナリニカー姫本生物語　(527)ウンマダンティー女本生物語
(528)大菩提普行沙門本生物語

第十九篇

(529)須那迦辟支仏本生物語　(530)サンキッチャ仙本生物語

第二十篇

(531)姑尸王本生物語　(532)数那・難陀仙本生物語

【第37巻　小部経典十五】

K　本生経

第二十一篇

(533)小鵞本生物語　(534)大鵞本生物語　(535)天食本生物語

(536)鳩那羅本生物語　(537)大須陀須摩本生物語

第二十二篇

(538)啞躄本生物語　(539)マハーヂャナカ本生物語

【第38巻　小部経典十六】

K　本生経

第二十二篇

(540)睒摩賢者本生物語　(541)尼弥王本生物語

(542)カンダハーラ司祭官本生物語　(543)槃達龍本生物語

(544)大那羅陀迦葉梵天本生物語　(545)比豆梨賢者本生物語

【第39巻　小部経典十七】

K　本生経

第二十二篇

(546)大隧道本生物語　(547)毘輪安呾囉王子本生物語

【第40巻　小部経典十八】

L　無礙解道［Paṭisambhidā-magga］

論母　大品

【第41巻　小部経典十九】

L　無礙解道

倶存品　慧品

M　仏種姓経［Buddha-vaṁsa］

N　所行蔵経［Cariyā-piṭaka］

【第42巻　小部経典二十】

O　大義釈［Mahā-niddesa］

【第43巻　小部経典二十一】

O　大義釈

【第44巻　小部経典二十二】

P　小義釈［Culla-niddesa］

◎論　蔵（Abhidhamma-piṭaka）

【第45巻　法集論】

A　法集論［Dhamma-saṅgaṇi］

(0)論母　(1)心生起品　(2)色品　(3)概説品　(4)義釈品

【第46巻　分別論一】

B　分別論［Vibhaṅga］

(1)蘊分別　(2)処分別　(3)界分別　(4)諦分別　(5)根分別
(6)縁行相分別　(7)念処分別　(8)正勤分別　(9)神足分別
(10)覚支分別　(11)道分別　(12)禅定分別　(13)無量分別
(14)学処分別　(15)無礙解分別

【第47巻　分別論二・界論・人施設論】

B　分別論

(16)智分別　(17)小事分別　(18)法心分別

C　界　論［Dhātu-kathā］

D　界論註(覚音造)［Dhātukathā-aṭṭhakathā］

E　人施設論［Puggala-paññatti］

【第48巻上　双論一】

F　双　論［Yamaka］

(1)根双論　(2)蘊双論　(3)処双論　(4)界双論　(5)諦双論

(6)行双論

【第48巻下　双論二】

F　双　論

(7)随眠双論

【第49巻　双論三】

F　双　論

(8)心双論　(9)法双論　(10)根双論

【第50巻　発趣論一】

G　発趣論［Paṭṭhāna］

順三法発趣　(1)善三法

H　大発趣論註(覚音造)［Mahāpaṭṭhāna-aṭṭhakathā］

(1)善三法発趣之釈

【第51巻　発趣論二】

G　発趣論

順三法発趣　(2)受三法　(3)異熟三法　(4)已取三法

(5)已染三法　(6)尋三法　(7)喜三法　(8)見三法

H　大発趣論註(覚音造)

(2)受三法之釈　(3)異熟三法之釈　(4)已取三法之釈

(5)残余三法之釈

【第52巻　発趣論三】

G　発趣論

順三法発趣　(9)見所断因三法　(10)積集趣三法　(11)有学三法

(12)小三法　(13)小所縁三法　(14)劣三法　(15)邪性〔決定〕三法

(16)道所縁三法　(17)已生三法　(18)過去三法　(21)内所縁

(22)有見有対三法

H　大発趣論註(覚音造)

(5)残余三法之釈

【第53巻　発趣論四】

G　発趣論

順二法発趣　(1)因二法　(2)有因二法　(3)因相応二法

(4)因有因二法　(5)因因相応二法　(6)非因有因二法

(7)有縁二法　(8)有為二法　(9)有見二法

(10)有対二法　(11)有色二法　(12)世間二法

(13)所識二法　(14)漏二法　(15)有漏二法

(16)漏相応二法　(17)漏有漏二法　(18)漏漏相応二法

(19)漏不相応有漏二法　(20)結二法　(21)順結二法

(22)結相応二法　(23)結順結二法　(24)結結相応二法

(25)結不相応順結二法　(26)繋二法　(27)順繋二法

(28)繋相応二法　(29)繋順繋二法　(30)繋繋相応二法

(31)繋不相応順繋二法　(32～43)暴流・軛群二法　(44)蓋二法

(45)順蓋二法　(46)蓋相応二法　(47)蓋順蓋二法

(48)蓋蓋相応二法　(49)蓋不相応順蓋二法　(50)執二法

(51)已執二法　(52)執相応二法　(53)執已執二法

(54)執不相応已執二法

【第54巻　発趣論五】

G　発趣論

順二法発趣　(55)有所縁二法　(56)心二法　(57)心所二法

(58)心相応二法　(59)心相雑二法　(60)心等起二法

(61)心倶有二法　(62)心随転二法　(63)心相雑等起二法

(64)心相雑等起倶有二法　(65)心相雑等起随転二法　(66)内二法

(67)所造二法　(68)已取二法　(69)取二法

(70)順取二法　(71)取相応二法　(72)取順取二法

(73)取取相応二法　(74)取不相応順取二法　(75)染二法

(76)順染二法　(77)已染二法　(78)染相応二法

(79)染順染二法　(80)染已染二法　(81)染染相応二法

(82)染不相応順染二法　(83)見二法　(84)修二法

(85)見所断因二法　(86)修所断因二法　(87)有尋二法

(88)有伺二法　(89)有喜二法　(90)喜倶行二法

(91)楽倶行二法　(92)捨倶行二法　(93)欲界繋二法

(94)色界繫二法　(95)無色界繫二法　(96)所摂二法
(97)出離二法　(98)決定二法　(99)有上
(100)有諍二法

H　**大発趣論註(覚音造)**

(6)二法発趣之釈

【第55巻　発趣論六】

G　**発趣論**

順二法三法発趣
順三法二法発趣

【第56巻　発趣論七】

G　**発趣論**

順三法三法発趣
順二法二法発趣
逆発趣
順逆発趣
逆順発趣

H　**大発趣論註(覚音造)**

(7)二法三法発趣之釈　(8)三法二法発趣之釈　(9)三法三法発趣之釈
(10)二法二法発趣之釈　(11)順発趣之釈　(12)逆発趣之釈
(13)順逆発趣之釈　(14)逆順発趣之釈　後之釈

【第57巻　論事一】

Ｉ　**論　事**［Kathā-vatthu］

大五十〔第一品～第五品〕

【第58巻　論事二】

Ｉ　**論　事**

第二五十〔第六品～第十品〕
第三五十〔第十一品～第十五品〕
第四五十〔第十六品～第二十三品〕

◎蔵　外

【第59巻上　弥蘭王問経上】

弥蘭王問経（上）［Milinda-pañha］

【第59巻下　弥蘭王問経下】

弥蘭王問経（下）

【第60巻　島王統史・大王統史】

島王統史［Dīpa-vaṁsa］

大王統史［Mahā-vaṁsa］

【第61巻　小王統史】

小王統史［Cūḷa-vaṁsa］

【第62巻　清浄道論一】

清浄道論［Visuddhi-magga］

(0)因縁等の論　(1)戒の解釈　(2)頭陀支の解釈
(3)業処把取の解釈　(4)地遍の解釈　(5)余遍の解釈
(6)不浄業処の解釈　(7)六随念の解釈

【第63巻　清浄道論二】

清浄道論

(8)随念業処の解釈　(9)梵住の解釈　(10)無色の解釈
(11)定の解釈　(12)神変の解釈　(13)神通の解釈

【第64巻　清浄道論三】

清浄道論

(14)蘊の解釈　(15)処・界の解釈　(16)根・諦の解釈
(17)慧地の解釈　(18)見清浄の解釈　(19)度疑清浄の解釈
(20)道非道智見清浄の解釈　(21)行道智見清浄の解釈
(22)智見清浄の解釈　(23)慧修習の功徳の解釈

【第65巻　一切善見律註序・摂阿毘達磨義論・阿育王刻文】

（Ⅰ）一切善見律註序［Samanta-pāsādikā］

（Ⅱ）摂阿毘達磨義論［Abhidhammattha-saṅgaha］

（Ⅲ）阿育王刻文［Inscriptions of Asoka］

About

The original 65 volumes in 70 parts of the **Nanden Daizōkyō** (南傳大藏經) were published 1936–41 by the Takakusu Hakushi Kōseki Kinenkai (高楠博士功績記念會纂譯), under the editorship of Takakusu Junjirō (高楠順次郎; 1866–1945[8]), who also used the resources of the Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai (大正新脩大藏經刊行會). It contains the complete Pāli canon as well as additional texts like the Milindapañhā, Visuddhimagga and Edicts of Ashoka. A reprint was published by *Taishō Shinshū Daizōkyō Kankōkai* (大正新脩大藏經刊行會) in Tokyo from 1970 onwards. The three-volume index was edited by Mizuno Kōgen.[9]

suttacentral.net

The translation of the Pāli-Canon, *Nanden Daizōkyō* is no longer in Japanese copyright, as determined by the *National Diet Library,* Tokyo. Their reasoning is given below:

Scans zenwort.de
mail@zenwort.de

2014 年 1 月 7 日インターネット提供に対する出版社の申出への対応について。2013 年 7 月 12 日付ニュースでお知らせした一般社団法人日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社から『大正新脩大蔵経』（全 88 巻）ほかのインターネット提供の中止を求める旨の申出を受けた件に関し、その後の対応について報告します。[10]

当館では、申出を受けて、当該資料のインターネット提供を一時停止し、当面館内利用に限定するとともに、2013 年 7 月に館内検討組織を設置し本事案の検討を行い、5 名の有識者のヒアリング等も踏まえて、下記の結論を取りまとめました。

1. 『大正新脩大蔵経』（1923 年～1934 年、大正一切経刊行会、全 88 巻）については、インターネット提供を再開する。

---

[8] Biogr.: 鷹谷俊之 (1891–1970); 高楠順次郎先生伝; Tokyo 1957 (武蔵野女子学院).

[9] 水野弘元; *Nanden daizōkyō sōsakuin* [南傳大藏經総索引]; “Comprehensive Index to the Pali Canon,” Tokyo 1959-60 (Nihon Gakujutsu Shinkōkai). Scans available on archive.org. Permalinks: Vol. 1-1 (第 1 部上巻): ark:/13960/t0rr2qp0m, Vol. 1-2 (第 1 部下巻): ark:/13960/t0zp4x15x, Vol. 2 (第 2 部): ark:/13960/t9s18vg4b.

[10] 2013 年 7 月 12 日近代デジタルライブラリー提供資料の一時公開停止について
国立国会図書館が、近代デジタルライブラリー等で提供する『大正新脩大蔵経』（全 88 巻）及び『南伝大蔵経』（全 70 巻のうち 21 巻）について、一般社団法人日本出版者協議会及び刊行元の大蔵出版株式会社から、「当該資料は、現在も商業刊行中であり、公開中止を求める」旨の申出を受けました。
当館としましては、当該資料はすでに著作権の保護期間が満了しており、遠隔地でも広く利活用可能とするため、インターネット公開が望ましいとの基本的立場に変わりはございません。しかしながら、直接の利害を有する商業出版者の申出であることに鑑み、当面 3 か月程度を目途にしかるべき検討を行うこととし、その結論が出るまでの間、当該資料のインターネット提供を一時停止し、館内利用に限定することといたしました。
利用者の皆様には、ご不便をおかけいたしますが、円満な解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じますので、ご理解を賜りますようお願いいたします。(Archived at: https://web.archive.org/web/20140111204528/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/1201734_1828.html)

2. 『南伝大蔵経』（1935 年〜1941 年、大蔵出版、全 70 巻）については、当分の間、インターネット提供は行わず、館内限定の提供を行う。

検討の詳細につきましては、報告書（「インターネット提供に対する出版社の申出への対応について」[11]）を参照ください。

現在、日本出版者協議会及び大蔵出版株式会社と『大正新脩大蔵経』のインターネット提供の再開について協議を行っているところであり、再開の時期については未定です。解決に向けて、引き続き努力を重ねてまいりたいと存じます。

The *National Diet Library* limits its scan to in-house use. [12]

All original material created by *SuttaCentral* is dedicated to the Public Domain by means of Creative Commons Zero.[13] This file was created on June 19, 2020 by Adi Meyerhofer, Munich on behalf of `suttacentral.net`:

> "*SuttaCentral* is a website run by a small team, originally based in Australia. We have no institutional affiliation, but are just a group of friends interested in the Suttas. The founders are Rod Bucknell, John Kelly, and Bhante Sujato. As of 2017 the main developers are Bhante Sujato, Ayya Vimala, and Blake Walsh. Financial support for the site comes from the *SuttaCentral Development Trust,* a non-profit charity incorporated in Australia.
>
> *SuttaCentral* aims at facilitating the study of Buddhist texts from comparative and historical perspectives. It focuses on the texts that represent"Early Buddhism," texts preserved not only in the Pali Sutta and Vinaya Piṭakas but also in Chinese and Tibetan translations and in fragmentary remains in Sanskrit and other languages.
>
> If you make use of any of our material, even though you are under no legal obligations, we respectfully request that you:
>
> - Provide a notice of attribution.
> - Maintain the spirit of the Buddhist tradition.
>
> Please let us know if you would like any assistance in making use of our materials."

☸ ☸ ☸

Although the creators of *SuttaCentral* had several times promised to bear the cost of scanning of this project nothing but "umpty words" have been forthcoming as of June 19, 2020. Adi Meyerhofer, Munich.

[11] Archived: `https://web.archive.org/web/20140114004605/http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2013/report140107.pdf` （pdf: 435 kB）

[12] Call number: 183.039-M723n (DOI: `10.11501/2997519`).

[13] `http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/`

Journey to the West (西遊記): “The Seiryu-zan Goblin (青竜山妖怪) steals the Tripitaka from the ‘monkey.’” (Woodcut by Katsushika Taito 葛飾戴斗 1818–54).

